

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

転生？チート？勘弁してくれ……

## 【作者名】

2Pカラー

## 【あらすじ】

転生することになりました。好きなチート能力もくれるそうです。そのうえスクウェアメイジになるだけの才能までサービスされるのか。しかし変わり者の転生者はドット以下の落ちこぼれにしてくださいと頼みこみ……。

作者は素人です。過度な期待はしないでください。また、本作は処女作だったためにいろいろ迷走しております。どうか寛大な心でご容赦のほどを

本作はにじファンにて掲載していたものです。一度読んだ、もう一回読むのは別にいいやという方は57話から読み始め下さいませ

## 01. プロローグ

はいはいテンプレテンプレ。

いきなりなんだって？ うっせーな。こちとら気付いたら見覚えのない場所に居て、そこにいた自称神に俺が死んだとか聞かされて、その上『力』を一つやって異世界に転生させてやるとか言われて、もうね、そんなん言われても付いて行けるかっての。せめて死んじまつたことを悲しむ時間くらいくれっての。葬式終わるまでくらいは現世で家族の顔を見て過ごさせてくれっての。頼むぜ神さん。

「申し訳ありませんがこちらの都合もありますもので」

あー、スマン。テンプレじゃない所があったわ。

この神ときたら、よくあるSSの如く腰の低さなんかまったくねえの。寧ろ事務的対応？ 今俺らはテーブル挟んで座ってるわけなんだけど、ちらりともこっちを見ずになんか資料っぱい紙束めくってるしね。俺なんかより仕事の方が大事ってわけね。

「で？ 能力については決まりましたか？ なるべく派手なのにしてくださいね」

「いやさ、そもそもなんで俺は転生なんてさせられんすか？」

SSなんかだと神様のミスとかありがちだけど、コイツはミス自体しなさそうだし。超有能そうだし。つか見た目まんま百計のクロなんで、ちょっと怖いっす。

「貴方は選ばれてしまったんですよ」

「選ばれた？」

「たまに、といっても人間の時間で百年に一度くらいの頻度ですが、上の神々が我儘を言いやがるんですよ。娯楽をよこせとね」

なんか神さんの口調が一瞬恐ろしくなっただんですけど……。苦勞してはるのね。

「それで人間の方々を選抜しまして、上の神々を楽しませていただいているんです。とはいえ今回の参加者は運がいい方ですが。数百年前など人間の作った娯楽小説というものが無かったものですからそれはもう血みどろ……。おっと失礼」

いや、血みどろって言ったよね？ 何させられたのご先祖様たちい

！

「それほど恐れなくても平気ですよ。先ほども言った通り貴方はまだ運がいい方なのです。上の神々の求めた娯楽は、貴方も良く知る転生モノ。閉塞した物語に新たに異物を放り込むことによって、全く別の物語を作り出させるといふモノです。選ばれた人間たちは思うままに生きてもらいます。物語に介入するもよし、好きな人物に肩入れするもよし。主人公に成り変わるのもいいでしょう。そのための『力』はこちらで用意します」

「物語ってか異世界じゃないと駄目なんですか？ 俺としては日本の平和ボケっぷりが気に入ってたんですけど」

『力』を与えた人間が好き放題やっても影響が無い世界というのが所謂フィクション。人間の創作作品というわけなんです。『力』を得る以上異世界へと赴いていただくことは決定事項。そして上の神々を楽しませるため人を超えること、すなわち貴方が『力』を得るといふ

「こともまた決定事項なのです」

マジかあ。まあダメもとで聞いただけなだけどさ。

「ちなみに俺が行くことになる異世界ってのはもう決まってるんですか？」

神さんは資料の束の中から一枚の紙を取り出すと渡してくれた。さつきから見ただ資料は異世界の情報だったのか。他にも数百枚は資料がある所から考えると、その分異世界を用意して転生者と面接して……止めよう。俺に出来ることなんて俺にかかる仕事の時間を減らしてあげることぐらいしかないんだから！

とは言えこれから生きていく世界のことを無視するわけにも、と渡された資料に視線を下ろせば

「ゼロの使い魔？」

全く見知らぬ文字なのにそう読めた。というか読める部分と読めない部分がある辺り、俺に見せてもいい部分だけ神様ばうあーで自動翻訳でもされているのだろう。

それはそうとゼロ魔かあ。

……………ぶっちゃけ最悪な部類だな。

だって治安悪いじゃん。文化レベル低いじゃん。差別&格差の世界じゃん。しかも戦争ばっか。才人とルイズのイチャコラのため、他のキャラには徹底した不遇を。そんな印象、ザ・ハルケギニア。

正直やってらんねえっすわ。原作のほうも序盤の大きなイベントは覚えてるけどロマリアが調子に乗り出した辺りからうる覚えだしな。何巻まで読んだっけ？十……七？

そんな思いなどそれこそ知ったこっちゃないのだろう。神さんはまるで変わらない口調で、目線は他の資料に向け、こちらをチラリとも見ないまま口を開いた。

「では現状を理解していただけた所で補足説明に入らせていただきます。まず、貴方に向かつてもらう世界はそちらの資料にもある通り『ゼロの使い魔』の世界です。人種、生まれる国、生まれた家の地位、家の属する勢力などの一切は既に決定されており変更は効きません。また、情報を開示することも出来ません」

「それはなんでっすか？ 貴族か平民かが分かるだけでもどういう『力』をもらうべきか、ある程度予測が付きそうですけど」

「だからです。上の神々が求めるのは自由奔放に『力』を振るい世界に新たな面を作る人の姿。ゆえに状況に則した能力などで場を濁されるのは好まれないのですよ。真に望まれていることは完全な原作破壊なのでしょっしね」

まったく、面倒な。と思いつつもある程度思惑は読めてきた。

神さんはこう言ってはいるが、おそらく俺が平民に生まれることは無い。原作に関わるならば十中八九トリスティンの貴族。メインヒロインに蔑まれるゲルマニア人も、空の上で交通も不便なアルビオン人も原作には関わりにくいだろうしな。ガリア？ シャルル派大粛清に俺が巻き込まれたら神々が原作崩壊を楽しむどころじゃねえだろう。エルフや巫人も言っに及ばず。

「では次に現時点で開示可能な貴方の情報を。まずは容姿。これは向かう先が先ですのでそれなりの見た目の体を用意します。両親と見た目が違いすぎるなど、異質と取られるような容姿とはなりませんので安心して下さい」

まあ生前の俺の見た目が反映されるとは思ってたけど。黒髪黒目がかなり珍しい世界らしいし。

「次に身体能力に関してですが、かなり高いものだと思ってください。もちろん希望されれば超人的なスペックを与えますが」

「サービスなんですか？」

「はい。『ゼロの使い魔』の舞台は医療などまるで発展していない世界です。水の秘薬を潤沢に使える貴族の家に生まれると決まっているわけでもありませんし。送り出した転生者<sup>アナタ</sup>が抵抗力の無い生まれたばかりの状態で病に罹り死亡でもすればこちらとしても遺憾ですから」

なるほどね。生まれながらに成人なみの抵抗力を持つ肉体。鍛えたらどうなんだろうね……

「さらに魔法に関して。非メイジに生まれた場合には残念ながら発現しません、メイジの家系に生まれた場合ならば努力次第でスクウェアに到達できるだけの「ちょっと待って！」……はい？」

……ここなんだよなあ。転生先がゼロ魔だと知って、おそらく貴族の一員になるだろうと予測が付いて、ここが一番重要だと、与えられる『力』なんかよりもよっぽど大事だと、真っ先に思い至った。

思い至り、熟考、とまではいかなかったけど、さすがに覚悟は決められた。容姿だの身体能力だのを先に説明して時間を与えてくれた神さんには感謝っす。

「魔法の才は皆無にしてください」

その時初めて神さんが顔を上げた。うお、目つき悪！

「理由を聞いても？」

「魔法至上主義の世界を掻き回すのに、俺自身が魔法の恩恵を受けられるポジションにいたんじゃモチベーションが上がらないだろうと思わしてね。ホラ、領地の経営だけ頑張っただけで原作に介入しなくてもいいやなんて気分になるかもしれないし、神様たちがお望みの原作破壊なんてそっちのけで平和な地方に婿入りして安穩と過ごすなんてこともスクウェアなんて箔さえあれば可能になるかもしれないし！ それならいつそ頼れるのは神さんから貰える『力』だけにして魔法なんかは全く使えない方がいいかなあ、なんて、……思ったり、その、しまして。はい」

もちろん全て口から出まかせの大ウソである。世界を掻き回す？ やるわけねえだろ！

神さんは派手に原作に介入してもらいたいのだろうが、そんなのよ  
り俺は自分の安全と幸福を優先したいね！

そしてゼロ魔という『魔法の世界』においてもっとも不幸を呼ぶもの。それこそ『魔法の才能』だと俺は考えている。

トリステインで魔法の才に目覚めようものなら、侯爵、公爵クラスの後ろ盾でもなければ、まずワルドに目を付けられるだろう。表向き栄えあるグリフォン隊の新人に、内実レコンキスタ幹部の自分の右腕に、なんて狙われたら生きた心地がしない。

それをスルーしたとしても待っているのはアルビオンでの戦争だ。力があれば嫉妬も受けるだろうし危険な任務を押し付けられる可能性もある。ゼロ戦護衛の竜騎士たちみたいにな。

さらにそこから生還できたでしょう。待っているのは？ オン  
ディーヌ隊で騎士団ごっこですわわかります。才人のために作られた部隊に箔を付けるにはスクウェアクラスのメイジは放っておけないだろうしね。

あれ？ 休まる暇なんてなくな？ それどころか魔法が使えるせいで死亡フラグ量産してねえ？ と、まあこんなかんじである。

トリステイン以外の国で生まれた場合？ 似たようなものだろう？  
アルビオンでは貴族派に敗北する王党派にも、ガリアにいいように

扱われる貴族派に付くわけにもいかないが、魔法の才能があるというだけでクロムウェルに戦力として確保され、逃げ出せないなんてことになりかねない。最悪アンドバリの指輪が相手側にあるのだから俺の意思なんて関係ないだろうしな。しかし魔法の使えない『無能』ならば、むしろ貴族派の側から追い出そうとしてくれるだろう。戦争では役立たず。勝った後には分け前を要求する無能貴族なんて誰だつて仲間に欲しくは無いだろう？

ゲルマニアは一見安全に見えるかもしれないが、アルブレヒト三世が作中でほとんど描写されていないのが不気味すぎる。蓋を開けてみたら使える奴は全て軍人に！なんて危険人物かもしれないし。何よりゲルマニアなら魔法がなくても金を稼ぐ能力さえあれば出世だつてできるだろうしね。

ガリア？ 大粛清がある場所で一人の魔法の才能が何になるよ？  
使えない力ならなくてもいいさ。

と、まあこんな感じで俺は魔法は要らないと結論付けました。むしろ厄介事に巻き込まれる呪いのようなものだろ？ ルイズの虚無しかりタバサのスクウェアしかり。

だからチートでスクウェアにしてやるなんてマジで勘弁してください！！



## 02・プロローグ2

「ふむ。なるほど。魔法の才能は要らない、と」

しばらくじっと俺を見つめていた神さんがやっと口を開いた。

ぶっちゃけ目を逸らしたいほど神さんの目つきが怖いんですけど、でも、ここで退くわけにはいかんのよ！

「わかりました」

うつしやーーーーー!!! さらば死亡フラグ!!!

にしても生まれる前から死亡フラグを考えなきゃならないなんてなんて世界だよハルケギニア。

「ですが」

「はい？」

え？ 一件落着じゃなかったんスか？

『『ゼロの使い魔』において、『ゼロ』とは一種の特殊性を示すことになります。魔法の才能を失くすということは出来ませんが、メイジの子供として生まれた場合』

「あー、完全に魔法が使えなくするわけにもいきませんが」

メイジの子はメイジ。それがハルケギニアなのだろう。となればメイジの血を引くにも拘わらず魔法が完全に使えないというのはある意味異常。ルイズやジョゼフもそうだったが、彼女らの場合は『失

敗』という形で魔法は発現していたし、何よりいずれ虚無へ至るのだ。コモンも系統も虚無も発現しない完全な『ゼロ』のメイジの子供。それは言ってしまうえば完全なる異端。

さすがにそれは勘弁だな。何より『系統魔法』が使えない貴族となってしまうえば、ガリアやロマリアに虚無疑惑をかけられかねない。

「そうですね。じゃあ落ちこぼれ位にしてください。コモンマジックはなんとか出来る。でも系統は必死に努力してもドットで失敗しまくる、とか、そんな感じで」

「わかりました。系統の希望はありますか？」

「ないです。どうせ使いませんし」

ふいー。やっと一段落か。なんとか希望が通ってホッとしたぜ。

「では、こちらで元より用意していた貴方のスペックに関しての説明は終わりました。最後に何か質問は？」

ふむ。別に無いよな？ 見た目を調整されて、体を丈夫にしてみらうだけなんだから。

「無いようですね。では次の話に入りましょう」

そこで初めて神さんは表情を変えた。

「ニヤア。そんな音を錯覚させるような笑みを顔に張り付け

「貴方が求めるつもりの『力』について教えていただきたい」

……やっべ。なんも考えてねえよ。

「魔法の才能を拒否し、落ちこぼれとなってなお、原作に介入し己の自由を貫き通す。『力』さえあればそれだけのことが可能だと貴方は考えているのでしょうか？ 是非ともその『力』の概要を説明していただきたい」

クカカ、キキキと神さんが笑う。めっちゃコエエんですけど!!!

なんで俺いじめられてんの？ □から出まかせで嘘ついたから？

神さんの厚意を無下に扱ったから怒られてんの？

と、とにかくそれっぽいスーパーな『力』を言っしかない。プリミル教に異端だと指さされず、魔法だとも思われず、それでいて強力で、万が一戦争に巻き込まれても生き残ることが出来、億が一エルフと出会っても殺される前に逃げ出せるような、……ああ！

そうだよ！ そうだよ！ 何も戦いに使える力だけが『力』じゃないじゃん！ 要するに人を超えたチート能力が神さんの言う『力』なんだから！ なら

「……「ミュウ力をくれ！」」

神さんの方は茫然としてるっぽいけど、考えてみればこれ以上のズルい能力は無いんじゃないだろうか。ただしゃべくってるだけで異端だと言ってくる神官なんかいないだろうし、実際魔法じゃないし、戦争の士官の話だったのらりくらりとかわせるだろうし、エルフをも会話によって丸めこめる。おおー！ 考えれば考えるほどいけそうな気になってきた。ジョゼフだろうが教皇だろうが舌先三寸で丸めこめるといふなら、まさに俺最強と言えるはず！

「……「ミュウ？」」

「ああー！ あっ、いや、はい。そうです。えっと、要するに「ミュウニケーションが得意になる能力」というか」

「話術、あるいは詐術のようなものですか？」

「(詐術で。まあそういうものかもしれないけど)ハイ」

「クツ、ハハハ」

俺が会心のアイデアに内心震えていると、神さんの方も実に楽しそうに笑っていた。

いや、鷲巢笑いなんかされるよりよっぽどいいんだけどさ。俺はというと状況の変化について行けず内心ビクつきながら問いかけた。

「そんな面白かったっすかね？」

「ん？ ああ。そうだな。実に面白かったとも」

なんて砕けた口調で笑いかけてくれた。

「いや、くれてやると言った才能を拒否したり、戦争のある世界に行くにも拘わらずまるで戦い向きで無い力を要求したり、お前は面白い。端的に言って気に入ったのさ」

そう言っって神さんは膝の上の資料をテーブルの上にぶちまけた。

「二千六百三十四人。今回のジジイ共の暇つぶしに巻き込まれたお前以外の人間の数だ。俺は二千六百三十四の世界を用意し、二千六百三十四通りの能力を与えた。どいつもこいつもつまらん人間だったよ。与えられる才能を歓迎し、強力無比な所謂『チート能力』を求めた。人間によっては暇つぶしのために殺されたという事実には激怒し俺に殴りかかって来る奴までいたな。仮にも神であるこの身を傷つけられると思っていた辺りは愉快な連中だったが。そんな奴らは拷問して『力』を選ばせた上で念入りに殺してから魂に恐怖を刻み付けたうえ

で送り出してやったけどな」

……せんせー。かみくんがはんこつきです。

いや。いやいやいや。まじこええよ。二千六百人のお仲間がいたとかどうでもよくなる怖さだよ。

「その点お前は面白い。自分の死を受け入れたがらないやつは珍しくもないが、お前は一度認めてしまえば、そこからはほかの奴らとまるで違った。気に入ったのさ。お前の事がな」

「えと、ありがとうございます。それで「コミュ力」はいただけるんでしょっか？」

「ああ。くれてやるさ。そしてやっとお前は転生する準備が整ったわけだ、が」

……が？

「仕事でうんざりしていた俺の気分を晴らしてくれた礼だ。もう一つ、くれてやる」

いや、もうお腹いっぱいなんですけど。戦場とは無縁でいたい以上戦い向きの能力なんていらなし、内政を能力チートでブーストして目立つのも避けたい。無難なものは何かないか？

「そうだな。これは『力』でなくてもいいぞ。物だろうがなんだろうがかまわん。本物の太陽神ブリュナクの槍ナクや雷神ミヨルニルの鎚ニルでも用意しようか？」

勘弁してくれ。やばい、早く何か思いつけ！

ウオオオオオオ！ 唸れ俺の脳髓！ 廻れよ知能！ 輝け俺の二枚舌ア！！

あつ！ あつたぜオラア！！

「な、ななな名前！ 名前をください！！」

「クツ、カハハ。名前だと？」

「はい！…ゼ口魔で生きていく体の名前を付けてください！ 神様が名付け親ってのは御利益半端なさそうですし、なにより神さんに付けてもらいたいっすー！」

「クハハハハハ！ いいぜ。俺が名付け親になってやろう。お前の両親には神託にでもして告げてやるぞ」

ふいー。俺、ファインプレーじゃね？ 余計な『力』を貰うことな  
く神さんの不興を買うこともなく。しかも神さんも楽しそう。

「さて、俺からはもう何も言うことは無い。質問が無いのならこのまま送り出すことになるが、何かあるか？」

「いえ。平気っす」

俺がそう言うのと神さんはニヤリと笑ってパチンと指を鳴らした。

スーッと、四肢の感覚が無くなっていく。なのに恐怖も何も湧かなかった。

俺は消えかける口をなんとか動かし、一言だけ礼を口にして、そして完全に消えた。

行ったか。

最後の人霊、対象二千六百二十五号はなかなか愉快な奴だった。なにせ戦乱の世を口先だけで生き抜いてみせると言い切ったのだ。あれほどの馬鹿はなかなか見られない。

「しかしまあ、たかが口先といえど、神の力がそこに宿るならばそれは神秘に昇華してしまう。たかが名前と思っただのかもしれないが、神の与えた名はそれだけで力を与える」

奴はそれを望まないだろう。人霊ごときに騙される俺ではない。奴があくまで平穩を望み、神のためにシヨールをするなどご免だと考えていたことくらい分かっている。

「それでもお前は巻き込まれるのさ。そういう世界の、そういう国の、そういう家に生まれるようにしてしまったのだから」

ククク。にしても名前か。下手に俺が知恵を絞れば奴に神性を与えかねないからな。

と、足元に散らばる資料の山が目映る。なるほど一枚手に取り「奴の髪の色は遺伝によって確定している。ならばこの名など妥当か」

クカカ。声が漏れる。

誰もいない空間に向かって、誰にも届かない言葉を投げかける。

お前の自由を貫いて見せるよ。よ。

### 03・母と父と

どうも俺です。ただいま生後3かげちゆ。

もうね。なんて言うかね。またかつて気分なんだよね。

またこのセリフを言わなきゃならないのかつて気分なのさ。

生まれて直後の光のまぶしさに対して、

母乳を与えられる気恥かしさから、

おむつの世話なんぞをされる悲しさから、

毎度のように繰り返してきたセリフをまた使わせてもらつよ。

「ばぶう（勘弁してくれ）」

事の発端は母の一言からだつたんだよ。

母は、まあなんと言うか、かなり美人なわけだ。

見た目金髪白人美少女。この人と結婚した父は、「前世」でならきつとロリコンのレットルを張られていたことだろう。

まあ年が近いならアリなのかもしれないのだが、うちのダディは残念なことにかんりの御年輩の方らしいんだよね。ほぼお爺ちゃんになりかけの。

うん。言葉尻から分かったかもしれないが、俺はファザーにあったことがないんだ。

なんでもパパンには既に奥さんがいるらしくてね。浮気なのか愛人なのかは知らないが、いや、ハルケギニアってお妻さんとのこと認められてるんだっけ？ まあとにかく愛人的ポジションに母は埋まっていたわけだ。

で、その母が今日はやけに機嫌が良かったんだな。

いやー美人さんがニコニコしているのは見ていて胸が温かくなるねえ。なんて思っていたら



うん。ハルケギニア語は分かんないんですわ。

まあでも、ね。俺には神さん特製のチートパワー「コミユカ(神)」が備わっているわけで。

母さんの言いたいことが「言葉」ではなく「心」で理解出来る！

……えーとなになに？

今日、父、来るよ。やったね！ 嬉しいね！ アハハ！

うん。めっちゃはしゃいでたのさ。

俺としても夫婦仲の悪い家に生まれるよりかは、お互い好き合ってる両親の間に生まれる方がよっぽどいいし、文句なんてなかったんだ。嬉しそうなお母を見てベイビーハートをくすぐられたのか、俺を抱き上げてクルクル回る母と一緒にキャッキヤと笑ったりなんかもしたな。

……もうねえ。父を見た瞬間そんな気分なんて吹っ飛んだけどね。

父が現れたのはもう日も落ちかかった頃だった。

使用人さんが「旦那さまがお見えになりましたー」なんて感じの事を言ったんだけど、残念なことにその時は俺のお食事中だったんでね、お出迎えはなしになったのさ。

父があ。どんな人なんかなあ。なんて思いながらも母の母性をちゅーちゅー吸ってたんだが、

ドタドタと廊下を駆ける音が聞こえ、

ババーンと扉を開け放たれた瞬間に、

ブバツ！

っとね。鼻からね。ミルクがね。噴出しちゃったのさ。

だってよう、だって。

アレが父親とかありえねえもん。

知ってる奴だったのだった？

いや、まるで知らない奴だったさ。

原作でイラストが描かれているようなキャラじゃなかったよ。

むしろ原作で名前すら出てないんじゃないかなかったただろうか。

ならなんでそんなに拒絶するのだった。

簡単さ。

父親の髪と髭が、どこまでも立派な「青」だったんだよ。

ガリアの王族で……。orz

「ばぶう」(勘弁してくれ)「

## 04・神託事件

一歳になりましたー(テレツッテッテー)

どうも、ガリア王家王位継承権第三位を獲得しました俺です。

数日前パパ上が、今度二人のお兄さんにも会わせてやろうなんて言ってたんだぜ。

ちなみにお兄さま達のお名前はジョゼフとシャルルというそうなんだぜ？

生まれながらに死亡フラグ背負ってる様にしか思えないって？

HHHHAHA！ ミーもそうとしか思えないデース！

……勘弁してくれよ orz

あ、そうそう。

最近やつとハルケギニア語が理解出来てきました。

一歳で言葉を話せるのが早いのか遅いのか、「前世」では子供どころか嫁さんすらいなかった俺には判断付かなかったので、とりあえずまだ片言でしかしゃべってませんが。

母は「マーマ」と呼ぶと笑って喜んでくれます。俺も嬉しいです。

父は「ジジー」と呼ぶと泣いて喜んでくれます。ウケケ

ジョゼフやシャルルとの王位継承者争いに万が一にも巻き込まれないように、しばらくはアホの子として生きながら様子を見ようと思ってます。(まあ妾腹をわざわざ持ちあげる貴族もいないとは思いますが、ただでさえ目立ちかけてるんでね)

……そうなんスよう。きいてくださいよう。目立ちかけてるんですよう。

ズバリ「神託事件」のせいだ。

うん。自業自得とか言わないで欲しいな。

俺だっけ覚えていたよ。俺は神さんから「コミュ力」と「名前」を

貰ったんだってことは。

神さんが「名前」に関しては「神託」で伝えると言ってたことも。でもさあ、俺としては両親に夢のお告げがあるとか、そんなものだと思ってるんだよ。

なのにねえ、国王の子供だから神さんもはしゃいじゃったのか、わざわざブリミル教の司教にお告げを落とすじゃがったんだよ。

もうね。グラントロワは大混乱だったらしいよ？ 始祖（だと思われてた）からお告げがあるわ、それは両親しか知らなかった俺に対しての言葉だわ（俺が本当にいたその時点で「神託」は本物だーって教会側も大騒ぎになったそうだけど）。当然その過程で母の存在もバレ、父が愛人とってたこともバレ。ジョゼフ兄さん大笑い、シャルル兄さん苦笑い。一躍俺は時の人になってたらしいからね。

まあ出自に国王のスクヤンダルが絡んでくるのですぐに緘口令が敷かれたらしいけど、どの程度機能していることやら。

とにかくこうして俺は二人のお兄様にその存在を知られてしまったのよ。

ホント、勘弁してくれ。

ん？ ああ「名前」ね。

それなんだけどちょっと複雑なことになってるんだよねえ。

司教が「神託」受けたのはさっき言った通りだし、両親しか知らなかった俺の存在を言い当てたんだからその「神託」は本物だったんだと思う。

でもさ、両親にも「神託」があったんだと。

こっちも両親とも同じ夢を見て同じ「名前」のお告げを聞いたらしいから本物だと思う。

問題は司教の聞いた「名前」と両親の聞いた「名前」が違うことなんだよね。

司教としては始祖のお告げを無視するなんてとんでもないが、大国ガリアの王族相手に強く出るわけにもいかない。

両親としては自分たちが「神託」で聞いた名前があるんだからそれ

を付けたい。しかし教会と事を構えるのはどう考えてもマズイ。随分悩んだそうですよ。俺はその頃飲む寝る漏らすのベイビークラ イフに嘆いてましたが。

結果、両親が「神託」で受けた名前をファーストネーム。司教が「神託」で受けた名前をミドルネームとすることが決まったそうです。

さらに保険のためにミドルネームを幼名として扱い、しばらくは始祖のお告げに感謝してますよーとのポーズをとることにするそうです。まあウチのパピーは、五年や十年も経てば司教の方もミドルネームを使わなくなっても何も言っておなくなるんじゃないか、なんて楽観的に考えてるみたいですけど。

と、いうわけで、俺の名前は

クー・セタンタ・ド・ガリア

……うん。神さん、絶対適当に付けたよね。

クーで。クー、……て。

セタンタのほうはまあいいですわ。どっかの神様かなんかでしょ

? メガテンに出てきてたよね?

でもさ、クーで。何? ラーの翼神竜の友達? 知らんぞ俺。

……まあ、いいや。うん。きつと慣れれば普通に感じるようになるわ。

というわけで近況報告でした。

みなさんさよーならー。クー・セタンタをこんごもよろしくー

せつぽいづれねえよなあ。ハア

## 05・兄参上!

一歳の誕生日から数カ月がたちました。どもども、クーです。今日もあのセリフからいつてみましょーかねー。はい。皆さんもご一緒にー。

勘弁してくれー!

事の発端はいつものように親父殿。

ついに、ついに兄と顔を合わせることに。

いや、本来ならもうちょい早くに会ってたはずなんだけど。

「さあパパとグラントロワ行こうかー」

「やー(フルフル、キュー)」

「そ、そうだなー。今日はママと三人で過ごそうなー」

「なー(ゴッポー)」

と、まあこんな感じで拒否っていたら毎度毎度お流れになってくれてたんだよね。

問題の先送りにしかなくてないよなーなんて思いながらも、いっそ五十年後くらいまで先送れないかなーとか思ってたんだけど。

しかし現実は無情である。二人の兄上が早々にしびれを切らし、向こうから出向くというじゃありませんか。

父上からその旨を聞いた時には思わずげんなりしたね。

わざわざ親父の愛人の家に出向くという二人の王子様(髭)にも呆れたけど、父上も拒否できなかったのかとね。

まあ決まっちゃったことは仕方ない。なるべく凡愚に見られるようアホ面下げていよう。王位継承者争いになんてまるで参加できないように見えなければ、お兄たまたちも俺への興味を失くしてくれるだろうしね。

と、思ってたのにね。どうしてこうなった。

「ふむ。不思議な瞳をしているな。我が弟よ」

「あー？」

あ………ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺は兄の前でアホのふりをしていたと思ったら、いつの間にか顔を覗きこまれていた』

な………何を言っているのかわからねーと思うが、俺もどうしてこうなったのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうだった………虚無の担い手だとか未来の狂王だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

「兄上は随分セクスタが気になってる様ですね」

とは家に来てからずっとニコニコしている下の兄、シャルルの言葉。

「ああ。畏れ多くも始祖に名付けられた我らの弟だぞ？ シャルルは気にならんのか？」

「気にならないと言えば嘘になりますが、私としては初めて出来た弟に対しての感情の方が強いのでしょっ」



「ふむ。教会の連中が大騒ぎする「光の御子」も、我らにとっては一人の弟、クー・セタンタ、と言うことか」

……ん？ ジョゼフ兄様の言葉に聞き流してはならない言葉があったような。

くそ。未だしゃべれない凡人を装っているせいで聞き返すことも出来ない。俺の平穩を揺るがす危険ワードな気がするのに。

「にしても兄上がセタンタのことをそこまで気にかけているとは思いませんでしたよ。神託事件の折も、司教はただ夢を見ただけ。実際にセタンタがいたことを知っても、ただ偶然が重なっただけ。なんて不敬なことを言ってますでしたか？」

「クックック。確かにそう思っていたさ。だがな、シャルルよ。セタンタの瞳をしてみる。これを見てしまえば神託とやらも司教の妄言ではなかったと理解出来るさ」

「へえ。兄上にそこまで言わせますか」

そう言ってシャルル兄様もしゃがみこんで俺に目を合わせてくる。  
いや、そんなイケメン二人に見つめられても／＼モゲロと思えへんよう／＼

「不思議な色合いですね。吸い寄せられるように深い色でありながら、自ら輝く力強さもある。ガリア王家には珍しい赤い瞳だというだけではない、何かを感じさせますね」

ん？

「あかー？」

思わず尋ねていた。だってただでさえ王家なんか生まれたり神託事件があったりしたのに、そのうえダメオシ？ 目の前の兄二人も、そして父も瞳の色は青だった。俺だけの赤眼と言う特異性なんて目立ちポイントは勘弁願いたい。

言葉を返されたシャルル兄様はそれが嬉しかったのか、

「そつだよ、セタンタ。セタンタの目は赤くてとても綺麗なんだよ」

そつ言っつてわざわざ使用人に鏡を持って来るよう命じてくれた。

ありがたい。自分でも確認しておきたかったからね。

で、使用人さんが鏡をもつてきてくれたんだけど、

一目見て、

うん。ちょっと落ち着こうか。

眉間を揉んだりしたかったが二人の兄の前でもあるし自重して、もう一度見て、

うん。クー、貴方疲れてるのよ。

……うん。うんうんうん。一つずつ整理して行くつか。

「前世」の記憶がある身としては信じられないほど小さな体。これはまあいい。

「前世」ではありえなかった青い髪。これもまあいい。

「前世」でならアルビノと呼ばれるかもしれない赤い瞳。これだっていいわ。

でもね。

「前世」のとあるゲームで見たキャラを、シヨタを通り越してベイビーサイズにまで縮めたようなのが鏡越しにこっち見てるってのはどうよ？

青い髪。赤い瞳。間抜け面をしてみてもなんとなく分かってしま

う目つきの鋭さ。

どう見ても某蒼い槍兵シヨタver.です。ありがとございまして。

てか、クーテクー・フリーンのことがよおおおおお!!?  
アイルランドの光の御子おおおお!!?

「ん？ どうつしたクー・セタンタよ？」

なんてジョゼフ兄様が尋ねてくるが、正直それどころじゃなかった。

ガチンガチンと歯車がかみ合い、俺のネガティブ思考が高速回転し始めてしまったのだから。

俺の名前がクー・フリーンから取られていることと、俺の見た目が型月におけるクー・フリーンに似ていること。それぞれ独立して見れば大したことじゃあないんだよ。

問題はそれらの事柄が関連していた時だ。

髪の色は父からの遺伝だし、瞳の色も母方の遺伝と考えられるかもしれない（母の瞳はブラウン）。

しかし見た感じ、俺の顔つきと両親の顔つきはほとんど似ていない。

もしかしたら、

俺の顔がこうなのは、クー・セタンタという名前のせいなのではなからうか？

なんせ神さんにチートパワーの代わりとして貰った名前である。御利益はんぱねーなんてものじゃないだろうし、俺が名前自分にふさわしい持ち主になるよう、俺自身を成長させるなんてこともしそうだ。

もしこの予測が合っていた場合、俺は将来的に彼の英霊クー・フリーンのスペックを手に入れてしまうことになる。

ヤバいなんてものじゃない。トリスティン貴族に生まれるだろうと予測していた時とは状況が異なってはいるが、「誕生前」同様、俺の「強さは死亡フラグを招き寄せる」論は変わっちゃいない。

おそらくスクウエアメイジなど余裕で降せるだろうクー・フリーンのスペック。果たして隠し通せるものだろうか。

ああ、何も出来ない赤ん坊だというのに危険なフラグばかりが乱立してる気がする。

「セタンタ？」

お兄様がた、愚弟はもう限界の様です。

しばらく、不貞寝させてください。

ぼてりこ

俺は横になって目を閉じた。

いつものセリフを頭に浮かべながら。

ホント、もう

勘弁してくれ

## 06・俺、無言、ベッドにて

ども。ベッドから失礼します。クーです。

先日めでたく二歳になりました。こんな危険な世界の危険なポジションで二年も生き伸びれたことに感無量です。

まあ生まれて間もないころから命の危険にびくつく生活にはうんざりしてるんですけどね。ハハ。

だってねえ。来よるんすわ。ジョゼフが。

お前、親父の愛人家になに足しげく通ってんねんとね、一言物申したい気分なんすわ。

あんまり親しくしたくねえんだよなあ。

だってシャルルを暗殺した後の暴走っぷりを知ってるわけですからね。

「お前を殺せば余は泣けるやもしれんぞー」とか言ってナイフ片手に「加速」で向かってくる兄とかね。

新ジャンル「ヤン兄」。あれ？ デレはどこ？

そんな誰得な展開にするわけにもいかないので、なるだけジョゼフの興味を引かないように寝て過ごす日が増えてきてるわけなんすわ。

ああそうそう。

「体がクー・セタンタの名前に引っ張られてんじゃね？」疑惑ですが、ビンゴっばいです。

先述の通り俺はジョゼフの興味を失わせようと食っちゃ寝生活を続けてるんですが、なんていうかね、こっつ、うっすら筋肉のようなものがね。

いやいやいや。碌に遊び回ろうともしない二歳児の癖にしっかりと成長しやがるんですわ。

どうせなら横に育ってマリコルヌのようなギャグシーン要員にでもなりたいくらいなんですけど。

アホ面下げて「ガリアの光の御子（笑）」で居ようと努めてるんですけど、気を抜くとすぐに「リュティスの猛犬（キリッ）」って感じの目つきになってしまふから困りものですね。

このままだとマジで最速の英霊のスペックが手に入りそうです。目立ちたくねえってのに。

で、だ。

今後に関しても色々と考えてみたりしたんでその報告も。

いやね。寝てるだけじゃ暇なんでね。頭働かせて今後に関してどう動くかとか、そういうことばっか考えて過ごしてるんですね。

まあ「誕生日」に色々考えてたことが、生まれてみたら予測の斜め上のことばかり起きて、プラン（笑）になってしまった実績を考えるとな、あんまり役に立たないんじゃないかなあとも思っただけけど。

とりあえず当面の目標は「光の御子」の評判を落とすことだね。

最近よく現れるジョゼフ兄曰く、教会関係者のボルテージが上がってるらしいんですね。

当初は始祖のお告げで名前を与えられたというだけ（それでも俺がらしたら厄介だけ）だったんだけど、今じゃどういいうわけか始祖の生まれ変わらんじやないかとの声まで出てるのか。

もうね、アホかと。馬鹿かと。

愛人との子どもゆえという理由で親父殿が俺を公の場に出さないというのが、余計に神秘性を感じさせてるか。

そういやブリミルの像を造るだけでも不敬だと言われる世界だったっけね。正体不明な感じが大好きなのかね。もうチラリズム教に改名しちゃえよ。見えそうで見えない、正体不明にこそ神秘を感じるチラリズム教。風のメイジの貴方の参加をお待ちしています。みたいな？

閑話休題（一度言ってみたかったんだよね、コレ）。

ま、俺からしたら「ブリミルの生まれ変わりなんじゃね？」疑惑なんて百害あって一利なしなんで、早急にぶっ潰しときたいわけですよ。

なんたつてこんな噂が広がったら将来的に「ジョゼフ派」「シャルル派」に対抗して「クー・セタンタ派」なんてものが出来かねない。

愛人の息子。妾腹。王位からもっとも遠い継承権第三位。不利な点は多々あれど、教会がバツクに付くならと「ジョゼフ派」「シャルル派」の中核になり損ねた中級〜下級貴族あたりに持ち上げられかねないんだよね。

そんな死亡フラグ満載な未来を潰すためにも「俺＝無能」ということは示しておかなければならない。

いくら神託を受けた司教でも、俺が虚無に目覚めるどころかドットの魔法にも四苦八苦する姿を見れば、ブリミルの生まれ変わりなんて考えは無くなるはず。

そして俺の場合、演技で無能のふりをするわけじゃあなく、本当にドットクラスで頭打ちなわけだから高位のメイジに疑われることもない。

いやあホント、スクウェアに至れる才能とやらを拒否つといて良かったぜ。

で、「光の御子」呼ばわりされることの対策はコレでいいとして、だ。次に考えたのが俺が神さんに貰った「力」すなわち「コミュ力」に關してなんすよね。

俺としては「コミュニケーションが得意になる程度の能力」を所望したつもり、なんだけど。

知つての通り、ただ「名前」を貰つたつもりが神託だの肉体スペックの上昇だのを引き起こした以上、樂觀なんて出来るはずもなく。

ならば「コミュ力」に關しても何が出来るのか、何を引き起こしてしまうのか、真の意味で「どの程度の能力」なのかを知っておくべきだろう、ってね。

俺の予測が悪い方向で当たってれば、この能力はかなり凶悪なものになりかねないんすわ。

ほんの少し「力」のニュアンスを変えれば……。 「コミュニケーションを成功させる程度の能力」。これだけでかなりのチート性能に昇華

しかねないのだよ。

「コミュニケーションが「得意になる」ではなく「させる」。「力」を行使して無理やりコミュニケーションを取らせる能力に変わってしまっただよね。」

剣を向けてくる賊。杖を向けてくるメイジに「戦闘」ではなく「対話」を強制させる「力」。

それこそ蛮族との対話など不要とのたまうエルフを交渉のテーブルに付けることすら出来るだろうね。

もしこの予測が的を射ていた場合ではあるが、もしこの予測なしに「コミュニケーションを成功させる程度の能力」が発動していればヤバいことになっていった可能性もあった。

この「力」さえあれば「命乞い」がかなりの確率で成功するのだから。

ガリア王族という身内からも命を狙われかねない身の上ならば、暗殺の対象になることもあるかもしれない。

もしスクウエアメイジが俺を狙ってきたら、その結果窮地に追い込まれた俺が「命乞い」という「交渉」を「コミュ力」の力を借りて成功させたら。

正体不明の「心を操る魔法」を使ったと思われなだろうか？

敵からはエルフの先住魔法を使ったのだと思われなだろうか？

味方からは「虚無の再来」だと思われなだろうか？

危険度のレベルが分からない能力ほど厄介なものはない。

早急に俺に宿った「力」がどの程度のことまで可能とするか調べる必要があるだろう。

ま、ジョゼフ兄のせいで身動きなんて取れないんですけどねー。アハハ

そろそろ普通に歩きまわるようにしますか。

二歳児が歩いてる姿を見て変に思う人はいないだろう。むしろ周



りより遅れているくらいだろうし。

体がうずうずしてしょうがないんすわ。多分これもクー・セタンタの名前のせいなんだろうね。

今にも走り出したがっている体を押さえつけるってのも、結構大変なんよ？

## 07・グラントロワで

はろー。クーです。三歳になりました。

それでもって、まあとりあえずいつものセリフを言わせてもらおうか。

勘弁してくれ。いや、結構マジで。

うん。なんのことも全く分からないと思う。

安心してくれ。俺も全く分かってないから。

とりあえず落ち着こうぜ、俺。

そう深呼吸だ。

まずはCQCの基本を思い出して、っと。

「なにしてるの？」

うん。目の前で銃とナイフをもったつもりでCQCしようなんて見せられたらそんな反応するよね。

うん。そうなんだ。

今、俺の目の前に二人の幼女がいるわけなんだ。

状況を簡単に説明するぜ。

父に「グラントロワ行こうぜっb」と誘われる

「よく来たな弟よ」とジョゼフ&シャルルに歓迎される

「仲良くしろよ」と幼女たちと同じ部屋に放りこまれる

うん。わけがわからん。せめて紹介位してくれよ。

まあわざわざ紹介されるまでもないんだけど。

こつこついう時、血筋に現れる高貴（失笑）な髪の色ってのは便利だね。幼女は二人とも真っ青な髪色をした。つまりはこの二人がイザベラとシャルロットというわけか。

うーん。ペドい、もとい幼い。

イザベラ二歳。シャルロット一歳といったところか？

まだ生まれてないだろうと思ってたのに。すでにシャルロットが生まれているということは俺にとってはバッドニュースなんだよな。

なんたって現状俺にとって一番危険なイベントは、ジョゼフが王に即位する前後で発生するゴタゴタだ。

そして俺にはソレがいつ起きるのか、正確な時間が分からない。

あえて分かっていることを挙げるならば、国王が病気であること、タバサ＝シャルロットがそれなりのメイジの実力を備える頃（『ゴタゴタ』で心を壊された母親のために、無茶な仕事をさせられ始めたそうだから、『ゴタゴタ』時にシャルロットがドットメイジなんてことはないだろう）といったことくらい。

つまりほとんど分かって無いに等しい。

ただ、シャルロットが「未だ生まれていない」ならば俺にとってその時期は完全に安全といえたのだが。

目の前でイザベラの影からこちらを見ている青髪幼女。可愛いけど今は会いたくなかったなあ。

「おねーちゃん」

なんて言っつてイザベラにぎゅっとしがみつくシャルロットちゃん。いや、俺の目つきが怖いのは知ってるけどそこまで怯えんでも。

「あなたはだれですか？」

とはイザベラ嬢の言葉。さすがに幼女時代からシンデレロ調じゃないらしい。ま、アレはシャルロットへのメイジの才能の劣等感から来てたものだったから、生まれつきってわけじゃないんだろっけど。

にしても、どうしようか。

いくら神さん印の「コミュカ」があるとはいえ、相手は幼女。「前世」でも接触したことのない生命体だ。(むしろ子供もいなかった俺が「前世」で幼女との「コミュニケーション」に慣れていたりしたら逆に大問題だろうが)

俺も幼児とはいえどうしていいかわからない。

ホント、勘弁してくれとりたいが、

……………ティンと来た！

「ふははははー」

びくうと幼女ズの背筋が伸びる。

俺はそれを無視して未だ全容の掴めない「コミュカ」を発動。「アイコンタクト」によるコミュニケーションをイザベラに送る。

「我こそはスーパードラゴン・クー・セタンタ！ 大人しく後ろのお姫様を差し出せ！ 勇者イーヴァルディよ！」

そう。皆大好きイーヴァルディの勇者ごっこだ。まあ「コミュカ」の制御実験の兼ね合いもあったんだけど。

イザベラは俺の「アイコンタクト」を理解したのか、おどおどしているシャルロットをギュッと抱きしめると、舌足らずな口調で俺に合わせてくれた。

「なにおー。ひめさまはわたさないぞー」

「ふははー！ さあ来いソードマスター・イーヴァルディ！ 俺は実は一回刺されただけで死ぬぞおー！」

じりじりと笑いながら二人に近づくと、イザベラがポカポカと叩い

て来る。ウム。萌える。ではなくて

「グアァァー！ このザ・アニキと呼ばれたいなあとか思っていた俺が……こんなチビどもに……バ、バカなああああ」

「チビっつていじなー！」

なんて言いながらイザベラは馬乗りになってポカポカ叩いて来る。ついでにシャルロットまで。

だんだんとシャルロットも笑い声をあげるようになり、俺は髪を引っ張られるは足蹴にされるは馬にされるは。もう俺への怯えなんてなくなっていたが、無防備にしがみついて来るのは止めなさい。俺の雄が励起状態に入っていたら新しい世界に目覚めちまつてる所だぜ。フウー。

ま、しかし、やんちゃなのはいいことだ。陰謀だらけの王族なんてモノに生まれてしまったんだから強くあらねばね。

うん。出来れば俺の死亡フラグまで叩き折ってくれるような強さを手に入れてもらいたいもんだよ。ホント。

その時かな。

姪にまで助けを求めている俺は最低なのかなあとも思ってたぞ。

少しだけ、本当に少しだけなだけだよ。

俺が生き残るためじゃなく、俺たちみんなが笑って過ごせるよう頑張ってみようかなあなんてことも、思い始めていたんだ。

なんて格好よく締めてみたりして

## 08・魔法訓練

ちつす。クーです。五歳になりました。

なんだか久しぶりな気分がしますねー。なんたって二年ぶりですし。

この二年は随分ゆっくり出来ました。気分的な意味ですが。

やっぱアレっすね。一枚絵のCGイベントどころか立ち絵イベントすら起こらないフェイズは平和そのものですよ。

そらね、イザベラとシャルロットに引っ張り回されたり、ジョゼフ兄が家に来たり、シャルル兄に見定められるような目をむけられたり、ジョゼフ兄が家に来たり、パパ上から杖との契約を強制させられそうになったり、ジョゼフ兄が家に来たり、ちよろちよるとイベントモドキはあったわけですけど(つかジョゼフ来すぎじゃね？ イザベラを構ってやれよ)、新事実や新キャラが出てこないだけでかなり楽なんですよ。

え？ 杖との契約渋ってるのかって？

まあ「ブリミルの生まれ変わりなんじゃね？」疑惑をぶっ潰すためにも魔法の練習風景は、そして俺が魔法の才なんて持ってないってことは見せつけるつもりなんですけどね。

どうせなら効果的に行きたいじゃないですか？

俺はドットで頭打ちになることは分かってるんですけど、周りは当然そんなこと知らないわけですよ。

コモンスペルを覚えてく、ドットメイジになってく、と段階を踏んでたら「俺〓無能」の図式が見えてくるまで何年かかるか分からないっしょ？

原作では結構活躍するギーシュだって魔法学院二年生時点でドットメイジ。しかしそれでも「青銅」の二つ名をもつ結構な実力者ポジションだったはず。

確実にギーシュより才能の無い俺じゃ、自分の才能限界にいつ到達

できるか分からず、「ドットが限界である」という事実が発覚するより早くジョゼフの王位即位、それに連なるゴタゴタが発生しかねない。ならマトモに魔法訓練をする姿を見せても非効率的じゃないだろうか。

その考えにたどり着いた瞬間にね、ティンと来たのよ。

隣に比較対象がいれば万事解決じゃね？ ってね。

幸いなことにグラントロワにはかの最年少スクウェアの娘、将来的にスクウェアに目覚めることが確定している天才美少女シャルロットちゃんがいるわけでして。

比較対象が天才なら、俺はきつと「ゴミを目にするような目で見てもらえないはずだ。

おそらく「期待させやがって」とか「これが光の御子か？」とか「ジョゼフの悪夢再び」とか「無能二号WW」とか。きつとさまざまな侮蔑の目が向けられてくるだろうね。

俺は特殊な趣味でもないし、ソツチに目覚めるつもりもないけど今回ばかりはバッチコイっすわ。

父上には折角年の近い親類がいるのだから、シャルロットが魔法を学べるようになるまで待ってから共に学びたい、と言って納得させた。切磋琢磨だとか手と手を取り合ってたとか、口の回るのに任せていろいろソレっぽいことを言っていたら結構あっさり承諾してくれましたよ。

俺が杖との契約をさせられそうになったのが大体三歳くらいだからシャルロットもそろそろ魔法を習い始めるんでしょうね。

え？ イザベラ？

ジョゼフが魔法自体にあまりいい印象を持ってないせいか、特に魔法の勉強を強制させられていたりはしないらしい。

なので「俺たちと一緒に勉強しようぜ」と既に勧誘済みだったり。

ま、イザベラは俺と同じで才能無い組だろうから比較対象にはならないだろうけど、俺という同類落ちこぼれが傍にいれば、シャルロットへの劣等



感による性格の硬化も少しは軽減できるんじゃないかと思ってる。

なんだかんだで情が移ってるのかもね。この子らには笑っていてもraithたいと思うくらいには。

ろ、ろろろロリコンちゃうわー！

そして、ついに初めての魔法訓練。やけに多いギャラリーに囲まれての初授業です。

まあね。母上やシャルル兄の奥方なんかはいいさ。我が子が初めて魔法を使うんだ。魔法至上主義のハルケギニアなら今日は特別な意味のある日になるのだろう。

でもよ、父上&兄上ズよ。アンタらは仕事しろ。

ほら、そろそろと近衛隊まで付いて来てるじゃねえか。彼らにも職務がある以上、王族の傍を離れるわけにもいかないのだろうし。

ま、そんなことを思ってるのは俺だけの様で、普段キチツとしている宰相なんかも何も諫言を言わないあたり、王族にもこういう家族サービス（というか息抜きというか）は必要なのかもね。

さて、気を取り直してっと。

いろいろと思うことはあったけど、魔法ってのには結構興味があったんだよね。

特にフライとレビテーション。

トライアングルだのスクウェアだのの攻撃魔法なんかには微塵も興味は無いんだけど、やっぱり空飛べるってのは楽しそうじゃん？

どっちもコモンスペル（？）だし使っても目立たない。というか使えない方が目立つだろう。なんせ原作当初でルイズ以外の全員が使えた魔法だ。難易度的にはベリーイージーなはず。

個人的な興味を満たすという意味でも、将来的に「ゼロ疑惑」の発生を抑えるためにもこちら辺は抑えとかないなね。

というわけで横に並ぶ二人の姪と共に真面目な顔して家庭教師の授業を聞いてたんだわ。

で、初めて習ったのはコモンスペル・ライト。

「いいですか？ スペルを唱える際には成功する自分自身を強くイメージするのです。体の内側で消費される精神力を感じ取り、それをもっと強く引き出そうとしてみてください」

先生の言葉に頷いてライト・明かりを灯す魔法を唱える。

こんなとこまで魔法に頼るから科学が発達しないんだよと思いつつ、豆電球をイメージして杖を振る。

ピコン！ パリイを閃く俺をイメージ！

……うん。なんもおこらへんね。

ま、全然落ち込んでなんかないけどね。むしろ計算通りってゆゝか。

なんて内心くらいは虚勢を張っているよ。

「おおー… 素晴らしいですよ、シャルロット様！ まさか一度目で成功させるとは！」

なんてオッサンが大はしゃぎしてる。ギャラリーの大人連中も普通にはしゃいでる（ジヨゼフは……うん。察してくれ）。

シャルロットは褒められてうれしい半分照れくさいの半分といった感じでおどおどしているが。

「すごいな、シャルロット」

一応俺からも褒めておいた。さて、共に一度目は失敗したイザベラにもフォローをしておくか。

「よし。俺たちも頑張って成功させるか、イザベラ」

そんなしよぼくれんなよと思う。シャルロットは文字通り特別なんだから。

俺は間違っても先に行くなんてことはないだろうから安心しろよ。

下には下がいるってことを教えてやるから。  
ハハハ。

なんて気楽に考えていた時期が俺にもありました。

忘れていたわけじゃないんです。俺もまた、特別な存在だったということを。

シャルロットが一発で成功させたコモンスペル・ライト。

大体に十数分後くらいだろうか。シャルロットや周囲のアドバイスを受け、見事イザベラが成功させる。

うんうん。きゃっきゃきゃっきゃしちゃって。愛い奴らじやのう。なんてのほほんとイザ×シャルを眺めていた俺だが、魔法訓練のほうは結構真面目に取り組んでたのよ？

ただね。さすがは神さん印の落ちこぼれにしてもらっただけあつてね。

めっちゃ時間はかかったけどね。

何分かつたと思う？ え？ 甘い？ 何時間の間違いだろって？

ハハハハ！ 甘すぎるぜ！

正解は、

九日間だよおおおおおおおおおおお!!!

一週間以上もひたすら「ライトライトライトオオオオ！」と叫び続けましたよ。

イザベラとシャルロットがフライを覚えてフワフワキャッキヤしている間もずっと、叫んでましたよ。

当然のようにギャラリーはどんどん減ってくわけだったんだけどね。なんかねえ。ジヨゼフだけはずっと見ていてくれたのさ。ジヨ

ゼフ兄がすごい優しい目をして俺の肩を叩いてくれるんよ。

もうねえ。思わずコロツと惚れちまうところだったよ。

八日目辺りにはもうね、俺は魔法を学びに来ているのか、「ライト」と呟きに来てるのか分からなくなりかけてたからね。

イメージするのが重要だって言われたから、常に最強の自分をイメージしてみたり、

「I am the born of my sword（我が骨子は抜じれピカる）」

とか呟いてみたりしてスペルが違つと怒られたりもしたね。

そんなこんなでライトが成功したときは思わず泣きそうになったよ。

魔法の才なんて自分から拒否したし、魔法関係では落ちこぼれだと目されるというイメージ戦略は「魔法を失敗しまくる姿」を見せることで大成功したはずなのに。

そんなことよりなによりも、魔法が使えたということ自体を俺は喜んでたんですわ。

ライトが成功した瞬間、体から精神力とやらが出て行くのを感じたその瞬間、世界が変わったようにすら思えたもの。

なんかね、キラキラとね、妖精さんみたいなのが笑いかけてくれたように感じたんだよね。

……ん？

………妖精さん？

.....まさか、アレが精霊か？

.....勘弁、して、く、れ

## 09・俺は友達が少ない

よつす。クーです。六歳になりました。

最近活動範囲が広がりました。

というのも魔法の授業から逃げ出してはグラントロワ中を駆けまわってたせいなんだけどね。

ホントは単独行動はなるべく避けたいんだけど(暗殺的な意味で)さすがに飽きました。発動しないスペルを叫び続けるのもね。

現在俺はめでたく(?)落ちこぼれの地位を獲得してます。

なんとたつて一年かけてライトとアンロックしか覚えられてないんですから(ロックの方は出来ないんだよねえ)。

しかも魔法の教師の見立てでは、初歩の初歩であるコモンスペル・ライトを成功させるだけでも俺は精神力を全て使いきってしまったているらしい。

メイジの格が上がれば増えるという話の精神力だけど、そもそもスタートラインであるドットにすら立てない俺をどう鍛えればいいのかと、家庭教師陣でも頭を抱えているらしい。

え? そんなことより妖精さんの話をしろって?

妖精なんて見えるわけじゃないですか。H A H A H A!

あれはきつと幻覚さ。もしくはサツパリ妖精とかギップル的な何かさ。

断じてエルフ達の言う精霊なんかじゃないってば。

だからうようよと視界に入ってくんじゃねえよ teme いら! 魚群

か! 激熱リーチってか!

見えへん! ウチはなんも見とらへんねや!

うん。現実逃避は止めるよ。

見えてるよ。精霊っぽい。うじゃうじゃいるよ。

しかもねえ。コミュニケーション取れちゃうんだよねえ、俺。間違

いなく「コミュニケーション」のせいだろうね。精霊が見えるようになったの自体「コミュニケーション」のせいっぱいもんなあ。

結構ね、精霊たちは嬉しがってるみたいなんだよね。人間オレに気付いてもらって。

指をね。こつ虚空に突きだすだけでもね。わらわら〜と群がって来るからね。風の精霊ちゃん達。

害があるわけでも無いし、精霊（先住）魔法さえ使わなければ精霊が見えてることなんて他人には分からないだろうからってことで、今じゃ結構受け入れられるようになって来たんですが。やっぱり出来ることなら精霊さんたちが見えるようになる前に戻りたいっす。

たぶん、ってかかなり高い確率で、俺、精霊魔法使えるんだよね。

エルフは、その土地に住む精霊と契約してからだが、精霊との契約を履行させることで精霊魔法を使ってたんだよね。多分。うるおばえだけど。

でも俺はさ、その場にいる精霊さんと「コミュニケーション」が取れるわけだ。

契約で縛った後で命令するなんて方法じゃなく、ふよふよと漂ってる精霊さんたちに「お願い」をすれば、それで精霊魔法が発動する可能性は高いと思うんだ。

……ヤバイよね？ コレ。

………なんで平穩を求めているだけなのに「チート」が増えるんだよ。

嗚呼。勘弁してくれー

さて、話を変えましょうか。別に現実逃避ってわけじゃないんだから！ 勘違いしないでよね！

あいさつの後に言った通り、最近活動範囲が広がってきてるんですよ。

そもそも俺の行ける場所というのが極端に狭かったってこともあるんだけどな。なんとたって自宅かグラントロワのイザベラ達の遊び部屋、食堂のような場所くらいしか行ける所無かったもの。

最近じゃ妾腹の子という醜聞はあるものの、俺の存在が公に認められてきていることもあって王宮の騎士連中からまで隠れなきやならんってことにはならないのも、俺が自由に動くことの後押しにもなってたしね。ま、ロマリヤ辺りの情報操作でもあったんじやないかと不安でもあるんだけど。

それから魔法の授業から逃げるために走り回り、今まで碌に体を動かせなかった鬱憤を晴らすために駆け回り、いろんな場所に行ったよ。

城といえばレヌール城だとかグランバニアとかをイメージしちゃう俺じゃ、実際の王城であるグラントロフでは迷いまくったけどね。

でもいくつかお気に入りスポットが出来たんですわ。

で、今いるのがそのお気に入りスポット。

所謂、練兵場だね。

……絶対クー・セタンタの名前に影響されてたよな。

最初にこうね、剣の訓練をしてる騎士団を見た瞬間にね、体がうずうずしだしたんですわ。

理性では分かってたんだよ？「魔法が使えない＝無能」って図式を信頼しすぎるのも駄目だってことはね。魔法至上主義のハルケギニアとはいっても魔法以外の実力は全て見下されるわけじゃない。ゆえに戦闘訓練なんかには参加すらしなないべきだ、ってのはね。

でもねえ、口ではなんと書いても体は正直なんですな。くやしい、でも、ビクンビクンって感じに体がうずいてたんですわ。

気が付いたら訓練に参加してたからね。

騎士団員らはかなり戸惑ってたけどな。なんせ俺はいろいろ抱えているとはいえ第三皇子だ。そして剣の訓練なんてものは本来平民の傭兵などがすること。

一応ブレイドという魔法があることや、護衛任務には遠距離からの大規模魔法よりも近接での戦闘技術を求められるという理由で騎士団員は剣を学ぶらしいけど、それでも剣術なんてのは言ってみれば魔



法の使えない平民が使う「下賤の技」。それを王族に学ばせるなどと、って感じで随分言われたもんだけど、精霊ちゃん達すら籠絡した俺の舌技「コミュニケーション」を甘く見てもらっては困るね。

ズバーンと言ってやりましたとも。

「しるせえー！ やらせるー！」

うん。別にエロい意味での発言じゃないから110をプッシュするのはやめようか？

ま、そんなこんなでちよくちよく練兵場でストレス発散させてもらってるわけです。

いやあ、年甲斐もなくはしゃいじゃってますよ。つっても六歳児ですけど。

なんか他の転生者がチート能力を貰いたがるって神さんの話に納得しました。

だってメチャクチャ楽しいのよ。

体を動かせば動かすほど強くなっていくのが実感できるってのが。

リアルバガボンドな修行もしてみたいね。こっちに行きたい？

こっちか？ って感じの。騎士団員にサイレントを掛けて貰ってかなり熱中しました。

「前世」じゃ武道はおろか喧嘩すらまともにしたことがなかった俺には想像しか出来ない世界だったよ。

目立つのがいやだからってのは変わって無いんで、ある程度強そうな騎士とは模擬戦すらしてないけどね（わざと負けようとするとかーの名前のせいか体が暴れそうになるんよ。沈まれ俺の右腕！がリアルで発生とか、もうね）。

そんな理由もあるんで訓練に参加させてもらうときは見習いクラス（それでもラインの上位）トライアングルクラスのメイジばかりだけど（の若い連中と一緒に鍛えるんだけど、なかなか仲の良くなった奴もいるわけで）。

俺が王族ってことであくまで気を使われている感じは抜けてないんだけど、それでも年の近い(といっても倍以上離れてることになるんですが)同性との会話ってのも新鮮なもので、

……うん？

……年の近い相手との会話が新鮮？

!! ああっと !!

気づいちまった。俺、今まで友達っていなかったんだ……orz

「ええいつ！ ネガはやめろといってるサル！」

「殿下？ どつされたんですか？」

「うつせえ！ 来い、バツソ！ その心臓貰い受ける！」

「ちよっ、殿下！ これ模擬戦ですから！ 殿下の槍の突きは本当に危ないんですから！」

## 10・ジヨゼフ対話篇

「ちやお。クーです。ついに七歳。そろそろ「政変」を警戒しとかないとまずいかな、って時期ですかね？」

「だというのに、現在ジヨゼフ兄の私室に招かれています。」

「ふむ。ずいぶん長考しているな」

「……ってかもう詰んでね？」

「あ、今はチェス中ね。当然のようにフルボッコにされてるわけだけど。」

「チェスはいいいね。リリンの生みだした文化の極みだよ。なんたって普通に遊ぶだけで俺の無能っぷりをアピールしてくれるんだから。」

「いや、俺から見る限り、まだ生きる道は残っているぞ？」

「ジヨゼフ兄には世界はどう見えているんだか」

「そう言ってナイトを相手のビショップの進路を遮る位置に動かす。」

「残念。チェックメイトだ」

「うーばあ」

「ま、勝てるわけもなし。なんたってシャルル兄以外では誰も太刀打ちできない指し手らしいしね。」

「せめて囲碁なら……。うん、囲碁でも無理。ってかルールも分からんし。saiでも取りついてくれんことにはジヨゼフ兄と遊ぶこと」

もままならないだろうね。

「セタンタは強いのか弱いのか分からんな。穴に見せかけた罫は容易く看破する癖に、ソレを逆に利用する戦術が立てられていない。こちらの狙いが分かっているようだが自分が何を狙うべきかは分かっている、とでも言おうか」

まあ、ね。普段もある程度の「コミュ力」が発動してるからね。相手の思考を「察する」ことは得意っすよ。

に、しても、と思う。ジョゼフ兄と仲良くなりすぎだよなあ、と。先々のことを考えると、ジョゼフには興味すら抱かれなくらいが理想だったつてのに。

こうやって接していると普通に「兄」なんだよね。

そりゃひねくれてる所もあるけど、むしろいつも仮面みたいな笑顔を張りつけてるシャルル兄よりも接しやすい。

ホントにこの人が「狂王」になるのかと疑問にすら思えてくる。それとも俺というイレギュラーが現れたことでジョゼフの性格に改変でも起きたのか？

ま、いくら状況が楽観的に見えたとしてもそれを鵜呑みにするわけ無いんだけどね。

「セタンタよ」

「あー？」

態度が悪いって？ あー、思考が体に（ってか名前に）引っ張られてんだよ。特に脳みそを酷使した後なんかは、この本能的なものに抵抗できなくなるんだよね。

「最近はずっと、魔法の授業に顔すら出していないそうではないか？ イザベラ達が寂しがっていたぞ？」

「イザベラを寂しがらせたくないならもう少し構ってやれよ。父上殿」

「くっくっく。違うない」

盤上のクイーンを手にとって眺めながらジョゼフ兄が笑う。

ふむ、何か言いにくそうにしているが。

「コミュカ」のうち「心情報知」を発動。相手の思考を知ろうとするのは円滑なコミュニケーションに必須だからね。

さてジョゼフ兄の心情図は、っと、悲哀……嫉妬……そして自己嫌悪……が、二対三対五程のブレンド。やや不安、それだけのこと。……って片付けるわけにはいかんよなあ。

「なあ、セタンタ？ お前はなぜ魔法の勉強を嫌うのだ？」

あー、やっぱり魔法がらみか。

相変わらずこの世界の人間は。

「お前は少なくとも俺とは違う。時間こそ人の数倍の時をかけたかも知れんが、きちんとコモンスペルを唱えることが出来たのだ。他の学問や宮廷作法はしっかり学んでいるし、騎士団の連中と戦闘訓練までしているそうではないか。お前は怠け者などではない。魔法の勉強だけを嫌っているのだから？」

優しいねえ、ジョゼフ兄は。ライト一つにシャルロットやイザベラの数百倍の時間をかけた俺に、「人の数倍」程度だと言ってくれろとは。

「王族付きの魔法の教師陣はアレでも有能なのだ。俺という前例がないが、セタンタがきちんと奴らと向き

合えば、今頃はドット、いや、ラインメイジにも手が届いていたやもしれん」

ホント、優しすぎるよ。「無能と呼ばれる苦しみを味わって欲しくない」だなんて。「俺のように歪んでほしくなどない」だなんて。心情を察知出来る俺にはジョゼフ兄のデレ期が到来してる様にしか思えないんだけど。

そういや俺という、よりいっそう影の濃い落ちこぼれがいるせいか、ジョゼフのイザベラに対する風当たりも無くなってるんだよね。シャルルと比べられる自分を、シャルロットと比べられるイザベラに投影していたからこそ、イザベラへの風当たりの強さがあつたわけで、それが無い今、ジョゼフ父娘の仲はおおむね円満といえる。うん、いいことだ。

それも関係してるのか、原作で知るジョゼフとは比べ物にならないほど丸いんだよね。

それともこれはあれか？ キャラとしてしか「ジョゼフ」を知らなかった俺が、人間「ジョゼフ」の本質まで見ぬけてきたということなのだろうか？

閑話休題。

さて、優しい兄上の言葉には誠意を持って応えたいかしらね。

下手をすると「わざと阿呆のフリをしていたんじゃない？」なんて警戒されるかもしれないけど、仕方ない。「俺」の言葉で話してみたくなくちやっただから。

死亡フラグが立つちまったら、そうだな、ゲルマニア辺りに逃げますかね。

覚悟を決めて話しましょ。それで兄上が少しでも救われることを願って。

「ジョゼフ兄は魔法ってなんだと思ってる？」

「ん？ 魔法は魔法だろう？ 貴族たちにもみ許された力であり、始祖の残した偉大な「心にもないこと」……」

俺は盤上の騎士<sup>ナイト</sup>をつまみあげ、神官<sup>ヒジョッフ</sup>を倒す。

「魔法なんてものはさ、ただの戦う道具でしょ？ ジョゼフ兄。水には癒しの魔法なんてのもあるけどさ、あれだって戦場で使われるためのものでしょ？ 土の錬金は暮らしに根付いているなんて言うかもしれないけど、土メイジが自慢するのは自分のゴーレムだったり派手な土の魔法でしょ？ メイジなんて連中はさ、結局のところ剣や銃を持ってはしゃいでる子供と同じなんだよ」

槍を持つてはしゃいでる俺も人のことは言えないけどさ。

「確かに魔法がもつとも活躍する場は闘争、ひいては戦争にこそあるのかもしれない。だが、魔法なくして国家は保てないだろう？」

「そこがまさに間違いなんだよ。なんで俺みたいなのが気付けることにジョゼフ兄が気付いていないのかが分からないんだけど」

今度はキングを持ち上げる。先ほどジョゼフ兄のルークの射程に入れられたキング。それを大きく動かし、ジョゼフ兄のキングのすぐ前にまで前進させる。

「王が敵陣に突っ込んで行くなんて、英雄譚でもありえない」

ま、どごその指輪にまつわる物語なら普通にやっていたけど。

ハルケギニアでの英雄譚なんてメジャーなのはイーヴァルディの勇者くらいだし、説得力はあるだろう。

「貴族だってそうでしょ？ 前線に出たがる貴族なんてのは領地の経

嘗に失敗して名誉挽回の機会を欲してるダメ貴族くらいなもの。普通は平民を前面において盾にするし、私軍を持つてる貴族なら一番後方に自分を置くでしょ？」

ポーンを揃えてクイーンを守る様に囲ませる。鉄壁の守りを手に入れたようでもあるが、クイーンという「戦闘力」が完全に封じられている。

「王族や貴族ほど魔法なんて言う『戦闘力』を必要としない人間はいないよ。本来こんな力は前線に立つ兵隊ポーンにこそ与えられるものだ」

「平民に魔法を？ くっくくく。変な発想をする奴だ」

「多分俺が生まれてから数年の間、家族くらいとしか接して来なかったのがでかいんだろうね。下手な貴族意識に染まることなく成長できた今までのおかげで、魔法つてやつを貴族の持つ特権だと思いつ込まずにきちんと認識出来ているんだと思う。俺からしたら魔法が使えりゃ偉いなんて考え、狂ってると思えないよ」

「はっはっは。では、戦場ではなく内政においてはどうだ？ 貴族などいらないか？」

「領地は統治する貴族は必要だろうね。治安の向上にはそれを引きつけてくれる領主の存在は大きいし、領地の繁栄には高等な教育を受けたりリーダーが必要。そしてそれらを担えるのは現状では貴族だけ。でもね、メイジはまるで必要とはされていないのさ」

「治安を守ってくれるなら魔法の有無は関係なく、領民を導く『高等な教育』とやらには魔法に関してのものは含まれていない、か」

「むしろ魔法があるほうがマイナスかも。魔法という分かりやすい武



器、圧倒的な力の差が存在するからこそ、貴族の中には重税を課す馬鹿も多い。どう扱おうが平民は逆らわないんだから、つてね。重税を課して恐怖政治しか出来ない貴族と、魔法などという力を振りかざすことなく領民を治めることのできる貴族<sup>統治者</sup>。どちらが民にとって、貴族にとって、そして国にとって有益かは平民でも答えられる問題だ」

「だが、治世を目指す貴族は驚くほど少ない。……なるほど。剣や銃を持ってはしゃいでいる子供と同じ、か。先のことなど考えられず、重税を課して「今の」「己の私腹を肥やすしか考えられない」と。くっくく。治世を行えるものは、むしろ魔法の才に乏しい者だとも言うつもりか？」

ジョゼフ兄はひとしきり笑うと俺のナイトをつまみあげ、盤の中央に運んだ。

「なるほどなるほど。魔法は戦う力。王族には必要のないものだと言いたいのには良く分かった。しかし王家にとって魔法の才能とは重要なものだ。偉大な始祖様の系譜だそうだからな。それゆえ魔法の才能に乏しい王族は排斥される傾向にある。お前はそれを望むというのか？ だから魔法の勉強を嫌うのか？」

「魔法を苦手とする王族がいたからといって、全ての貴族が敵になるというわけではないでしょう。王族が偉大な始祖様の血を引いていることに変わりなんてないんだし。それに魔法が使えないというだけの理由で見下してくる貴族なんて、あっさりと潰せると思うけどね」

「ほっ？。どっぴい意味だ？」

「魔法ってのはバカ御用達の物差しだっただけのことさ。まず魔法が使えるか使えないかで人を二種類に分け、使える連中はドット、ライン、ト

ライアングル、そしてスクウェアと四つに分けられる。スクウェアなら天才。ドットなら落ちこぼれって分かりやすく測れるわけだ。逆に言うなら、そんな物差しに頼らないと人の本質を計ることも出来ない連中が多いってことだけだ。俺の本質も見抜けずにただ見下してくる馬鹿共なんて怖くもなんともないよ」

そう。怖いのはジョゼフのような「俺」を見ることの出来る者だ。目立ちたくないというのだって、ジョゼフの対抗馬に担ぎ出されることを防ぐためといった意味合いがもっとも大きい。

望んだことではないが、幸いなことにこの身にはいくつもの「チート」が宿っている。ジョゼフほどの大物に狙われでもしなければ、逃げ伸びて生きていく自信くらいは付いているのだよ。

「……セタンタの物差しでは、俺の本質はどう見える？」

「王様」

即答だよ？ 悩む必要もないじゃん。

原作では最大派閥だったシャルル派を肅清し、その反乱を完全に封殺し、国を乱すこともなく、その上手駒を操るだけでアルビオンという国家を落とすほどの人だ。正直狂王バージョンでも、色呆けアンリエッタやプライドのために王家の血を絶やしたウェールズなんかより、よっぽど王族らしかったと思ってる。いや、ウェールズも？ っと思つかもしれないけどさ、王族なら血筋を残すために泥をすすってでも生き延びるべきだと思うんだ。

身内にいると未だに死亡フラグの塊にしか見えませんですけどね。でも、この対話は千載一遇のチャンスだと言えるのかもしれない。だから、俺は止まる気は無いよ、兄さん。

「多分有能な人間ほどジョゼフ兄のことを買ってると思うよ。ね、シャルル兄？」

珍しく驚いた顔で固まっているジョゼフ兄を置いて、扉へと声をかける。

風の精霊ちゃん達が騒いでいたよ。青いヒトが聞いてるって。

ゆっくりと扉が開き

そして現れたシャルル兄は

いつものように仮面のような笑顔を浮かべていた。

## 11・仮面　くとりにている魂

「いつから気付いていたんだい、セタンタ？」

部屋に一步踏み入れ扉を閉めると、シャルル兄がそう言った。

……アレ？　シャルル兄ってこんなに威圧感あったっけ？

俺の知ってる（覚えている）シャルル兄のプロフィールといえば、

タバサ・シャルロットの父親で

最年少でスクウエアメイジになった天才で

チエスで唯一ジョゼフと渡り合える天才でもあって

ジョゼフに王位が渡った時も笑顔でジョゼフを祝福して見せる  
ほどのお人好しで

というのは実は演技で、本当は王になれなかったことをすごく悔  
しがっていた

ってところなんだけど……

……アレ？　ヤバくね？　特に　と

頭脳だけでアルビオンを落として見せたジョゼフと同じくらい頭  
がよくて、しかも念願であった王位を得られなかった時でさえ、兄弟  
であるジョゼフにも心情を悟らせることなく良き弟を演じ続け、その  
うえ王位を渴望してる。

ジョゼフの大粛清にビビり過ぎてたせいで見逃してたよ。特大の  
死亡フラグじゃん、シャルル兄って。俺が「コミュ力」チートならシャ  
ルル兄は「演技力」チートじゃん。しかも王位を狙ってるってことは、  
「他の継承権を持つ兄弟は全て邪魔」という考えに至る可能性もあ  
るってことだ。それらが組み合わさったら笑顔で兄弟に杖を向けら  
れる天才暗殺者の出来上がりじゃねえか！

絶望した！　絡んでも安全だと思っていた相手まで危険なキャラ  
に変わるハルケギニアに絶望した！！

ジョゼフ兄も初めてシャルル兄から感じる異様な威圧感に驚いているが、

「風のメイジとして気付かれていない自信はあったんだけどね。まあいいや。とりあえず結果的にはあるけれど、盗み聞きをしてしまう形になったことを謝罪するよ」

「コエエエエエ!! 目が笑ってないんですけどおおおおおお  
!!!!

俺としちゃ軽い気持ちだったんだけど。

実はシャルル兄もジョゼフ兄を認めていて、でも王様になりたいからシャルル兄は魔法の修行を一杯したんだよ。クーもシャルル兄もジョゼフ兄がすごいのを知っていて、父上はやっぱりジョゼフ兄を王様指名するんじゃないかなあとか思ってるんだよ。でも王様になりたいシャルル兄はジョゼフ兄が王様になったらきつとすごい悔しがつちゃうんだよ。てきな? シャルル兄が本心を晒して王様になりたいと言え、ジョゼフ兄なら笑って譲ってくれちゃうかもよ? てきなてきな? そんなことを会話で伝えとけばシャルル兄の暗殺やシャルル派大粛清を無しに出来るんじゃないかと思っただけで。

なのにコレ。魔王を説得に来たら大魔王が隠れてましたっか?

この人なら「今のはカッター・トルネードではない。ウインドだ」が素で出来そうなんですけど。

やべえよ。勘弁してくれよ。

「興味深い話だったね。私も参加していいかい、セタンタ?」

ええい、覚悟を決めろ、俺! 予想外の場所から死亡フラグが現れるなんて生まれた時から経験し続けてる事じゃないか!

「俺としてはシャルル兄の意見も聞きたいし、むしろ参加してほしいくらいだけどさ。」  
「ううはジョゼフ兄の私室なわけで」

「ふむ。俺としても文句のあるはずもない」

「ありがとうございます、兄上。セタンタも」

チェスボードを挟んで向かい合って座っている俺たちの横、ちょうどチェスボードを横から覗きこむような位置にシャルル兄も座る。

と、ほぼ同時にシャルル兄が杖を抜いた。

ッ！

思わず身構えるべきか迷ったね。手元には槍はおろか武器になりそうなものなど何もない。杖を抜いた所で俺には何も出来ないし、ならば無手でどうにかできるかと聞かれれば自信は無いと答えるしかない。

うん。襲撃を予想してたんですわ。いや、この場で一番怖いのはシャルル兄が「手段を選ばない人間」なのではという予想が当たってしまうことだったんだ。

だからかな。シャルル兄がサイレントを部屋にかけた時は、安堵からか笑みを浮かべてしまったよ。

「王族ならば周囲の眼や耳には常に気を配るべきですよ。どこで誰が聞いているのかも分かりませんし」

シャルル兄も笑みを浮かべる。ニコニコとした見る者に安心を与えられる笑顔。今では「支持を受けるために創り上げた笑顔」にしか見えないけどね。

「立ち聞きしていた王族の言うことは説得力があるな。いや、責めているわけではない。それにサイレントなど、俺もセタンタも使えないのだから、まあ許せ」

ジョゼフ兄も嗤う。初めて見るシャルル兄の「人に見せない面」をどう思っているのか。まあ不快に思っているわけではないみたいだけど。

「そもそも聞かれて困る話をしていたつもりもなかったしね。俺とジョゼフ兄がサイレントをかけた部屋に籠っている、なんてほうが変な勘繰りを受けてたよ」

俺もワラう。「コミュニケーション」は最初っから全開だ。「説得力」「交渉力」「洞察力」etc. 全て使って俺の言葉を「無視することの出来ない言葉」にまで昇華する。「我が舌鋒に貫けぬモノ在らず」発動……なんつって。

目の前に座るは王位継承権第一位、ジョゼフ・ド・ガリア。手元に寄せるは黒のキング。神算鬼謀を操りて、臣下すら謀る「無能王」。

隣を見やれば王位継承権第二位、シャルル・ド・ガリア。その姿はさしずめ白のキング。誰にも剥げない白き衣の内側に、一体何を納めていることやら。

なんてカツコつけモノローグをしているのはこの俺、王位継承権第三位、クー・セタンタ・ド・ガリア。えーと黒も白もキングは無いし、……気分的には青のナイト？

ようやく舞台は整って、台本ナシの演技が始まる。

ジョゼフは本物の「シャルル」を見極めるため。その姿を目から離さず

シャルルは己こそが王に相応しいことを兄にすら認めさせるために

クーは全てを操って、祖国に血の雨が降ることを止めさせるために  
どう転ぼうと誰かしらを敵に回しそうな、口先での戦いを始めよ  
う。

覚悟はいいか？

……俺はあんまり出来てない



## 12・脅迫？　いいえ、交渉です

まず口火を切ったのはシャルル兄だった。小手先のジャブ、本気ではない一言。先ほどの俺の発言に切りこんでくる。

「聞かれて困る話ではないと言っただけだね、セタンタ。私は聞いていてヒヤヒヤしたよ。そのせいで立ち去ることも出来なければ、ノックをするタイミングも掴めなかったんだけど」

それに対して言葉を返したのはジョゼフ兄。

「ふむ。俺も聞かれて不都合のある会話だとは思わなかったがな」

「兄上。ここ、グラントロフには多くの貴族がいるのですよ。王族同士の会話を盗み聞きする貴族の存在など考えたくもありませんが、もし彼らに「貴族は魔法の才能でしか人の器を計れない者ばかりだ」なんて言葉を聞かれたら、セタンタは確実に反感を抱かれてしまいます」

「シャルルよ。セタンタは貴族の反感などどうとも出来ると言っただぞ？　特に、そんな言葉に凶星を指されて反感抱くような連中ならなおさらな」

「ですが兄上。セタンタはまだ幼いですし……」

笑顔を張りつけたままシャルル兄の眼が俺に向く。ちっとも笑っていない視線に貫かれながらも俺は肩を竦めて見せ

「確かに俺に反感を持った貴族が襲いかかってきたら事だけど、それ

はないでしょ。そんな短絡的な手段に出るバカが宮中勤務を務める地位まで登れるとは思えないし」

「短絡的でないからこそ怖いのだよ。恨みのような暗い感情というものは根付くものなのだからね、セタンタ」

まるで「暗い感情」と長い付き合いをしてきた人みたいな言葉だね、シャルル兄。今のジョゼフ兄なら、その言葉の意味を、そしてその先の真相／深層まで予測出来てしまつかもよ？」

「溜めこむというのなら余計に懸念は無くなるでしょう。そういう連中に見れば、俺は王位から最も遠い第三王子にして、特筆すべき明晰さも無く、さらには魔法の才も持たない、どう考えても王位に付くことはないだろう存在だ。放っておけば上の兄が王位に付くと同時に辺境にでも飛ばされるか、国益のために他所に政略結婚<sup>売</sup>でもさせられる<sup>出</sup>ような存在だ。眼中から消えてくれる存在をわざわざ害して地位を捨てるものなんていないでしょうっ」

「くっくく。忠義がある者ならそもそも王家に杖を向けることなどありえず、利によって動く者もまたセタンタに杖を向けることはない、か？俺にはむしろお前が貴族共を眼中に入れていないようにしか思えんがな」

「まさか。年中何かを企んでないと安心できないような連中を視界から外すことなどありえないさ。歯牙にかけるつもりもないけどね」

そりゃあ理想を言えば貴族が視界に入らない場所で悠々と暮らしたいけどな。

「……ふう。セタンタは一体何者だい？ほんの数時間前まで、私にとってセタンタは体を動かすことの好きな弟という印象だったのに。

演技でもしていたのかい？」

「それは俺も聞きたいな。魔法が不要だと言いきった時といい、貴族に対する考え方といい、これまで謀られていたのかという気分さえなってきた」

かたや「演技」を得意とする者が俺の「演技」を疑い、かたや周囲を「謀って」「口を無能だと思わせている者が俺の「謀」はかりごとを疑ってくる。気付いているのかな、この滑稽さを。気付いているんだろっね、どっせ。

「別に演技していたわけでも騙していたわけでもなかったんだけどね。ただ今まで俺の思考を表に出してこなかったというだけ。兄さん達しかこの場にいないから、今は話しているっただけのことだよ」

「何故、今までは隠していた？ セタンタは自分の考えを、セタンタがそこまで深く物事を洞察できるといふことを私たち以外には知られたくないのかい？」

「隠していたつもりもないんだけどね。さっきと同じ事を訊ねられていれば、正直に答えていただろうし。でもまあそれでも何故だと言われるなら、「王位争い」なんてのはゴメンだっと思いのせいだって答えるかな」

「ほう？ それは言い換えるならば、実力を隠さなければ王位を争える？ 自分も王の椅子に届きつるという自信の表れか？」

ジョゼフ兄の言葉に圧力が増す。もちろんシャルル兄からのプレッシャーだ。

「そんなんじゃないよ。王様になれるとも思えないし、なりたいても

思っていない」

でも、と続ける。

「ブリミル教が思いのほかしつこくてね。騎士団の奴らに聞いた話だと、例の「神託司教」を中心に噂を広めているそうなんだよね」

「なんだって？」

「俺って連中に狙われてるっばいんだよね。一応俺が魔法苦手なこともあって大々的には動いてないけど、でももし俺がそれなりに頭の回ることをアピールでもしようものならさ、アイツら俺を担ぎ出しそうなんだ」

「ほう。セタンタにとっては面白い展開ではないのか？」

「冗談。俺は王冠なんかより平穏が欲しいの。ブリミル教に後押しされるなんて最悪な展開だよ」

「……やはりサイレントは必要だったじゃないか。今の発言が聞かれていたら」

「サイレントをシャルル兄が掛けてくれたからこそ言ってるのさ」

それ以前は貴族を批判はしてもブリミル教やロマリアには一言も触れていなかっただろ？

「現状俺は王位獲得レースでは大穴なんだよ。それも誰も賭けていないほどの。でも教会がバックにつこうものなら、下級貴族がわらわら群がってきかねない」

順当にジョゼフ兄が王位を継げば、現在の有力貴族が次代の国家の中枢も担うことになるだろう。

次点のシャルル兄が王位を獲れば、シャルル兄を支持した有力な中堅貴族にポストが用意されるだろう。

ではクー・セタンタが王位を奪えば？ 俺に手を貸した貴族が新たな有力貴族になることは明白。

現状では俺は王位に最も遠く、実績・功績なども皆無。王位争いにおける勝ち目など見えない俺に味方する者はいない。なぜなら王位争いに負けた派閥は辛酸を舐めることになるのだから。次代の王にとしての「過去の政敵」になど誰もなりたくはないだろう。

しかしブリミル教がバックにつけば話は完全に変わる。

ブリミル教が俺を支持するということは、ロマリアが支持するということであり、俺の力が増すことになる。

勝ち目が見えてくれば下級貴族にとってこれほどおいしい勝負の場は無い。クー派に属し勝利すれば、一気に子爵以下の貴族が侯爵・伯爵クラスの爵位を手に入れられるかもしれないのだ。領地も持たない貴族の次男三男でも、宮中勤務の要職につけるかもしれないのだ。ジョゼフ、シャルルに与したゆえに有力貴族は中枢権力から追放され、多くのポストが空位になるのだから。

ゆえに「神託司教」らは、騎士団員のような領地を持たず己の才覚で立身出世を目指す下級貴族、シャルルにとっては掌握する優先順位の低い者らに目を付け。

そして、ガリア貴族の大半を占める下級貴族、その多くが俺の味方となった場合、

「それこそ前線に出たがる貴族ばかりが集まるだろうね。貴族に戻りたがっている爵位を取り上げられたメイジなんかも集まってくるかも。魔法を使う兵隊<sup>ポイン</sup>が完成することになる」

強力なクー・セタンタ軍が出来てしまう。それこそ、王位をめぐる「政争」ではなく「戦争」を起こせるくらいだ。

さらにジヨゼフ派、シャルル派の苦境は続く。

俺を敵に回すということは、同時にブリミル教を敵に回すという、最悪異端認定されかねないリスクを背負うことになり、今まで支援していた貴族の離脱や平民の悪感情を引き起こすことにもつながるだろう。

さらには「始祖の敵」とされてしまえば、周辺国すら敵に回しかねなくなるのだ。ロマリアがただ声明を出せばいい。「始祖の敵を討とうとしない者もまた、異端である」と。異端認定への恐怖ゆえに、ゲルマニアからトリステイン、アルビオンに周辺の小国までもがガリアに攻め入って来るだろう。

とはいえそこまで事態が悪化するとも限らず、今述べたものは想定できる未来のうち最悪に近いモノでしかない。だがジヨゼフとシャルルも想像できる最悪である以上、それは可能性として考えておかなければならないものだ。

そう。今、この場での俺の僅かばかりの発言で、ジヨゼフ兄もシャルル兄もソレを想像できていた。

ゆえにシャルル兄の表情は「初めて」「歪み、それを見たジヨゼフ兄は「初めて」「震えていた。

「王位争いに巻き込まれるなんて、平穏を望む俺には百害あって一利なしなんだよ。巻き込まれたが最後、祖国は荒れ、兄弟とは敵になり、たとえ勝ったとしても、幼い俺を操って国を我が物にしようとする貴族には狙われ、バックに付いてたブリミル教は枢機卿を送り込んできかねない。得るものなんて何もなしのさ」

だからさ、と俺はワラワラ。

「俺の本性は兄弟だけの秘密ね。兄さん」

ワラワラワラワラ。ワラワラしてみせる。

最初のターンだましあいは俺の勝ち。

二人は騙されたことにも気づいていない。

俺は「コミュニケーション」を使い「以心伝心」を操った。

最悪の未来のイメージ。全てが兄さんたちにとって悪い方向へと転がった場合のイメージ。

それは俺が放ったもの。テレパスの如く飛ばしたモノ。

二人の兄は誤解する。僅かばかりの俺の言葉から、それを自分が閃いたのだと。それが脳裏に閃いた「自分の想定」「自分の予測」であると誤解する。

ゆえに騙されたことには気付かない。気付くことなく「自分の考え」を「確信」する。

これで青のナイトは傍観者になる。巻き込まれることをこそ警戒する俺を、シャルル兄は王位争いの敵候補とは見なくなる。クーは「あり得る未来」を回避したいだけなのだ、と「確信」させたのだから。

全ては俺の狙い通り。最初のターン勝負は俺の勝ち。

はてさて次はどちらのターン？

黒のキングと白のキングの一騎討ち。

血みどろの戦いだけは勘弁してくれよ？

### 13・その死亡フラグをぶち殺す

なにはともあれ、やっと一息つきました。どもども、クーです。

え？ 話の続きはって？

ちよっと待ってよ。慣れないシリアス調が続いたんで疲れてるんだから。

あー、胃が痛い。そして表情筋も痛い。兄二人を前に俺の寿命がストレスでマツハなんだが。

だけどシャルル兄に危険視されるっていう特大の死亡フラグは(一時的に?)鎮静化させることに成功した模様。突然シャルル兄の危険度に気付いただけに、随分焦っちまったぜ。あんなに焦ったのは「誕生前」に神さんに睨まれた時以来かも分からんね。

さて、と。これでやっと本題に入れるかな？

元々ジョゼフ兄にシャルル兄の暗殺やシャルル派の粛清を行わせないためにチェスの後の話を誘導したんだし、ここからがメインディッシュのようなものだ。

シャルル兄が聖人君子なんかではないとジョゼフ兄に理解させ、シャルル兄が将来的に建てるであろう死亡フラグをブチ折ってやらないと。

俺、このミッションを成功させたらイザベラとフラグ建てるんだ。

さて、俺の「三人だけのヒ・ミ・チュ」発言(いや、ニユアンス的には合ってるっしょ?)以降くつくつと嗤っていたジョゼフ兄が口を開いた。次のターンはジョゼフ兄さんっすか。いよいよシャルル兄の仮面について口撃するんすか? なんて考えていたら、

「くっくっく。まったくおかしな奴だな、セタンタよ」

まだ俺の(攻撃される)ターンは終わって無いぜ! ってことっす



か？ 勘弁してくれー。

「始祖の残した魔法を不要な力といい、貴族を下に見、拳句の果てには王位を要らないと言い切る。どれも俺には至れぬ考えだな」

ふっ。残念だがジョゼフ兄よ。俺はもう話題の中心には居たくないからさ、ここからはシャルル兄と踊って貰うぜ？

「ジョゼフ兄が考え付かなかった？ 本当に？ ってことは、魔法は必要で、貴族も重要で、そして、」

行け、リバーズカードオープン！

「王位には興味深々ってこと？」

ウケケ。シャルル兄が目を見開く。未だに笑顔を崩していないことは立派だが、頬が引きつってるよ？

まあそれも当然か。「無能」の名は伊達じゃあない。当初は魔法の才を持たないがゆえに付けられた渾名だったのだろうが、現在では第一王子であるにもかかわらず政務に積極的に携わろうとしないその姿勢ゆえに「無能」と諷られているのだ。そんなジョゼフ兄を見て王位継承に意欲的だと見る者はいないだろう。

伝統がある故、長子が王位を継ぐべきだと口にする有力貴族たちにとってもその認識は同じ。ゆえに「長子」であるという以上のアドバンテージをジョゼフ派は得られなかったのであるが、もしもジョゼフ本人が王位に興味を示し貴族の取り込みを始めてしまえば……。そんなことを考えているのかな？

「ふむ。王位か。実はな、セタンタ。俺は次の王になるのはシャルルだと考えていたのだよ」

「……兄上」

「俺だけでなくほとんどの貴族がそう考えているはずだ。おそらく父上や母上も。俺を次期王になどとほざくジヨゼフ派なる連中のことは知っているが、奴らは利権が欲しいだけで俺のことなど見てはおらんしな。セタンタが初めてなのだよ。俺を王様などと言ったのはな」

それほどハルケギニアにおいて魔法は重い。魔法を使えないという、ただそれだけのことで血筋も才能も、人としての全てをも否定されるほどに。

「正直言って王位などには興味など無かった。いずれシャルルが手に入れるのだと諦めていたのかもしれない。実際そうなることを確信していたのだ。むしろ俺に王位を譲るなどと言われたら、父上の正気を疑っていただろうな」

くっくくく、とジヨゼフ兄が「ありえない未来」を嗤う。それが「正史」なんだけどねえと俺も声には出さずにワラってみせる。

「だが、どつしたのだろうな。どつやら今の俺は王位というモノにそれなりに興味を持っているらしい。要らぬと断言できない程度には、であるがな」

「……それは、どのような心境の変化でしょうか？」

「簡単なことだ、シャルルよ。今までが狂っていたのだと理解させられたのだ」

チラリとジヨゼフ兄がこちらを見る。

「魔法が使えないゆえに俺は「無能」であり、魔法の天才であるがゆえ

にシャルルこそ「王に相応しい」のだと思っていた。が、どうやら我らが弟の言う所によれば、魔法の才など一つの物差しに過ぎんらしい。確かにそうなのだろう。俺という人間は、「魔法が使えない」という唯それだけのモノだけで構成されているわけではないのだから」

不思議と楽になった気分なのだよ。ジョゼフ兄はそう呟いて嗤うのをやめた。そして、

「今は、試してみたいと思っているのだよ。果たして俺は「無能」だったのか。果たして俺はシャルルには勝てないのか。どうせ王になどなれぬのだからと避けてきた政務だったが、今では俺にこの国をどこまで変えることが出来るのかと興味を持ち始めてもいる」

その独白はシャルル兄にはどう映っているのか。

再びジョゼフ兄がくっくと肩を震わせて、

「まあ結局のところは、シャルルに勝ってみただけなのかも知れんがな」

それだけの理由で王位争いなどという巨大な政争、すなわち政治的戦争を起こそうなどと考えているのだ。そんな思考をする俺は、王になど決してなるべきではないのかもしれないが。ジョゼフ兄は嗤ってそう言い、

「シャルルよ。お前はどのようなのだ？ 誰もが次の王に最も相応しいと考えているお前自身は、その手に王位を掴むことを欲しているのか？」

「次の王位とは父上、国王陛下の決定するモノです。私個人の意思など」建前は要らんよ、シャルル」

「この部屋には我ら兄弟しかいない。そのうえ我が国最高の使い手のかけたサイレントがあるのだ。「本音」を語れ」

「……ですが」

「俺は本性を見せしジョゼフ兄は本心を語ってくれた。シャルル兄も本音を明かしてよ」

大分軟化したとはいえ、ジョゼフ兄の意識を変えるにはシャルル兄の本音が必要だという俺の考えは変わらない。ここで退くわけにはいかないのだ。

第二のターンはジョゼフ兄の独壇場。

本当にジョゼフ兄が王位に興味を持ったのかなんて、俺でさえ読み取れない。

全てシャルル兄に本音を語らせるための撒き餌のようにも見えるし、心からの本心のようにも思える。

未だ狂王とは成っていない「天才」は、一体何を考えているのやら。

次はいよいよシャルルのターン。

はたして白のキングはどう動く？

依然騙そうとしてくるか？

それとも……？

## 14・告白／独白／慟哭

本音を語れ。そうジョゼフ兄に言われた後、しばらくの間シャルル兄は口を開かなかった。

そこにあるのは逡巡か、それとも葛藤か。

俺やジョゼフ兄が実は「本心」を語っていないという可能性も十二分に在り得る。にも拘わらず自分は本音を語るのか。笑みを消したシャルル兄からは容易にその葛藤が読みとれた。

そしてそれは、シャルル兄の心が揺れていることを示している。

片や王位よりも平穩が欲しいのだとワラウ弟。片や自分に勝ちたいという唯それだけの理由で王位を狙ってみるかと嗤う兄。

最も王位の継承を囑望された次兄が、対話の主導権を常に握られ続けたシャルル兄がやっと口を開いた。

「兄さん。……僕は」

その一言はジョゼフ兄にも明確に理解させる。「兄上」ではなく「兄さん」と呼び、「私」ではなく「僕」という言葉に、シャルルが本音を語るのだと理解していた。

「僕は、兄さんが次の王に相応しいことを知っているんだ」

ジョゼフ兄は無言を通す。言葉の意味を噛みしめるように、シャルル兄の本音を聞き逃すまいとするように。

「兄さんは僕が次の王について言ってくれたけど、僕はそうは思っていなかった。僕が兄さんに勝てることなんて、魔法の腕くらいしかないとも思ってる」

「お前は皆に認められているじゃないか。誰もがお前を愛している」

「そうなるように努力したから、ね。そもそも誰からも嫌われなかったというのは美德なんかじゃないんだよ。清廉であれば利によって出世してきた貴族には疎まれるし、賄賂のような穢れを容認すれば王家への忠誠心の強い貴族に眉をひそめられる。誰からも認められるという事実が、僕が貴族たちの顔色をうかがって立ちまわってきたことを証明してる」

清濁併せのむ器量も必要なことだとは思っ、が、今は口を挟まない。

これはシャルル兄の告白なのだ。ジョゼフ兄にもシャルル兄にも必要な、俺の立ち入るべきではない対話なのだから。

「そう。僕は貴族の顔色をうかがってきた。僕は、王様になりたかったからね」

「……そう、か」

「僕が最年少スクウェアになれたのだったって王様になりたかったからさ。魔法以外では兄さんに勝てないことを知っていたから、唯一勝てる魔法の腕を磨き続けた。魔法の腕さえあれば、きっと皆は僕の方が王様に相応しいと認めてくれる、そう思っていたからね。だからセタントの「貴族は魔法でしか人を計れない」っていう言葉を聞いた時は焦ったよ」

「凶星を突かれたか？」

「それもあるね。でもそれ以上に貴族の耳にその言葉が入るのが怖かった。魔法以外の面で僕と兄さんを比べられたら、絶対に勝てないと分かっているんだから」

なるほど。最初感じた威圧感は焦りから漏れたものだったのか。

「僕はね、兄さん。僕は欲深い男なんだ。ダメな奴なんだ。兄さんが魔法を使えないってことで馬鹿にされていることを知っても、僕は何もしようとは思わなかった。政務に携わろうとしない兄さんのことを悪く言う貴族がいても、僕はそれを咎めたりなんかしなかった。全て、僕が王様になりたいってだけの理由で、兄さんが苦しんでいるのを見ないふりをしていたんだ」

告白は懺悔に変わる。今まで隠し通してきた本心を漏らしたことで、決壊したのだろう。全てを吐き出したいという感情に従っているのだろう。

「僕が次の王様になると思っていたって兄さんが言ってくれた時、とても嬉しかったんだ。でも、兄さんが王位に興味が湧いたって言った時には、とても暗い感情が湧き出してきたんだ。兄さんにこんな感情を向けてしまうこんな自分が嫌いなんだ」

「……………シャルル」

「セタンタの話聞いていた時もそうさ。セタンタはガリアに混乱を起こしたくないと言っていたのに、僕はセタンタが王位争いに加わらないことに安心していったんだ。国の未来よりも自分が王様になれるかどうかの方が大事に思っていたんだ！」

それは独白。たまりにたまった感情は、欲望の一言で表すには複雑すぎた。嫉妬、羨望、自己嫌悪。心情を読み取れる俺にはキツイくらい感情のうねりがシャルル兄から発せられる。

「兄さん。セタンタ。僕はこんな男なんだ。魔法という「分かりやすい優秀さ」をはぎ取れば、こんなに醜い男なんだよ」

「シャルル。もう十分だ」

「何がさ！ 僕は今まで騙して来たんだ！ 兄さんが魔法の失敗をする姿を見て、僕は優越感に浸っていたんだ！ セタンタが魔法の勉強から逃げていると聞いて、王位を争う相手が自分から墮落して行ってくれたと笑っていたんだ！」

「シャルル！」

「僕は王様になんて相応しくない。分かっているのさ、そんなこと。でも、僕は王様になりたいんだ。そう思う自分が大嫌いなのに」

シャルル兄の顔が歪む。ジョゼフ兄がシャルル兄の肩に手を置いた瞬間、シャルル兄の眼からは涙が零れおちていた。

「もういい、シャルル。俺だって綺麗な人間じゃない。お前に嫉妬して、疎んでいた。お前の苦しみも、悩みも、本心すら見ようとはしなかった。お前だけが醜いだなんてそんな考えは止める」

ジョゼフ兄がシャルル兄を抱き寄せるようにして引つ張り肩を組む。

途端、嗚咽が漏れだした。

二人の男は肩を寄せ合う。

久しくなかった本音での語り合いを終え

心にため込んだモノを吐き出して

疎遠であった心の距離が縮まったことを示すように、ただ肩を寄せ



合った

その姿は

俺の知らない二人の少年時代を幻視させるほど

純粹で、尊く見えた

## 15・チエックメイト

王族同士ではなく、ただの兄弟として接している二人を、俺は何も言わずに見ていた。

何も思わないわけではない。俺も二人の弟なのだから。

だが、今はそれ以上に冷静になるべきだ。

ジョゼフ兄とシャルル兄の仲が良好になったことは、原作で発生したシャルル暗殺の可能性を大幅に引き下げた。それはネガティブな俺でも確信しているし、それこそ万が一ジョゼフ兄が狂いでもしなれば、原作でのシャルル暗殺は発生しないだろう。

そう。「原作での」である。

今回の対話での唯一発生した懸念。それを挙げるとすれば、ジョゼフ兄の発言である。

曰く、王位に興味が湧いた。

もちろんシャルル兄から本音を引き出すための布石だったとも考えられる。本心を隠し、演技を得意とするシャルル兄から本音を引き出すには、可能な限り精神的に追い詰める必要があった。すなわち俺がその気になればガリアにクーデターを起こすことも可能だと理解させ、ジョゼフ兄が王位を積極的に継承しようと思わせろ。王位を渴望するシャルル兄からすれば危惧すべき状況だ。ソレを突き付けていなければシャルル兄の仮面を壊すことは出来なかったかもしれない。

そう。ジョゼフ兄のあの発言は、シャルル兄から本心を引きだすために吐いた嘘ともとれる。

しかし、本心から王位に興味を持ったのではないかと懸念出来るのだ。

原作でのジョゼフは父王から次王として指名されるまで王になるとは思っていなかった。これはジョゼフが初めから王位はシャルル

のモノと諦め、政治的活動をしてこなかったことを意味している。

しかしもし、ジョゼフが王位継承にむけて積極的に動いていたら？

魔法の才能がないとはいえ、王家は長男が継ぐもの。それはゆるぎない伝統。王族のお家騒動など国力を下げるだけなのだから、継承者争いなどを防ぐためにも、その伝統はもはや鉄則に近いモノがある。

しかし如何に伝統が、それこそ六千年もの間王家を維持させてきた伝統が存在したとしても、ここはハルケギニアである。

魔法の才がないというだけで王家の者が誇られることさえ普通な、ハルケギニアという俺には狂っているとしか思えない世界なのだ。

当然のように「魔法が使える」という理由だけで次男であるシャルルをそれでも推そうとする者はいるだろう。

ならば、伝統を超え次男であるシャルルを王にしようと動くシャルル派と、それを積極的に迎え撃とうとするジョゼフ派がぶつかり合うことになる。

ジョゼフ兄が王位を目指すということは、原作では発生しなかった次王指名以前の政争の発展を意味するのだ。

そして、ここは大国ガリアであり、数多くの貴族のいる国なのである。

全員の行動を把握できなくなるまでに膨れ上がった派閥の中で、暴走する者がいないとは限らない。

政治的闘争において、支援者の上げられる最大の功績は政敵の追い落とし、すなわち暗殺にあるのだから。

「原作での」シャルル暗殺はもはや発生しない。しかし、俺はそれだけで全てを安心したりなんかしない。

最後の仕上げ、させてもらうぜ、兄さんがた。

「恥ずかしい所を見せてしまったね」

ようやく落ち着いたシャルルの第一声は、気まずそうに目を逸らしたまま発せられた。

「恥ずかしいなんて言わないさ。むしろ兄弟としての親睦が深まった感じだし」

「くっくっく。確かに距離は縮まったか。なに、俺もセタンタもこの部屋であったことは秘密にしておきたいのだ。シャルルが口外しなければ、誰にも知られることはないさ」

「それは、……僕としても誰にも話すつもりはないけどさ」

随分と打ち解けている。出来ればこのまま、めでたしめでたしと行きたいところなんだけど、

「さて、それじゃあ結論を決めようか、兄さんがた」

「結論？」

仲良くハモっちゃって、まあ。

「そ、結論。俺にとっては平穩が一番大事って言ったでしょ？ だからさ、俺の住んでる国で、俺の兄弟たちが王位をめぐって争い出す、なんてのは回避したいんだよね」

その言葉で二人の兄も俺の言いたいことを理解したようだ。さすがは天才兄弟。

「ジョゼフ兄は王位に興味が出てきたって言ってたけどさ、シャルル兄の本音を聞いてもまだ「シャルル兄に勝ちたい」と思ってる？」

それは劣等感から来た思いのはず。シャルル兄を見返してみたいという思いから来たはず。

ならば、シャルル兄もまた劣等感にさいなまれていたという事実が

明るみになった今はどうか？ シャルル兄が清廉なだけの人ではなかったと分かった今でもその思いは変わらないのか？

「シャルル兄は王様になりたいって言ってたけどさ、そのためならジョゼフ兄や俺を害すことも辞さないと思ってる？ それとも真っ向から挑戦して、王位に届かなかったら素直に諦められる？」

自分で言うておいてなんだが、シャルル兄が俺やジョゼフ兄に直接手を出すことはあり得ないだろう。それはシャルル兄がこの部屋に来て、最初にサイレントをかけた時点で判明している。

シャルル兄が王位のためなら手段を選ばないという人なら、あの瞬間唱えられたのは攻撃魔法だったはず。それこそが「最短」。言い訳など、「無能な兄弟たちが王位を篡奪するために父王を害す計画を立てていた」とでも言えばいい。清廉で知られるシャルル兄を疑う者はいないだろう。

しかしシャルル兄は対話を選んだ。それはシャルル兄が「最善」を目指していたことを示している。

ならばどれほど効果的でも俺やジョゼフ兄を害そうとはしないと、思うわけだ。

ゆえにあの時「安堵から笑みを浮かべ」たのではあるが。

「つまり、セタンタは今、僕か兄さんのどちらが王に相応しいか決める、と？」

「くっくっく。政争を回避するにはそれが最適なのかもな」

「……セタンタ。僕もいろいろ言ったけどね、次の王とは国王陛下が指名するモノなんだ。周りの貴族の意見を聞くことはあっても、決定権は陛下にある。誰にも口出しは出来ないんだ」

頭が固いなあ。やりようなんていくらでもあるのに。根っこのと

ころは王子様なんだよね。髭だけど。

「なら、国王陛下ではなく、父さんに話しに行きましょう。俺と、まあどっちかの兄さんが王位を要らないと言って、王様になりたい方の兄さんが父さんに「王冠ちょうだい」って「おねだり」に行く。家族の会話を咎める奴なんていないでしょ？」

「ハッハッハ！ 王位をねだれ、か。まったく、お前と言う奴は」

「しかしだね、セタンタ」

笑う長兄、渋る次兄。だけど俺は止まらんよ。ここまで来たんだ。  
チエックメイト  
詰みまで行くさ。

無言で二人の兄を見る。目に込める意思是「コミユカ」を使ってブースト済みだ。答えを聞くまで引かない意思を視線に込める。

数分、もしくはほんの数秒だったのか、まあ俺にとってはとても長く感じた時間の後、

「そうだな。父上に頼んでみるか」

口を開いたのはジョゼフ兄だった。

「うむ。次の王にはシャルルを、とな」

「兄さん!？」

「ん？ セタンタの言うことはもっともだと思っぞ？ 政争を避けるにはそれが最適だ。それに折角本心を語り合った弟たちと争いたくなどないし、な」

「そうじゃなくて、兄さんは王位を諦めていいの？」

「ああ、いいとも」

ジョゼフ兄は茫然とするシャルル兄に笑いかけながら

「俺は一度だけでもシャルルに勝って見たかった。ただそれだけだ。そしてシャルルは今まで俺に負けていたと思っていたんだらう？  
なら俺が勝っていたも同然ではないか。それならもう満足だ」

「……兄さん」

「それにな、この国を良くするにはそれが一番いいのだらう。なに、王宮から離れて隠居するつもりはないぞ？ 俺は自分がこの国をどこまで富ませることが出来るのか、試してみたいと思っているのだからな。次王の政治にも口出しさせてもらおうとも」

はっはっはとジョゼフ兄が笑う。シャルル兄もそれにつられて、そして全てが綺麗にまとまりそうなことに俺も笑みを浮かべ、

「俺たち兄弟ならきつとガリアをもつと素晴らしい国に出来るぞ。セタンタもいるのだしな」

「……………へ？」

「へ？ ではないだらう？」

いや、ちょっと待ってよジョゼフ兄。俺は隠居したい組なんだから。

「なにせ口先だけで俺とシャルルに本心を語らせ、その上国の未来まで決定してしまったんだぞ、お前は。今から鍛えればどれほどの外交

の天才になることが」

「確かにセタンタならとんでもないことが出来そうだね。うん。僕たちならきつとガリアをもっといい国に出来るよ」

いやいやいや。ちょっと待とうか、髭共。俺に今後こんな腹の探り合いを続けると？ しかも他国と？

おいおいおい。マジで待ってくれよ。

なに？ 決定？ ふざけんな！

やらんぞ俺は！ 外交なんぞ学ばん！

頼むよ。マジで。

……………勘弁してくれ



## 16・彼女が出来ました

彼女が出来たよ

バツソに。

どちくしょう  
!!!!!!!

二ーハオ。クーです。現在八歳です。あの兄弟会議から一年くらい経ちますね。

あの後すぐに父上に直談判に行き、結構あっさりシャルル兄を次の王にするという提案は受け入れられました。まあ、ジョゼフ兄と俺が「アルビオン辺りまで旅行に行って行方不明になりたくなるかも」と亡命をほのめかしたりもしたんで、ゴネルわけにもいかなかったんでしょうがね。

とは言えアレから一年経った今でも、まだ王位継承は行われてません。

俺たち兄弟の目的の主眼は「シャルルに王位を継がせること」というより「王位争いを発生させないこと」にあるので、少ないとはいえ確かに存在しているジョゼフ派などの掌握を進めないといけないそうです。

大体後一年くらいかかるか、とジョゼフ兄がこぼしてました。王位

争いは数十年に一度のビッグイベントなので、その中心に儂を据えろと仰りやがるアホ貴族も多いんですわ。俺もOHANASHIに駆け出されたりしたよ。え？ なのは式は使ってませんとも。ええ。平和的なOHANASHIでしたヨ？ ウケケ。

そんなこんなでこの一年は結構忙しかったりしました。リユティス以外に出ることも初めてなのに、ガリア中を移動させられたからね。

なもんでグラントロワにもあまり来れなかったんだけど。

まさかソレがこんな事態を引き起こすとは。

「バツソに彼女が出来るなんて……」

現在東薔薇騎士団の詰め所に来ています。お通夜のような雰囲気です。

ガリアのエリート組と呼ばれる花壇騎士ですが、コイツラ、基本的に一人身が多いです。

騎士なんて言ってみれば軍人ですからね。出会いがないのがデフォ。宮中勤務の女性はどうかと思うかもしれないけど、そういう女中のような人は平民だからね。結婚を前提に付き合っには身分の差が壁になり、軽い気持ちで手を出すには宮中勤務という職業が壁になる。結局手を出されることは無いわけですわ。

それに実力はあるとは言っても命を張る職場に勤める連中です。当然領地持ちの長男坊なんかは騎士団入りなんてしません(たまに箔付けのためにコネで入団してくる奴もいるけど)。

魔法の腕は確かにある。でも出会いは無い。金もない。爵位もたいてい持ってない。

すなわち、モテないわけですわ。

そんなモテない奴らで構成される騎士団に、未だ見習いにすぎない少年に彼女が出来たなんて情報が広まったら。

ま、吊るし上げですわな。

「バツソ」

「はっ」

椅子に座らせられ縛られているバツソの前に立ち、語りかける。俺の背後には他の騎士団員が沈痛な面持ちで並んでいた。

「バツソ。俺は悲しい。俺はお前ら花壇騎士団員を部下だなんて思ったことは無かった。共に訓練し、共に笑い、共に泣き、かけがえのない絆で結ばれた仲間だと思っている」

「……もったいないお言葉です、殿下」

「特にお前のことは友達だと思ってたんだ。年も近いことがあったしな。なのに、なのになんでっ」

思わず膝から崩れ落ちる。周囲で成り行きを見守っていた騎士団員にも、俺と同じように声にならない声を押し殺している者がいた。

「なんでっ、お前だけ彼女が出来るんだよおおお!!!」

「そうだ、カステルモール！ ふざけんな!!」(二十二歳独身のAさん)

「一人だけ抜け駆けしやがって!」(十九歳童のBさん)

「イケメン死ね！ 氏ねじゃなくて死ね!」(二十六歳お見合い十七連敗中のCさん)

「クソッ。私には春が来ないっていうのに!」(三十四歳東薔薇騎士団団長のDさん)





「や、やばいぞ！ バッソの縄を切れ！ こんな所を万一見られでもしたらー！」

俺の言葉に皆の顔から血の気が引く。誰だって火山の噴火を再現出来るような化け物の逆鱗を触れたくはないだろう。

「おい！ 水の秘薬をありったけ持って来い！ カステルモールの口が切れてやがる！」

「痣になってる所も全部治すぞ！ 逃げ！ 風のメイジは外を警戒しておけ！」

「くそっ！ どの誰だ、バッソをこんなに殴った奴は！」

「『殿下が一番殴ってましたよね』」

「『うおい！』」  
「『いついつ時は連帯責任でお願いします!!』」

治療には参加できないし、そ土下座でもしてしまおうかとオロオロしていると、外を見張っていたはずの団員が悲鳴のような声を

「殿下!! お逃げくだぶぐるおあ!!」

上げて飛んでいった。

……え？ マジ？

「うぶ。うぶふぶぶ。バッソ君とお昼でもと思って来てみたら、随分楽しそうなおことをしてらっしゃるのね」

あは、あは、あは、あは。

「ねえ、殿下？ 私のバツソ君に何をしたんですかあ？ いくら殿下といえども。うふふふふ」

コ、コエエエエエエエエエエエエ!!

一年ぶりの死の恐怖だよ

ハルケギニアはやっぱり死亡フラグが満載だよ

もうホント

勘弁して下さい

## 17・フラグ？

ちゅーっす。クーっす。現在九歳です。あと一年で二ケタになりますね。

最近どんどんクー・フリーンに似てきちゃってるのが悩みですかね。この前バツソカップルのイチャコラ見せられて、俺もフラグ建てねばと一念発起、久しぶりにイザベラ&シャルロットに会いに行ったらね、うん、泣かれました。目つきが人殺しの眼だっけイザベラには怒られ、シャルロットはマジ泣き。そら怖いよなあ。『猛犬』だもんなあ。

あー、ネガるのは止めよう。今日は大事な話があるとかで父上に呼ばれていたんだった。

と言うことでやってきました国王陛下下の執務室。

最近有能っぷりが知られてきているジョゼフ兄と、なにやら貫禄のようなものが出始めているシャルル兄も一緒です。

はてさて一体何用でしょうかね。最近ジョゼフ派とのOHANASHIには駆り出されなくなってたんだけど。

そんなことを取り留めもなく考えていると、父上から話し始めた。

「よく来たな、セタンタ。健勝なようで何よりだ」

「いえ、一昨日会ったばかりなんですが」

ボケたか？ その一言はなんとか呑み込んだ。洒落にならんし。

「ぐぬっ。まあなんだ。父親というのはいつも子の事が心配なのだ

よ」



「今日呼ばれたのは親子としての話をするためでしょうか？」

それならば楽にさせて貰いますが。そんな言葉を言外におわせる。

……いや、これでも畏まってるんヨ？ 背筋もピンと伸ばしてるし。

しかし父上は、ジョゼフ兄との血の繋がりを強く感じさせる笑みを作って、

「いや、今からするのは『公』の話だ。三人とも、そこに並びなさい」

「はっ」「はっ」

シャルル兄を父上の正面に、俺とジョゼフ兄がシャルル兄に付き従うように一歩下がって脇を固める。これからの『ガリア王家』の形つてところだ。

「まず、これから話すのは内密の話だ。しかし同時に公になる話でもある」

ふむ。つまりは公然の秘密という奴だな。ならば話の主題も予想が付く。

シャルル兄もジョゼフ兄も俺と同様気付いたはずだ。特にシャルル兄なんか肩が震えているし。

「ふむ。何が言いたいのかは分かっているようだな。ならば単刀直入に伝えてしまおう。」

シャルルよ。余は次王にそなたを指名する。

これより十ヶ月後。フェオの月に正式に王位を移譲する故、心定めて待つように」

「謹んで、お受けいたします」

シャルル兄が膝をつき臣下の礼をとる。

王となればすることは無くなるだろうと臣下の礼をとるシャルル兄の背中が、歓喜に震えているようだった。

「同時にジョゼフ、クー・セタンタ両名には公爵位を与える。未永く次王シャルルを支えるように」

「謹んでお受けいたします」

この時を持って、ガリアの運命は確定した。

もはやこの国から『内乱の正史』の可能性は完全に失われ、戦乱に苦しむことも無くなるだろう。

歴史が変わったことを事実として確認できるようになって、俺はハッピーエンドにたどり着けたことを実感していた。

にしても公爵か。やっぱり領地経営しなきゃならんよなあ。ま、税率下げて犯罪取り締まるだけでも平民の支持は取れるだろうし、あまり気負わずのんびりやるか。

そんなことを考えていたんだ。この世界が俺にはハードモードであることも忘れてな。

現実に引き戻されるには親父殿の一言で十分だったよ。

「あ、セタンタは今からトリステイン行ってこい」

「……………は？」

「王位継承式典の準備のようなものだ。ガリアの王位継承式典ともなれば、他国の王族や有力貴族も参加する」

「トリステイン王家に招待状を渡して来いってことですか？」

「うむ」

「トリステインだけでよろしいので？」

「まあな。アルビオンは交通の不便さもあることから代理の使者を送ったとしても許容される。ロマリアにはガリアで活動する司教を通さねば逆に問題が生まれる。ゲルマニアは始祖の血を引いていないからな、我々には強く出れん。結果、礼を尽くす相手はトリステインのみでいいというわけだ」

それはトリステインだけは王族を使者にしないと文句言ってくるってことなんじゃ？

あーやだやだ。プライドでぶくぶく太った弱小国のご機嫌伺いに行かなきゃならんなんて。

「それとな、その足でオルレアンに行くように」

「オルレアン」

確か原作タバサの実家があったとこだよな。

「王家直轄領でな。ラグドリアン湖もそこにある」

「それで？ ラグドリアン湖で何をすれば？」

「王位継承式典とはいえ、全ての他国の貴族も招待してしまえばリュティスが溢れかえってしまうだろう。だからと言って我々の側から他国の貴族を格の差などで差別してしまえば後の外交に支障をきたす。それゆえのラグドリアン湖だ」

「つまりはだな、セタンタ。リュティスでの王位継承式典は王家や教皇などの一握りの有力者のみの出席とし、大多数の貴族には式典後、景勝地として名高いラグドリアン湖での園遊会への出席を求めるのだ」

なるほど。つまりは結婚式後の披露宴みたいなものか？ 確かに他国の貴族が大量に王都に押し寄せてくれば、色々と問題もあるだろう。警備上の観点とか。

「要するにトリステインへ挨拶に行ったあとはオルレアンで園遊会の準備をして来いってことですか」

「うむ。主導はセタンタが取るとはいえ、専門の者を付けるから安心するといい。まあなんだ。このところ国内のゴタゴタを片付けるためにセタンタにも苦勞をかけたからな、ハルケギニアーの景勝地で羽を伸ばして来い、ということだ」

羽を伸ばすなら他国になんか行きたくないんだけどなあ。  
しかもトリステイン。厄介事の匂いがぷんぷんするぜ。

「なんなら嫁でも探して来い。トリステインのアンリエッタ姫もお前と同じ年くらいだったしな。はっはっは」

はっはっは。テラワロス

それだけは回避してやるともさ

いや、ホント

予想外のフラグ建設とかは、勘弁してくれよ？

マジで。運命操ったりすんなよな

頼むぜ、神さん

## 18・両用艦 発進!

(、・・・)ゝクーです。

現在お空の上です。

ええ。フネに乗ってトリステインに向け移動中です。

いやあ、トリステイン行きを父上から命令されてからはトントン拍子で、気付いたら空の上って感じですね。

まあ外国まで馬車で行くはずは無いとは思ってたけど、それならなおのこと出立までは時間がかかると思ってたんだけどね。

三日で全ての用意が済んじゃってました。

ではトリステインへの大使クー・セタンタの護衛の連中を紹介して行きましょうか。

まずは俺の乗る最新鋭の両用艦。艦の名前は……スマン、忘れた。勝手にハイウインドって呼んでるけど。戦艦よりカジノがあるブラックジャック号のがよかったなあ。

さらに我が艦に従う二隻の護衛艦。バイラテラル・フロツテ両用艦隊に所属している所を今回駆り出されたため、当然武装済み。

機動戦力として風竜を操る竜騎士が二十騎。当然全員がトライアングル以上。

護衛戦力として東薔薇騎士団。こちらもトライアングル以上のメイズで構成されてるね。

おまけとばかりに両用艦隊所属の空軍士官たち。

……うん。言いたいことはよく分かる。

戦争する気が、おい?

いや、マジでこれだけの戦力で奇襲をかければトリステインなんか落ちるぜ?

つか警戒されるだけだろう?

一応俺の出立よりも前にトリステインへは大使の向かう旨を連絡

したらしいし、先触れとして風竜も飛ばしてはいる、が。それでも、なあ？

「我が艦にて行けるのはオルレアンまでです。そこからトリスタニアまでは馬車にての移動となります」

「それは分かるがね。俺ならこんな戦力が国境に見えただけで挑発されてると思っけどな。勘違いしたバカが出てこないことを祈るよ」

「はっはっは。殿下に向けて杖など向けようものならば、我が艦の誇りに欠けて立ちふさがる全てを蹂躪して見せましょっ」

「ホント、祈るよ。兄上の門出の前に血の雨を降らすなんてゴメンだしな」

テンシヨンの高い艦長と軽口をたたき合う。

護衛として俺から離れない騎士たちも、フネを操る士官たちもシャルル兄の王位継承が決定したことは知っている。まあ、俺がなんのためにもトリステインくんだけ行かなきゃならんのかを秘密にしておくわけにもいかんし、そもそもその必要もないしね。

そのことに対しての不満の声は上がって無い。思う所はあるのかもしれないが、ここ二年ほど俺とジョゼフ兄がシャルル兄の補佐的な立場で動いていたことは周知の事実だし、花壇騎士のようなリユティスに勤務している者らはそれを実際に目に見しているしね。

まあ、それはそれとして、

「なあ艦長？ やはり護衛艦までオルレアンに連れて行くのは止めた方がいいと思うんだが。花壇騎士を連れて来ただけでもやりすぎだし。だいたい必要でもないだろっ？」

「そう仰いますな、殿下。殿下の安全こそ最重要とせよとはジョゼフ

殿下、シャルル殿下お二方よりの御命令です。トリステイン側の心象を良くするよりも、クー殿下の安全を兄君はお望みなのですよ」

「それは、まあ、ありがたいけどな」

「でしたらどうにか自愛くださいませ。くれぐれも、く・れ・ぐ・れ・も、護衛を撒いて街へ繰り出したりしませんように。トリスタニアはリュティスとは違うのですから」

お前はオカンか。艦長の説教にげんなりするもため息だけにとどめる。

まあトリスタニアがリュティスと同じだとは思っていない。

ここ二年ほどで王都リュティスはすっかり変わった。

新たに編成された警邏隊によって犯罪者の取り締まりは強まり、治安は向上した。

貴族といえども無法を働くことは許されなくなり、平民たちの笑顔は増えた。

税率は下げられ、同時に公共事業が行われることとなり、街道は整備され衛生管理までされるようになった。

全て国策ということではジョゼフ兄が手がけたことなのだが、一体アంతはどこの内政チート系転生者だと言いたいくらいリュティスの状況を一変させてしまった。しかもジョゼフ派掌握の片手間で、だ。

おかげで俺も安心して街中をうろつくことが出来るようになったのだが。

「わかっているよ。別にトリスタニアに興味があるわけでもない。王宮で大使としての仕事を終わらせたら、とっととガリア領まで戻ってくるわ」

「それがよろしいかと。万が一クー殿下がトリステイン領内でお怪我でもなされれば、確実にガリア王家は宣戦布告するでしょうからな」



はっはっは。わらえねえよバカヤロウ。

ガチで余裕そうだからなあ。トリステインとの戦争なんか。

戦力差はありすぎるし、戦争準備する暇も与えないだろうし。

最終兵器彼女ことツンデレピンクはまだ使い魔サイトを呼んですらないし。

え？ 『烈風』？ こっちにゃ『紅玉』がいるんだよ。大怪獣戦争なら受けて立てちゃうんだよ。

……ありえる未来って怖いよね、ホント。

ホント、勘弁してくれ

嗚呼、隠居してえ

## 19. いざトリスタニアへ

ぐーてんもるげん。クーです。現在馬車に揺られとります。両用艦にてオルレアンに到着後、一泊してからトリステイン入りしたんですが、特に何も起こらず平和に国境を越えられました。

まあ両用艦が国境までやって来るなんて事態に警戒はしたんでしょうが、たとえ召集可能な全戦力を集めたとしてもウチには対抗できないのだから、兵隊集めて下手に刺激するのはマズイと考えたんでしょう。

ラグドリアン湖を挟んだ向こう側、ガリアと接しているのはあのモンモランシ領だったそうで、モンモランシーの家と戦闘に入ったりしなかったことにホツとしたりも。実際の面識は無いとはいえ「原作知識」で知っている相手を不幸にするのはちょっと、ねえ？

ま、そんなわけで俺が何より愛する平穏な時間を過ごしているわけなんですけど、

「めっちゃ暇」

そうなんです。メチャクチャ暇なんですわ。

馬車の外では東薔薇騎士団が過剰とも思える防備を敷いているんですが、馬車の中は当然のことながらスカスカ。まあ王族用の馬車だからね、俺以外乗せるわけにもいかないだけござ。

でも暇なんだよね。話相手もおらんし。馬車はやっぱり慣れないね。

ガリア内を移動していた時？ 馬に乗ってレッツパーリイしてましたが何か？

まあトリステインではしゃいで怪我でもすればガリアにとってもトリステインにとっても、そして俺にとっても大変よろしくない事態になりかねないので自重しますがね。

ふう。しゃあない。トリスタニアに付くまでは寝て過ごすかね。

おやすみ

「たまえ。起きだ。や」

うっせえな。寝たばっかだぞ。

「起きえ。起きるのだ！」

チッ。わあったよ。起きりゃいいんだろ、起きりゃ、って……

「なんじゃーりゃあー！」

いや、そりゃ叫ぶよ。

だってよ。馬車の中で眠ったと思ったら、いつの間にかお花畑に居たんだぜ？

これはアレか？ 転生モノの導入部か？ また死んだのか俺？  
今度こそ腰の低い神さんが出てくるのか？

そんな感じに大混乱していると、目の前にいたナイスミドルなおっさんが話しかけてきた。どうやらさっきの声もおっさんのものだったらしい。

落ち着かせるように話しかけてくれるのはありがたいんだ。俺も少し冷静になれたしな。

たださ、話しかけられた内容の方は大問題だったけどな。

「起きたかね。アーカード」

「……………は？」

「混乱するのも無理はないが、こっちは君の夢の中だ。問題があったわ

けではないから安心するといひ」

「いやいやいや」

「ん？ ああ、まだ名乗っていないかったか。私は君の銃、ジャツカルの精」ちよつと待って！」「……む？」

ちよつと落ち着け？ なんて言ったアイツ？ いや、それよりもまず確認するべきことは。

「あの一、すみません。俺の髪の色って何色でしょうか？」

「む？ 髪？ 青だな。珍しい髪色だが染めているのかね？」

セーフ！ 服もクー・セタンタのものだし、貴族の証としてのマントも付いている。と、いうことは、知らない間に異世界憑依ストリーが始まってたわけじゃない。つまりは、

「まことに申し上げにくいのですが、人違いです」

「な、なに？」

おつおつ愕然としている。

「ジャツカルさんの言ったアーカードさんって吸血鬼の方っすよね？  
ヘルシング機関の」

「うむ。君がそうなのではないのかね？」

「全くの別人ですね。そもそも何故俺をアーカードさんだと思ったのかも分からないんですが」

全然似ていないだろう。旦那と俺じゃ。

あー、でもあの人見た目変えられるからなあ。幼女から髭のオジ様まで自由自在っぽいし。だが、だとしても間違えるかなあ？

「だいたい俺、銃持ってないですし。」「こ地球ですらないですし」

「な、なんだと!？」

「というわけでお帰り下さい。きっとアーカードさんも待ってると思います」

ウィリスが語尾に付く悪霊にうなされてる様な気がするが、気のせいだよな?」

ジャッカルさんも俺の言ったことを信じてくれたようで

「そうか。そうだな。確かに君からは私の本体の気配がしない。人違いというのは本当の様だ。意図していなかったことはいえ夢の中まで押しかけてすまなかったな。ああ、と」

「あ、俺の名はクーです」

「ふむ。クーよ。迷惑をかけた。いつか詫びも兼ねて君の力になれる時が来るとよいのだが」

いえいえお気になさらず。ホント気にしないで。場違いな工芸品としてやって来たりしないでよ、マジで。

「では私は主人のもとへと戻ろう。ではな」

はいはい。さようならー。ノシ

.....

.....

.....?

「帰れん……」 orz

「えええー」

「というか君の夢から出られないんだが」

知らんがな。 というかまさか居座る気じゃ

「むづ。これはつまり君の力になれという神の思し召しとやらでは」

居座る気だー！！

「というわけで私は武器の精だから君の武器に乗り移って、む、何も持っていないではないか」

「いや、そんなこと言われましても。やっぱりアーカードさんの所に帰った方がいいんじゃない？」

「むづ。仕方がない」

お？ 帰ってくれるのかな？

「クーが相棒と呼べる武器を手にするまでは、君の精神と共にいさせてもらおう」

「は？ 精神と共に？」

「うむ。つまりは君の体内に間借りさせて貰うことになる。君が私の依り代に相応しい武器を手に入れば出ていく故、安心したまえ」

「いやいやいや、体内に間借りってなんスか!? なんでそんなに俺にこだわるんスか？ てか何で背後をとってらっしやる？ ちよっと！ ちよ、待てよ！ おいおまつ？ え？ ええ？ ちよ、やめ！」

アッーーーーー！！

## 20・トリスタニアについたけど

ハアイ。クーです。そろそろ挨拶のバリエーションが切れてきましたなあ。

ま、別に毎回違う挨拶じゃなきゃダメってわけでもないんで気にしてないんですが。

さてさて、よつやく辿り着きました。原作で散々出てくるトリスタニア。

魔法学院やらタルブやらにも興味はありますが、そこらへんは我慢しましょう。

適当にうるつくとか、危険なフラグを踏みそうな予感しかしなないしね。

え？ ジャツカルさん？

ヤメテ！ 思い出させないでヨ！ 折角忘れようとしてたのに。

ううう。ママン、俺、汚され……イヤ、ちやうねん！ アレは夢やねんから！ アレは夢アレは夢。

せやからもう触れんなや！ ええな！

話を戻しましてトリスタニアまで来たわけですが。

うーん。ごちゃっとしてますなあ。

リュティスが王都ならトリスタニアは下町って感じですか。そりゃ白い街並みは綺麗かもしれないが、なによりもまず狭すぎる。道幅とか五メートルくらいしかないんじゃないかな。なかるうが。

正直馬車で通っていい道じゃないよね。と言っても他国の王族が徒歩で城まで、なんてありえないんだけどさ。

まあ注目はすごかったですわ。トリステインじゃお目にかかれな最新馬車、それも二本の杖を交差させたガリア王家の紋章付き。

周囲を固めるのは平民にすら実力の高さをうかがわせるほどの、統制の取れた騎士たち。



こんな物々しい集団が街中ねり歩いていたら俺だって引くもの。大名行列かつ、て。

ま、トリステイン如きに舐められるわけにもいきませんし、王族らしくない振舞いなどしませんかね。

……こう、他国に出てきて実感して来たんだが、俺、ガリアの人間って意識が強まってるなあ。悪い事じゃないんだろっけど、さ。

「殿下。到着いたしました」

「ああ。御苦労」

促す騎士にしたがって馬車を降りる。

ふむ。

城の前にはそれなりの数の人間が出迎えの体制をとってはいるが。どちらかというど歓迎よりも警戒より、か。

王族の護衛とはいえ他国の騎士がぞろぞろやってきたことが気に食わないってか？ アスタリスクのちいせえ奴らだ。

そのくせ大国相手だからか抗議すらして来ない。プライドは人一倍でかい癖に最優先は自己保身。味方にはしたくない連中だな。

「ったく。敵意も隠しきれないとは。程度が知れる」

っと、イラつくなよ俺。別に宣戦布告に来たわけじゃないからね。スマイル、スマイル。

腹の探り合いは得意だけど、笑顔を振りまくのは苦手なんだよねえ。こういう場こそシャルル兄の独壇場なんだけどな。

そのまま格式ばった挨拶が行われた。

出迎えの中心にはマザリーニ枢機卿。さすがに大后は出てこない

か。

ま、こっちは王族とはいえ大使という形で来たので不満があるわけではないが。

まあいいや。と、思考を切って笑顔を作ることだけに集中する。

そのまま数名の護衛だけを伴って城中へと案内され、向かった先は謁見の間。

礼？　しないよ？　別に臣下であるわけじゃないし。

いや、その場にいた宮廷貴族なんかは睨んできたけどね、王位に就くことを拒んでいる太后と王位継承権保持者じゃ地位の差なんてほとんどないし。つか絶望的な国力の差があるというのに俺を睨める貴族がいることの方が驚きだよ。

やっぱトリステインは駄目だ。早く仕事済ませてオルレアンに帰ろう。

「お初にお目にかかります。私はガリア王国第三王子クー・セタンタ・ド・ガリア。本日は我がガリアよりの使者として参りました」

「はじめまして。小さな使者殿」

あ、頭イテエエエエエエエエエ。

マザリーニ枢機卿も胃を押さえてるし。

確かに俺は九歳児だよ？　でも使者である以上ガリアの代表なわけだよ。

その相手に向かって小さな使者殿ってアンタ。一歩間違えれば、とつかこちらから一歩間違えてあげなければ確実に外交問題だぜ？

とつとと父上からの書状だけ渡して帰ろう。

「こちらがガリア王国国王陛下よりの親書となります」

「あらあら、お役目御苦労さまね」

うおおおおおおおおお!! 胃が痛ええええええええええええ

!!!

おつかい扱いかよ! 後ろに控えてる俺の護衛なんか殺気放ちちゃってるよ!!

ダメだ! これ以上ここにおいても事態は悪くなるばかりだ!

「で、では、私はこれで」

「え? もう少しゆっくりしてらしたら? アンリエッタともお話しただきたいし。別室にお菓子を用意させますから。ね?」

ね? じゃねえだろ!

「大変ありがたいお申し出ですが、私にも仕事がありますゆえ、どうか「ご容赦を」

「あら。そうなの? 小さいのに大変なのねえ」

おう大変だよ。主にテメエのせいだな! 胃の調子がな!!

つか貴族共よ。マリアン様のお誘いを断るとは何事かってな目を向けんじゃねえよ。

気付けよ! お前らが棺桶にダイブしようとしてるのを俺が止めてやってるってよ。

護衛に付いて来た東薔薇騎士団がキレれば、こんな城一時間と持たねえぞ?

あー、もう!

勘弁してくれ!!

## 21・フィーーーーッシュ!!!

……やあ。クーだ。

スマン。胃が痛くてテンション上がんない。

マリアン又大后に親書渡してからは逃げるようにガリア領まで戻って来たんだが、もうね、東薔薇騎士団が殺気立っちゃって。

城を出る前にマザリーニ枢機卿が後で謝罪に行くとかなんとか言ってたからまだ抑えられたけど、コイツラよりもよってジョゼフ兄に向けて鷹便飛ばそうとしたからね。

止めるのがあと少し遅ければ全面戦争もありえたよ。

そりゃ俺だつてさ、おそらく無意識的にとはいえ、ガリアを見下されるような事されたんだから頭には来たよ？

でもさすがに抗議に留めとくべきだろう。精々『遺憾の意』をブツパするくらいでいいだろう。

そしてガリアとして抗議するなら表の顔である父上か、これから表の顔になるシャルル兄に頼むべきだろう。

ジョゼフ兄は言ってみりゃ裏の顔。陰謀EXの、最近ではガリアを祖国として愛し始めている人間にトリステイン如き弱小国に舐められたなんて報せが行ったら……。あばばばば

ホント、止めるの間に合ってよかったです。

まあその後親の仇でも討ちに行くのかと言いたいくらい殺気だった騎士団に囲まれて馬車に揺られるのもつらかったんですがね。

いつそ発散させてやった方が……アカン！ 今コイツラ自由にさせたらトリスタニアに突っ込んで行きそうだわ。

さて、そんなこんなでオルレアンまで無事戻ってきました。

いやー、ここまで来ちゃえば安心です。

ガリア国内なら他国の貴族の眼を警戒する必要もないし、ここには両用艦まで停泊してるからね。

……いや、両用艦はリュティスに帰れよとは思ってたけどさ。園遊会の準備にも一役買ってるらしくて。

その園遊会の準備だけど、なんと云うか、俺の予想をはるかに超えてました。

そりゃ十ヶ月も前から準備を開始させるって時点で予想しとけて話なんでしょうが、これほどの規模になるとは。

簡単に言つとだね。街づくりだね、こりゃ。園遊会パーティーの準備とは思えませんわ。

パーティー会場はラグドリアン湖を眺められるよう屋外なんだが、ただっ広い場所を用意して魔法で平地に均して芝を整えて。

街道を引つ張つて王族や貴族の滞在できる宿を用意して。

商人を集めて色々を用意させて何カ月も後の予定をキッチリ纏めて。

周辺に亜人や盗賊が現れないよう徹底的に調査&駆逐して。

うん。立派な国家事業だね、これは。

トリスタニアから戻って数日で理解しました。俺に出来ることは邪魔にならないようにラグドリアン湖でも眺めているしかないって。

……別にいじけてなんかないよーだ。

にしても、スゴイね。ラグドリアン湖。

何がスゴイってまずデカイ！

アニメで増水時のラグドリアン湖が出て来てたけど、実物はあんなモンじゃないぜ？

なんたつて向こう岸が見えないんだから。

天気が快晴でやっと薄らと何かある様にも見えるかなあって感じだし。

大きさ的には『前世』で見た琵琶湖に近いかも。

もっとも水の綺麗さとか比べ物にならないけどね。

さすが科学がほとんど存在しないアホ世界。水を汚す要因なんか存在すらしないな。

これは景勝地にもなるわ。納得です。

とは言え眺めているだけでもなんだな。  
「こりゃアレだな。」

「釣りでもしたいな」

「釣りですか？」

「ああ」

そばに控える騎士団長に返す。

釣り。なんとなく言っただけはみたが、いいんじゃないだろうか。

俺が名前を貰った相手も趣味にしていたしね。それにここなら赤いのやら金ぴかやらは出て来ない。きっと楽しめるだろう。

「殿下が釣りを趣味とされていたとは初耳ですな」

「いや、一度もやったことないんだけどな。偶然思いついたんだが、俺たちにはそっちの方が似合っているだろう？」

「ハハッ。そうですね。確かに湖畔で紅茶を楽しむなんてのは、ご婦人がたに譲るべきでしょうな。では、早速小舟でも用意させましょう」

小舟か。それもいい。

俺は立ち上がるとラグドリアン湖へと近づいた。

これだけデカイ湖だ。魚が住んでいないなんてことはないだろうが、どんなのがいることやら。

そんなことを考えながら水面に映る自分を覗き込んでみると、

「げぼあ」

突然腹部へと衝撃が襲いかかって来た。

「なんだお主は!?    なんだお主はっ!!!?    なんだお主はー！ー！ー!!!?」

仰向けに倒れた俺の腹の上で叫ぶ幼女ボイスの未確認物体。

「というか護衛の花壇騎士は何やってんだよ、と目を開けてみれば、  
……うん。ちよっと待て。

……うん。待っていてありがとっ。

「水の精霊?」

俺の腹の上には水で出来たヒトガタのモノ。透明な人間がいた。  
つか周りの騎士も開いた口が塞がってないし。

「うむ。我は単なる者らがそう呼ぶ者だ。して、お主はなんだ?」

「いや、なんだって言われても。つか精霊さまよ、どいてくれないか  
」?」

「だが断る」

何故にそのネタを?    偶然?

てか一体何が起きているんだ?    何かしたっけか?    釣りしよう  
としたから怒ってんのか?

「お主は他の単なる者と違うだろう?    その身のウチに何を入れてお  
る?」

……まさか、ジャッカルさんのことですか?

彼は無理やり居座ってるだけで俺の意思としては出て行って欲しい  
くらいなんです。

「それに何故だろうな。お主を見ていると不思議な気持ちになる。お主に纏わりつく風の精霊共を見て、羨ましく思ったのだ」

ちよつと待て。まさか『コミュ力』のせいか？ 無条件に好意を寄せられる効果なんて、この九年で確認してないぞ。それともまさか、精霊にだけ効く力というわけか？

くそつ。抜かった。サツパリ妖精だなんて馬鹿にせず、精霊ちゃんたちが何を考えているのか知ろうとするべきだった。俺の後悔をよそに、なおも水の精霊は話し続ける。

「つまりはだな」

その時小舟を用意しに行った騎士団長の声が聞こえてきた。

「殿下。トリスティンのマザリーニ枢機卿およびラ・ヴァリエール公爵、ド・モンモランシ伯爵がお見え。お主に惚れたッ!!」……へ？」

いや、間抜け面を晒した騎士団長を責めることなど出来ないだろう。俺だって、護衛のために侍っていた騎士たちだって、そして騎士団長の背後に見える三人のオッサン共だって、皆一様に間抜け面を晒していたのだから。

「ちよつと待った、精霊サマ！ アンタ、トリスティンと盟約結んでるんでしょ？ 俺はガリアの人間なんで問題があると思うんですが」

「我を顎で使えるなどと驕り高ぶった連中など知らん。我もお主と共にあるぞー」

「いや、共にあるって何する気っすか!? この湖の精霊なんですよ」



が！」

「心配するな。我は水の精霊。本来形を持たぬのが水の姿ゆえ、我は無限に別れることも全を一にすることも出来る。我が一部がお主と共にある限り、我もまたお主と共にあるという寸法だ」

すんぽーっすか。意識が繋がってる分身体ってことか？  
ってか、ちよっと待て！

「一部が俺と共にあればって、瓶にでも入れて持ち歩けばいいんじゃないでしょうか!？」

「我に後塵を拝せよと言うのか？ もっともお主に近い場所を奪われたままでいると?？」

いや、ジャツカルさんはそんなんちゃいますから！  
ヤメテ！ なんかウネウネ触手みたいな伸ばして来ないで！

「大丈夫だ。痛くはせぬ。空に浮かぶ雲の数でも数えておればすぐに済む」

「ちよ、待って、ってフゴツ、何故鼻から入ろうとする!? てか入ってくんない！ おうえっ、鼻はヤメ、うご、せめて口から、うおえっ、一旦戻って、ごぼあ、勘弁、して、くっ」

ら、らめえー！

## 22・胃痛シンパシー

ううう。クーです。

鼻が痛いです。喉も痛いです。頭も痛いです。

なんだか血管がむずむずするんですが、これって大丈夫なんですか？

ああ、そして今は何よりも、胃が痛いんです。

現在俺は湖畔の椅子に。目の前には四つのティーカップ。

ええ。今そいつを挟んで相對してます。トリスティンのオッサン共と。

真正面に居るのはマザリーニ枢機卿。彼も胃を押さえています。新事実（水の精霊サマにまつわるエトセトラ）のせいで只でさえ痛かった胃が色々とヤバイ域に来ているんでしょう。

向かって左側に居るのはラ・ヴァリエール公爵殿。事の大きさの分かっていない宮中貴族の代わりに駆り出されたっばいですね。確かにマトモな貴族と言って思い浮かぶのは彼くらいかもしれません。どこかバツソに似た苦労人臭がしますね。

そして向かって右側。今にも入水自殺を図りそうなほど思い詰めた表情をしているのがド・モンモランシ伯爵です。自領がオルレアンと隣接しているということとで連れて来られたんでしょうが、まさか代々交渉役を仰せつかっていた水の精霊の浮気現場に立ち会うことになるとは思っていなかったんでしょう。……目が nice boat なんです、こっちに被害は出ませんよね？ ハッ！ 前回の小舟はこのフラグかつ！

あー、胃があ、胃が痛い。

「ふっ、安心せい、クーよ。我がお主と共にあるのだぞ。お主のウチに在る我が少し本気を出せば胃の痛みどころか、不治の病ですら敵では

ないわ」

「いや、心を読むなよ、……っつて、おい!!」

目の前のティーカップから水の精霊サマ(レッド)が出てきやがった。なるほど、全ての水は精霊サマと繋がっているわけですね。ってそうじゃねえよ!

不治の病のところであんなプレッシャーが一つ増えたんですけど!!

ヴァリエール公爵の目つきがギラついた雄の眼に!?

コレ、絶対立ってるよね? いや、そっちの立ってるじゃなくてさ、フラグだよな? ここまで分かりやすい展開ないよね?

いや、カトリアさんに会うのは別にいいんだよ。治せるってんなら治してあげたいくらいだし。

でもさ、そうになると『烈風』さんとも会うことになるよね?

……嫌な予感しかしねえよドチクシヨウ!!

ああ、胃があ。

と、ストレスによる永続ダメージと水の精霊による永久リジエネが同時にかかっている胃に手でさすっているよ、

「お、おほん。よろしいですか、クー殿下?」

とはマザリーニ枢機卿。あー、謝罪に来てたんだったね。連れの人選間違えたこと理解しているのか、さらに顔色が悪くなってるけど。俺も外交モードに切り替えないとな。九歳児がやると滑稽に映る事の方が多いが、仕方ないんだよねえ。

「ええ。見苦しい点をお見せして申し訳ない。本日来る旨を傳達していただければそれなりの用意をさせたのだが」

「いえ、お気になされませぬように。本日は我々、トリスティンを代表

して謝罪に参りました」

「ふむ。トリステインを代表して、ということとはマザリーニ殿の言葉はトリステインの総意と捉えるが、よろしいか？」

おつかい扱いなんてしないぞ、と暗に込める。

「はっ。当然のことでしょう」

その当然が出来てないのがお宅の王妃さんだったんだがな。

「まずは謝罪を。先日はガリアの大使であらせられるクー殿下に数々の非礼。誠に申し訳ありませんでした」

返事はしない。ここで気にしていないだの許すだの口にするのはありえないしね。

「ですが我がトリステインに貴国に対しての害意はない事をどうかご理解いただきたい。無論、言葉で足りないと仰られるならばそれ相応の謝罪を用意いたしますゆえ」

なにとぞご容赦を。と、こっちが悪いことしてんじゃねえかと思うくらいの平身低頭っぷり。

……つてか、スゲエ。

一応『コミユカ』使って真意を読み取るうとしてみたんだけど。

なんとこのオッサン、いや、マザリーニ枢機卿。自分の首を差し出す覚悟すら決めてやがる。

スゲエな。トリステインなんかは何故そこまでするのか分からないが、元がロマリアの坊主だとは信じられないくらいの忠誠心だね。

「ふむ」

俺としては謝罪を受けはするが何も返答する気はなかったんだ。大使へのトリステイン大后の無礼なんてのは、使いようによっては、というかジョゼフ兄あたりが使えばかなり強力な外交カードになる。それこそ侮辱されたことを大義名分にして戦争を起こせるくらい。

だからこそマザリーニ枢機卿もここまで頭を下げているのだろうが、……ふむ。

「トリステイン側の謝罪は確かに受け取りました。大使としての立場上、私はガリア王家への報告をしなければなりませんし、トリステインへの対応を決定することも明言することも出来ません。しかし今は我がガリアとしても大切な時。余計な火種を抱えることは私としても本意ではありません。ゆえに我が国王陛下への報告の折、微力ながらも言葉添えをすることを約束しましょう。それでよろしいでしょうか？」

「は、ははっ」

まあなんだ。マザリーニ枢機卿の懸念ももつともだとは思うが、案外平気だとは思うがね。

だってトリステインなんて呑み込んでもしようがなくね？

碌な資源があるわけでもない小国で、その上売国貴族が山ほど。

きつとトリステインに宣戦布告した瞬間、腐敗貴族共がこっちに尻尾振って来るんだろうね。

めちゃくちゃウザいよね？ 他国で好き勝手やってるならまだしも、こっちくんなって感じだし。

国王になるシャルル兄も征服願望あるようには思えないし、ジョゼフ兄も当分は内政チートを楽しんでるでしょう。

トリステイン如きに目を向けることにはないと思っよ。今回のよう

に、ガリアが舐められでもしない限りはね。

さて、めでたしめでたし……とはいかないよねえ、やっば。

いや、メインはあくまでマザリーニ枢機卿の謝罪だったんだよ。

他国の王族相手に謝罪に来たのに、オマケとして来た人間が口を開くなんてことは本来無いんだよ。

だけど、ねえ？

モンモランシ伯爵は目が虚ろで、口からエクトプラズムらしきものがちらちら見えてるし。

ヴァリエール公爵は最愛の娘の治療法（の可能性のあるもの）を目の前にして我を失い気味だし。

無理矢理ならともかく、このままお帰りいただくのは無理だよ  
ねえ。

はあ。もうちょい薄情な人間に生まれていれば、こんな苦勞しなくて済んだんだろうに。

全く。勘弁してくれよ。

## 23・交渉？　いいえ、お願いです

さて、マザリーニ枢機卿のお連れのお一方を放っておくという選択肢を選ばなかったわけだが。

ヴァリエール公爵は……まだ俺の覚悟が決まってないっす。と言うわけでモンモランシ伯爵から崩していきますか。

ま、とりあえずは、

「ふう。公式な立場としての会話はこれくらいにさせていただきますしょう。さすがに疲れました」

と、笑みを浮かべて見せる。九歳児ってのはこういつとき便利だね。大使として行動している時はさすがに責任が付きまとうけど、そうじゃないと明言してしまえば子供として見てもらえるし。

まあ今はリラックスさせる効果を期待しての言葉だったんだけど。俺の肩から力が抜けたのに安心したのか、マザリーニ枢機卿もどこかホッとした様子。

ここからはプライベートだと理解し、最初に動こうとしたのはヴァリエール公爵だったが、今はモンモランシ伯爵を優先させてくれ。

そして、モンモランシ伯爵との交渉を見て、俺を安く使えるなんて考えは消し去ってくれよ。

「一つ、いえ二つですか、トリスティン側に、というより貴方がたにお願いをしてもよろしいでしょうか？」

「は？　殿下が我々にお願ひ、ですか？」

反応したのはマザリーニ枢機卿。そろそろモンモランシ伯爵は帰ってこいよ。

「ええ。彼女(?) に関してのことだ」

俺が示したのはティーカップ。というか紅茶で造られたヒトガタの精霊サマ。

「私としても水の精霊に気に入られるなど予期していなかったことでして。まあ人の身である我々に精霊をどうこう出来る道理もありませんし、受け入れるほかないのですが」

「なんだ？ 我と共に在れることに不満でもあるの」精霊サマは少し黙ってただけですか？」「……つれないのう」

「私個人にとっては水の精霊と交流が生まれたことに問題などないのです。ただ、我がガリアにとってみれば、あまり歓迎できる事でもありません」

「どういうことでしょうか？ トリステインにとって、という話ならばわかりますが、殿下と水の精霊との間に交流が生まれることはガリアの国益につながるのでは？」

「時期が悪いのですよ、マザリーニ殿。ご存知かもしれませんが我がガリアは我が兄シャルルの王位継承を祝うため国が一丸となっている段階です。長兄であるジョゼフも、不肖の身ながら私も王位継承式典の準備のために動いています」

言外にガリアが一枚岩であることをアピールする。次男の王位継承というイレギュラーを好機と捉えられて、トリステイン如きに暗躍されても鬱陶しいしね。

「そんな折に私が水の精霊との交渉を成功させた。それも本来トリス





「ああ、正確には王家との間を取り持つ交渉役でしたか？ まあともかく、モンモランシ家にはトリステイン王家と水の精霊の間の交渉役に戻っていたいただきたいのです。現状私が警戒しているのはトリステイン側からの情報流出のみ。我々の側は一つに纏まってますしね」

東薔薇騎士団には緘口令を既に敷いてある。俺（の鼻）が「ピー」されたなんて、噂にしようものなら心臓ブチ抜いてやるわボケ。

「トリステイン側で私の事が噂などになることを防ぐためには、より大きな噂で持ち切りになっていただくのが良いでしょう。ですのでモンモランシ家に水の精霊との交渉を成功させたという偉業を打ち立てていただきたいのです」

「仰ることは分かりますが、水の精霊は殿下をお選びに……」

「私はあくまで気に入られただけですよ、モンモランシ伯爵。それに水の精霊が常に一つの陣営としか協調しないと限らないでしょう」

そもそも国とか派閥とかいった俗っぽいことが水の精霊に関するようにも思えない。俺を気に入ったからと言ってトリステインを完全に無視するようになるとは思えないのだが。

「その辺りどうなのでしょう、精霊さま？」

「むっ」

「モンモランシ伯爵を交渉役とし、再びトリステインと盟約を結ぶつもりはおありですか？」

ゴクリと鳴った音は誰の……まあモンモランシ伯爵だよな。

上手く行けば家の名誉が回復するのだ。ただでさえ領地の干拓に

失敗し貧乏しているらしいし、この状況に目が血走るとも……いや、目が血走ってるのはさすがに必死すぎでしょ、伯爵。

「クーの願いならば大抵のことは受け入れようと思うが、その単なる者は我を道具のように使おうとしたのだ。我としてはそのような無礼者と再び盟約などと思つのだが」

「ふむ。モンモランシ伯爵が気に入らないと？ トリスティンとならば盟約を結んでも良い、とそういつことでしょうか？」

「うむ。そうなるな」

その言葉に打ちひしがれたように再びうなだれるモンモランシ伯爵。

別にこのオッサンのために頑張つてやる必要など無いんだよなあ。モンモランシーも別に好きなキャラってわけじゃなかったし、というかギーシュとくつつくじゃん？

それにトリスティン内で水の精霊との盟約を復活させられるのなら、それがどの貴族の手によるものだったとしても大騒ぎにはなるだろう。俺としては条件はクリアされるわけで。

……ただなあ。

……ああ、そうだよ。名前だけとはいえ知っている人間が不幸になるってのはなんか嫌なんだよ。

これがガリアの為とかなら割り切れるんだけどな。

仕方ない、か。お人好しと言われるんだろうけどさ。

「精霊さま。モンモランシ伯爵以外でしたら誰が交渉役でも構わないのですね？」

「ああ。構わぬ」

「でしたらモンモランシ家の御子息か御息女に新たな交渉役をお願いしましょう。伯爵、お子さんはおられますか？」

「は、ははっ。娘がおります。ですがまだ八歳になったばかりでして、魔法の腕もドットでありますれば」

「待て！ その者の血族だ?!」

「まさか嫌だと？ 親の罪は子の罪だとも？ 私は嫌いですよ、その考え方は」

「む、むっ。仕方あるまい。クーに感謝せよ、単なる者よ」

「さて、精霊サマのお許しも出たことですし話を戻しますが、八歳ですか。まあ年は若い方がむしろ話題になるでしょう。魔法の腕も関係ないかと。将来性を期待されることは御息女にとってもモンモランシ家にとっても良いことかと思えますが？」

「ははっ。異論などあるはずもございません」

ふう。これで水の精霊サマに関することは落着かな。

情報が漏れる可能性はかなり減らせたはずだ。

ロマリア辺りに知られていたらどうなっていたか分からんものね。

『光の御子』の名もまだまだ消えてはくれないし。

モンモランシ家の復興のメドも立ったし。これでモンモランシ家はトリステインでの地位を向上させるはず。となれば俺の作った貸しの意味合いも大きくなる。出来ればモンモランシ家が侯爵でも綏爵してからの貸しは回収したいけど、……さすがにそこまでは望みすぎか。

さて、後はヴァリエール公爵か。モンモランシ伯爵との交渉中にドンドン目が怖くなって行ってただけで、やっぱり警戒されたかね？

なんて考えているとモンモランシ伯爵がテーブルに頭を打ち付ける勢いで頭を下げた。

「クー殿下。このたびは、まことにありがとうございます。我がモンモランシ領は救われました。殿下にはなんとお礼をしいいか」

「ふむ。でしたら私の行っている園遊会の準備への助力をお願いしたい。オルレアンと隣接するモンモランシ領の助力があればありがたいのです。トリステインから輸入する資材などもあるでしょう。それらがモンモランシ領を通過する際の税を優遇していただけだけでも我々には大きな利益となります。税が少なくなれば商人らは通過する経路にモンモランシ領を選ぶようになるでしょうし、そうなればそちらの税収も潤うでしょう。園遊会前にラグドリアン湖周辺の亜人・盗賊に関して一掃する予定ですので、その際にも協力していただければと思います。無論、許可さえいただければ我が東薔薇騎士団がモンモランシ領の亜人・盗賊も討伐しましょう」

え？ 相手に有利な話ばかりじゃないかって？

向こうもそう思ってるだろうぜ。

いいんだよ。こっちが損するわけじゃない。

税は掛けられるのが当たり前だから減らしてくれればこっちが得になるし、商人がトリステイン内のどの領を通過してやって来るかなんてガリアには関係ないしね。

亜人や盗賊関連は元々予定に入っていたことだ。むしろラグドリアン湖の向こう岸をどうやって調査するか考えていたくらいなんだから。

ガリアには損はない。そして確実にモンモランシ家に貸しを作れる。

ならばモンモランシ家という将来貸しを返してもらうことが決定している家を富ませるのは悪手じゃないさ。

豚はまるまると太らせてから食べましょってね。ウケケ

## 24・公私混同

ふいー。フォーマルモードでしゃべると疲れますなあ。

今回は腹の探り合いは必要ない分楽な方なんでしょうが。

ま、この会談は以前ジョゼフ兄やシャルル兄とした会談に比べればかなり気が楽なほうなだけだね。

あの時は俺の死亡フラグを折れるかどうかってのもあったし、かなり焦ってた。

でも今回はそうじゃない。というかスタート時点でトリステイン側は俺に貸しがあったようなものなんだから、こっち主導で進められたしね。

そりゃ水の精霊というイレギュラーはあったけど、それも上手く利用できたと思う。

あのマリアン又大後の失態の後で、俺があくまで公人として動き、ガリアの国益を優先する姿を見せる。マザリーニ枢機卿辺りにはかなり強烈な印象を残せただろう。

これによって期待できる効果はいくつもある、が……

「殿下。よろしいでしょうか？」

と、俺の意識を声を引き上げた。声の主はヴァリエール公爵。

……いや、何を言おうとしているのかは分かるが、それを回避するために既に俺は布石を打ったぞ？

第一に先述したように公人としての態度を示した。他国の王子が公に徹していると言うのに、娘の治療を頼むという私事を切りだすのは、プライドの高いトリステイン貴族にはつらいはず。

さらに俺は国益を優先して見せた。しかしヴァリエール公爵がカトリア嬢の治療を頼むと言うのは、確実にガリア王族に貸しを作ることになる。私利を優先し、トリステインの国益を損なわせる可能性が

あるってことだ。王族とはいえ子供が国の事を考えているのに自分はッ、って感情に囚われるはず。

俺がモンモランシ伯爵に見返りを要求したことも大きい。善意だけで他国の人間を助けるのではなく、貸しを作れば回収するぞと教えているのだから。

序に言えばここにはマザリーニ枢機卿がいる。原作では散々鳥の骨と揶揄していた相手に、私利私欲のために他国の王族に貸しを作るといっ、売国とも取れる失態を見せるなど公爵家の当主ならしないだろうと踏んでいた。

踏んでいた……んだけどなあ。

ヴァリエール公爵が理解できていないはずがない。ここで俺にカトレア嬢の治療を頼むというのは完全なる公私混同。自分の立場を悪くしてしまうと言っことを。

それでもなお娘の治療を望みますか。

モンモランシ家への見返りの内容を見て、俺なら無茶な要求をして来ないと踏んだのかな？

だとしたら犠牲になるのは自分のプライドくらい。

……ま、プライドよりも娘を優先するってのは好感持てるけど、いささか甘いよね。

そこまで考えて、なるべく表情を崩さずヴァリエール公爵に返答した。

「なんでしょうか？」

「不躰な質問をお許しいただきたい。殿下は水のメイジであらせられますか？」

「質問の意図が分かりかねますね」

「……殿下はその身の内に水の精霊を宿されたと。であるならば、既存のメイジでは治療不可能だった病の治療も可能なのでしょうか？」

思いつめたような表情で語るヴァリエール公爵。同時にマザリー二枢機卿は再び胃を押さえてしまった。

おそらく予想していたのだろう。俺に娘の治療を頼むのではないかと。

そして、それによって俺の護衛たちが殺気立つのも。

「良い。判断は俺が下す。警戒に従事しろ。『耳』を許すなよ」

ともすればガリアの王族を使おうとするかのような発言だ。花壇騎士が敵意を抱くのも仕方がない。

しかし俺は諜報による会話の盗聴のみを警戒させ、

「察するに、ヴァリエール公爵にはどうしても治療したい方がおられるようで。このような場にも拘わらずそれを話題に出したということとは、余程大切な方なのでしょうね」

「はっ。殿下のご慧眼には恐れ入ります。病にかかっているのは私の娘でありまして」

「ふむ。トリステインと水の精霊の盟約が復活した今でも治療は無理なのでしょうか？ 精霊の涙を入手することも可能になるでしょう」

トリステイン内でなんとか出来る可能性もあるのではないかと匂わせる、が。

「精霊の涙に関しては既に試しております。これまでもカトレア、娘の治療法を国中を回って探しました。しかしどれも娘を癒すには至らず」

むーん。どっしりよ。



いや、手を貸すのは別にいいんだよ？ ヴァリエールへの貸しつてのは下手したらトリスティン王家への貸しよりも有用だろうっしね。ただね。

ぶっっちゃけ聞き方が悪いよ、公爵。

水のメイジか？ って聞かれたらこう答えるしかないじゃん。

「残念ながら私は水のメイジではありません。それどころか系統に目覚めてもいませんしね」

「そ、それは大変失礼を」

いや、別に失礼だとも何とも思っていないけど。魔法が苦手なことを知られる＝侮辱されるって式がトリスティンじゃ出来てるんだものな。そりゃ不敬なこと言ったと焦るわね。

というか落ち込んだじゃったよ。

あーやだよだ。魔法至上主義って。

たとえば水の精霊に気に入られたとしても水のメイジじゃなけりや何も出来ないと思っただろうね。

助けなくてもいい気がしてきた。

……って言ってもここまでできたら助けないわけにはいかないんだよねえ。

ここで手を引いたら俺は魔法の才が無い事をバラしただけになってしまう。ガリアにとっても俺の価値が下がることはマイナスではない。

だから俺は進むほかない。魔法など使えなくても俺に価値があると示すのは必須。

…………やる気は削がれちゃったけどねえ。

「そもそもヴァリエール公爵は何故私にお尋ねに？」

「はっ。いえ、水の精霊の加護により殿下は不治の病すら治せるかと」

「それは私の力ではないでしょう。私があらゆる病を寄せ付けなくなったのはあくまで水の精霊の力によるもの。治療を願うのなら相手は精霊なのでは？」

「は？ いや、しかし」

しどろもどろになるヴァリエール公爵。まあ水の精霊に直接治療を頼むなんて常識的に考えてあり得ないことなのかもしれないが。

「どうなのでしょう、精霊サマ？ 不治の病に苦しむ女性を回復させることは出来ますか？」

「何故我がそんなことをしなければならぬのだ？」

精霊サマは不思議そうに尋ねてくる。不機嫌とかではなく、純粹に疑問に思ったのだろう。

まあ、何故かと問われれば、何故なんだろうね。

治療してやったとしても精霊サマに見返りなど無い。金だの物だの貰ってもしようがないんだろうし。

ヴァリエール公爵は俺と精霊サマの問答を固唾をのんで聞いている。

「ふむ。何故。カトレア嬢が治療を望んでいるから、ですかね。現に私の胃の痛みは消してくれたではありませんか」

「それはクーだからだ。他の単なる者のことなど知らぬ」

……何故に俺だけ鼻肩されてんだろうか。これは検証しとかないと更にヤバイことになりそうだな気がする。

それはともかくとして、どう籠絡するかね。

つかモンモランシ家は価値観も違う精霊相手に代々どうやって交渉して来たんだか。

「カトレア嬢を治療することが出来れば我がガリアにとって有利になるのですが」

「ガリアというのはクーのいる単なる者らの集まりであろう？ 有利にさせるだけならば我が力を貸すぞ？」

「いえ、それは止めてください。少なくとも数年の間は」

むむーん。いつそ『コミュニケーション』全開で命令しちまおうか？ たぶん成功すると思うんだけど。

でもなあ。なんかやっちゃいけない予感がするんだよなあ。

言動から伺える性格は単純そうだけど、だからこそ交渉が難しいというか……

あれ？ ならこっちも単純に行けばいいんじゃないかね？

念のため『コミュニケーション』で言葉の重みを増やしてっと。

「精霊サマ？」

「なんだ？」

「カトレア嬢の治療をしてください。お願いします」

イスカリオテの機関長も籠絡出来るこの一言で、どうしよう！！

「あいわかった。クーのため、その単なる者を治そう。ここへ連れてくるがよい」

「お、おおお」

ヴァリエール公爵が感激の声を上げていたが、俺の頭は別の言葉で埋め尽くされてたね。

うん。『ちよれえ』って言葉で。

つかそれでいいのか精霊サマ。素直と言っかなんというか。

ま、なにはともあれ、俺は多くのカードを手に入れるに至った。

トリステイン王家への貸しはシャルル兄かジョゼフ兄が有効に使えうだろうが。

トリステインを実質的に取り仕切っているマザリーニ枢機卿へは、兄に「手加減してやってよ」の一言を伝えるだけで貸しが出来る。

水の精霊との盟約を結ぶトリステインにとって重要なポジションにいるモンモランシ家には、家を救ったに等しい貸しを作れた。

トリステインにおいてクルデンホルフ大公国を除けば最大の貴族であるヴァリエール家には、娘を救う手伝いをしたという貸しを与えた。

……これもうトリステイン詰んでね？

後は、軍部の頂点であるグラモン家でも落とせば、完全にトリステイン掌握出来るものね。

まあトリステインが掌握できたとしても、するだろう命令は唯一つなんだけど。

すなわち、色呆け姫をこっち来させんな！

公私混同言うなし！ 俺にとっては死活問題なんだから  
よおおお！！

お前らだって見ただろうが。あのアホ王妃を。アレの娘だぞ？  
絶対原作通りのアホ姫だぞ？

折角のフラグを折れる機会を見過ごせるかい！ 見敵必殺！  
見敵必殺！  
拘束制御術式解放したいくらいだっつーの！！

## 25・カトレアさん

ちよりっす。クーです。

オッサンらとの会談から数日、リュティスに向けて報告を飛ばしたり、一応の責任者として園遊会の準備を見て回ったりして過ごしていたんですが。

また来ましたよ。モンモランシ伯爵とヴァリエール公爵。

今度はマザリーニ枢機卿はおらず、かわりに娘さんを連れてはいませんが。

……つか何故来たし？

モンモランシ伯爵は水の精霊とモンモンとを会わせるためですかね？ いや、モンモランシ領側のラグドリアン湖畔でやれよ。

ヴァリエール公爵も。モンモランシ家によってトリステイン内で水の精霊と接触することが出来るようになるんですから、そっちでカトレアさんを治療しなさいよ。

わざわざこっちまで来る意味は？ 他のトリステイン貴族にガリアとの内通を疑われかねないんじゃないの？

なんて色々疑問にも思ってたわけですが、来ちまった以上無下には出来ませんよねえ。

というわけで湖畔のティータイムスペースへと案内させたんですが。

「は、ははははじめまして！ わたくし、モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシと申します！ お会いできて光栄です！」

てかガッチガチですな。モンモンちゃん。

一方でふわふわしてるのが、

「お初にお目にかかります。わたくし、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌと申します。以後お見知りおきを」

カトレアさんは余裕そうだね。というか美人さんだねえ。

いや、俺はそのことに対して何かあるわけじゃないんだよ。

ただね。周囲を固めてる花壇騎士どもがね。

チラチラ視線向けとるんですわ。

……仕事しろ。モテナイブラザーどもが。

「ああ。私はクー・セタンタ・ド・ガリア。ご丁寧な挨拶痛みいる。が、公式な会談と言うわけでもないのだし、あまり畏まらず楽にしてくれ」

そう言って椅子をすすめる。ついでに紅茶を人数分＋1用意させる。

俺の前に二つのカップが用意されたことにモンモンとカトレアには不思議そうな顔をされたが、まあ精霊サマ用だと分かるはずもないのだし仕方がないだろう。というかこうしておかないと俺の分が無くなるんだよ。

「数日ぶりですか、ヴァリエール公爵、モンモランシ伯爵。本日はやはり先日の件で？」

「はっ。殿下の貴重なお時間をお借りすることに心苦しくは思いますが、先日の水の精霊の言に従い、参上した次第でございます」

先日の？

えーっと。確か精霊サマは……

『を治そう。二二入連れてくるがよい』

……あちゃあ。ここに来いって言っちゃってるよ。  
なるほど。それでわざわざガリア領まで来たわけね。

「そうでしたね。では、精霊サマ？」

「なんだ？ クーよ」

うによりんと紅茶が盛り上がり、精霊サマが現れる。モンモラン  
シーは「わぁ」と、カトレアは「まぁ」と感嘆の声を上げるが。

何故俺のカップから出てきやがる。お前はその隣だ。

……まぁいいけどな。

「先日したお願い、覚えていますか？」

「ああ。単なる者と盟約を結び、単なる者の病を治すのだろうか？」

…… 個体識別出来てんの？ 同じ人じゃないよ？

「ええ。では待ちかねておられるようですよ、そうですね、先にカトレア嬢の治療から」

そう言っつてカップごと精霊サマをカトレアさんの前に押し出す。

順序的にはモンモンに先に盟約を結んで貰い、カトレアさんの治療は交渉役になったモンモンに全て丸投げしようと思っていたんだけど、公爵家より伯爵家を優先すると面倒なことになりそうだしね。

だから、今か今かと鼻息荒くしている公爵が怖かったわけじゃないんだからね。勘違いしないでよね。

「ふむ。」の単なる者を治療すればよいのか？」



「ええ。お願いします」

「お願いします。精霊様」

「あいわかった。クーよ。我に感謝するがよい」

「ええ。感謝し、そして忘れませんよ。これで私はヴァリエール家に大きな貸しが作れるのですから」

ヴァリエール公爵に向けて釘をさす。

しつこい？ アホか。娘が回復した感動で忘れられた(ことにされた)らどうすんだよ。

行く時はガッツリいかなきゃね。ウケケ

「では単なる者よ、我を飲むがいい」

「精霊様をですか？」

カトレアさんは不安げにヴァリエール公爵と、そして俺に視線を向けるが、神妙な顔を作って頷いておく。

カトレアさんは意を決したように、精霊サマがぼちゃんと沈んだカップを手に取ると、そのまま口を付けた。

……どうでもいいんだけどさ、何故俺の時は鼻から入って行ったんだ？ 何故カトレアさんの時は普通に飲ませたんだ？ 何これ差別？ イジメ？ 泣いていいっすか？

「ど、どうだ？ カトレア？」

「ん。不思議な感じですよ、お父様。お腹の中がジンワリ温かくなるよっな」

俺の時はしばらく鼻水が止まらなかったけどな！ H A H A H A

！  
……やめよ。切なくなるし。

俺は給仕に新たに紅茶を注ぐようお願い、現在カトレアさんのウチで治療中の精霊サマに進捗を尋ねることに。分裂できるって便利だね。

「どついでしよう、精霊サマ。カトレア嬢がどこを病んでいるのか分かりますか？」

「いや、わからん」

あれ？ 意外な言葉。ヴァリエール公爵なんか顔面蒼白になっているし。

「分からないのですか？」

「ああ。そもそも我は単なる者の体の事など知らぬ。何が正常なのか分からぬゆえ、何をもって健康とするのかが分からぬ」

あー。なるほど。

要するに基準を知らないということか。

どついう構造ならば健康体と呼べるのかが分からない以上、たとえ内臓の数が人より少なかったとしても精霊サマには異常だと分からないのだろう。俺だって何をもって人を健康と判断するのかなんて分からないしね。

でも、ならば何故、

「治そうと言ってくれたではないですか？ あの時からこうなることは予想できたのでは？」

「クーよ。聞き方が悪いぞ」

それは先日俺が思った言葉と同じ。表情があればニヤリと笑っていたんじゃないだろうか。

「我は確かに単なる者がどこを病んでいるかなど分からぬ。我に分かるのは、単なる者とクーとでは、体内の水の流れが異なっているということのみ」

水の流れ。それはハルケギニア流の不調を示す言葉だったはず。

確かに俺は健康体だ。『コミュニケーション』や『名前』に隠れ気味だけど、病気などで死なないように『丈夫な体』も神さんから貰っている。その俺と比べればカトレアさんの『水の流れ』は淀んでいるのだろう。

「ゆえに我が行つのは単なる者の病を取り去ることではない。我が行つのは単なる者の水の流れをクーと同じくすることのみ。異論はあるか、単なる者よ」

「いいえ、あろう筈もございません」

カトレアさんがにつこりほほ笑んだ。

見る者を虜にするかのような柔らかい笑みにどきりとする。

うん。女っ気のない人生だったもんだから心臓バクンバクン言ってたよ。

背後の花壇騎士がため息をついているのも感じたけど、まあ許そう。

あれを目の前にすりゃ、男なんて骨抜きにされて当然なものな。

だから俺も気付けなかったんだろっね。

そう結局俺は気付けなかった。精霊サマがカトレアさんの完治を告げた時も、それを聞いたヴァリエール公爵がカトレアさんを抱きしめながら喜んでいたら、結局気付くことが出来なかったんだ。

精霊サマは言っていた。俺と同じにすると。

神さんから人並み以上の肉体を貰い、『名前』の加護によって<sup>クイーン</sup>最速の英霊のスペックへ向けて成長しているこの俺と同じにすると。

そのことを俺が知るのはまだまだ先の話。

ヴァリエール公爵がモンモランシ伯爵に「うちの次女と妻との喧嘩で、屋敷の半分が吹き飛んだんだが」と零すのもまた、まだまだ先のお話。

## 26・モンモランシー

さて、水の精霊サマによるとカトレアさんの治療は無事終わったようです。

ヴァリエール公爵なんか今にも泣きそうな感じで喜んでます。

こりゃあれですね。俺たちガリア組やモンモランシ親子がいなければ、わんわん泣いていたことだろうね。

今夜はヴァリエール家では宴でも開かれることでしょう。

「殿下。この度は誠にありがとうございました。殿下には感謝の言葉が尽きません」

「顔を上げてください、ヴァリエール公爵。カトレア嬢を治療したのは精霊サマですし、私も善意だけで精霊サマに頼んだわけではありません」

「それでも、言わせていただきたい。ありがとうございます、クー殿下」

むーん。個人的な感情でトリステイン貴族に力を貸したと思われる俺の立場が悪くなるんだけどなあ。ビジネスライクな関係では終われませんか。

もっとも個人的な事情でガリアの王族に借りを作ったとなればヴァリエール公爵の立場が悪くなる故、この情報はトリステイン側から漏れる可能性も低いんだけど。

「私からもお礼を言わせて下さい、クー殿下。ありがとうございます」  
「このご恩は決して忘れません」

「ふむ。そうですね。カトレア嬢のような美しい方に私の事を覚えていて貰えるというのなら、私個人にとってはこれ以上ない報酬ですね」

これくらいのリップサービスはしてもいいでしょ？ カトレアさんは口元を押さえて頬を赤く染めている。うむ。眼福眼福。

ん？ いや、フラグは立ってないでしょ？ 『烈風』や『虚無』との接触の可能性がある以上ポーターは超えないよ？

あくまでリップサービスさ。貴族社会に暮らしてればこのくらいは身につくだよ。社交界なんかじゃ相手を喜ばせるための『褒める技術』は当然として、褒めてくる相手の気分を良くさせる『褒められる技術』なんかも必須なんだぜ？。

ヴァリエール公爵もカトレア嬢も分かっているはずさ。ガリアなら俺くらいの子供でも教育されるようなことだし、いくらトリステイン貴族がアホばかりとはいえ、さすがに真に受けたりは……しない、よね？

え？ もしかしてヤバイ？ やっちゃった系？

は？ 『ミニユカ』使って確認？ やだよ！ 知りたくないよ！  
どどどどどどしょ。マジでフラグががががががが

「あの、殿下？」

「はっ、いえ、失礼、モンモランシ伯爵。少し考えごとをしてしまいました」

と、とりあえず今は置いとこつ。

なんだか時間が経てば経つほど手遅れになる気がするけど。

導火線についた火がどんどんBOMBへと近づいて行ってる気がするけど。

「では、精霊サマにはトリステインとの盟約を結びなおしていただき

まじょう」

「ははっ。モンモランシー、教えた通りにな」

「はい、お父様」

モンモランシー嬢は心配そうな顔をしている伯爵に頷き返すと、ポケットから針を取りだし指先を刺した。

赤い血が指先からにじみ、

「水の精霊よ。私はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。旧き盟約の一員の家系に名を連ねる者です。どうか私と、我がトリスティンと再び盟約を結びなおして下さい」

緊張でふるふる震えながらも指先を出し、練習して来たのであろう言葉を紡ぐ。

……うん。何故精霊サマはこちらを見てらっしゃる？

……何故にモンモランシ親子やヴァリエール親子まで？

……何時の間に俺は精霊サマのボスに認識されてるのでせうか？

「受け入れてあげてはもらえませんか、精霊サマ」

「うむ。我に感謝せよ、クー」

……まさかコレを貸しと言って変なこと要求して来ないよな？

俺の懸念をよそに精霊サマは満足気な顔で頷くと、紅茶で出来た腕を伸ばしてモンモランシーの指先に舐めるように触れた。

ぬるりと血を拭った感じだが、あれで盟約とやらは結び直されたのか？

原作でもモンモンの血を使って呼びだしてたしな。

……血という液体を通してならば個体認識も出来ると言うことか？  
むーん。よくわからんが、……ま、いいや。別に俺、学者じゃねーし。

「ちて、これで一件落着ですか」

「ははっ。クー殿下には多大なお力添えをいただきまして、モンモランシ家一同、感謝の念を忘れないでしょう」

「あ、ありがとうございます！ 殿下！」

ヴァリエール親子もそうだったがモンモン親子もすつこくお礼を言うてくる。

……俺、口を挟んだだけなんだけどね。

ま、なにはともあれ一件落着ですな。

トリステイン行きを命じられた時にはまさかこんなことが起きるとは思ってたかったけど。

トリスタニアでは侮られ、水の精霊サマに気に入られ、マザリーニ枢機卿に貸しを作り、カトレアさんを治療してヴァリエール公爵に貸しを作り、トリステインと水の精霊サマの盟約を復活させモンモランシ伯爵に貸しを作り……

俺、働きすぎじゃね？ トリステインの人間だったら爵位が一つ二つ増えてもおかしくない功績だろ。

一応休暇でオルレアンまで来たんだけど。

ま、なんだな。

お疲れーって言いたい感じだね。

うん。

やっぱそれが一番しっくりくるね。

よし。

俺、お疲れー



は？ 建てたフラグ？

知るかそんなもん

園遊会終わったらトリスティンはおるかオルレアンにも来ねえよ  
そうすりやさすがに捕まらないだろ

フラグなんて回収しなけりゃいいんだよ。ウケケケ

## 27・たまに行くならこんなラグドリアン湖

ぶえつくしよい。あ、ども。クーです。

園遊会の準備は着々と整ってます。

来賓用の休憩施設や宿泊施設も出来上がり、ガリアでもトップクラスの土のメイジたちによって造られる街並みは、即席のものとはとても思えない仕上がりになってます。

うーむ。杖の一振りですぐに街道が出来上がり、もうひと振りで数年はメンテナンスの必要が無くなる固定化が掛けられる。

これはメイジが特権階級になるのも納得ですわな。

原作では『科学』を研究するコルベル先生が生徒たちから白い目で見られているなんて描写がありましたかね。あれ、納得ですわ。

杖を振れば事足りるんですから、魔法以外の技術なんて探しませんよ。

その上ハルケギニアの人間は生まれた時から魔法が身近にあるんですから。平民でさえ求めるとしたら、『魔法以外でなんとかする方法』ではなく『メイジにより安価で魔法行使を頼む方法』とか、そんなんでしょね。

まあほとんどの平民はそんな方法が手に入るのなら『メイジに殺されない方法』を求めるだろうけどね、と言えてしまっ辺り、やっぱり魔法を好意的に見ることは出来ないけど。

「考えごとですか？」 殿下

考えごとじゃなく現実逃避って言うんだよ！

ちなみに現状を説明しよう。

俺 ボート乗る 湖出る 釣りする

別のボートやって来る 二人乗ってる 手を振られる

目を凝らす 見覚えある

カトレア モンモランシー 俺のボートへダイブ

うぼあー ぶくぶく

以上アルヨ。理解した力？

「まさか不覚をとるとは。最近では騎士団員相手でも後れを取ることなんて無かったんだけどな」

「すすすすいません、殿下！ ホラ、カトレア様も謝って！」

「ごめんなさいね、クー殿下。少しはしゃぎ過ぎちゃったみたいで」

ちなみに今はカトレアさんたちの乗ってきたボートにお邪魔しています。転覆したマイボートは精霊サマにサルベージして貰ってる所です。

「まあ別にいいが。それで？ 何故貴方がたがここに？ 何か用でも？」

「いえいえ。殿下がラグドリアン湖で釣りをするのを趣味にしていると聞きまして、来てしまいました。ラグドリアン湖はトリステイン領でもガリア領でもありませんし、誰にも咎められませんから」

ふむ。確かにラグドリアン湖は正式にどの国の領土だと明文化されてはいない。

トリステインにとっては盟約を結ぶ水の精霊の住まう場所であるのだから、他国のものだとは認められるはずもない。が、ガリアに文句を言うにはトリステインは小国すぎる。

ガリアにとってはオルレアン地方の景勝地だけあって手放すには惜しい。というかトリステイン如きにくれてやるいわれは無い。が、戦争起こしてまで奪いたいほどでもない。

結果、暗黙の了解としてラグドリアン湖は中立地帯となっているの

である。

資源でもあれば奪い合いになってたかもしれないけどねえ。

「つまり、ただ遊びに来たと？」

「はい。殿下とおそろいですね」

「カ、カトレア様。それは無礼に当たるんじゃない？」

「はあ。いや、いいよ。モンモランシー。周囲に聞いている奴がいるわけでもないし、遊びに来たと言っただけならお互いプライベートだ。口調も楽しってもらって結構だ」

「いえ、そんな恐れ多いです」

と、モンモンが首を振る。ま、本人がそう言っなら強制するつもりもないけどね。

下手に普段通りの口調に慣れてしまっって他人のいる前でも俺にタメ口、なんてことになれば被害を受けるのはモンモンだし。年齢の事を考えるなら敬語のオンオフを切り替えることを望むよりも、常に敬語で話して貰った方がいいのかもしれない。

「それにしてもカトレアはモンモランシ領に滞在しているのか？」

ヴァリエール領とモンモランシ領はかなり離れていたと思うが」

「ええ。モンモランシ伯爵のお屋敷にお邪魔しています。ヴァリエール領にも一度帰りましたが、父に無理を言っってこちらに来ることを許して貰ったんです」

「へえ。なんでまた？」

「そ、それは……」

「おいイ！ 何頼染めてるわけ!? ちょっとSYレならんしょこれは……?」

「早急に話を変えるべき！ そつすべき！」

「ま、まあなんにしても納得がいった。カトレアとモンモランシーが随分仲がよさそつに見えたが、伯爵家に滞在していたからか」

「え、ええ。モンモランシーにはとても良くして貰ってます。まるで妹が二人に増えたようでも楽しいんですよ」

「あれ？ カトレア様には妹さんがいらしたんですか？」

「ナイスアシストモンモン。助かったぜ。」

「ええ。ルイズと違ってね。モンモランシーと同年よ。私と一緒にモンモランシ領に来たいって言うてただけだね、お母様がダメって」

「お身体が弱いんですか？」

「うっん。あの子は魔法が苦手だね。お母様に厳しくされているの。息抜きも必要だと思っただけね、お母様がルイズに期待しているのも分かるから」

「カトレアさんの表情が少し曇る。」

「まあルイズが唯一の味方だと認識していた人だし、溺愛しているのだろうけど。」

「そんなカトレアさんの様子を見て、今度はモンモンが慌てて話題を変えた。」

が、

「そ、そういえば殿下はどんな魔法が使えるんですか？ シャルル殿下は最年少スクウェアの天才だって聞いたことがありますけど」

そいつはバッドな質問だぜ嬢ちゃん。まあ伯爵も俺が魔法を苦手として話を話したりは出来なかつたんだろっけど。

「あー、なんだ。俺は魔法は苦手なんだ。使えるのもライトとアンロックだけという有様だな」

「え、あ、あの、私」

「いや、いい。別に気にしていないしな。だからモンモランシーも気にすることは無い」

ホント、気にしてないんだけどな。

トリスティンはハルケギニアでおそらく一番伝統だの格式だのを崇めてるからな。ヴァリエール公爵もそうだったが、魔法が使えるいってだけで同情の視線を向けられてもねえ。

俺の周りの騎士連中なんかは、魔法の使えないジョゼフ兄がリュティスの環境を一変させた所や、魔法ナシで俺がトライアングルメイジをボコボコにしているとこなんかも見てるから、最近意識が変わってきてるっばいけどね。

「あの、殿下？」

「ん？ どうした、カトレア？」

先ほどまでのほんわかした表情はなりを潜め、カトレアさんは少し思い詰めたような雰囲気だ、

「大変無礼な質問かとは思いますが、」

「構わないよ。無礼だなんだなんて考えは、ボートから落とされた時に飛んでいたからな」

「では、お言葉に甘えさせて頂きます。殿下は魔法が苦手でも気にしないと仰られましたか、それは何故でしょうか」

あー、なんかデジャブ。

ジョゼフ兄にもそんな話したなあ。あの頃は若かった。

あの時はなんて言っただけ。支配者には必要ない力だと説明したんだっけか。

でも今求められてる言葉は違っただろうね。それはルイズが必要としてる言葉だろうから。

むーん。でもなあ。ルイズの場合、俺の言葉は届かないんだよねえ。

ルイズに必要なのは『魔法が使えなくても良い理由』じゃなく、『魔法が使えることによって貴族と認められること』だろうから。

だから、説得のための言葉は造れそうにないなあ。

「ふむ。あえて説明しようとするのが難しいが、そうだな、安心していいから、といったところか」

「安心ですか？」

「ああ。俺がいくら落ちこぼれだろうと、シャルル兄上がガリアを良くして行ってくれるという確信があるから、安心していられる。ジョゼフ兄上がシャルル兄上を支えてくれると信頼出来るから心に余裕を持っていられる。だから魔法が苦手なことくらい、気になんかしないんだよ」

それに、と続け

「人は魔法の才だけで測れるほど小さくは無いんだよ。魔法が使えないと言っなら他の能力を示せばいい。他の素晴らしい所を見せればいい。ガリアではジョゼフ兄上を馬鹿にする声は無いんだ。なぜなら魔法が使えなくてもジョゼフ兄上の政策はリュティスを豊かにしたという実績があるから。俺も確かに魔法が苦手だが、魔法の才の無さだけを気にしていても仕方がないと思っているのさ」

しばらく黙って考え込んでいたカトレアさんだが、うんうんと頷くと、再びふわっとした笑みを見せてくれた。

「とても考えさせられるお話でした。やっぱり殿下は素敵です」

……アレ？ 何故俺は踏み込んだ？ 距離を取ろうと決めていたはずでは？

「是非ルイズにも聞かせたい話でしたわ。今度、お母様に内緒で連れてこようかしら」

……アレ？ ボムが巨大化している気がするヨ？

やばくね？ これやばくね？

ホント、勘弁してくださいあ



## 28・With a fanfare

皆さま、ご機嫌いかがでしょうか。クー・セタンタ・ド・ガリアで  
ございます。

思えばこの十月月は休暇とは名ばかりの大変な期間でした。

トリステインへと赴き、胃を痛めながらも役目を果たしました。

トリステイン側から使者が参られた時には、水の精霊様に気に入ら  
れるという不測の事態が発生しました。

それにもないトリステイン貴族の方々と交渉する羽目にもなり  
ましたね。

水の精霊と交渉役であるモンモランシ家の間を取り持ち、ヴァリ  
エール家の御息女の病を治療していただきました。

その後も様々なことがありました。

ラグドリアン湖に小舟で出れば、何故か毎回カトレア嬢とモンモラ  
ンシー嬢がやって来ていましたし。フラグを回避しようと湖に出る  
のをやめれば、花壇騎士の諸兄らがニヤニヤ笑いながら私をボートに  
無理やり乗せやがったこともありましたね。なんでもリユティスか  
ら騎士団へと様々な指令書なる物が送られていたとか。陰謀大好き  
な上のクソ兄……ゴホン、失礼。私のことを大変思ってくださいとい  
る長兄のお節介が働いたように思えますね。

ああ、そうそう。ラグドリアン湖で思い出しましたが、私が湖に出  
ると精霊様が喜んで下さるようで、私が湖上に居る間は鉄壁の守りが  
敷かれていました。凶暴な亜人が湖のほとりで全身から血を噴き出  
して倒れていた、なんてこともありましたし。精霊様に聞いたとこ  
ろ、あの方、液体ならばなんであれ操れるそうで、血流操作なんての  
も出来るそうです。どこの一方通行でしょうね。さらに水に触れて  
いる相手ならば思考を呼んだり精神への干渉も出来るそうですから、  
心理掌握のような力も持っているということでしょうか。私も一応  
チートに分類されるはずですが、精霊様に比べれば可愛い方だと思い

ます。

さて、形式的に与えられていた仕事をこなし、同時に舞い込んで来る厄介事も片付け、時には湖で釣りを楽しむ。そんな毎日はそのなりに楽しく、またとても充実しており、あっという間に十カ月が過ぎました。

ええ。現在ガリアでは王位継承式典が執り行われております。

自然、背筋も伸び、思考までもピシッとせねばと思う次第であります。

ま、と言ってももう終わりかけなんですけどw

いや、だってわざわざ説明しなくてもいいでしょ？ すっげえつまんなかったぜ？

宰相による長々とした説明があつて、父上がうんたらかんたらしゃべつて。

で、シャルル兄が戴冠して。拍手や歓声が溢れて。

まあ省略してもいいでしょう。継承式典そのものはこの戴冠式が本番だけど、実際は王族やそれに準ずる大貴族しか来ていないココではなく、諸外国から多くの貴族がやって来るラグドリアン湖の園遊会の方が派手になるしね。

「以上をもって、我がガリアの、王位継承の儀をつつがなく終了したことをここに」

さて、こつから俺もお仕事開始なんですわ。

戴冠式は終わったけど、直接オルレアンへってわけには行かないんだよね。

まずは国内貴族と王都に集まった多くの平民にお披露目をするために、シャルル兄はこれからパレードです。花壇騎士（担当は騎士団の中でも見目麗しい方々がするそうぞ）を引き連れ、リュティスを回るとか。

リュティスはここ数年の好景気に沸いていたし、継承式典に向けてジョゼフ兄が準備を担当して来たので、大いに盛り上がることでしよう。

で、俺はと言いますと。

「お初にお目にかかります。ジェームズ陛下。わたくし、名をクー・セタンタ・ド・ガリアと申します。以後お見知りおきを」

戴冠式に出席していた他国の王族のお相手ですわ。

今のお相手はアルビオンのジェームズ一世。最初はトリスティン担当にされそうだったんだけど、なんとかジョゼフ兄に押し付けることに成功しました。マジで危なかったんだぜ？

「これはこれは。」丁寧な挨拶、痛み入ります。本日は兄君の戴冠、誠におめでとございます」

「ありがとうございます、陛下」

ちなみに今の俺の立場は王子ではなく王弟。非常にややこしい立場なんだが、公爵位を授爵するまでは王族のままってことになっている。ちなみに王兄であるジョゼフ兄が王位継承権第一位、王弟である俺が継承権第二位、王女であるシャルロットが第三位ということになってるあたり、わけがわからんよね。

まあ何が言いたいかというと、現在の俺は国王はまだしも、それに準ずる王族となら対等の立場であれるってことだ。

「これよりリュティスの民の前に新たな国王シャルルが姿を見せることで、王位即位を知らしめることとなっております。オルレアンでの披露式典は後日となりますので、本日は我らがグラントロワでお過ごしください」

「ありがとう、クー王弟殿下。お言葉に甘えさせていただくことにするよ」

ふむ。ジエームズ陛下とは安心して会話をしてられるね。

というか女性との会話よりオッサン相手にする方が心休まるってどういふことよ？

「それにしてもクー殿下は落ち着いておられるな。このような場においても堂々たる佇まい。我が息子にも見習わせたいたいものだ」

「アルビオンのといいますと、ウェールズ殿下ですか。ウェールズ殿下の聡明さは遠くガリアにいる私の耳にも届くほど。おそらく私ごときでは引き立て役にもなれませんでしょう」

「ハッハッハ。そう言って貰えるならば嬉しいのだがね。アレはあくまで年齢の割には聡明である、という評価を越えられはしないだろう。君とは違って、ね」

「それは、買被りでしょう。私は日々二人の兄の偉大さに、我が身の小ささを感じていますよ」

「ふっふっふ。我が息子ならば、この場面で兄君を持ち上げること、ガリアの偉大さを印象付けよう、などととは考えられないだろうよ」

見通されていますなあ。ま、見抜かれることで効果の減るような話ではないんだけどね。

むしろシャルルは『そこまで考えられる人間が王に推している』ということ、印象操作の強化を期待できるくらいだし。

にしても、なんというか、かなりのレアキャラだよな。きちんと王族や貴族としての役目を果たせてる人って。ガリア以外では初めて見たんじゃないかな。

「クー殿下には是非ともウェールズと友誼を結んで貰いたいものだよ。それに、君の聡明さを目の当たりにすれば、このところプリンスオブウェールズという呼び名に喜ぶばかりのアレも少しは気を引き締めるだろう」

「私はいずれ公爵位を授爵し、王室からは外れる人間です。そうなれば」

「それでも、だよ。クー殿下はきつとガリアの支柱となるだろう。なれば君と面識を持てることはアルビオンにとって、そしてウェールズにとってかけがえのない財産となるだろう」

「勿体ないお言葉です」

かなり本気で言ってるね。『コミュニケーション』で確認したけどさ。

この人の息子ならそこまで酷いことになってはいないと思うんだけど。

ってか、そのウェールズはどこよ？

「ところで陛下。ウェールズ殿下は今どこに？」

「……うむ。おそろくだが、従妹イタコと会っているのかと」

……そりゃジエームズ陛下も顔を逸らすわ。

つか他国の王位継承式典に呼ばれてるってのに、アンリエッタと逢い引きしてんのかよ。年齢からすれば仲のいい親戚がいるから会いに行っちゃったってレベルなんだろうが。

「クー殿下と会う前だったならば子供のやることと目を瞑っていたかもしれないが、……む」

ジェームズ陛下の視線を追えば、……えーと、誰だっけ？

ガリアで見かける顔ではない。トリスティンからの来賓は全て把握している。ゲルマニアのアルブレヒト三世は式の前に挨拶したし、ロマリアの僧侶が着るような服装でも無い。

ならばアルビオンか？ と考えていると、

「ふむ。クー殿下。この者は我がアルビオンの大公。名をモードという」

モード大公!? 生きてたのかよ!!

俺は衝撃を受けていた。だってモード大公の投獄は既に終わっていると思ってたからね。

というか何故か俺はそう思い込んでいたけど、モード大公の投獄はまだまだ先だって可能性の方が高かったんだ。

それに何故気付かなかったのか。

……決まってるよなあ。

気付いてしまえば目を逸らせなくなると分かってたからだろう。

助けられるというのなら、ティファニアも、その母も、投獄される大公自身も助けるべきだと思ってしまつと、俺自身が分かっていたからだろう。

これはカトレアさんの時ほど簡単な話じゃあない。

国家に対する干渉であり、俺がミスをすればガリアにまで責が及ぶ可能性だつてある。

簡単に手を出すべき問題じゃあないんだ……が。

ホント、お人好しな思考回路つてのが神さんから押し付けられた嫌がらせに思えてきたぜ。

ああ、あのセリフが言いたいが、目の前にはジェームズ陛下もモード大公もいるしなあ。

……分らないように眩みますか。

Could you give me a break?  
My

## 29・考える俺

Hi, Guys. クーだ。

現在オルレアンでの園遊会中です。

万事つつがなく進行し、一応は総責任者である俺の評価にも繋がっている。ジョゼフ兄にも褒められたしね。

今はシャルル兄の他国貴族に向けての挨拶が終わり、歓談の時間となってます。

とはいえ他国の貴族との接触をなるべく避けたい俺は、ガリア貴族らの集まっている一角にてボケツとしています。ここまで乗り込んでくる他所の貴族はいないでしょう。

さて、そんな俺の頭を埋め尽くしている案件は唯一つ。どうやってアルビオンに介入するか。

既にこの件から手を引くことは諦めた。助けられる相手を助けないという選択は精神的につらいし、なによりモード大公投獄から発生する可能性に気付いてしまったのだから。

モード大公投獄。これは原作においては過去の事件であり、フーケ「マチルダ、ティファニア」らの生い立ちに関わる歴史の一つでしかなかったが、俺はこれを一つのトリガーだと考える。

もともとモード大公は現アルビオン国王ジェームズ一世の弟に当たる。つまりはウチでいうシャルル兄の立場だったってことだ。

つまり過去にアルビオンでも王位争いがあったことは想像に難くない。

もっとも先日ジェームズ陛下とモード大公が話す様子を見たが、兄弟仲は悪いようには見えなかった。が、ガリアでもそうだったように、王位争いの影の主演は貴族たちである。過去には派閥で別れて政争があったのだろう。

そして、おそらくは現在でもモード大公派は存在している。原作ガ



リアで、ジヨゼフによるシャルル派大粛清後も、タバサ・シャルロットに期待を寄せるオルレアン公派が根強く残っていたように。むしろ肅清など無かったアルビオンでは、原作ガリア以上に、王弟派が多いのかもしれない。

もしこの状況でジェームズ一世がモード大公を投獄したらどうなるか。

それも、エルフを妾に取っていたなどという醜聞を隠すため、モード大公派の貴族になんら説明することなくモード大公を投獄したらどうなるのか。

モード大公投獄の理由を捏造した所で、王弟を投獄するほどの理由としてモード大公派の貴族を納得させるだけの説得力のあるものを作れるとは思えず、逆に王は何かを隠しているのではと疑念を持たれることだろう。そうだったら一体どうなるのか。

国王への不信感で済めば奇跡的なほどだろう。

そして俺は、奇跡など期待しない。常に最悪を想定し、それを回避しようとして来たのだから。

最悪。それは何か。

原作を知る者ならばこう言うだろう。レコンキスタの再現こそが、アルビオンにとっての最悪だ、と。

はつきり言わせて貰おうか。

その程度で済むのならば、諸手を上げて歓迎したいくらいだ。

原作におけるレコンキスタ。すなわち貴族派による王党派の打倒は、ハルケギニア史にとってみれば、一連のアルビオン戦役の序章に過ぎなかった。

モード大公の投獄という大公派貴族への不信感を火種にし貴族派の原型が出来上がった。オリヴァー・クロムウェルがアンドバリの指輪を用いて、自身が虚無の再来だと喧伝することで貴族派のトップに立った。指輪の力で王党派を操り、貴族派を多数派に変えた。全てジヨゼフの指揮の下、ミヨズニルトンが暗躍して創り上げた状況

だったが、その結果は、数百程度の王党派を数万の貴族派が討つというものだった。

そう。ガリアの暗躍によって、数万の王党派と数万の貴族派による血で血を洗うアルビオンの内戦は回避されたのだ。被害は精々数千人程度。数百の王党派を数万の貴族派が撃つという状況だったからこそ、その程度で済ませることが出来たのだ。

もしモード大公投獄への不信感を募らせた貴族が反意を抱いたら、ミョズニトニルンの暗躍なしに貴族派が立ちあがったとしたら。なるほど、アルビオン王家の血は保たれるかもしれない。

しかしその対価として差し出されるのは、数万に及ぶ人の被害なのだろう。

俺は、その『最悪』を許容できそうにない。

正史においては死ななくても良かった人にまで死ぬ危険が生まれるのは、俺がジョゼフ兄を変えたからかもしれないんだから。

「叔父様？」

「ん？ ああ、イザベラか。シャルロットは一緒じゃないのかい？」

「はい。エレー又はシャルル叔父様と一緒にトリスティン王家の方々とお話しているみたいです」

とはいえそのことに後悔があると言っわけではない。

俺はガリアの人間だ。ガリアの百人を救うためなら、アルビオンの千人を殺すことだってできるだろう。アルビオンで多くの死者が出ると理解していたとしても、ガリアの未来を暗いままでいさせる選択肢は無かった。

それに、今、イザベラやシャルロットが笑ってられるのだから、後悔などしようはずもないんだ。

「そうか。シャルロットが一緒じゃないと、寂しいんじゃないのかい

「？」

「そ、そんなことはありません。私はエレーヌが心配なだけで」

「ハハッ。そうかい？ イザベラが寂しがっているようなら一緒にラグドリアン湖を眺めに行こうかと誘うつもりだったんだけどね」

原作と性格が変わっているのはジョゼフ兄だけじゃない。イザベラもまるで別人のように変わっていた。

原作でのイザベラには味方がいなかった。父であるジョゼフは、自身とシャルルの魔法の才能の差を、イザベラとシャルロットとの魔法の才能の差から思い出してしまいがゆえに、イザベラを疎ましく思っていたし、周囲の貴族の大多数は、ジョゼフが王位についても尚、心情的にはシャルル派のままだった。

従姉妹であるシャルロットは父を恨み、周囲の貴族は何時ジョゼフを、そしてイザベラ自身を裏切るか分からず、父であるジョゼフすら味方にはなってくれない。その結果、原作でのイザベラはあのような性格にならざるを得なかったのだ。

しかしジョゼフが変わり、シャルルが王位に就いたこの世界には、イザベラに敵など存在しない。

素直なまま笑うイザベラを見て、アルビオンのために原作通りの歴史の方が良かったなどと言えるはずがないだろう？

「もう。しばらく会わないうちに意地悪になりましたね、叔父様」

「そうかな？ イザベラは綺麗になったね。立派な淑女になってるよ。うで安心したよ」

「も、もう！ 叔父様ったら意地悪です！」

後ろを振り返る暇などない。

前を向いて、救える者に手を伸ばそう。

俺の『お人好し』が神様から押し付けられたものかどうかなんて分からないけれど。

それなら別に、それでもいいさ。

ハッピーエンドを望むのは人として当然だろうしね。

さて、とりあえずはサウスゴータと面識でも作っておくと思いますかね。

もちろん、レディ淑女のエスコートも忘れたりはしませんとも。

### 30・徒然なるままに

うつす。クーっす。シャルル兄の王政開始から半年くらい経過しましたね。

この半年、俺は色々と大変な目に会ってました。

まず第一に、クー・セタンタ・ド・オルレアンになりましたね。

ええ。オルレアン公クーです。オルレアンはこの度王家直轄領から公爵領となり、俺の領地となりました。

トリステインとの国境を任されたことになるわけですな。

……

……

……………ドチクシヨウ!!!

どうせあのクソ兄……………失礼、非常にオツムのお回りになりやがる長兄殿の企みでございましょうよ。

ってかバレてたからね。精霊との一件。

なんでも騎士団とは別口でリュティスから数人のスクウェアがオルレアンに派遣されていたそうぞ。

それもメイドに化けさせたうえで。彼女ら全員ジョゼフ兄の手駒で俺の護衛任務に就いていたんだとよ。

結構タイプのお姉さんもいたのに orz

まあそんなわけで精霊との個人的な繋がりを持っていることや、トリステイン貴族との関係性を考慮されて、めでたくトリステインとの国境を任されることになっちゃいました。

もうね。二度とトリステイン側には近づきたくないと思っていたのにね。

あー、逃げてえなあオイ。

そうそう。トリステインと言えばカトレアさんが魔法学院に入学

することにしたそうです。

オルレアン公領に封じられたので、一応トリスティンのお隣さんであるモンモランシ家にも挨拶に行っただんですがね。その時に話題に出てました。

モンモランシーが言うには、カトレアさんは「私、魔法学院に入学するのが夢だったの〜」なんて、どこぞのキーボードのお嬢様のような事を言っていたとか。

カトレアさんの周りもいろいろあったそうです。

なんでも水のメイジとしてメキメキ頭角を現しているとか。すでに水の精霊サマはカトレアさんのウチからは出て行っているはずなんですが。彼女自身が自分の体で精霊サマの御技を体験しているのが成長に繋がっているんですかね。

それと、カトレアさんが健康になったことで、カトレアさんのフォンティーヌ子爵位を返上し、再びヴァリエール家に戻すため色々やってるそうです。

まあ姉は婚約者が逃げ出すほどのキツイ性格だそうですし、妹は魔法の失敗ばかり。婿を取って家を存続させる可能性の一番高いのはカトレアさんなんでしょう。

とつとつそれなりのトリスティン貴族とくっついて貰いたいものです。

いっそ学院で婚約者でも作っちゃえよと思ったのは、口に出すわけにはいかないでしょうがね。

さて、俺の話に戻しますが、準備に追われてもいましたよ。

ええ、アルビオンで一騒動起こすための準備ですわ。

あの園遊会では結局サウスゴータの太守と接触することは出来ませんでしたからね。

サウスゴータ家の者。特にマチルダ・オブ・サウスゴータと面識さえ持ていれば使えただろう安全策もあったんですが。

仕方がないですわな。俺も全ての貴族が領地を開けてガリアまでやって来るとは思ってたし。

というわけでプランBを発動させるために準備してきたわけです。

あ？ プランB？ ねえよ、そんなもん！

ゴホン、失礼。

まあぶっちゃけた話、何も思い浮かばなかったわけです。

こちら辺の陰謀じみた領分は、ジョゼフ兄の専門ですからね。

策謀巡らしたり出来ない俺としては、出たところ勝負で通用するよう幾つもの選択肢を用意しておくしか出来ないわけです。

で、最初に手を付けたのは諜報ですね。

モード大公がエルフを妾に取っていることはほぼ確定事項でしょうが、万が一がありますし。

俺が生まれたことで、俺の母が父と出会ったことで、なにかしらのバタフライ効果があったかもしれない。

勢いよくアルビオンに乗り込んで、空振りでしたじゃ話になりませんし、そうじゃなくても情報ってのは大事ですからね。

とりあえずモード大公とサウスゴータ太守の周囲を探らせてます。

妾のエルフさんは果たして大公邸にいるのか、それとも現時点で太守に預けられているのか。

それくらいは知っておきたいですしね。

というか諜報員を鍛えることも考えませんと。

今回は雇った人間を『コミユカ』を使って裏切りの可能性が無いことを念入りに確認して……と段階を踏みましたが、正直どこまで使えるか。

将来的にはN I N J A軍団を作りたいものですな。

ああ、軍団で思い出しました。

現在のオルレアン領に関してですが、それなりの数の腕利きが集まっています。

というのも俺がオルレアン公になったところ、花壇騎士の中から一

緒に行かせてくれと言い出した奴が結構いまして。

もともと自身の才覚だけで立身出世を目指して来た次男三男の多い騎士団でしたがね、俺としては予想外でしたよ。国家騎士団を辞めて一公爵の家臣になろうと考える奴がこんなにいるなんて。

バツソも何故か来てました。そしてレティシアさんも。

俺の領地を火の海に変えて貰いたくは無いですけどね。

まあ『烈風』対策が出来たとでも思って喜んでおきましょうか。トリスティンが攻め込んでくるなんてことはまずないでしょうがね。

現在彼らM Y家臣団には治安維持を担当して貰ってます。

ガリア内は結構安定していますが、トリスティン側から盗賊が乗り込んで来ないとも限りませんし。

モンモランシ伯爵はそれなりに有能な人だとは思いますが、信頼しすぎて自領の民を失うなんて失態、起こしたくはありませんね。

さて、これくらいですかね。わざわざ言うておくべきことなんてでは、本日はこの辺で。

そろそろアルビオン行き計画を詰めて行きましょうか。

継承式典で作ったコネクションを最大限利用して、アルビオンへの『旅行』を各方面に認めさせることから始めましょうかね。



### 31・ワルダクミ

ぼんじゅーる。クーです。そろそろ十一歳になりますね。

現在リュティスにきています。というか呼び出されました。ジヨゼフ兄に。

「アルビオンに行きたいそうだな」

「ええ、まあ」

いや、報告はしてたんですわ。公爵位を受け取ったからと言っても一応王弟ですしね。他国に旅行に行くのも上には伝えとかないとってね。

……コンビニ行ってくる！ みたいなノリの手紙で報告したせいで怒られてるんですかね？

「旅行が目的だそうだが？」

「まあ、ね。王室から外れて少し自由度も上がったし。空に浮かぶアルビオンってのも見てもみたかったし」

「わざわざ事前にアルビオンに密偵まで派遣してただの『旅行』、か？」

うばあー。何故か把握されてるし。

つかニヤニヤしてるのが気になるなあ。全て見透かされてそうでもさすがにエルフ云々のことまで掴んでいるとは思えないんだけど。

「念のための用心だよ。トリスティンに行った時は酷い目に会ったし

ね

半分くらいアンタのせいだな！ 目線に込めるも堪えた様子は無い。

チツ。それどころか楽しそうにしゃがって。

「酷い目、なあ。なかなか良好な関係が出来たと聞いているが？」

「……てかさあ。ジョゼフ兄としてはアリなの？ 俺がトリステインと繋がりを持つの？」

「お前は平穩を望むのだろうか？ トリステインと組んでガリアを狙うのを警戒しろとでも？」

「そつじゃなくてさ。俺は公爵になったとはいえ王家の血を引いているわけだし。利用価値はまだあると思っただけだ」

始祖の血を欲しているゲルマニア辺りならば喉から手が出るほど欲しい人間のはず。アルブレヒト三世の娘あたりの婿に出せば、ガリアはゲルマニアとのつながりを深め、更に発展するだろう。

外に出さなくてもガリア内の有能な部下に公爵位を与えるためにも使える。王室との繋がりが出来るなんて貴族にしてみれば最高の恩賞だ。有能な人間に名誉を与えるためにも利用できるはず。

「そんな利用価値のある俺を、トリステインとの繋がりのためだけに使うのはもったいないと思っただけだ」

「公爵家ならば側室を抱えても何も言われなと思うが？」

「勘弁してくれ」

トリステインとの繋がりだけで俺を使いきるのではなく、ゲルマニアやガリア内でも相手を作れと？

「くっくっく。まあ「冗談だ」

「九割くらいは本気だったろ？」

「ほう、分かるか？ くっくっ、まあ許せ」

はあ。ホント、勘弁してくれよ。

「まあなんだ。お前には王家の人間としての意識が強すぎる気がするな。俺もシャルルも、お前を婚姻外交の道具などにするつもりは無いんだが」

「……………はあ？」

「そもそも俺は自分の相手は自分で決めた。シャルルはどうかは知らんが、少なくとも奥方を愛していないようにも思えん」

「そりゃ王位を継承するのがどっちか決定する前のことだからでしょ。次王の可能性のある人間を外に放り出せはしないって」

「まあそれもあるのだろうが、な。しかし兄二人が好きに相手を決めたことは確かだ。お前だけに望まぬ相手を押し付けるつもりはない」

なんともまあ丸くなっちゃって。原作を知る人間が聞いたら信じられないんじゃないかな。

「それに婚姻による同盟が必要なほどガリアは弱くは無い。婚姻による連携などなくともガリアを豊かにすることは出来る」

「……大した自信だね」

「まあな。そしてこの自信はお前がくれた物だろう?」

「……そうなるのかねえ」

「そのお前が気に入った相手がトリステインにいるというのなら、俺もシャルルも反対などしないさ。尤も、お前にとっては余計なお世話だったようだがな。くっくくく」

くっくくく、で済ませて欲しくは無いんだけど。

「まあいい。話を戻そうか」

「なんの話だったっけねえ」

「お前がアルビオンに行きたいと言っていた話だ」

あー。そうだったそうだった。その話でリュティスまで呼ばれていたんだった。

まあ単純に反対されるだけ、というわけではないだろう。それならば俺の手紙に対して駄目だの一言を送り返せばいいだけの話だし。とはいえ賛成されるってわけでもなさそうなんだよねえ。

「で、何が狙いだ?」

来たぜぬるりと。

さて、どうしたものか。

嘘を『コミュニケーション』使って信じ込ませてもいいんだが……。

うん。折角だし引き込もうか。原作でビダーシャルを手中に入れ

ていたジョゼフという人間を。

風の精霊ちゃんにお願いして周囲の気配を探り、音を部屋の外に伝搬させないようお願いする。疑似的なサイレントってわけだ。

「俺が精霊サマに気に入られたことは知ってるよね？」

「ああ。ラグドリアン湖の水の精霊だな」

「アレ以来ちょっとばかり感覚が鋭くなっていてね。特に……鼻が利くようになったのね」

とはいえ全てを明かすわけじゃない。

目的はぼかし、真実の中に一滴の嘘を。

身動きが取れるだけの余裕は常に確保しておきたいからね。ウケケ

「継承式典で会ったモード大公。あの人はやけに匂いが強かった」

「ほう？ 血の匂いでも感じたか？」

「いや、それだったら首を突っ込むのを自重するさ。俺が感じたのは精霊の匂い。精霊を使役するモノの気配」

「……まさか？」

ジョゼフ兄の言葉にニヤリと笑みを見せてやる。

ジョゼフ兄もまた、俺を見てニヤリと笑う。

この場にシャルル兄がいないのは僥倖だったね。シャルル兄には清廉な王を演じて貰って、俺たちは裏で悪だくみ。実に利にかなった役割分担だ。

「初めは有益な技術を秘密裏に集めているのかと思った。なにせ歴史の示す通りなのだと思えば」

「奴らの能力は人の十倍、か。しかし初めは、ということは実態は違ったのだらう？」

「ああ。密偵が見つけれなかっただけ、という可能性もあるにはあるが、おそろく違う。モード大公の個人的な事情だらうね」

「なるほど。それでお前自身が行くというわけか」

「その通り。下手にこの情報を下の者にまで出して、その挙句どこぞの六千年モノの信者共<sup>ヌ</sup>にまで嗅ぎつけられたんじゃ分け前を取りそこなう」

ロマリアがエルフを嗅ぎつけてしまえばモード大公は破滅だ。

そうなれば貸しを作るところじゃないだらう？

折角の『お友達になれる相手』だ。大切にしないとね。

俺の表情からジョゼフ兄はそんな思考を読み取ったはず。そう俺の『顔に書いてある』のだから。

やっぱり便利…… ボクの『コミュニケーション』チート

「分かった。お前の道は俺が均しておこう。向こうで自由に動けるよ  
うにな」

「そいつはありがたい。正直あちらに『善意』で護衛でも付けられたら面倒だと思っていたんだよね」

「くくっ。そうだな。それとシャルルには」

「言わないさ。陛下にはガリアを照らす光でいて貰わないと」

俺たちは影でいい。ガリアを支えることが出来るのなら。

くくく、ウケケと嗤い合う。

さて、悪だくみを進めましょう。ね、兄上？

その裏で、俺だけの悪だくみもさせては貰うがね。ウケケケケ

### 32・デコイ

やあ。クーだ。

現在アルビオンに向けて『旅行』中です。

両用艦？ アホいったらあかんでよ。そんな目立っても仕方ないでしょう。

同行者は八人ですね。内訳はメイジ六人にメイド二人。

ラ・ロシエールまでは騎兵に守られ馬車に揺られ、そこからガリア籍のフネに乗り込むことになってます。トリステイン領のラ・ロシエールですが、交易用だとかの理由を付ければ他国籍のフネを駐留させることもできるそう。まあ今回使うフネは、一応の武装を積んだ『小型艦』を賄賂で『商船』だと認めさせたそうなんですがね。うーん。さすがトリステイン。

話を戻しましょう。

護衛を連れて移動し、ガリア籍のフネに乗る。実際目立つとるやんけ？ と疑問の諸兄もおられるかもしれませんが。

説明しますと、全てジヨゼフ兄の発案です。

『とじろでお前のアルビオン行きの名目はどじするべ』

『ただの『旅行』じゃ納得されない？』

『おそらくは無理だろうな。お前がトリステインのヴァリエールやモンモランシと懇意にしているのは少し調べれば手に入る情報だ。トリステインに食い込めるだけの力を持ったクー・セタンタ・ド・オルレアンが此度はアルビオンへ。それも向かう先はモード大公家。裏を疑わない奴がいるならば、そいつはガリアじゃ出世できん』

『有能な奴なら疑ってくる、か。そいつはマズイね。疑われるってこ



とは調べられるってことだ』

『ちつ、どつするべきだと思つ…』

そう言った時のジョゼフ兄は輝いてたなあ。

あれは、うん。どんなイタズラをしてやろうかと企む子供みたいで。

あるいは、そう。自分と同じレベルで陰謀の話し合いの出来る相手を見つけたことに喜んでいるようでもあった。

『情報を隠すのは下策だね。俺たちの側からの情報流出は防げても、モード大公がポカをやらかせば一巻の終わりだし』

『ならば偽の情報を流すか？ 裏を疑わないほどの情報を？』

『いや、むしろ疑って貰おう』

『ほう…』

『俺が『旅行』にアルビオンへ。何か裏があるのでは、と疑って調べてみれば、ギリギリ手の届く所にクー・セタンタは囷だというネタがあった』

『自分で手に入れた情報は疑わない、か。お前を囷にしてまでガリアがしようとしていることに関しては？』

『そっちはジョゼフ兄にお任せするよ。あるでしょ？ 他国の目があるだけに踏み切れなかった案件。アルビオンに使者を出したい案件の一つや二つ』

『いっその際にアルビオンとの関係を変えてしまつのも手だな。お

前を囿とするだけの案件には風石関連辺りが妥当か。軍備を固める  
そぶりはゲルマニアへの牽制にもなるしな』

『現状ヴァリエールやモンモランシとの繋がりがあることで、俺を頼  
れると思っているトリスティンの馬鹿共への牽制にもなるね。ガリ  
アがアルビオンとの取引を重要視しているんじゃないかと思わせる  
ことが出来れば』

『その思い込みを利用してさらにトリスティンから絞り取る、か？』

『ロマリアにもいい薬になるでしょ？ 始祖の血を引く三王家が一つ  
にまとまれば、今までのような横暴が出来なくなる』

『異端審問を盾に暴れることもできなくなるか。継承式典への教皇の  
招致にも正気を疑うような寄付の催促があったしな。まあ大人しく  
させるためには、もう二、三絡め手が必要だろうが』

くっく、ウケケと嗤いながら策を巡らしていく。

よりガリアを富ませるために。より強固な平穩をもたらすために。

『ふむ。つまりはお前の『旅行』は囿としてそれなりに目に付いて貰う  
必要があるか』

『それでいて派手になりすぎず、何か裏があるんじゃないかと疑わせ  
るくらいが丁度いいね』

……と、まあそんな感じのジメツとしたやりとりがありました。

結果的にこうなりました。

「クー殿。そろそろラ・ロシエールです」

ちなみに俺をクー殿と呼ぶのは古参の連中。つまりは花壇騎士からオルレアン領に来たような奴らだね。

新たに俺の下に付いた奴らは公爵、もしくはオルレアン公って呼んでくる。

原作のオルレアン公の末路を知ってる身としては不吉に感じる呼び名ではあるんだけどもね。

「わかった。それにしても空に浮かぶ島、か。楽しみな限りだ」

「そうでしたね。クー殿は空に浮かぶ島が見たくてアルビオンに行くのでしたね」

ちなみにコイツラ。俺の目的を知っているわけじゃありません。

こいつらはジヨゼフ兄と決めた、囷としての俺の目的のことしか知りません。

んで、その目的というのが、

「にしてもクー殿はそっち方面には疎いのかと思っていました。仕える者としては安心しました」

「そうですね。オルレアン公爵家も安泰でしょう」

「ええ。不敬と言われるかもしれませんが、クー殿にますます親近感を感じられるようになりましたよ」

「「まさかアルビオンまで嫁探しに行く」となるのは」「」

はっはっは。笑い合う部下を見て、やはりこの『理由付け』は止めといった方が良かったんじゃないかと今さらながらに思う。

まったく、勘弁してくれ

### 33・サウスゴータ

ボンジヨルノ。クーです。

ラ・ロシエールでフネに乗り、やってきましたアルビオン。

いやあ、すごかったです。

ラグドリアン湖を初めて見た時も思わずため息ついたもんだけど、アルビオン浮遊大陸もすごかった。

雄大な大地が浮かぶという威容。

大陸の下半分が纏う雲形はむしろ白い海。

実際見るまではラピュタをイメージしてただけど、むしろアツパイヤードに近いのかも。

海を引き連れ空を飛ぶってのは、なんというか、うん、なんと言えればいいか分からなくなるほどの、あー、上手く言えねえや。

とにかくものすごかった。

俺は『前世』では海外どころか本州から外に出たこともないようなジャポネーゼだったけど、もっと色々な風景を見ておきたかったなあと思いましたよ。

んで、港町ロサイスに到着してから、王都ロンディニウムまで馬車でトトロト移動することになりました。

で、到着しました。サウスゴータ。

本日はここ、太守さんのお家にお泊まりだそうです。

ええ。マチルダさんとフラグを建てろってことですね。分かります。

え？ 恋愛フラグじゃないよ？

ここで重要になって来るのは頼れる相手フラグです。

今回の『旅行』でアルビオンの内乱の火種、すなわちモード大公のスキヤンダルがジエームズ一世に伝わらないよう、色々と釘を刺すつもりではあるが、俺の力が及ばなかったって場合もある。

そうなったとき、マチルダさんが俺を頼りにしようと思ってくれれば、ティファニアに干渉しやすい。

エルフとは言え彼女も虚無。目の届かない所に行かんでもしたら、気が気じゃないしね。

第一の目的はあくまでアルビオンの内戦を抑えること。アルビオンの内戦によつてガリアがダメージを受けないようにすること。

そこは俺も間違えたりはしない。……けれど、やっぱり、ね。

救える相手は保険をかけてでも救いたいと思ってしまうんだよね。

とまあ頭ではそんなことをつらつらと考えているんですが、実は現在サウスゴータ家でささやかなパーティー中だったりします。

『コミュニケーション』とは便利なもので、勝手に口が動いてくれます。

ここいらの有力貴族らしい方々の話を聞き流しつつも、それを感じさせずにこやかに対応してます。オートで。最近『コミュニケーション』で出来るが増えてる気がするんだけど、大丈夫だろうかね。

「つまりサウスゴータは由緒正しい土地というわけです。始祖ブリミルが最初に降り立った地でもあり、我がアルビオンが誇る」

はあ。飽きてきたなあ。

なんと言うか、貴族ってワンパターンで。

やれ俺のココがスゴイだの、やれ我が家のコレがスゴイだの、やれ我が国のアレがスゴイだの。

自慢以外の事が出来んのだろうかね。

……そりゃ聞き流しているわけだから何を話されていようがどうでもいいんだけど。

ええ、耳では聞き流しつつ、視線は周囲を探ってます。

とはいえ眼をキョロキョロ動かすなんてへマはしませんかね。

……っと、やっと見つけた。

ちよつと失礼と一言残し、ロープレのキャラの如く同じセリフを繰り返すオッサンどもから離れる。

行き先はモチロン、

「ごきげんよう、ミス・マチルダ」

「え？ あっ！ オルレアン公」

「ははっ。あまり畏まらないでくれないか。未だ公爵と呼ばれることにも慣れていない若輩者だ。なんならクーと呼んで貰っても構わないが？」

「いえ、そんな恐れ多い」

「そうかい？ ミス・マチルダのような女性に名前前で呼んで貰えるなんて私にしてみれば榮譽に感じることもなんだが」

と、掴みはこの程度でオツケーかな？

それはそれとして、なんだか俺の言動がギーシュっぽくなってる気がするの、気のせいだよね？ あそこまで進行してないよね？

「？ なんのご用でしょうか、オルレアン公？」

「あ、ああ。少し酔ってしまったようだね。夜風に当たりたいと思っただが」

ちなみにワインを頂いてます。ハルケギニアに未成年の飲酒はどうこう言う法はないしね。というか真水をそのまま飲む方が危ない世界なんですね。

「そうでしたか。では、テラスの方へ案内いたします」

「ああ。ありがとう」

他のメイドなんかは案内させない辺りは、ホスト側として当然のことではあるものの、安心したね。

もし俺だけテラスにゝなんてことになっていたら、マチルダさんと話す機会が欲しかった俺としては、何かしら言葉が必要になっていただろうし、二人つきりで、なんて言わなきゃならなかったかもしれないんだから。

「ところで、オルレアン公」

「ん？ 何かな、ミス・マチルダ」

「オルレアン公は何故アルビオンに？」

ふむ。すっかりしてるねえ。見た目年下の俺に思われても嬉しくないだろうけど。

かなり意外だったりしたんだよ。これまで接してきたお嬢様がたを基準に考えていたからかもしれないけどね。モンモンならばガチガチになってそんなこと聞けないだろうし、カトレアさんなら疑問にも思わないだろう。

しかし、さて、どうしたものかな。

彼女にはいざという時に頼る相手と認識して貰うつもりだったんだが。

ここで彼女に只の嫁探しだと言つのはマズイ。俺が『国家の密命』を与えられる人間、位の認識でないと、いざという時頼ろうと思えないだろうしね。

だからと言ってガリアがアルビオンと秘密裏に交渉を行う際、両国から視線を外させるための罠だという『対外的に作った裏』をバラすわけにもいかない。やすやすと機密を話すような相手にエルフを託せるなんて思わないだろう。

参ったな。どの手を選んだとしても悪手になる気がする、が。



しかしここで止まるわけにもいかないんだよね。

### 34 マチルダ・オブ・サウスゴータ

「何故、アルビオンに、か」

マチルダさんに案内されたテラスで二つの月を見上げながら考える。

はて、何故俺はアルビオンに来ているのだろうか。

いや、頭がおかしくなったわけでも急にボケが来たわけでもないんだ。

ただなんとなく思っただけ。俺の本心はどこにあるのだろうか、と。

ガリアにとって有益な『モード大公への貸し』を作るため？ アルビオンの内戦を食い止めるため？ それともこの地にいるエルフの親子を救うため？

さて、俺の本心はどこにあるんだろうね。

「答えにくいことでしたか？」

「ふむ。まあ、そうなるか」

未だあどけなさの残るマチルダさんを正面から見返しながら、いくつか騙すための嘘を考え、しかし結局それらの嘘を捨てる。

「ただ、対外的には私は結婚相手、つまりは婚約者を探すためにアルビオンまで来たってことになるね」

『対外的には』という言葉を『コミュニケーション』で強調する。マチルダさんの思考に一番強く残る様に。

マチルダさんはしばしの逡巡。うん、横顔がふつくしいねえ。

……そういえばメガネかけてないんだよねえ。

俺としては秘書モードのミス・ロングビルが結構好きだっただけに、少し残念だったりも。やっぱり女性は知性的な方がいいよね。パリティとしたスーツが似合うような人。

……それにさ、いいよね、メガネ。たとえばメガネ属性が無かったとしてもメガネっ子からメガネを奪うなんてことはあり得ないでしょ。 ヨン氏は何もわかつちやいない。お前はニーソ属性が無いからと言ってニーソを脱がせるのかと。ブレザーよりセーラーが好きだからと言ってブレザーを脱がせてジャージを着せるのかと。違うだろと。たとえばお前にメガネ属性が無かったとしても、メガネにはただあるそれだけで並々ならぬ魅力が詰まっているというのに。全く、アイツは何にも分かつちやいない！ 俺の『転生』先があの世界だったなら出会い頭にハイスラでボコッてたつてのに。忌々しい、ああ忌々しい、忌々しい。

……そういや分裂の続きどうなったんだろっなあ。『前世』で死ぬ前に読んでおきたかつたんだがなあ。

なんて感じに悶々としていたところ、はたして俺の企みは成功したようで、マチルダさんは俺の望み通りの疑問を口にしてくれた。

「つまり各目的には、とてつとてしょうか？ では、実際は？」

ふむ。『リミユカ』をある程度行使しているから分かるけど、なかなか警戒されていますな。

これは……エルフという大スキャンダルまで知っているのかもね。十六、七の女の子に関わらせるなよとも思っけど。

「アルビオンをどうにしようとするのではないよ」

実際はどうしようしようとしているんだが、アルビオンにとってもプラスになるんだから別にいいよね。

それはそれとして風の精霊ちゃん。お仕事のお時間ですよーっど。

本来音を伝えるはずの空気の層に壁を作り、絶対的な盗聴防壁を発生させる疑似サイレント。さらには空気の流れを操って他人に俺たちの気配を感じ取れなくさせる。水場が近ければ水の精霊サマに頼んで近づこうとする者の心情に『近づぐことに対しての忌避感情』を発生させて貰って疑似人払いなんてのも出来たんだろうけど、さすがにそこまではしない。

まあ、これで俺とマチルダさんだけの密室が出来たわけだ。月が綺麗ですね、なんてセリフを言いたいくらいだね。

「詳細に関してはさすがに言えないが、私は注目されるためにアルビオンに来ている」

「注目ですか？」

「ああ。大国ガリアの公爵。それも先日即位したガリア国王シャルルの弟が僅かな護衛を連れてアルビオン入り。ゲルマニアなんかは私の動向に注目するだろう」

「……オルレアン公が視線を集めている間に別の人間が、ということでしょうか？」

Exacty（その通りでございます）

さすがに優秀だね。

「ロサイスから馬車でサウスゴータまで来た私とは別に、ガリアからの使節団がロンディニウムにも向かってるんだよ。私は多くの人に見られなければいけなかったがために竜籠を使うわけにはいかず、使節団は見られることを防ぐために歓迎されるわけにはいかないがね」

「そこまでしてガリアは何を？」

「そこまでは言えないよ。裏があることを話したことだってかなりギリギリなんだから」

「……そうですね。私が聞いていいことでもありませんし」

とアッサリ引き下がったマチルダさんはどこかホッとした様子。

やはりエルフ親子に関してサウスゴータ家は既に御存知のようだね。

ま、原作でも愛妾を匿ったほどの直臣だし、十分あり得る展開だと予想していたけど、希望を言わせてもらえば、徹底しとこうぜモード大公。こう言う所の緩みから情報ってのは流れ出すんだから。

さてと、マチルダさんへの返答はそれなりに上手くいったかね？

国から任務を与えられるだけの地位をアピールし、なおかつ重要な情報は易々と外に漏らさない。将来的にエルフを匿える力と情報の扱いかたを知っていることを示せたんじゃないだろうか。

とはいえマチルダさんの中の俺は、まだ『頼れる相手』にまではなっていないだろう。

なにより俺のエルフに対しての感情を示していない。クー・セタンタならばエルフを差別せず匿ってくれるとマチルダさんが認識してくれないと保険の意味がないんだが。

仕方がない。もう一歩だけ踏み込み……

あれ？ ちょっと思い付いたんだけど。

これってもしかして。

……いけるか？ いや、いけそうだね。

でも俺としては……アリだな。むしろ大歓迎？

うん。何を悩んでいるのか分からないだろうけど、もう少し待ってくれ。

ならば外向けには……平気だろ。

ジョゼフ兄の意向は確認済みだし、シャルル兄もおそらく平気なはず。

ならこっちはオーケー。そっちは……どうだ？

うん。あれがあーなっぺこつなっぺ。

つまりは……

おく。覚悟を決める。男は度胸、何でも試してみるもんだ。

「なあミス・マチルダ。結婚してくれないか？」

……

……

……

「はあああああああああああああ?!?」

### 35・退かぬ！媚びぬ！省みぬ！！

「は？ え？ はあ!? なんて!？」

おお、敬語も忘れて驚いちゃってまあ。

……ま、確かにいきなりすぎたか。マチルダさんの素っばい所が見れたのは良かったけどね。

「なんで、と言われてもね。なんでだろうっね」

肩を竦めておどけて見せる。とりあえず落ち着かせないと。

と、マチルダさんがメダパニから回復する前に、状況を整理しておこうか。

俺がアルビオンに来た理由。それは何度も繰り返したように、モード大公投獄から連なるアルビオン内乱の可能性を摘むため。そしてモード大公の投獄を発生させないために、最も効果的だと考えていたのがティファニア母娘を救うことだったんだ。

しかしここで一つ間違えちゃいけないのが、『ティファニア母娘を救う』二人をガリアに連れ帰る』ではないということだ。

そりゃ俺としても原作におけるバストレヴォリューションには実は興味深々だったし、可能ならばテファにはオルレアンに来て貰いたかった。まあ個人的感情を置いておくにしても、アルビオンの虚無は目の届く範囲に置いておきたかった。それが最善だと思っていたしね。

だって原作でのモード大公はミスを連発していたからね。

エルフを愛人にするのは別にいいさ。そこに関しては何とも言わない。

だが、エルフをエルフとして扱っていたのがまず駄目だ。ハルケギニアにはフェイスチェンジという魔法があるんだから人間に化かさ

せておけばよかったんだ。耳をちょっと隠すくらい出来るだろうに。特に先住魔法の使い手であるエルフならば。

それでもって平民の愛人を持つていてもいっつ情報を、公然の秘密としてある程度広めておけば尚良かっただろう。大公が愛人を持つ、それも平民の、とくればテファ母が人目を忍んでいても不思議には思われなかっただろうに。

さらにはジエームズ一世にエルフを愛人に取っていることがバレたときの対応もダメダメだ。ティファニアという始祖の血を継いだハーフェルフの存在を知れば、さすがにジエームズ一世も即時処刑せよなんてことは言わなかったはず。精々が追放命令だろう。王家側としても騒動を大きくしてスキャンダルが知れ渡るなんてことは回避したかったはずなんだから。

なら追放したことにしてしまえばよかったのだ。王命を守り愛人と娘を追放した王弟。無用な詮索などしにくいことだろうし、それでも疑われると言うのならそれこそ魔法の出番だろう。先住魔法で編み組を作れるだろう。なにせエルフは人間メイジの十人分の能力があるそうなのだから。まあ魔法が無理だったとしても、大公家のコネクションを使えば有用なマジックアイテムを手に入れることだってできただろう。えーっと、原作で出て来てた精巧な人間そっくりのゴーレムを作るアレはなんて名前だっけね？ まあとにかく簡単には見破れない偽物を作り、追放される姿を見せる。バレるかもと不安ならば、追放され移動している『偽物』を盗賊に変装させた家臣にでも襲わせ、消息不明にしてしまえばいい。

ま、つまりはだ。色々と抜け道があるのにどれも考えられなかった、もしくは採用しなかった大公に任せるよりも、安全を考えるのならエルフ母娘をガリアに連れてっちまうのが一番だと思っただんだ。『コミュ力』全開でも説得できなければ、いっそ攫ってしまうかなんて考えてたし。

そしてマチルダさんはエルフ母娘をアルビオンから引き離せなかった時の保険として考えていたんだ。



ただ、保険が効いて来るときってのはつまりモード大公が大ポカやらかした後で、内乱の可能性が膨れ上がった後なわけだから、俺の目的の一つは完全に潰れた後になるわけだ。『アルビオンに内乱を起こさせない』『アルビオンの虚無を他所に奪われない』『両方やらなくちゃならない』ってのが平和主義者のつらいところだな。

そう。『内乱を起こさせない』策があるなら俺はそっちを選ぶ。そして選んだわけだ。

それがマチルダ・オブ・サウスゴータ。彼女を手に入れること。理由は何でもいい。サウスゴータというモード大公家の直臣が、俺というガリアの公爵家の人間と繋がりを持てば、それはすなわちモード大公家が他国に後盾を持つことにもなる。

大国ガリアと懇意にしている人間を、アルビオンの家臣だからと理由も明かさず処断することは出来ないだろう。だからと言ってエルフを愛人にしていたなどという強力な外交カードになる弱みをガリアに明かせるはずもない。

すなわち、マチルダさんをガリアに招くことが出来れば、一気にアルビオンの内乱の可能性は減るのだ。

さらに現状でもテファのことを知ってるっぽいマチルダさんになら、万が一の時もテファは頼りやすいんじゃないだろうかとも思う。

あら不思議。マチルダさんを味方につければ一気に色々なことが解決するね。もうこれは、呐喊するっきゃないでしょう。

ま、あえて不安要素があるとすれば、マチルダさんを俺が手に入れるには結婚くらいしか理由が作れなさそうなことなただけ。

二つの月を見上げながら、マチルダさんの返答次第でどう状況が動くかも考える。

と、とよつやくあわあわしていたマチルダさんが我を取り戻したようで、一、二度深呼吸を繰り返すと、

「もしかして、からかってらっしゃるんですか？」

「いやいや。私は本気さ。本気で貴方が欲しい」

うん。マジで欲しいのよ？

立場的にも是非とも迎え入れたいポジションの人間だし、原作ではかなり有能だったことも知っているしね。なんせ箱入り娘状態から数年で知名度MAXの盗賊にまで上り詰めるような人だぜ？ まともな仕事に就いていたとしても名前を残していたらうさ。

それになによりレアな知的美人だしね。是非とも俺の部下の誰かと結婚して貰いたいよ。

「で、ですがオルレアン公と私とでは身分の差が……」

……あれ？ なんで俺と結婚する話に？

俺、ちゃんと言ったよね？ 『私の部下と結婚してくれないか？』って。

あれ？ あれあれあれ？ ちょっと待って！ 言っただっしょ!?

コ、『コミュニケーション』発動！ 俺のログには何があるよ!?

巻き戻し！ 巻き戻してちょっと！ 確認して！

えと……

Repeat

『なあミス・マチルダ。結婚してくれないか？』

『なあミス・マチルダ。（……）結婚してくれないか？』

『なあミス・マチルダ。（私の部下と）結婚してくれないか？』

……

……

部下との部分が無い!? 大事なセリフが抜けとるガネ!!! やっちまった!!!

ちらつと見れば目をウルウルさせているマチルダさんが。

……今さら勘違いだとは言いだせにい。

さて、ここで質問だ。

諸君は果たしてビアンカ派かね? それともフローラ派かな?

俺はね、断然フローラ派なんだよ。

ああ、待ってくれ。別に逆玉だとかお嬢様萌えだとかじゃないんだ。……まあそれもあるけど。

ゴホン。俺がフローラを選ぶ最大の理由というのはだね、先にフローラに求婚しているから、ただそれだけの単純な理由からなんだよ。

……だつてさ!! 結婚イベントはアレ、そもそもの始まりからしておかしいじゃんか!!!

主人公 (盾欲しす)

ルドマン「家宝は娘の旦那にやる」

主人公 (おk)「フローラさん、結婚して下さい」  
だぜ?

ここでビアンカを選ぶつてのはだ。フローラに対して『求婚したのは盾が欲しかったから。ホントは好きでも何でもなかったし』と言うようなものじゃないか。

俺には無理だね。たとえ不純な動機で近づいたのだとしても、その『動機』は明かせない。明かすことでフローラを悲しませることなんてできない。秘密は墓の下まで持っていかなば! それが漢って生き様じゃろがい!!

つまり何が言いたいのかというと、だ。女を悲しませるイベントなんて、俺の人生に要らねえってことさ(キリッ)

「身分なんて関係ねえな。来いよ、何処までもクレーバーに抱きしめてやるぜ」

ガイアが俺にもっと輝けと囁いている!!

まあ実は冷や汗ダラダラなんですけどね

## 36・Eyes on me

ズギヤ  
z  
\_\_\_\_\_ン

そんな効果音をバックにポーズを決める。

自分がプロポーズをしまつていたことに気付いてからは、もう心臓がうるさいのなんのって感じだけど、退くわけにはいかねえよ。というか、さすがにココで勘弁してくれなんて言えるほど、俺は恥知らずじゃないしね。

愛ってなんだ？ 躊躇わないことさー！

「ぷっ、ぷっ、あははは、ゴ、ゴメンナサイ、ぷっ」

と、俺が人生の墓場とやらに突っ込む覚悟をしていたというのに、何故に笑い声が？

「いや、気にしないでいいが……笑わせるような事を言ったかな？」

「だ、だって、なんなんですか？ くれぱーに抱きしめるって？ あはははは」

なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるが世の情け。とは思うモノの……なんなんだ？ テンパってたから良く考えず口にしたフレーズなんだけど。

……あれか？ 子供がマセたこと言ってるなあとかそんな感じだろうか？

まあ今の俺は十一歳。ハルケギニアの一年が384日と地球の一年より長いことを鑑みても、精々が小学生程度の年齢だろう。

……そりゃ笑うか。一応王家からの指示を受けるだけの立場

にあることは示していたし、子供扱いされることは無いと思ってたけど、まあ仕方がないか。

「ふふっ。失礼しました。お恥ずかしい所をお見せしてしまって」

「いや、「こちらこそすまなかった。突然すぎたね」

「ふふっ」

まあ突然すぎたことは事実だ。

はあ。にしても気が抜けちゃったな。

マチルダさんを引き抜ければかなりの問題が解決すると気付いたり、と思えばいつの間にかプロポーズしていたり。自分でやったことながら急展開すぎるだろう。

と、そんな思わずため息をついてしまった俺を見て、

「オルレアン公。少しの時間だけ、立場を考えずに話してもいいでしょうか？」

ふむ？ つまりはガリアの公爵とサウスゴータの娘、ではなく、クーとマチルダとして話したいことがあると？ くすぐったい感じもするが、拒否することでもないし、と頷けば、

「では、」

と、マチルダさんの黄色がかった翠瞳が俺を真正面から捉えた。

「オルレアン公、……クーさんの言葉、とても嬉しく思います。でも、私はサウスゴータの、アルビオンの人間です。この空飛ぶ大陸に愛着を持ってます」

フーケではなくマチルダの言葉だと思えば、その言葉に不自然な点など無いだろう。彼女がアルビオンを憎むきっかけはまだ発生していないし、貴族を嫌うようになるのもまだまだ先の話なのだから。

「私はサウスゴータが好きです。領主によって統治される地ではなく、人々が集まって発展させるこの街が。議会の皆が力を合わせるこの街が」

「始祖の降り立った地だからではなく、サウスゴータ家が統治する地だからでもなく、住む者が手と手を取り合うこの街だから、ということか」

「はい。叶うことならば、私も生まれ育ったサウスゴータのために生きて行きたいと思ってます」

そういえば原作のフーケはトリステインで活動していた。思う所の多いアルビオンではなく。

サウスゴータ家の者として面が割れているから、そう思っていたが、それだけじゃないのかもね。

サウスゴータ家で生まれ育ち、サウスゴータの街を良く知る彼女だからこそ、アルビオンを嫌いになり切れなかったのか。モード大公の投獄を切っ掛けにサウスゴータ家の家名を取り潰され、その後も苦勞したるうちに、それでも嫌いになり切れなかったということは、なるほど確かに今のマチルダさんの言葉は本物なのだろう。

「それ」……」

続く言葉はなんとなく予想できる。『コミユカ』が俺に無かったとしても、きつと分かったはずだ。

マチルダさんはこう言いかけたのだろう。それに『ここには妹のようになっている子がいますから』と。





「私は、いや、俺はね、望まぬ相手を地位をかさにきて無理矢理にってのは嫌だったんだ。ミス・マチルダが結婚などしたくないと言っのなら、俺は潔く退くつもりだったんだ。でもね、もう無理だ」

そう、無理だ。

取り繕うつもりはないさ。誤魔化そうとも思わない。

「もう、俺の心は止まらない。俺は君に惹かれてる」

君の意思の強さに惹かれてる。

君の聡明さに惹かれてる。

君の民を思う優しさに惹かれている。

君の瞳の美しさに、どうしようもなく惹かれてしまっている。  
だから、

「俺は、君を手に入れる」

マチルダの見開かれた瞳を正面から見つめ、視線に意思を込める。

今回ばかりは『コミュカ』には頼らない。

俺は、俺の力で君を手に入れて見せる。

君の心を手に入れて見せる。

だから覚悟しておいてくれ。君を必ず、俺のものにしてみせる。

アルビオンの方は最早ついでだ。

ま、救ってやるんだから勘弁してくれ

### 37・あれもラブ、これもラブ

ぐっもーにん。クーです。そして朝です。

え？ 昨日の続きはって？

聞かんといてよ／＼ 柄にもなくマジモード入っちゃって恥ずかしいんだから。黒歴史になりそうです。

まあ前言撤回するつもりもないけどね。マチルダさんは俺の嫁（キリッ なんつってww キャー／＼

……はい。そろそろ自重します。

昨夜の事ですが、あの後すぐに邪魔が入りました。

やはり風の精霊ちゃんによる人払いモドキでは限界があつたようで、姿の見当たらない主賓（オレ）を探しにホストである未来の義父上サウスゴータさんが来てしまいました。

そのまま口説き続けていたら「アイヤー、ガリアの公爵に見染められるなんて目出度いアルー」なんて感じにマチルダさんの意思を無視して縁談に、なんてことになりかねなかったので自重したんです。

手段をあえて選ばなきゃといけないケースってのもあると思うんですよ。

え？ 護衛の騎士連中は何してたのだったの？

アイツラならパーティーに招かれてた地元の貴族令嬢相手に鼻の下を伸ばしてましたよ。

そりゃ俺ならそこらのメイジが相手でも後れを取ったりしないけどさ、もう少し真面目にやれってんだ。

オルレアンに帰ったら一度訓練イジメし直すべきかもね。

ま、そんなわけで一夜明けてちょっと冷静になってしまったわけですが。

はてさて、マチルダさんの方は俺の事をどう思ってるのかな。

今回ばかりは『コミュニケーション』チートに頼らないと決めたので、どう思

われているのか分からなくて少し不安ですが。

朝食をサウスゴータ家のみなさんと頂いた時には、マチルダさんは特に気にした風でもなかったんで、悪印象を与えたわけではないと思うんですがね。

逆にいえば気にされていない、というのは悲しくもありますが、まあネガティブ思考はやめましょ。

これから大事な『お仕事』ですし。

はい。現在ロンディニウムはハヴィランド宮殿にいます。

この『アルビオン旅行』はトリステインに大使として向かった時とは違い、あくまで『旅行』なので実はロンディニウムには来なくても良かったんですが。

まあ、アルビオン王家の顔も立てておいた方がいいし………というだけの理由でもないんですけど。

ジョゼフ兄と組んだ予定としては、『表向き』として俺がラグドリアン湖で交流のあったアルビオン王家と顔を合わせるため。『表向きの裏事情』としてはアルビオン王家と接触した俺が大した交渉も無しにロンディニウムを離れることで、ガリアとアルビオンの間に密約などなされなかったと他国にアピールするため。『裏』として、俺に付いているかもしれない他国の密偵に『ガリアからの本当の使者』の存在をわざと気付かせることで、その後の俺を囮だと『気付かせる』ため。ま、ちょっとばかし複雑な策謀からハヴィランド宮殿に来たわけですが。

で、ここハヴィランド宮殿にて、未だに『表向きの裏』に気付いていない密偵がいた場合そいつらを撒くというわけです。

保険のような策ですけどね。有能な上司が密偵にいた場合、既に俺以外のガリアからの使者を疑って動いていることでしょうし。

なのでジェームズ陛下に一応のお目通りをした後は、宮殿を後にしてロンディニウムを散策しつつ適度に目立つというお仕事を予定であって、ここに長居するつもりは無かったです。

何故か現在、ウェールズ殿下とお茶してます。

……何故に？

「久しぶり、と言つべきかな？ シャルル陛下の即位式典以来だからもう一年ほどになるか」

「……そうなりますね」

「あの園遊会は君が主導を取ったものだとか。私も楽しませてもらったよ」

そう言いつつウェールズはカップを傾ける。

チツ。絵になりやがる。イケメンめ。

「それと敬語はよしてくれ。君も始祖の血を引く人間なのだし、口調は楽にして貰った方が私としても気が楽だ」

「ふむ。ならお言葉に甘えるが」

とは言え普段の口調にはせず、あくまで対等な貴族を相手にする時の口調にする。

なんとというか、気になるんだよね。ウェールズの目が。

俺を見定めるような目。俺という人間を見極めようとしているのかね。人の上に立つ素質は十分ってことか？ それを俺に感じ取らせてしまっている時点で減点ではあるんだけど。

あれかね？ ジェームズ陛下に何か言われでもしたのかね。継承式典の時のアレで小言でも言われたか？

……つか、何が狙いだ？ 『コミュカ』で心情を読み取ろうとしているんだが、良く分らない。というか、ウェールズ自身の心情が揺れているというかなんというか。

何かを探ろうとしているのは分かるんだがね。探るべきか止める

べきかを迷っていることしか読み取れない。むーん。

「ふむ。紅茶は嫌いだったかな？ なんならワインを用意させるが」？

「いや、気をまわして貰わなくても結構だ。なに、私の護衛として付いて来た者たちが粗相をしてないか気になっていただけでね。目の届く所に置いておきたいというかな」

言外に『さつさと本題を済ませて解放してくれ』と匂わせるが、

「そうかい？ 良いワインがあるんだが」

とウエルズは気付いた様子もない。

いや、これは言葉の裏にまで気を向ける余裕がないってことか？

……おいおい、まさか。

既にアルビオン王家がエルフの情報を掴んでいるとかは止してくれよ？

今回の俺の『旅行』が継承式典で面識を持ったモード大公からの要請だとも疑われたってのか？

確かにエルフ親子の情報をアルビオン王家側が掴んでいたとすれば、俺は確実に疑われるだろう。

なんとたつて俺の滞在先には、宮殿から適度に離れ、かつそれなりに注目を浴びなければという『表の理由』からモード大公家も選ばれているんだから。

俺は原作知識と照らし合わせ、モード大公がエルフを愛人に行っているとジエームズ一世が知ったら、即動くだろうと考えていた。それだけに未だアルビオンに動きのない以上、エルフの情報は漏れていないと踏んでいたが。

その前提が崩れたとなると状況は大きく変わる。最早アルビオンの未来やティファニアよりもガリアを考えるべきだろう。俺を通し

てガリアにエルフ隠匿の罪がなすりつけられないよう、即逃げも考慮に入れなければ。

……マチルダさんは……攫っちまうか？ 盗賊に身をやつすよりはましだろうし。何より俺が諦めきれん。

なんて、背筋に冷や汗を垂らしながら俺は考えていたわけだが、俺を混乱にたたき落としたウエルズとは言えば、そんな俺の様子に気づいた風でもなく、

「実は園遊会の折に知り合ったトリステインの方に頂いたワインが美味しくてね。君がワインの方がいいと言うならば、とも思ったんだが」

なんてワイン談義を続けている。

ぶっちゃけそんな話を聞いている場合じゃないっばいんだが、聞き流すわけにもいかない。『コミュカ』を使って重要なフレーズが無いがチェックしておかなければ。

「確かタルブという村だったかな。そこで採れるブドウが良いものでね。今じゃ私もタルブのワインの虜だよ」

「タルブ、か。聞いた覚えがあるな。ふむ。ガリアに戻ったら私も商人にあたってみるとしようか」

と、その言葉でウエルズの雰囲気が変わった。

……変な事言っただけ？

「そう言えば、君はトリステインと良好な関係を築いているとか」

……あるえー？

え？ そこ？ そこなの？ 俺、盛大に空回りしてた？

「単刀直入に聞こうか。オルレアン公、君はアンリエッタをどう思っている？」

どう思ってるも何も……

「会ったこともないが？」

あちゃー。完璧空回りだったね。ハズカシー！

つかウエールズよ。それでいいんか？

いや、まあ年齢考えれば普通なの、か？

そもそも俺の中の王族ってジョゼフ兄とシャルル兄だからな。あの規格外共を相手にするのと同じ気分でしたら、そりゃ空回るか。

「そ、そうなのかい？ いや、彼女は私の従妹でね。少し気になったんだ。他意は無いのだが」

それじゃ他意があるって白状してる様なもんでしょうが。

嘘のつき方も勉強しとこうぜ、プリンス。

ま、適度に応援しておきますか。将来アンリエッタを引き取ってくれる第一候補だしね。

嗚呼、何が悲しゅうて野郎相手に恋バナなんぞせにやなんのか。ホント、勘弁してくれ。

### 38・クーのみぞ知るセカイ

「ふむ。トリステインのアンリエッタ姫、ね」

どもども、クーでさあ。ウェールズ君の恋愛相談中ですが。

え？ 飛ばせて？ キングクリムゾン発動しろって？

だが断る！ 野郎相手の恋バナなんて拷問、俺だけ受けるってか！

むしろ道連れじゃ！ キンクリどころかバイツァダストで巻き戻

すぞこの野郎!! 俺はこのままエンドレスエイトでもいいんだが？

おっと失礼。空回りした恥ずかしさから少しカッとなってしまうたね。

ま、こっから先は興味ないって方は時を駆けて未来で待つてくれ。

「いや、本当に他意は無いんだ。ただガリアのオルレアン公がトリステインと交流があると小耳にはさんただけで」

随分慌てて否定してるけどさ、ドツボにはまって行ってるよね。

というか自国の情報収集力を明かしているのか？ いいのか。これくらいなら。

とはいえ言動からお人好しっぽい所が見え隠れしているし。

適当に励ましておくか位に考えていたけど……いっそ貸しを作っておくべきかもね。ウケケ

……いや、やっぱり面倒だわ。

「先ほども言ったが私にアンリエッタ姫との面識は無いよ。継承式典の折にはトリステインの王族の方々にも出席を求めたが、私はアルビオンからの出席者と応対していたしね」



「ああ。そういえばそうだったね。父上から君の話を聞くことも多くなかったよ」

ふむ。本当に小言でも言われてるのか？

まあ悪印象を抱かれているわけでもなさそうだし、今はいいか。

「確かに私はトリステインと付き合いがあるが、主な付き合いがあるのはオルレアン領の隣領の領主であるモンモランシ家と、あとはヴァリエール公爵家くらいか。マザリーニ枢機卿とも面識があるが」

「へえ。トリステインの有力者ばかりじゃないか」

「そうなるか。まあトリステインの内情を僅かばかり知っている私としては、私とアンリエッタ姫の婚姻の可能性は低いだろうと思っている。安心してくれ」

「二、婚姻って」

いや、そこに食い付かれても。

というか意外と幼さが残っているな。王族の婚姻なんてウチのよガリアうな例外以外は政略がらみがほとんどだろうに。うるたえられてもねえ。確かウエールズは現在十三歳、俺の二つ上だったはずなんだが。

まあハルケギニアだしな。魔法の腕がなにより重要とされる世界だ。政治を学ぶのはこれからってことなんだろう。

「私も一応王家に連なる者だしね。それが国益となると言うのなら見知らぬ相手とでも結婚するさ。ま、ウチの場合は他所との繋がりを強く求めているというわけでもないんだが」

「ガリアは……なるほど、自国の力だけで……。いや、しかし君はトリ

ステインの内情を鑑みて、と言わなかったかい？ トリスティン側ならガリアとの繋がりには是が非でも欲しがるものだと思うんだが」

ふむ。頭が柔らかいね。ウェールズ君には八十ポイントあげましよう。

ま、最初に目が行くのがアンリエッタのことなので九千二百ポイントマイナスされてるんだけど。

「いや、むしろトリステインは私を歓迎できないだろう。ガリアの王弟とトリステインの姫。もしこの婚姻がなされれば、事実上トリステインはガリアの属国になってしまうからね」

「それは……いや、そうなのか？ 君がトリステインの王となるというのなら」

「それはないよ。それはつまり私が婿入りするという話だろう？ 王弟を人質の如く他国に渡すというのはガリア貴族の感情を逆なでするものだ。もしウェールズ殿下に弟がいて、彼がトリステイン、だと冷静に判断できそうにないから、そうだな、クルデンホルフ大公国に婿入りなんて話が持ち上がったらどう思う？」

「それは……なるほど人質か。……いやちょっと待ってくれ。本当にアンのことは」

もう面倒だから認めちまえよ。

え？ 俺がツッコミを止めればいいって？

アホか。マセガキをからかいながらもなけりゃこんな話やってらんねえっての。

あー酔っ払いてえ。ワインを断るんじゃないかなかったかね。でもワインじゃ酔えないしなあ。

はあ。ホント勘弁願いたい。

「そうだったな。すまない。話を戻そう」

「あ、ああ。そうだね」

「つまりは、だ。トリステイン側としては私を警戒しているくらいだと思うよ。少なくともヴァリエール公爵やモンモランシ伯爵のような愛国心のある貴族はね」

これがレコンキスタに尻尾を振るような腐敗貴族なら、国よりも自分の利益を守るためガリアの属国になることも喜びそうではあるんだけど。ま、そこまで説明することもないだろう。

「とにかく私とアンリエッタ姫の仲の事を警戒する必要は無いってことさ。アルビオンの王族として殿下が他国同士の関係の強化を警戒するのは当然だとは思っがね」

最後に持ち上げてあげておいてっと。これでウェールズの俺への警戒も無くなったことだろう。

さて、そろそろお暇させて貰いたいん

「と、ということとはだ。アンリエッタが他国の王族と結婚する可能性もないという事かい？ トリステインの有力貴族が反対すると言っのなら」

……誰か代わってくれよ orz

「ストレートでは難しいだろうな。搦め手を使えばあるいは」

「搦め手？ それはどんな？」

しらねえよ。俺だってマチルダさんをどつやって落とすか悩んでる所だったのに。

……もついいか。適当で。

「そうだな。……他国への婿入り、あるいは嫁入りというのが、一種の人質のような役割を果たすと言ったが」

「ああ」

「逆にとらえれば、他国に自国の位の高い人間を差し出すと言つのは、信頼を示すことでもある」

「人質が信頼を？」

「ああ。例えば、だ。アルビオンの爵位の高い貴族がトリステインの貴族に婿入りする。それはつまり、トリステインならばアルビオンの人間を無下には扱わないだろうという信頼からの行為とも取れるわけだ」

「ふむふむ」

「まあしかし、一方からの貴族の供出は、いくら信頼が成り立っていたとしても人質でしかない。だが、これを相互に行った場合、一種の同盟のような関係を作れるだろう」

「同盟？」

「なにせ両国が自国の人間を預け合うんだ。トリステインが、そうだな、仮にゲルマニアに攻め込まれたとしよう。アルビオンはトリステインに預けられた『自国の貴族』を救うためという大義名分で、実質トリステインを救うために兵を出すこともできるようになる。アル

ピオンにいる人間には、アルビオン王家はたとえ他国に行った貴族だとしてもないがしろにはしない、という信頼を与えることが出来るだろう。逆もまたしかり、だ。国家間の関係は密になり、他国への牽制にもなる」

「それは……なんというか……」

良いことづくめに見えるだろう？　良いことだけをピックアップして話しているからな。あえて『穴』まで説明はせんよ。ウケケそれにしても目を輝かせちゃってまあ。陰謀は初めてかい、ボウヤ？

「まあ搦め手、と言われて今思い付いただけの策ではあるがな。これを使えばアンリエッタ姫をアルビオンに迎えることも可能だろう。アルビオンの公爵クラスの間人間をトリステイン貴族の『お相手』として差し出す必要もあるだろうが」

いつそトリステインの迎える側の貴族としてカトレアさんでも推薦してやるっか？

「……これが今思い付いただけの策。確かに父上が君を褒めるわけだ」

……つか感心しすぎじゃね？　あえて『穴』については説明しなかったんだが、ある程度釘をさしとかないと暴走しかねないな、これは。

「一応言っておくが、安易に実行しようとはするなよ？　始祖の血を引く二王家の内、二王家が手を組もうとすれば横やりが入るのは必至だ」

「ゲルマニアかい？」

「……ま、そんな所だ」

実際ウエールズに暴走されたらガリアも動くだろうけどね。

アルビオンとトリステインが手を組んだ所でガリアの敵ではないし、いずれ喰うにしても、まるまると太らせてからの方が身入りは大きい。が、事はそう単純でもないんでね。

「この策を実行するには障害も多い。しかしそれを乗り越えた先に待ってるモノが大きいことも確かだ。アルビオンにとっても、そしてガリアにとってもね。まあまだ殿下もアンリエッタ姫も若いのだし、これから計画を煮詰めていけばいいだろう。私でよければ協力させて貰うつもりであるしな」

「お、おお。万の味方を得たような気分だよ。父上の言っていたことは本当だった。君と友誼を結ぶことは、私に大きな力を与えてくれるだろうと。是非とも友と呼ばせてくれないか？」

友、ねえ。

アリっちゃアリか。

これでアルビオンとトリステインとの同盟が成ったとしてもガリアも一枚噛める。

なにより次期アルビオン国王との繋がりが出来たことが大きいしね。

ま、仲好くさせて貰いましょうか。ウケケケケ

「あ！ 何度も言ったがアンリエッタのことは違うからな！」

それはきついでいいの。

さてさて、ウエールズ君の恋愛相談から一日空けて、ようやくモード大公家へと行けることになりました。クーです。

いやー、一昨日は大変でしたね。ウエールズ君ったらはしゃいじゃってまあ。

友達いなかっただんですかねw まあ俺も人の事はあまり言えんけどさ。

ウエールズは一人っ子ということで、ガリアのように王位継承者争いなんてものもないんですが、一方腹を割って話せる相手というのもないんでしょう。

こっちがロンディニウムで散策している所を目撃されなければならぬという仕事を持ってなかったら、おそらく引きとめられていたことでしょう。実際お暇を申し出にくいつたらなかったですし。執事のバリーさんなんか微笑ましそつに見つめてましたよ。

なんかアルビオンでの俺の評価が上がりすぎてる様な気がします。別に損をするわけでもないですし、いいでしょう。厄介事が上がった時の相談相手にされそうな気もしますが、俺がある程度アルビオンを操れるというのなら、寧ろ願ったり叶ったりといったところですよ。すしね。

俺やガリアの平穩のためとはいえ、アルビオンのためにもなるでしょうから勘弁して貰いましょう。

というわけで戻って参りました。シティ・オブ・サウスゴータ。

モード大公家もこちらにあります。ちなみに密偵からの情報ではエルフが大公邸にいるのは確定っぽいです。

というのも食糧だとか衣類だとか、大公邸に運び込まれるモノの量がおかしいとか。

特に子供服の受注が商人に対してされていたなんて聞いた時は、も



うちよい気を配れよと突っ込みたくなりましたが。

地球産のストーリーカー術の持ち主ならゴミを漁ることで家人の行動まで予測できるそうですが、ハルケギニアにそこまでの猛者はいないと信じましょう。

それと何故サウスゴータに来た当初はモード大公家ではなくサウスゴータ家にお世話になったかという点、国王に挨拶する前に大公家に直接赴くとアルビオン貴族にあらぬ誤解をさせるから、だそうで。

ま、俺としてもモード大公にアルビオン貴族の目が行くのは避けたかったし、アルビオン王家側からのこの要請はありがたかったんですがね。

おかげでマチルダさんとも会えましたし。

……嗚呼、会いたいねえ。これが一目惚れというものか。

おっと失礼。プライベートを気にして仕事が疎かになったんじゃないかな。ただのアホと変わりないしね。

ええ。ようやく本命の『お仕事』です。

マチルダさんを通してサウスゴータ家に俺という後ろ盾が付けば、おそらく内乱に繋がるモード大公派の処刑は回避できると思うんですが、期待と予測は違いますしね。当初の予定通りきっちり釘をさしておかなければと思ってます。

とはいえアルビオンに来る前はエルフ親子を俺の監視下に置かなければ安心できないと思っていたくらいですし、ハードルが下がっていることは確かなんです。

ま、油断せずに行きましょう。

と、そんなこんなしているうちに、到着しました。モード大公邸。

「お久しぶりです、モード大公」

「ああ。シャルル陛下の継承式典以来だが、健勝なようですね。によりだね」

ちなみに今はモード大公と差し向かいでワインを頂いています。

サウスゴータ家で催された歓待パーティーのようなものはされてません。

モード大公家には数日滞在する予定ですので、おそらく今日くらいはゆっくりと、という配慮がなされたんでしよう。

正直ありがたいよね。毎度毎度貴族の相手をしてるのも疲れるし。

「此度の君の『仕事』に関しては私も聞き及んでいる。君もその若さで大変だろうが、せめて我が屋敷にいる時くらいは羽を伸ばしてくれたまえ」

「お言葉に甘えさせて頂きます。モード大公」

ニコニコと人の良さを表わすような笑みを浮かべるモード大公にほほ笑んで応対する。

正直原作でほとんど描写のなかったモード大公の人となりは予想が付かなかったんだが。

うん。『いい人』って感じだね。

まあ打算で動くような人間ならそもそもエルフを匿ったりはしないだろうし、その上エルフを愛人に、さらには王命を無視してまで守ろうなんて思わないんだろうが。

こつという主君だからこそ、サウスゴータ家もモード大公が投獄された時にエルフを守ろうとしたんだろう。

たとえ主の愛人だったとしても、エルフを守るなんて異端審問をされかねないほど危ない橋を渡るなんてのは、そうそつの忠誠心じゃ無理な話だろうし。

……人望、ありそうだねえ。

……こいつぁマズイよねえ。

モード大公が理由も無しに投獄されれば、多数の貴族が反感を持つのは必至だろう。

そうなれば予測していた『最悪』。すなわちアルビオンが王党派と大公派に分かれて内戦つてのも、あながち『最悪』ではなく、『当然』の未来になってしまつかもね。

は？ ガリアは関係ないだろうって？ アホ言いなさんな。

国が二つに分かれて戦争おっばじめるってんだよ？ とんでもない数の難民が豊かな国に押し寄せてくるっての。

さらには敗者側の貴族も問題だ。

連中は魔法つていう戦争で使える兵器を手にしてるんだぜ？

その上そいつらは平民は貴族に搾取されて当たり前。無礼討ちも許されて当然なんて考え方だ。

そんな連中が爵位を取り上げられ、日々の糧を手に入れる手段を失えばどうなるか。

ま、平民から奪ってしまえと考えるだろうね。

内戦に負けて国を追われたならば、当然の様に他国の平民からとなるだろう。

さて、泥棒だの強盗だのって連中は、どんな人間を標的にすると思っ？

正解は、より多くの蓄えを持つてる奴だ。

豊かな国に入りこんで、蓄えている平民から日々の糧を強奪する。そんな野盗の群れが押し寄せて来てみる。他国の内戦の影響なんて言葉が滑稽に思えるほどの戦後災害になるだろう。

ガリアといえども領主の中には平民のために力を割けるかなんて言う奴もいる。平民ならいくら被害にあってもいいなんて考えている奴だっているかもしれない。となればゲリラ的に発生する『戦争帰りの腕利きメイジ』らの強盗をガリアから一掃するのも容易ではないだろう。

先の先まで読むのなら、アルビオンの内戦の回避は、ガリアにとっても非常に重要度の高い案件なんだよ。

何事もなく平穏に、が遠いよねえ。

ま、色々と悩んだけど、やっぱりアルビオンに来ておいて良かった

わ。

さて、となるとこの『いい人』にエルフを匿うなんて裏事のイロハを叩きこまなきやならん訳だが。

はてさて、一体どこで切りだそうかね。

向こうから切っ掛けがやって来るのを期待するには、時間が足りないだろうしねえ。

## 40・マズイ

メシがマズイんだが。

おつといきなりすぎましたね。ちつす。クーです。

ただいまシティオブサウスゴータのとあるカツフエで食事中です。

は？ マチルダさんとデート？

んなわけねえだろ！

……んなわけ……ねえだろおがよお。

おつと失礼。どうにも異国の地でマズイ飯を食べているとなると、ナーバスになっていけませんね。

いやあ、そうなんですわ。マズイですわ。飯。

ハルケギニアを地球に当てはめると、アルビオンは英国の位置にありますしね。ある程度は予期していたことではあるんですが。

いやあ、ホント。ありえんぜ？

まあ考えてみればお空の上をプカプカ浮いてる大陸ですし、海産資源なんて当然取れません。

さらにはアルビオンの高度。

これ、アルビオン大陸の下半分を雲が覆っていることから分かるかもですが、雲よりも高い所を飛んでるんですよ、この島。

そりゃ雨も降りにくいことでしょう。

水源はあるはずですが、それだけで農作まで賄えるはずもなく、結果、

「芋エ……」

芋イモおいもあな芋づくし！

このままじゃ芋が夢に出てきかねない。マジで震えてきやがった……。

サウスゴータ家やモード大公家のような他所からの輸入食材をふんだんに使えるならともかく、平民の食卓なんかはさぞ深い悲しみに包まれていることでしょう。

アルビオンの立地上、輸入は全てフネによる空輸ですからね。追撃の風石費用でさらに食料価格は加速ッ！ ガリアに生まれて良かったと純粹に思えるのもどこもおかしくは無いはず。

「クー殿。午後の予定はいかがいたしましょうか？」

「ん。そうだな。東街に足を向けてみるか」

サウスゴータはシティオブサウスゴータを中心に、五芒星型に大通りが走ってまして、ちょうどそのうちの一つに面したカフェにいましたからね。

トリステインの王都であるトリスタニアなんかよりよっぽど大きな街ですし、ぶらぶらするのもいいでしょう。

と、そろそろ説明をしておきますか。

モード大公邸に滞在していた俺ですが、すぐにエルフと出くわせるわけありません。というかそんな簡単に事が運んだら、むしろ怖いんです。

だからといって直接モード大公にエルフ云々の話を切り出すのも結構マズインですよ。

マチルダさんのこともあります。今後モード大公との仲が険悪になるのは避けたい。むしろ俺がモード大公のバックに付いているとアルビオン王家に認識してもらったために、懇意にしていきたいくらいです。

そうなるといきなりウィークポイントに言及するのはマズイでしょう。

こちらの意図はどうかあれ、『貴族』という連中の中で生きてきたモード大公ならば、俺が弱みに付け込もうとしているんじゃないか？ と

思っても当然。

俺が『厚意』からエルフを妾にしているモード大公の手助けをする。それが理想的なシチュエーションであり、モード大公にはそう認識してもらいたいんです。

こちらの意図はどうあれ、ね。

そんなわけでこちらからアクションを取るのには出来れば避けたい。つまりは俺が動くためにはリアクションを取れるだけの状況を起こせばいい。

と、いつわけで現在動いて貰ってます。

精霊サマに。

「クーよ。見つけたぞ。地下だ」

おっと、噂をすればって感じですか。屋敷を水滴ほどの小ささで動き回っているはずの精霊サマからの通信ですね。

カフェで頂いている紅茶から出来た精霊サマが教えてくれました。

これも意識を共有したまま分裂できる水の精霊サマだからこそその技でしょう。

そのうち精霊本体とネットワークでつながった水の精霊、略してミセレが00001号から20000号まで作られたりなんかしてね。ミセレネットワーク。電気ではなく水を使う能力者集団ですが、領地の治安維持なんかには非常に有用そうですけど。

ま、それは置いておいて、周囲の護衛騎士に視線を飛ばします。さりげなく俺とティーカップを視線から守らせます。

同時にサイレント。これで俺と精霊サマの会話は騎士連中にも伝わりません。

ロンディニウムを離れる際、護衛の騎士にはジョゼフ宰相閣下からの別命があったと説明しています。祖国からの密命に関する話とくれば、彼らは自ら耳をふさいでくれるので安心です。

「へえ。昨日見て回った時には地下への道なんて見当たらなかったけ

どね」

「壁の一部が動くようになっていたぞ？」

「なるほど。マジックアイテムかなにかで開閉する隠し通路ってところか。それなりに隠そうとはしているってことね」

少し安心。ま、それくらいはしておいて貰わないと困るんだけど。

「風の精霊共ならば気付いただろうがな」

「あー。風の精霊ちゃんたちはあまり動かしたくないんだよ。俺が付き合いのある精霊は水の精霊サマだけってことになってるからね。俺の周囲の風の動きが不自然だと、ウチの騎士なら気付きかねない」

もう秘密にしておく意味も薄いんだけど、一応、ね。

身内に明かすにしても、一応ジョゼフ兄やシャルル兄に相談してからの方がいいだろうし。

「で、我はどつする？」

「ふむ」

「ここで重要になって来るのはどこをボーターだと考えるか、だ。

俺がリアクションを取るためには、ある程度モード大公には混乱して貰った方がやりやすい。

モード大公に混乱して貰い、小さなポカをして貰う。俺にエルフの存在がバレ、精神的に追い詰められたモード大公が覚悟を決めるかという段に突入した所で、颯爽と俺が解決策を示す。精神的などん底から救い出したということであの信頼感が増すだろうし、今後アルビオンに食い込みやすくなる。うむ。完璧だ。



しかし混乱が大きすぎてもダメだ。俺にバレるくらいのポカでいいのに、アルビオン王家側まで伝わる大ポカをやらかされてしまえば、一気に窮地に陥ってしまうだろう。

さて、どこをボーターとし、水の精霊サマにどの程度の接触をさせれば適度な混乱を引き起こせるか。

とりあえずは……

「む。マズイ」

「どうかした？ 精霊サマ？」

「うむ。我の分身だが、」

なんだか嫌な予感がするんだが。

「どつちやら捕えられたようだな。さすがはエルフ、といったところか」

……

……

……マジドゥ……

## 41・イレギュラー

水の精霊サマより齎された一報。すなわち俺がモード大公邸の調査を頼んでいた水の精霊サマの分身が捕えられたという情報は、俺の心中に焦りを生んでいた。

まったくの予想外の場所から現れたイレギュラー。

覚悟のない状態で受ける、文字通り真正銘の不意打ちはまさに痛恨の効果抜群といった感じで。

……スー、ハアー。うん、落ち着こう。

落ち着いてももう一度状況を整理して。

うん。マズイ。

なるほど、こいつは非常にマズイ。

向こうにエルフがいたからといって油断したわけではなかった。なかつたんだが、

「捕えられたということだけど、現状はどうなっている？」

「瓶のようなものに詰められているな。内部からの破壊は不可能だろう」

隠密性を高めるために水滴程度の大きさで屋敷を探っていて貰ったことが仇になったか。

水の精霊サマが扱う技は、精霊サマを形作る水の量によって左右される。

湖ほどの大質量を用いれば攻城・殲滅戦すら可能な精霊サマも、さすがに水滴程度の大きさでは無茶は出来ない。

「とはいえ今さら脱出して貰っても状況は好転しない、か」

肝心なのは水の精霊らしきモノがモード大公邸をうろついていたという情報が大公側に渡ってしまったことだ。

今さら証拠を消したとて、大公側の疑念は消えないだろう。

「意識だけを離れさせることもできるが？」

「いや、とりあえず精霊サマの分身体にはそのまま意識を乗せておいてくれ。エルフ側から対話を求められたら応じるように。ただ、俺の事までは今は言わないでくれ」

「うむ。了解した」

そう言ってちやぷんと精霊サマは紅茶に沈む。

サイレントをかけさせていた騎士に合図を送り、警戒レベルを下げさせてため息を一つ。

はあ、まいった。

水の精霊サマが俺の身内だということはそう簡単には掴めないだろうが……。

しかし疑われることは確実だ。なにせ水の精霊といえばラグドリアン湖に住まうモノだ。オルレアン領の領主である俺が無関係であるとも思わないだろう。

となれば主導権は俺から無くなる。

当然こちらの予期とは違う先手を打たれる可能性もあるわけで。

ホント、マズイことになったねえ。

といつてもグズグズしているわけにもいかないだろう。

おそらくモード大公は、俺がエルフの情報を聞きつけ探りに来たのではないかと疑うはず。というかここまできて疑わない様な『いい人』ならば、逆に策や搦め手なんて通用しないことだろうし。

さて、ここで疑念を持ったモード大公の取り得る動きは……。

大別して二つ、といったところか。

一つ目は、俺をどうにかする、という動きだ。

水の精霊を動かせる可能性のある唯一の存在、それが俺である以上、エルフを嗅ぎまわっていたとされる容疑者もまた俺しかない。ならばエルフを匿っているという情報を流させないためには、俺を抑えてしまえばいい。

とはいえ『口封じ』はありえない。そこまで短絡的に動かれるのなら、逆にやりやすくはあるが、仮にも相手は貴族社会で揉まれてきた人間であり、アルビオンの大公だ。むしろ俺がアルビオン内で怪我でも負って、ガリアの調査が自分にまで及ぶことを恐れるだろう。

ならば『交渉』か？　しかしモード大公側も水の精霊を使役していたのが俺だという確信を持っているわけではない。たとえそうだと仮定したとしても、俺がエルフの事まで掴んでいるかどうかまでは分からないはず。俺に『エルフのことは黙っていてくれ』と言った拳句、「エルフ？　なにそれ？」と藪をつついて蛇を出す結果になりかねない様な行動は控えるはず。

さて、こうなると俺への『干渉』によって状況を打開することは難しいだろう。

そうなるならば、モード大公は二つ目の選択肢を選ぶ可能性が高い。

二つ目。それはエルフをどうにかする、ということだ。

つまり、一時的にエルフの居場所を変える。

サウスゴータ家のような信頼できる部下に、一時エルフを預け、モード大公邸からエルフを痕跡を消す。その後水に水の精霊が侵入した地下を、宝物庫とでも言っておいて俺に見せればいい。マジックアイテムは泥棒などの侵入者対策であり、俺に宝物庫を見せる理由はコレクションの自慢、もしくはガリアとの親交を深めるために自身の宝の内の俺の気に入った物を贈呈しようとしているとも言え、それでいいだろう。

おそらく穴のない計画。俺が何を嗅ぎまわっているにせよ、モード

大公邸には目的のモノがないのだと示せるし、不自然な点は見受けられない。

原作で『エルフの引き渡しの拒否』という『素直』な行動をとったモード大公ならば、こちらを選択する可能性が高いが……。

今まで隠すだけでよかったエルフを、街中を移動させるということの危険性をきちんと理解できているだろうか。

変装させ馬車にて移動。それだけで十分、そう思われているとしたら、かなり危険だ。

モード大公にとっても、エルフにとっても、そして手引きをする家臣にとっても初めて渡る危ない橋。

十分な対策なしに警戒心ばかりを強めての行動。ミスが発生しないと思う方がおかしいだろうね。

むーん。最早一刻を争うと考えるべきか。  
まったく。イレギュラーは勘弁してくれよ。

「相席させていただいてもよろしいかしら？」

「はい。」

ふいにかげられた声でハッと顔を上げた。どうやら随分考え込んでいたらしい。

にしても相席？ ハルケギニアの貴族にそんな習慣なんかあったか？ 平民ならマントをつけた貴族に声をかけることすら遠慮するだろうし。

つか護衛は？ ああ、そうか。敵意を見せているわけでも杖を抜いているわけでもない相手に無茶な真似は出来んものね。一応他国だし。

と、声の主を見上げれば、

「初めまして。オルレアン公爵殿」

……おいおい。嫌な予感がびんびん来る容姿をしてらっしやいますね？

頼む。予感よ外れてくれ！

………まあ俺の神頼みなんて届くわけもなく、

「私はカリーヌ・デジレ・ド・マイヤール。ラ・ヴァリエールの妻にして、公爵殿に治療していただいたカトレアの母にございます」

とんでもないイレギュラーが来やがった。

いや、もうそろそろお腹いっぱいなので、勘弁してはもらえませんかね？

## 42・烈風

カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール。その名が出た瞬間、護衛にっていた騎士たちの顔色が変わった。

それは警戒の色。当然だろう。相手はあの『烈風』だ。

トリステインでは『烈風』カリンはほとんど伝説的な、逆にいえば現実味のない存在となっているらしい。しかしガリアでは事情が異なる。敵となり得る隣国で名を馳せる使い手。その情報は正確かつ確実に入手されている。彼女の実力も、容姿も、そして当然、彼女がヴァリエールに嫁いでいることも。

トリステインとの国境を任せられたオルレアンの騎士ならば、『烈風』の名を聞いただけで色めき立つのも当然。俺が護衛に選んだ腕利き達でさえ緊張と共に視線を向けているわけで。

……だからさあ、そちらさんももうちょっと緊張してくれてもええんじゃないよ？

当のご本人様は、周囲の騎士から向けられる視線などどこ吹く風と言った風に、

「一緒に緒してもっ。」

「……ええ。どうぞ、ヴァリエール公爵夫人」

はあ。涼しい顔をしてはります。こっちは内心ガクブルだったのに。

「ありがとうございます。それと、私の事はカリーヌとお呼びください」

「では、お言葉に甘えさせて貰いましょうか。ああ、申し遅れました。

私はクー・セタンタ・ド・オルレアン。よろしくお願いいたします、カリーヌ殿」

「はい。叶うことなら末永く」

……ス、スルーしようぜ！

うん。よし。よしっ。気を取り直してっつと。

「それにしてもヴァリエール公爵の御夫人とアルビオンにてお会いするとは思いませんでしたよ」

「ええ、そうでしょうとも。私自身、アルビオンに来ることになるとは思っていませんでしたもの」

「ということはアルビオン行きは急に決まったことだと？ ああ、詮索つもりは無いんですが」

「いえ、気を使っていたただかなくても結構ですよ。オルレアン公の仰ったように、アルビオン行きという予定はありませんでした。とある事情で急に決まった事です」

「へえ……」

はあー。紅茶がおいしい。

……

……

……は？ 事情を聞けと？ 何故来たのか理由を聞けと仰る？



いやいやいや。なんとなく分かるでしょ？ 藪蛇だってば！  
だって俺のいるところをピンポイントで狙って来てるんだぜ？ お  
互いニコニコしてるけど、カリーヌさんの目、笑ってないんだぜ？

「たとえば……、あくまでたとえばの話ですが」

「はい。」

いきなりどうした？

「たとえば、生まれた時から病弱で、なかなかベッドから出ることも出  
来ない少女がいたとしましょう」

な、何故に語りが始まってらっしゃるのでせうか？

事情とやらを聞かなかったからといって、いきなり話し始めるのは  
どうかと思うんですが。

もう少し段階を踏んだほうが。段階を踏めなかった時は諦めてい  
ただくという方向で一つ。

……はあ。ええ。無理でしょうともよ。聞く以外の選択肢は無い  
んでしょうね。

「その病弱な少女は裕福な家に生まれたため、何不自由なく生きるこ  
とが出来ていたとしましょう」

厳格な父と、聡明で美しく気品にあふれ気高く優雅でありつつも強  
く美しい母がいたとしましょう」

美しいって二度言ったよね？ いや、シツ「ミ」たくないけど。

「幾つもの治療法を試し、それでも快復に至らなかった少女がいたと  
しましょう」

そんな少女の前に一人の救い手が現れ、誰もが諦めた少女の病を癒

してくれたたしましょう。

その少女は、突然現れた救い主に、一体どのような感情を抱くと思いますか？」

なんとなく話の方向は見えたけどさ。正直勘弁してもらいたい。

まあガリアの公爵相手だし、さすがの『烈風』も無茶はしないだろうけど。

「健康になった少女はとても喜んだのです。

太陽の下を歩ける事を喜び、草むらの中を走れることを喜び、遅くまで月を眺めていられることを喜んだのです。

それらは当たり前のことでした。しかし、少女にとってはその『当たり前』こそが、憧れてやまないものだったのです。

少女は友人を作れることを喜び、パーティーに出れることを喜び、ダンスを踊れることを喜んだのです。

それらは少女の生まれならば当然のことでした。少女は今まで、姉妹の踊る姿を羨望と共に眺めることしか出来なかったのです。

そして少女は正しく理解しています。その幸せが、一人の異国の王子がくれたものだ」と

「…………たどえ話ですよね？」

「はい。あくまでたどえばの話です」

だったらもう少しボカしてくれると嬉しいんですが。

なんか感情込めて語ってくれるおかげで、護衛連中の中に聞き言ってる奴が出て来てるし。

普通にしても演劇っぽくなるのはトリスティンの伝統なんですよっかね？

「自分の幸福が全て異国の王子から与えられたものだ」と理解している

少女は、やがてその王子に淡い恋心を抱くようになりました。自分に救いを与えてくれた王子に。自身に幸福を与えてくれた少年に」

少年いうなし。

「もしこの少女が、その異国の王子が婚約者に相応しい相手を探すため異国に旅立ったと聞いたら、どうなると思いますか？

裏を疑うことも、当然政治に関しては何も知らない純粋な少女が、初恋の相手が恋人を探しているなどと知ったら、どういう行動に出るでしょうね？」

「えっと。後先考えなくなったり……とか？」

そこでカリーヌさんがハアと一息。

随分疲れてらっしゃるようですけど、あれ？ カトレアさんの相手候補を捕まえに来たってわけじゃなさそうなんだが。

「……母親が代わりに王子に事情を聞いて来るとい条件で、なんとか少女を引きとめることが出来たのです」

「それは、なんとというか……お疲れ様です」

「……無礼を承知で一言だけ言わせて下さい。あの子を刺激するような行動は、どうか勘弁して下さい」

わあお。しおらしい『烈風』とか想像だにしていなかったね。

というか、カトレアさんにそこまで思われていたとは。

だけど応えるわけにはいかんよなあ。

俺としてはもうマチルダさんとのトゥルーエンドに向けて突っ走りたいし。

ま、カトリアさんは常識人の部類だし、なんとかなるか。

「ホント、大変だったんですから。あの子、素手で壁とか普通に壊しま  
すし」

.....え、!?

## 43・イレギュラー

「素手で壁を……ですか？」

「ええ。まったく、誰に似たのやら」

「いやあ、少なくとも貴方の旦那さん似じゃないと思いますが？」

「ま、そんなことは口には出さないけどね。」

「つか何が起こってるのよ？ オーガの血でも目覚めたか？」

「まああの子が健康であってくれるというのなら、それ以上言ってもりもないのですが」

「そ、そうですね。それだけ元気があると言つのなら、心配など必要ないでしょっし」

「ちょっと気になってたりしてたからね。カトレアさんに関しては。」

「水の精霊サマを信用してないわけじゃないけど、かな〜り大雑把な治療だったっぽいし。」

「ぶっちゃけ本当に完治しているのかとか、再発しないのかとか、後遺症が残らないのかとか、気にはなってたんだよね。」

「ま、どうやら無用な心配だったようだけど。」

「あの『烈風』を疲れさせることが出来るくらいなら、病気なんて気にするだけ無駄だろうしね。H A H A H A。」

「……まあどういふわけかチート化してるっぽいけど、病気とは無縁になれそうだし、よかったんじゃないでしょうかね。」

「……今すぐ地の果てまで逃げなきゃならんような気もしてるけど。」

「ところで、話は変わりますが」

「はい。なんででしょうか」

「オルレアン公はカトレアをどうお思いで？」

変わってないよ。全然話が変わってないよーい。

つかなに？ ウェールズといいカリーヌさんといい、ハルケギニアの人間は何故まずそっち方面の話題をだすわけ？ まあカリーヌさんとウェールズじゃ質問の意図がまるで違っただとは思っけども。

それで……これはどっちだろうね。

素直に何とも思っていない事を明かしているのかどうか。さすがにガリアの公爵相手に娘を押し付けてくるとは思えんが……。

まあどんな目が出るにしても、ここで出来る返答は一つっきりなんだけど。

「私にとってのカトレア嬢は、あくまで隣国の公爵家の御令嬢です。個人的な感情は抱いておりません。カトレア嬢にはもっといいお相手が見つかることでしょう」

……ぶ、無礼すぎたかな？ どうかかな？ 怒っちゃやーよ？

でもここで退くわけにはいかんのよなあ。カトレアさんは嫌じゃないんだけど、今の俺には嫁（予定）がいるわけだし。

マチルダさんを裏切ることが出来ない以上、八方美人ではいられない！ ガツン……は無理でもはつきり断っておかねばね。

そんな感じで勇気を振り絞って答えたのだが、予想していた殺気とかがやってこない。てつきり『カトレアいらん』なら殺す『くらの応酬になるんじゃないかと覚悟していたんだけど。

しかし予想とは違い、何故かカリーヌさんはどこかホツとした様子。ホント、予想外の表情ばかり見せますなあ。ギャップ萌えでも狙ってるんだらうか？

「そうですか。少し安心しました」

「安心ですか？」

「はっ。いえ、申し訳ありません。オルレアン公が不満というわけでは決してなく」

「ああ、気になさらずとも結構です。ただ少し意外だったもので」

あの質問、『カトレアをどう思っているか？』は、ウチの娘に文句あるんかい？ 的な意図からの言葉だとばかり思っていたのに。

「カトレア嬢を刺激しないようにと言っていたので、てっきりくっつけようと画策されているのかと思いましたがよ」

肩を竦めておどけて見せる。『コミュニカ』も使ってるべくフレンドリーに。

ちょっと興味湧いて来たしね。事情とやらを教えて貰いましょうか。

「……現在カトレアのフォンテーヌ子爵位を返上し、ヴァリエール公爵家に戻そうとしているのはご存知でしょうか？」

「ええ。オルレアンに封じられた際、モンモランシ伯爵家より聞き及んでますが」

「……恥ずかしながらヴァリエール家の存続にはあの子は不可欠です」

……ああ。他の姉妹では婿が取れんからか。どっちも苛烈なツ

ンデレ様だし。

「あの子の幸せを第一に考えるのは母親として当然のことですが、一方でカトレアにはトリステインの貴族から婿を取り、ヴァリエール家を安泰させて貰いたいと思っているのです」

なるほどねえ。なんていうか、大変ですなあ。

ガリアの王弟を婿<sup>オレ</sup>に取ることなど不可能な以上、ヴァリエールとしてはカトレアと俺がくつつくことは阻止したい。しかしガリアの王弟がそれを望むと言うのなら、拒否することなど出来るわけもない。ゆえのあの質問か。それで俺がカトレア嬢に興味がないと分かって安心したわけね。

刺激するなつても他の女に手を出さなつて意味じゃないっばいね。どつちかつてえと、カトレアに気付かれないうちに婚約なりしてしまつてくれと思われてるのかも。他国に知られるレベルで大々的に『嫁探し』なんてされるのは困るつてわけか。

直情径行の人かと思つてたけど、一応考えてるのね。旦那さんからの入れ知恵かも知らんけど。

「ふむ。納得行きました。私としてもヴァリエール家との繋がりは大事にしていきたいです。そのヴァリエール家の存続とやらがかかっているというのなら、以降は善処しましょう」

うん。この『旅行』から帰った後にまた『嫁探し旅行』をさせられることは無いとは思うけど、カトレアさんを刺激するのはマズそうつてのは十二分に理解したしね。気をつけましょう。

と、そろそろいいかな？

さすがに現れたばかりのカーリヌさんを放っておく事は出来なかつたからカフェに残ってお話に付き合っていたわけだけど、現在俺にはエルフをなんとかせねばならないという大事な仕事がある。



モード大公が動く＝ポカをやらかされる可能性が高まるという図式がある以上、出来ればモード大公が動く前に押さえてしまいたい。というわけで、お暇させて貰いましょう。

「カリーヌ殿。叶うことならばこの後も一緒にしたかったのですが、私はモード大公に用事がありまして。申し訳ないがこの辺で失礼させて貰います」

そう言っただけで立ち上がったわけだが。

……何故にカリーヌさんまで立ってらっしゃる？

「奇遇ですね、オルレアン公。私もモード大公邸に行かねばならないのですよ」

はいい？

「トリステインとアルビオンの仲はそれなりに良好とはいえ、公爵家の人間がその地の領主に挨拶も無しに、というわけにもいかないでしょう。主人であるヴァリエールが既にモード大公に挨拶に向かっているはずですよ」

そそそそれを先に言ってくれませんかねねねね!?

やべえ。やっべえよこれ！

頼むから早まってくれるなよ、モード大公。

嗚呼、何故に当初の計画からガンガン外れて行くんだろうか。

ここまで来て御破算だけは、勘弁してくれよ？

## 44・涙

ヴァリエール公爵がモード大名家へ。

青天の霹靂ってレベルじゃねーぞ！　そう叫びたいくらいだったね。

モード大公邸は水の精霊サマを捕まえたせいで大混乱に陥ってるものだと、俺は読んでいた。

それだけに第三者にはちよっかい掛けて貰いたくは無かった。

これ以上状況を読みにくくされてたまるか、という思いも確かにあるが、同時に巻き込みたくは無いという思いもあるわけで。

ま、結論を言ってしまうえば、希望的観測なんてものを許すほど世界は優しく出来ていなかったんだがね。

「？　使用人の姿も見えないとはどういっことでしょうね？」

カーリー又さんを連れだって大公邸まで戻って来たわけだが、邸の外には人の気配がなかった。

人払い、か。やはりモード大公はエルフを他所へ移すつもりだったか。

可能な限り人目につかないよう配慮した結果、平民からなる使用人たちは屋敷から離れさせたのだろう。

まさに拙速。まあ第三者の介入を予測しろといっても、無理だったろうけどね。俺でさえまるで予想できなかったイレギュラーだったんだから。

「行きましよう、カーリー又殿。それと」

一応釘をさしておこうか。

カーリー又さんにも。そして俺自身の心にも。

「俺はある目的を持ってガリアより派遣されている。俺を邪魔するということはガリアを敵に回すということだということを理解しておいて貰おう」

『「コミュ力」を使って言葉を冷たく。

冷淡に、冷淡に、冷酷に響かせる。

護衛の騎士たちですら初めて見る俺の表情に息を飲んでいるが、こんなところで止まれるか。

こっから先はお巫山戯は無しだ。

やってやるうじゃねえかよ。

「オ、オルレアン公!？」

屋敷に入ってすぐに出迎えたのは予想に反して見知った顔だった。

「……マチルダ」

予測していなかったわけじゃない。

モード大公がティファニア親子を匿わせるという手段に出るならば、頼る貴族の第一候補は原作でもエルフを匿ったサウスゴータ家だろう。

以前の会話の様子からも、マチルダさんが既にティファニアを知っているらしいことには気付いていたし、この状況で彼女と顔を合わせることでも十分予測できたこと。

とはいえ、望んでいたかといわれれば、正面から否定させて貰うがね。

「オルレアン公。今日はサウスゴータを見て回るはずだったのでは？」

「すまないね。状況が変わった。『例の親子』はこの先か？」

「ッ！」

マチルダさんが杖を引き抜く。

呼応するように護衛達も。反射的にカリィ又さんまでもが杖を構え、

「止める」

俺の言葉で全員がビクリと肩を震わせた。

まったく。マチルダさん相手に『命令』する羽目になるとはね。

「あ、貴方は初めからあの方たちの事を知っていて……」

「ああ。そうだ」

……チツ。何から何まで計算外だ。さすがにムカついて来る。

折角出会えた心から欲しいと思えた相手にこんな目で見られることになるなんてな。

初めて惚れた相手に杖を向けられることになるなんてね。

俺のものにしたいと願った相手に、俺の身内が杖を向ける状況になるなんてさ。

まったく。自分の不甲斐なさに腹が立つ。

こっぴどく動いていたつもりだったってのか。

こっぴどく回避できると自信を持っていたってのか。

まったく。自分で自分の心臓をぶち抜いてやりたい気分だぜ。

「……私の事も利用するつもりで？」

違う。そう言えれば楽だったんだろっけどな。

「通せ。マチルダ・オブ・サウスゴータ」

とはいえ言い訳している暇もない。

彼女がサウスゴータのために生きたいと言っていた姿に俺は惹かれたんだ。

ならば俺もガリアのために進まなくちゃならないだろうよ。

膝から崩れ落ちたマチルダさんに目もくれずに、俺は一步を踏み出した。

聡明な彼女の事だ。他国の貴族、それも重鎮と呼ばれる相手にエルフの事がバレれば、どうなるか予想もついでしまっただろう。

心優しい彼女の事だ。妹のように思って来た少女のこれからを思えば、自然と涙がこみ上げてしまうのだろう。

護衛にその場に残るよう言い残し、彼女の嗚咽を振り切って、扉を開け放ち、視線を向ければ、

「オルレアン公……」

イレギュラーの最たるヴァリエール公爵。

「……」

無言を貫くモード大公。

そして、

「お初にお目にかかる。私はクー・セタンタ・ド・オルレアン。我が盟友たる水の精霊がお世話になったのは、そちらの御婦人かな？」

どこか諦めたような表情でこちらを見ているエルフと、怯えたように視線を彷徨わせている幼き少女の姿があった。

上等上等

一人残らず救ってやるうじゃねえか

覚悟はいいか？

俺は出来る！

45・お願い？　いいえ、脅迫です

ドカリと乱暴に腰を下ろした先は、相対するモード大公、ヴァリエール公爵らを横から睨む位置。ま、三竦みってやつだ。

この位置取りも少し懐かしかったり。ジョゼフ兄とシャルル兄の本心を聞いた時も、こんな状況だったっけね。

とはいえ、あの頃とは背負っているモノも覚悟の強さも別物だけど。

「やはり、水の精霊を招き入れたのは貴方でしたか」

最初に口を開いたのは意外なことにモード大公の愛妾であるエルフだった。

目を泳がせながら打開策を探しているらしきモード大公や、ヴァリエール公爵、エルフを目にした途端ヴァリエール公爵の隣へと駆け寄ったカリーヌさんらは口にするべき言葉が見つからないのか、沈黙を賣いているというのに。

どう考えても絶体絶命の状況いるエルフが一番落ち着いているってのはどうなのかね。

「ああ。捕えられてしまったそうだが、それは貴女が？」

「はい。申し遅れました。シャジャルと申します」

「そして、そちらのお嬢さんがモード大公との間に出来たハーフェルフというわけか」

「な!？」

驚きの声は未だ現状を認識しきれていなかったカリーヌさんのもの。

一方大公は俺がそれを知っていたということを知り、苦虫を噛み潰したような表情を見せていた。

「ハーフエルフ!? いやそれよりも、どういふことですか、モード大公!?」

「落ち着け、カリーヌ」

「あなた！　これが落ち着いていられ、少し黙れ、『烈風』」

俺の言葉にギロリとカリーヌさんの視線が向く。

まったく。さっきまでにこやかに会話で来てたっていうのにな。さすがはエルフのネームバリュー。あの『烈風』をここまで焦らせるとはな。

ま、退くつもりはサラサラないが。

「殺気を向けないでいただきたいね。トリスティン貴族殿」

「ぐっ……」

そうそう。立場ってやつを理解して大人しくしてくれ。

足りない脳みそフル回転で話をどう持って行くか考えてるんだから。

これ以上イレギュラーに掻き回されたくないんだよ。

「オルレアン公。君は初めから知っていたのか？」

「何をですか？　モード大公」



「……シャジャルとティファニアのことだ。初めから全て知っていて、それでアルビオンに来たというのか？」

ふん。今さらな質問だ。

俺が元々エルフの事を知っていたかどうかなんてのは、今尋ねるような事でもないだろうに。今必要なのは、現状をどうするかという問いに対する答えなんだから。

ま、答えてはやるけどな。

「名前までは掴めていませんでしたよ。モード大公がエルフを匿っているらしきこと。そのエルフとの間に子供がいるであろうこと。その辺りまでは確信していましたがね」

「一体どうやって……」

「我がガリアの情報収集力の結果、とでも言っておきましょう」

さすがに『前世』だの原作知識だのとは言えないしね。

「……それで、アルビオンに来たわけか。私を断罪し、アルビオンの国力を削ぐために」

「断罪？ エルフを匿うことが罪だとも？」

ああ、そうか。俺はまだ立場を明確にしていなかったな。

「言い忘れましたが、私はモード大公を責めるつもりでアルビオンに来たわけではありません。むしろ貴方がたにとっては味方になるでしょうね」

「」「？」

エルフ親子以外の三者の声が重なる。

まあ当然の反応なのかもな。

エルフといえばハルケギニアじゃ恐怖の対象だ。始祖信仰によって成り立つこの世界じゃ、聖地とやらを奪ったエルフは、存在するだけで異端視される。

他国の人間がエルフの事を嗅ぎつけて自国へと来たと聞けば、敵も同然だと考えるのは当然だろう。

「他国の人間でさえ、『モード大公はエルフを匿っている』という情報が掴めてしまう。これは非常に厄介ですので、この状況を変えるため、私が出来たというわけです。初めは折を見て人間の匿い方辺りを伝えるだけのつもりでしたがね」

「オルレアン公は本当に状況を理解しているのか!? 始祖に連なるアルビオンの大公家がエルフとの間に子供を成していたんだぞ!! しかもそれに味方すると!?!」

「落ち着いて貰おう、ヴァリエール公爵。それと、状況を正しく認識できていないのは貴方の方だ」

「なんだと!?!」

ふん。エルフの存在に危機感を抱くのは理解してやるが、視野狭容を起こすのは勘弁して貰いたいね。

ヴァリエール公爵なら現状のマズさを正しく認識できるだろうに。

「既にハーフエルフ、ティファニア嬢でしたが、は生まれており、ここにこうして存在しています」

「それがどう」始祖の血を引く大公家の血を、彼女は引いて生まれてい

るのですよ」「

「始祖の血はハルケギニアにとって最も尊いものでしょう。それを引いているティファニア嬢を、果たして誰が処断など出来ましようか」

処断のところではティファニアが一層強くシャジャルさんの服を掴んだ。

まあ怯えられるのも当然だとは分かるが、あまり泣きそうな目で見つめないでくれ。

「かのロマリアだとて、アルビオンの大公家の血を否定など出来ないでしょう。となれば、この情報、モード大公がエルフを愛人とし、子を成していたという情報が他所に知られればどうなるか」

「……兄上ならば、ジェームズ陛下ならば秘密裏に……」

「そうですね、モード大公。ジェームズ陛下ならば血の繋がり的情よりも王家の責務、上に立つ者の義務を優先なさるでしょう」

しかし、と一言挟み、

「それをモード大公は認められないでしょう？ エルフである。ただそれだけで恐れられ疎まれるはずの存在との間に子供まで成したのなら」

そこでやっと状況の危険さに気付いたのか、ヴァリエール公爵の顔が青ざめた。

当然だろう。現在アルビオンと最も深く関わっているのは、前王がアルビオンの王弟でもあったトリステインだ。アルビオンが荒れば、どんな希望的観測に頼ろうともトリステインが無関係でいられるなどとは思えないだろう。

「アルビオンが……二つに割れるというのか？」

「……私は祖国に杖を向けるつもりはないよ、ヴァリエール公爵」

「同じ事ですよ、モード大公。もしシャジャル殿とティファニア嬢を  
引き渡せと言われたらどうしますか？」

「そんなこと、認められるはずが……」

「となればジエームズ陛下はモード大公も罰するでしょうね。肉親だ  
からという理由で恩赦を与えているようでは王族は務まりません。  
しかし表には大公を罰する理由は明かせない。それも当然。エルフ  
を匿い、子供まで成していたなどと、スキヤンダルどころの話ではあ  
りませんし」

「理由も明かさず、モード大公を罰するとなれば……」

「ええ。モード大公は人望もおありですし。多くの貴族が王家に不信  
を抱くでしょう。いえ、不信で済むはずもないでしょうね」

そうなれば最早モード大公の意思など関係なくなる。モード大公  
はお飾りの御輿となり、新たな勢力図を作るため、貴族共が主役の内  
戦が始まることだろう。

モード大公に対して与えられるのを処断ではなく罰と言ったのは、  
逆にそのほうが内乱の可能性をヴァリエール夫妻に強く認識させる  
ことが出来るから。彼らにも『同じ危機に立ち向かう仲間』になって  
貰った方が都合がいい。

「ガリアはそれを容認しません。友好国アルビオンの崩壊も、そこか  
ら連鎖的に始まる未曾有の戦後災害も、我々は傍観するつもりなどあ

りません。そのためだというのなら、私、クー・セタンタ・ド・オルレアンは、エルフ秘匿にも協力を惜しまないでしょう。状況が状況ですし、当然ヴァリエール公爵夫妻にも協力して貰うことにはなりますが

「しかし、我々としては……」

「ああ、勘違いしないでらおうか、ヴァリエール」

そう。間違っても勘違いはしないでくれ。

俺はアンタ等を引きこむつもりではあるが、勧誘しているわけじゃない。

「これは『交渉』でも『説得』でもない」

そう。「いつは『お願い』じゃあないんだよ。」

『通達』であり、『脅迫』だ

## 46・鞭と飴

「きよ、脅迫だと？ トリスティンに宣戦布告でもするといつか、オルレアン公！」

ヴァリエール公爵が立ち上がり、口角泡を飛ばす。が、そんなつもりなんてないさ。

俺の欲するモノはあくまで平穏だ。アルビオンの内戦を食い止めるためトリスティン相手と戦争なんて、本末転倒どころじゃないだろう。

「静粛に願いたいですね、ヴァリエール公。戦争になどなるはずがないでしょう」

とはいえ、わざわざ安心させてやる必要もないがね。

「ガリアとの戦争など、今のトリスティンが応じるとしても？ トリスティン貴族の内情を最もよく知るヴァリエール公爵が、それを可能性として考えられるとは思えないですが」

王の不在。賄賂の横行。汚職の氾濫。トリスティンの内情は見るも無残なものとなっている。

この状況でヴァリエール公爵がガリア王弟、オルレアン公爵の不興を買ったなどと広まれば。その結果、絶望的な国力差のあるガリアに侵攻されるとなれば。

まず間違いなくヴァリエールはトリスティンから切られる。戦争などするまでもなく、ヴァリエール一族は蹂躪される。

その『イメージ』を上手く受け取ってくれよ。『コミュニケーション』を使って声なき声を伝える。自分で気付いた可能性ってのは、他者から予言さ

れる未来なんかより、よっぽど強く心に残るのだから。

「なにも祖国を裏切れというわけではないのですよ。エルフの存在を吹聴しないという、ただそれだけのこと。トリステインの国益を損なうわけでも、ヴァリエール家を窮地に陥らせるわけでもない」

「……しかし」

「まったく。頭が固い。」

結論などずでに出ているだろうに。

ヴァリエール家が俺に盾突いても得など無い。エルフだから弾効すべしなんて下らない始祖への忠誠心を持っているわけでもないだろう。

だがゴネられても面倒だ。『脅迫』とは言ったが、ヴァリエール公爵に協力して貰うのは既に決定事項ではある以上、離反されるわけにもいかない。

仕方がない。先日手に入れたばかりのカードを切るか。

「そう言えば、カトレア嬢は健勝なようですね。なによりです」

「なっ!? オルレアン公!! まさかカトレアを脅しに使おうというのか!？」

ん? ああ、そういえばそっちでも脅せたか。

水の精霊を使って治療したんだものな。水の精霊を使役出来る俺ならば、病気を再発させることも可能だとか思っているのだろう。

ハア。そこまではしないっての。

「そんなつもりはないですよ。あくまでヴァリエール公爵にはモード大公の『味方』になっていただくのですから。敵意を抱かれるのは御免です」

そう。敵対されては困るのだ。  
だからこれは、鞭ばかりではなく飴をくれてやるうって話なんだよ。

「先日ロンディニウムを訪れた際、ウェールズ殿下とお話する機会があったのです。その際、他国との関係を強化するにはどうすればいいか、なんて話が持ち上がりましてね」

ウェールズがアンリエッタを欲しがっているが故の議題だったとは言わない。

王族の醜聞なんて、握っている奴は俺だけでいいのだから。

「ウェールズ殿下が好感を持った策は、どうやら国家の重鎮同士の婚姻によって結びつきを強める策だったらしいのです。まあ前トリステイン国王はアルビオンの出ですし、馴染みの深いものだったのでしょうが」

「……カトレアをアルビオン王家にとでも？ オルレアン公が推薦するとしても言うのか？ その名誉で手を打つても？」

「違います。私が推薦することは違いますが、カトレア嬢には迎える側になってもらいましょう。ヴァリエール家には男子がいないそうですし、婿を取ることは決定事項。トリステインで家を継げない次男三男の中から後継者を探すよりも、アルビオンの有力貴族を相手にするほうが文句は無いでしょう？」

チラリとカリィヌさんに目を向ける。敵意はもっていないようだが、一体何を考えていることやら。

「ヴァリエール家は優秀な後継者を得、アルビオンとの国交のため尽



力することでもトリステインでの影響力を強められる。対価として必要なのは、エルフに関することを黙っているという、ただそれだけ。悪い話ではないはず」

それと、と繋げ、

「譲歩はここまでだ。これが最後通牒。受け入れられないというのなら、ガリアはヴァリエールの敵となるだろう」

「ぐ、ぬぬ……」

なにがぐぬぬだ。

ここまで俺が譲歩してやってるんだ。諸手を上げて喜んで貰ったくらいだったの。

決断の邪魔をするのはブリミル教徒としての葛藤か、それともトリステイン貴族としての矜持か。

ま、それはそれとして、終わりが見えてきたことでやっと頭が冷えて来た。

ヴァリエール公爵の返事も少しくらい待ってやろう、と思っていたが、意外なことにこちらをずっと睨んでいたカリーヌさんが、

「わかりました」

「カ、カリーヌ!？」

「元よりこれは『脅迫』なのでしょう？　ならば非力な我々に選択肢など無いのです」

へえ。

「ああ。その通りだ。なにせモード大公の側にはエルフがいる。非力な人間ならエルフと出会ったという記憶を消されていても不思議ではないね」

「ええ。ですが努々お忘れなき様に。この一件でヴァリエールが不利に立たされるような事があれば、『烈風』の名に賭けて、必ず後悔させて見せましよう」

怖いねえ。威圧感バリバリでさ。

だが、『その程度』で試しているつもりかよ。

「そちらも忘れるな。俺は舐めてかかって良いような雑魚ではないってな」

視界の端でティファニアが震えまくっているね。

笑みを浮かべているつもりなんだが。カリィヌさんも、そして俺も。

まあ、いいけどな。

さて、モード大公。

危機が去って安心していているようだが、アンタはこれから本番だけ？

エルフの匿い方から万一露見した場合の対処法まで、王族にあるまじき邪道な陰謀術を叩きこまれるんだからな。

手は抜くつもりは全くないぜ？

「ああそれと、オルレアン公。ヴァリエール家がアルビオンから婿を

取るという話、反対ではありませんが、カトレアの相手ではなく長女エレオノールのお相手とさせていたいただきたいのです」

「ふむ。ではそのように取り計らいましょう」

「感謝します」

ま、次女より長女を優先するという考えも分からないわけじゃないしね。

「これでヴァリエールは安泰。カトレアも嫁に出せますね」

……………え？

## 47・Flere 涙の理由を変えるモノ

ふいー、と一息。

ヴァリエール公爵に釘を刺し、モード大公に現状考えられる限りのエルフ秘匿法を叩きこみ、ようやく一息つけました。ども、クーです。現在モード大公邸の俺に貸し与えられた部屋で一人黄昏てまさあ。

……にしても、まさか『フェイスエンジンで耳隠せよ』の一言にあれほど驚かれるとはね。

目から鱗ってことなのかね。ようわからんが。

これからシャジャルさんはモード大公の愛人である平民として生きて行くらしい。公然の秘密にすれば、それ以上探られないだろうとは思う。まあシャジャルさん的には、万一自分がエルフだとばれた場合、自分が『平民を装って大公に近づいたエルフ』だと思われれば、モード大公まで被害が及ぶことは無いという辺りが嬉しかったらしいが。

なんていうか、熱々だよねえ。何故エルフがアルビオンにいるのか、俺の原作知識では分からなかった辺りの事を聞きたかったんだけど、あの幸せそうな表情を見せられちゃったね。追求できませんわ。にしても、はあ。

……いや、分かってはいるんだよ。俺がアルビオンまで来た理由は将来的に発生する内乱の火を、火種であるうちに片付けるというモノ。イレギュラーは重なっただし、ヴァリエールという第三者にエルフの情報が渡ってしまったことは想定外だったが、まあ概ね目的は達成できたと思う。

だからさ、喜ぶべきなんだよね。うん。

分かってるのさ。分かってはいるんだけどねえ。

……マチルダさあん

絶対嫌われたよねえ。完璧軽蔑されたよねえ。

だって利用するため近づいて来たって知られちゃったんだもの。

あのプロポーズはエルフをどうにかするため策だと思われちゃったんだもの。

嗚呼。泣きてえ。

オルレアンに帰りてえ。つかリユティスの家に帰りてえよ。

……うん。帰ろう。まずリユティスに帰って母ちゃんに会おう。そんで癒されよう。

それからオルレアンに戻って引きこもろう。仕事なんか他人に任せて二年くらい休もう。ラグドリアン湖にボートでも浮かべてそれに乗って寝よう。

そんなくらの休暇を貰わないと割に合わねえよ。

アルビオンの内乱食い止めて、モード大公の破滅の未来ぶっ壊して、ウエールズとアンリエッタの仲を進展させるための布石を打って、エレオノールの相手まで用意してやって。

そんでなによ。一番働いた俺はフラれただけってか。失恋が報酬だったか？

HHHHHA!! その上『烈風』に気に入られたっばいってか？

……はあ。もうそれあ、

「勘弁してくれえ」

「何がですか？」

一人だったからこそ呟いた言葉に対するまさかの反応に、思わず顔を上げて見やれば、部屋の入口には会いたくもありません、同時に今は会いたくない人の姿。

「……………ミス・マチルダ」

「お邪魔します、オルレアン公」

「部屋の入口には護衛が居た筈なんだが？」

「ええと。普通に通してくれましたけど」

……アイツら。

一応マチルダさんが俺に杖を向けた場面を見ているはずなんだがなあ。

若い女性ということに油断しているのか、それとも変な感じに俺とマチルダさんの関係を独自解釈したあげく自己完結してしまっているのか。

どちらにせよオルレアンでは『超特訓編』地獄すら生温いんだゾ』を敢行しよう。うん。ストレスを発散させて貰おう。ウケケケ

「あの、オルレアン公」

「ああ、なんの用かな、ミス・マチルダ？」

やっぱり怒られるのかなあとも思う。乙女心を踏みにじったような形になったわけだし。まあゴーレムビンタくらいなら甘んじて受けよう。そのくらいじゃ死なないしね。

でもなあ、出来れば責めないで欲しいなあとも思ったりも。

今は疲れ切っちゃってるし、俺、Mじゃないしね。

まあ自己嫌悪でツライってのもあるし、責めて貰った方が楽になれるのかもしれないけどさ。

しかし予想に反してマチルダさんの言葉は、

「申し訳ありませんでした、オルレアン公。私はオルレアン公を疑い、あまつさえ杖を向けるなどという「ちょ、ちょっと待った！」

ええー？　なんで謝られてんの、俺？　「こは俺クス男が非難されるシー

ンでしょ？

「イマイチ状況が把握できないんだが、ミス・マチルダに謝って貰うことなど無いよ？」

「いえ。全てモード大公から伺いました。オルレアン公がモード大公やシャジャル様の味方をなさっていたいただいたとも。それだというのに私は」

「いや、俺はあくまでガリアのために動いていただけで、結果的にモード大公の側についたのは確かだが……」

それに……。

「君を利用するために、君に近づいたのも確かだ。モード大公に敵意を持たねず、それでいて確実にエルフに関わるには、ミス・マチルダの立場は利用しやすかったからね。……俺は、少なくとも君に礼を言われるような人間ではないよ」

思わず俯く。

「仕方ないだろ？ マチルダさんを正面から見つめ返す度胸なんて俺「三男」にはないよ。」

「それでもー」

強い声に少し驚いて顔を上げれば、

「それでもオルレアン公のお力でシャジャル様やティファニアは救われたんです！ アルビオンが内乱になる可能性もあったとモード大公は仰ってました。それを止めて下さったのもオルレアン公だと。サウスゴータの民が戦火に巻き込まれる未来もあったのでしょ？」

それを失くして下さったのもオルレアン公だったのでしょうか？」

マチルダさんは床に膝をつき、ソファに沈んだ俺と視線を合わせて語りかけてくれる。

俺はまず彼女に椅子を勧めるべきだったなあなんて頭の片隅で思いながらも、彼女の言葉に耳を傾けるほかになく。

「ならば貴方は私たちの恩人です。お礼の言葉すらダメだなんて言わないでください」

「それでも君を利用しようとしたという事実は「か、関係ねえな！」……は？」

思わず聞き返してしまった。

俺をまっすぐ見つめていたマチルダさんといえば、どこか照れたように両手を広げ、

「こ、来いよ、どこまでもクレバーに抱きしめてやる」

……

……

……クッ

「ハハッ。なんだそりゃ？」

「私たちを助けてくれた恩人が泣きそうな顔をしているんですもの。そんなツラそうな顔、しないでください」

クッ。泣きそうな顔はそっちじゃないか。



まあしかし、確かに今の俺はそんなツラしているのかもね。『エルフの保護』なんて難題をやり切った達成感なんてものは無く、結局出たとこ勝負をするしかなかった不甲斐なさに奥歯を噛みしめていただけなんだから。

でも、さ。

「いいのか？ 俺は一度手にしたら離さないぜ？」

弟扱いしているつもりなら、今の内に手を引いた方が身のためだぜ？

ニヤリと笑みを作ってそんな事をほめめかすが、

「ぶ、どんとっさー」

ハハツ。なんのキャラだよ。

ささくれ立った心が癒されて行くのを感じながら、広げられたマチルダさんの腕の中に飛び込む。

まったく。これじゃ男として情けないじゃないか。そんなことを思いながらも、彼女の事を抱きしめ返す。

彼女の腕は優しくて、

彼女の体はやわらかくて、

初めて感じる安心と安らぎが、

マチルダさんの温もりから感じられた気がしていた。

## 48・ただいま

ナマステ！ クーでっす！

ようやく帰ってこれましたね。ガリアに。我がオルレアンに！

いやあ密度の濃い日々でした。アルビオン旅行。

ホント、へとへとです。

マイハウス（という名のキャッスル）にはもうしばらくかかりそうですが、つい先ほどモンモランシ領からオルレアン領に入りましたし、のんびり景色でも眺めながら馬車に揺られるとしましょう。

やっぱり故郷は良いですね。なんといいですか、空気の匂いが違う気さえします。

ほんの数年前にはガリアに常に死亡フラグを警戒しなきゃならん国って印象だったってのね。今じゃ安心出来るふるさどですから。わからんもんです。

そ・し・て。にゃふふふふ

なんと現在馬車に乗っているのは俺だけじゃなかったりします。

例の『モード大公よ。エルフがバテてしまつとは情けない』な事件の後、かくかくしかじかありまして、結局ガリアに連れ帰ることに成功しました。

ええ。ラブリーマイエンジェルまぢるだたん。

……そしてティファニアも何故か一緒に。

……………何故にっ!?

「わあ。大きな池ですね。これが海ですか？」

「テファ。ここが湖よ。ラグドリアン湖。シャジャル様から聞いてなかつたかしら？」

「あ！ お母様も言っていました。水の精霊様が住んでいるんですよ

「！」

チツ。はしゃぎやがって。小娘が。

おっと失礼。無邪気な姑娘クイニヤンに暴言はいけませんな。

……いや、俺だってね、別にテファ嬢が嫌いってわけじゃないんだよ。

たださ、この数日。

『マ、ママママチルダさん!! ああああののの!!』

『あ、クーさん。すいません、これからティファニアと約束がありました。あの子ったら耳を隠せるようになっ外に出れるようになったのが嬉しいみたいで、今日もこれからサウスゴータを散歩したいとフッフ』

とか、

『ママママチルダさん! どうでしょう? 一緒にワインでも』

『申し訳ありません、クーさん。ティファニアをお風呂に入れてあげるようシヤジャル様より言われていました』

とか、

『マチルダさん! 今晚』

『ごめんなさい。テファがもう眠いらしく。モード大公より今夜は一緒に寝てあげるように』

……ガッテム!!

と、まあお邪魔なわけですね。マ・ジ・で!! 邪魔!!  
折角マチルダさんと一緒にいられるというのに、全然いい雰囲気にならんねえ!

俺としては『前世』も考えればぶっちゃけいい年なわけですから、そりゃR 15をすつとばしてペンキーエアゾーンなイベントにも突入したいわけなんです。

だというのに今日の前ではしゃぐ小娘のせいだ。

あのハグハグギュー以来、手すら繋げていないとは何事か!

あームラムラしてきた。あ、間違えた。ムカムカしてきた。

……いや、間違えてないな。ムラムラして来た!

「あの、クーさん?」

とはマチルダさん。

お? まさか俺の心情を察知したというのか? さすがは我が嫁

!

と、思ったが、まあ常識的に考えてそんなわけは無く、

「やはりテファも一緒というのは迷惑でしたでしょうか?」

「……いや、そんなことはないよ」

そう言っしかないじゃない! 面と向かって『お前の妹、邪魔アル』なんて言える奴がいたら連れてこい。

「俺としてもモード大公の懸念はもつともだと思っ。ティファニア嬢をオルレアンにという申し出に異論があるわけじゃないよ」

モード大公の懸念。そいつのせいで現在テファは俺たちと同行しているわけである。

さて、それではそろそろそいつについて説明しておこうか。

エルフであるシャジャルを『平民の妾』とするのが、今後アルビオンに内乱を発生させないための俺たちの策だった。

しかし、その策を採用すれば、同時に厄介な問題も浮上することになる。

そいつがティファニア。『始祖の血を引くモード大公の子』の存在である。

『平民の妾の子』。大公家を継ぐには問題のある身分であり、本来ならば庶子として扱われるのだろうが、しかしモード大公家にはティファニア以外の子供がない。平民の子であったとしても、ティファニアが唯一の大公の血筋の者となれば、当然彼女が大公家の跡取りとなるだろう。

そうなれば、フェイスエンジという見た目のみを変える魔法は逆に窮地を招くだろうというのがモード大公の懸念だった。

なにせモード大公曰く『テファはめっちゃ可愛い』らしいから、『アルビオン貴族のガキ共から求婚されまくるんじゃないかね?』という予測が成り立つらしい。

何も知らないアルビオン貴族とウチのテファとの間に子供が出来たら……。そう言った時のモード大公は般若の様な形相だったが、まあ言いたいことは分かる。

クォーターエルフ。その子の見た目から『テファがエルフの血を引いていた』とバレルの可能性は十分あるというわけだ。

となればテファを大公家唯一の血筋の者と知らしめるのはマズイ。ゆえにモード大公は一つの決断を下すことになった。

すなわち、ティファニアに大公家とは無縁の人生を歩ませる。

その結果がティファニアを、彼女が姉と慕うマチルダに同行させるということ。当然出自は隠し、マチルダさん付きの使用人とでもするつもりだ。

甚だ利用されているという感が強いがね。

「まあガリアは貴族よりも王家の影響力の方が強い。フェイスチェンジもあるし、俺の身内にディテクトマジックをかけようとする馬鹿もいないだろう。安心して貰っていいよ」

そして俺がティファニアを匿っている間にモード大公は養子を取るらしい。

アルビオンの魔法学院。ロンディニウム魔法学院にて優秀な成績を収めている者の中から大公家に相応しい者を選別し、万一に備え有力貴族らとの繋がりも強めるとか。

大公家に滞在していたヴァリエール公爵と、養子を二人以上取り、一人をヴァリエールに婿に出すのなんてどうだなんて話し合っていた。

エレオノールさんのツンドラアタックに耐えられる人材でないと、いろいろ御破算になりそうだし、多数の選択肢の中から選んだ優秀な人間を『大公家の人間』として迎えられるというのなら、モード大公家の現状は幸先良かったのかもしれないね。

「オルレアンに居る間は安全を保障しよう。国境守護ということを手練も多い」

ロマリアに侵入されるほどやわな体制を敷いているわけでもない。

「窮屈な思いはさせないはずだ。年に二度くらいはアルビオンに旅行に行くこともできるだろうしね」

「何から何まですいません」

「すいませんじゃなく、ありがとうと言って貰いたいね」

「クーさん」

おお、いい雰囲気じゃね？

「さんづけは止めてくれ。リュティスで兄上たちに紹介したら、俺たちは正式に婚約するんだから」

「クー……」

「マチルダ……」

チャ、チャンスだよな？ この勢いのまま上手くいけば、せせせ接

ぶ」ああー！！」

「お城！ お城ですよ、マチルダ姉さん！」

ティファニアの声でハツとなったマチルダさんに目を逸らされ……。

ぐぬぬ。このちんくしゃめが！

……はあ。

思っていたのは別ベクトルで厄介なモノを押し付けられたのか  
なあ。

まったく。勘弁してくれ。

## 49・ジヨゼフの本気

人間の持つ根源的な強さとは、其の者の窮地において初めて計れるモノである

クー・セタンタ・ド・オルレア

ン

……

……

……

ハッ！ 思わずなんか名言っぽいこと言ってしまった！

あ、どもども。クーです。現在リュティスに来とります。

アルビオンで起きた事のあらましの説明、つまりはウエールズとの繋がりが出来たことやらモード大公の弱みを握ったことやら色々ミスったことやらの報告のために。

ま、この場には第三者がいたもんだからエルフ関連の話までは言及できなかったんだが、メインはマチルダさんの紹介だったわけだしね。

そっちの話にしても、他国の貴族を公爵家であり王弟である俺が見初めたともなれば、まあ表向き『嫁探し』のためにアルビオンに旅行に行ったことにはなっていたけれども、なんらかのお叱りはあるかなあなんて懸念したわけだが。

……現状のそれはそれどころじゃない窮地ってやつですわ。ええ、イレギュラーに襲われとりまさあ。

はあ。心休まる時間はいずこに？



いや、今回俺はなんもしとらんよ？ アルビオンで嫌ってほど学んだしね。

俺は万能なんかじゃないってことはさ。

二人の兄を和解させて、ガリア貴族の不満を消すため国中を走り回って、トリステインの貴族とも対等に渡り合って、それで『俺って実はすごいんじゃない？』なんて伸びかけてた鼻がポッキリとやられたからね。あの空飛ぶ大陸じゃ。

俺は確かにチート性能を神さんから貰った。だが、それだけ。俺が神になったわけじゃない。物事を思い通りに動かせるというわけでもない。

そのことを散々叩きこまれたアルビオンから帰ってすぐ、俺自身が何かをやらかすなんてありえないさ。

つまり現状は俺の起こした事じゃない。こいつは目の前の髭の起こしたイベント。

というか既にイベント自体は終わっていて、今はその概要を説明されるところというわけです。

俺としちゃマチルダさんとティファニアを紹介して、それで兄二人に祝われたりからかわれたりして一件落着としたかったのに。

「すまん、セタンタ」

もう使われることなど少なくなった幼名で俺を呼んだのは上の髭。失礼、上の兄上、ジョゼフ宰相閣下。

いつもニヤニヤ笑ってる印象の兄が、心なしか憔悴している気さえする。

「お前がアルビオンから女を攫ってくるのと知っていればこの話は後日にしたのだが」

「攫って来たとか言つな。合意の上だから。相・思・相・愛！」

「くっくっく。あのセタンタが一人の女になあ。てっきりそちら方面にはまるで興味の無い変人なのかと思っていたが」

変人言うな。まあパーティーなんかでも女性と踊るよりも食事の並ぶテーブルに興味が行ってる様な人間だったが。

ちなみに俺と共に来たマチルダさんとティファニアはウチの母親に連れられ、部屋から出て行って今はもういない。

おそらく今頃俺の優秀さを母上からこんこんと語られていることだろう。これで好感度もうなぎ上りのはず。頼むぜマミー。

……あの母なら俺の話題よりも自分とダディの慣れ染めなんかをキヤイキヤイはしゃぎながらしゃべくってる気もするが。

「まあ俺の事は今はいいさ。で？ 説明はしてくれるんだよね？」

視線はこの場に居る俺たち二人以外の人間へ。

一目見て大方の事は理解したけどさ。それでも色々と疑念はあるわけで。

だつてさ。『彼女』が現在ここにいるってのは全くの予想外だったんだから。

いや、確かに『彼女』のことは原作知識で知っていたし、いずれは手を打たないとなあなんて考えてたりもしたけどさ。

あー、アルビオンからこっち、イレギュラーに振り回されてる気がするなあ。

歴史が変わりまくってるハルケギニアで、最早俺の予測は当てにできないってことかね。

元々原作知識という強力なアドバンテージがあったからこそ、先の事を予見できたわけだしな。

「ふむ。事のきっかけはお前のもたらした情報だな」

「はい？ 俺なんか言ってたっけ？」

『この件』に関してはノータッチだったと思うんだけど。

「ああ、そう言う意味ではなく。アルビオンに関する情報だ」

あー、モード大公家の。

でもそっから『彼女』に繋がるか？

「大公家の、王家に連なるモノの醜聞は国を容易く揺るがすほどの力がある。それはお前も理解しているだろうが。俺としてもアルビオンのそれも大事だと理解しているが、しかしそれ以上にガリアが気になってな」

「ガリア王家に醜聞がないか調べてみたってことか」

「ああ。まあ、念のため、という奴ではあったが。だがその念のためが幸いした」

「隠し子を発見したってわけ？」

「いや……」

そう言ったジョゼフ兄は一旦言葉を切って目を細めると、

「ガリア王家の風習、特に双子にまつわるモノをお前はどの程度知っている？」

「……聞いたことがあるかもって程度かな」

確か双子＝不吉で、どっちか片方を生まれなかったことにするとか

「いう奴だったか？ 由来は数千年前、兄弟で仲たがいした王族が血で血を洗う戦いをしたからとか。」

「それを回避するために双子は生まれた瞬間『いなかったことにしまえ』ってのは暴論すぎるとは思っけどね。」

「ふむ。まあ法で定められているというわけでもない単なる『風習』だしな。知らなくても仕方ない、か。簡単に言っただな、ガリア王家においては双子というものが文字通り認められないのだ。」

「……………それって聞かせちゃっていいわけ？」

視線は『彼女』の方へと。

「言ってみればその『風習』が自分が捨てられた理由なわけだから、あなたの子にとってみれば聞いていて楽しいものではないだろうに。」

「ああ。彼女には既に説明してある。酷かも知れんとは思ったが、本人が知りたがっていたというのもあったしな。」

「ふうん。」

「シャルルの子は本来シャルロット一人ではなく、シャルロットと彼女の双子だったというわけだ。ガリアにおいては『いなかったこととされる』双子ではあるが、親子の情がそっさせたのか。ともかく彼女は生かされ、しかし人目をはばかるために修道院へと送られた。セント・マルガリタ修道院。陸の孤島と呼ばれる場所だ。」

「よくもまあ今までバレなかったもんだ。髪の色で一目瞭然だったのに。」

「フェイスチェンジ。お前が使わせている魔法と同じ物だろう。ワケアリの貴族の子女らが入れられている修道院らしく、見た目から出自

がばれないよう、対策が施されていた」

あー。そういやそんなだったっけね。原作のことも十年以上前に読んだっけりだし既にうる覚えだけど、確かにフェイスエンジを有効活用しているシーンはあの修道院くらいだったかも。

「それで、あの子の存在を知った伯父さまが颯爽と救い出したってわけか」

「なに。偉大な弟の真似をしてみたにすぎないとも」

ウケケ。何言ってやがるんだか、この髭は。

さて、問題は山ほどあるし、聞きたいこともまだまだあるが、一応そろそろ自己紹介をしておこうかね。

『彼女』の名前もつろ覚えなことだし。

「少々遅れたが、名乗っておこう。俺はクー・セタンタ・ド・オルレアン。よろしく頼む」

俺の言葉に俺達兄弟の様子をじっと見つめていた少女は背筋をぴんと伸ばし、

「は、はい！ よろしくお願いします！ あ、えっと、私はジョゼツトです」

そう言ってペコりと頭を下げた。

と、ここまでで済んでたら、俺も現状を『窮地』だなんて呼んだりしなかったんだけどね。

ジョゼットが頭を上げるとほぼ同時に、ジョゼットの隣、ジョゼフ兄の横にたたずんでいた『彼女』もゆっくりと礼をした。

「お初にお目にかかります、クー様。わたくし、主、ジョゼフ様の使い魔として召喚されました者にございます。シェフィールドと、そうお呼びください」

ああ。そうだった。シェフィールドだ。

ったく。何時の間に使い魔召喚なんてしやがったんだ、この髭は。

しかも額にはバッチリとルーンが刻まれているし。ミヨズニトニルンに間違いないわなあ。

はあ。ジョゼフ兄が『虚無』だったなんて情報が広まれば、下手したら王位争いの再燃だぞ？

平穩がまた一步遠のきやがる。

ホントもう、勘弁してくれよ

## 50・ガリアの虚無

「は？ え？ 使い魔？」

まずはジョゼットちゃんよりシェフィールドさんの問題から片付けますかね。

問題は山積みだけど、げんなりしたから放置ってわけにもいかんしね。

というわけで、俺はシェフィールドさんの自己紹介に聞き返す。

まあ原作知識があるから聞き返すまでもないんだが、一応、ね。人間が使い魔ってのは相当イレギュラーなことだし、驚いている風は装わないと。

さすがに『前世』のことまではジョゼフ兄にも知られたくはない。これだけは墓の下まで持って行くさ。

「はい。わたくしはジョゼフ様の使い魔にございます」

「……あー、ミス・シェフィールドはこう言ってるけど、ホントに？」

「ああ。本当だ。シェフィールドは俺が召喚した」

俺の問いに肯定を返す出来立ての主従。

むーん。まずは疑問のほうから晴らしていきますか。

「使い魔の召喚、ね。そういう儀式があるってのは魔法に興味のない俺でも知ってるけどさ。なんで召喚なんてしようと思ったわけ？」

ぶっちゃけきっかけがわからない。

今のジョゼフ兄を取り巻く環境は、魔法が使えないからと言って無

能だとそしられていた頃とは違う。魔法なしでも国を支えることができる、この数年ですっかり実感できていただろうし、最近じゃガリアの民からは国王シャルルを支える有能な宰相として、『王佐』のジョゼフ、なんてどこぞの文若様や公瑾様のような二つ名までついている始末。使い魔を従えるというメイジらしさを今更求めるとは思っ  
てなかったんだが。

いや、やっぱり魔法が使えないことへのコンプレックスは消え去っていないってことかね？ 俺なんかとは無能扱いされてきた年季が違っただしさ。

そうなるとまた違った懸念が生まれちまっわけだけど。原作で『記憶を消されたルイズ』が『虚無の聖女』としてロマリアに持ち上げられて舞いあがったみたい、暴走してしまっんじゃないかって。怖いものな。

「きっかけは先ほども言ったようにジョゼットだ」

ふむ。とうなずいて先を促す。

視界の端で小動物チックにジョゼットちゃんがオロオロしているのが、ちよいと気にはなっただけだね。

「ジョゼットがセント・マルガリタ修道院にいるということまで掴んで、それでも放置するという選択肢はなかった。わかるな？」

「わかるよ。シャルロットというガリア王位継承権第一位保持者とそっくりな双子。よその人間に見つかれば利用されることは目に見えている。シャルル兄を通してガリアと取引をしようとするか、それとも人質としてガリア王家への脅迫材料にでもされるか、はたまたシャルロットと入れ替わりをさせてガリアの王位を取らせ、傀儡のよう  
に操るか。まあ碌なことにはならないだろうね」

実際原作のロマリアはジョゼットを利用していたわけだし。



「可及的速やかにジョゼットを保護する必要があった。しかし事が事だけに部下は使いにくい」

「まあねえ。よそに気づかれればそれだけで不味いことになりかねない以上、大々的に動くわけにはいかないし」

「任務にあたらせる人材についても問題だ。ガリアに忠誠を誓っている貴族を使ったとしても、王家の慣習をシャルルが破っていたことが知られてしまう。だからと言って忠誠心のない人間を使うわけにもいかない」

「見事なまでに八方ふさがりだね」

俺ならどうしたかな。

やっぱり自分で動くのが一番だろうけど、俺が動くってのはそれだけで目を集めることになる。

ワケアリの子女ばかりを集める修道院というのなら、そういう方面では有名なんだろう。となれば俺が其処に赴いたという事実だけを材料に、王家ゆかりの人間がセント・マルガリタ修道院に預けられているのではないかという推量をされてもおかしくはない。

水の精霊サマに頼んで嗅ぎまわる輩用にアポトキシン4869でも開発して貰っちゃまうか。

「そこで使い魔だ」

「……段階を二三吹っ飛ばしてる気がするの俺だけか？」

「くっくくく。まあそんなのかもな。ふと思ひ浮かんだのだが、今思い返せばびっしょりしてそのような思考に至ったのか、俺自身不思議だよ」

どついうわけか思い浮かんだっけか。

まさか世界の修正力だとかそんな感じの不思議パワーは働いてないだろうか？

「使い魔とは主と一心同体だと聞いていたからな。裏切る心配はなく、また王家に対しての不満も持たないだろうと踏んだのだ。俺自身に対しては何か思うかもしれないがな」

と、そこで今まで沈黙を守っていたシェフィールドさんが横から、

「私はあくまでジョゼフ様の忠実なしもべにございます。思うところなど、あるとするならば、それは全てジョゼフ様への敬愛の思いのみでしょう」

「くっく。くすぐったい言葉だ、シェフィールドよ」

……oi misu ミス おい紀伊店のか？

いちやついてんじゃねえぞコノヤロー。

パルパルパルパル！

「まあ使い魔に思い至ったとは言っても、俺のことだ。十中八九失敗すると踏んでいたのだ。仮に召喚に成功したとしても、竜やグリフォンのような直接ジョゼットを連れ戻せるような立派な生物など召喚できないだろうと思っていたのだがな」

蓋を開けてみれば人間が出てきちゃった、と。

まあ状況を考えれば使い魔の契約で縛った人間ってのはジョゼット救出に最適な人材だったんだろうけど。召喚に応じて現れたのが人間だった時のジョゼフ兄はいつたいどんな顔してたんだろうね。この人の驚いてる表情ってのはかなりレアだから、見たかったような気もするわ。

ま、それはそれとしてシェフィールドさんを召喚した理由は大体つかめた。

じゃ、次の質問に移りますかね。

「そついや使い魔ってつたら普通は動物だよな。魔法に関しては興味ナシだったから不勉強なんだけどさ、人間の使い魔ってありえるの？  
まあミス・シェフィールドの額にルーンっぽいのはあるけどさ」

俺が今の質問で探りたかったのは、ジョゼフ兄が何処まで掴んでいくか、だ。

人間を使い魔として召喚するイレギュラー。それに対してこの異常に頭のいい兄が何の疑念も感じないはずがない。

サイトでさえ剣を手にすることで己の特異性を早い段階から気づいていたんだ。

シェフィールドさんがマジックアイテムを自在に操れることまで、すでにジョゼフ兄が検証し終わっていてもおかしくはない。

まあさすがに虚無云々までは気づいていないだろうとは思いますが

「ミヨズニトニルンという名を聞いたことがあるか？」

うぼあー。

え？ マジで？ そこまで調べがついてるわけ？

どんだけ有能やねん。むしろ俺と同じ原作知識持ちなんじゃないかと疑えてくるわ。

「無いね。使い魔が人であることを指す言葉とか？」

「六千年前、ハルケギニアに降り立った始祖は四体の使い魔を連れていたとされている。神の左手ガンダールヴ。神の右手ヴィンダール

ヴ。神の頭脳ミヨズニトニルン。そして名すら残されていない四体目。シェフィールドの額に現れたルーンはミヨズニトニルンのものだった」

「はー。ジョゼフ兄が始祖のことに詳しくあったとは知らなかったねえ」

「くっくっく。俺もシェフィールドのことが無ければ知ることはなかっただろうがな。まあ今必要な話はそんなことについてではないだろう？」

そつだよなあ。

ジョゼフ兄はシェフィールドさんがミヨズニトニルンだと確信している。おそらく実際にマジックアイテムに触れさせるなりして確かめてもいるだろう。

となれば、ジョゼフ兄が虚無の担い手だということもまた、確信に近いものを持っていると考えるべきだろうね。

「ズバリ訊くけどさ。王位には？」

「安心しろ。今更シャルルの代わりになどとは考えんさ」

そいつは重畳。というか即答されたってことはジョゼフ兄も俺と同じ可能性を懸念しているってことだよなあ。

「くっく。あいも変わらず理解の早いことだ。シェフィールドの額のルーンが始祖のそれと同じだと聞いて、まず出る質問が王位について、だからな」

「元『光の御子』としては、そついうのに敏感なんだよ」

「なるほど。お前はすでに教会の動きというものを経験しているのだったな」

まったくの不本意ながら、だけどねえ。

なんせミヨズニトニルンの存在はジョゼフ兄が虚無の担い手であることを示す強力な証拠なわけだし。

虚無の担い手。ぶっちゃけ『光の御子』なんて目じゃないほど価値のある肩書だ。

なんたって始祖の魔法を使う『始祖の再来』なわけだから。

始祖の血を引く＝王に相応しいという図式の成り立つハルケギニアじゃ、始祖の再来である虚無の担い手はそのまま王に最も相応しい人間ということになる。

今更シャルル兄を排してジョゼフ兄を王に、なんて言い出す輩はないとは思うが、ロマリアあたりに出しゃばられたらどうなるかはわからない。

俺の平穩のためにもヤバイ未来の可能性には対策を講じておかないとね。

「始祖の使い魔と同じルーンがジョゼフ兄の使い魔に刻まれた。つまりはジョゼフ兄には虚無の才能があったことが予測されるわけだ」

「ああ。虚無の担い手。王位に就くのにこれほど強い肩書は無いだろう」

「ロマリアあたりが騒ぎそうだね。正当な王に王位を譲れって」

「もっともそこまでされれば逆に動きやすい。内乱を起こさせようとする事と同義なのだから。始祖の血を引く王家を分裂させようとする狂った教会。そうとなれば討つことすら可能になるだろう」

「やだねえ。坊主は嫌いだけど争乱はもつと嫌いだよ。平穏安穩こそ至高でしょ」

「ふむ。セタンタならばそう言うだろうとは思っていたがな。では俺たちの取る選択は」

「この件は秘密に」

とはいえ『秘密』がどれくらい効果あるものか。

シエフィールドさんの額のルーンはフェイステンジンなりを使えば隠しきれぬだろうし、虚無なんて伝説上の存在にすぐに思い当たるような奴はロマリアの狂信者くらいのものだろうけど。

突然ジョゼフ兄の周りに身元不明の女性が現れたってのも噂を呼びそうだけど、そこらへんの情報工作はジョゼフ兄に任せましょ。

「あ、あの……今のお話。私、聞いちゃってよかったんでしょうか？」

あ、小動物（ジョゼットちゃん）のことすっかり忘れてたわ。

……いや、大丈夫だろ！

目の前のジョゼフ兄が非常に珍しいことに冷や汗かいてたりするけど、大丈夫なはず!!

「……ちなみに、理解できたかい？」

「あの……なんか大変っばいなあというところくらいしか」

セーフ？ まあ魔法の教育すら受けていなかったみたいだし、肝心なところは理解できていないだろうけど。

きっちり口止めしとかないとな。

というか、ジョゼフ兄はこの子のことどうするつもりなのかね？  
シャルル兄のもとに返すってのは、それはそれで問題が起きそうな  
気がするんだが。

……まさかティファニアに次いでジョゼットの世話まで押しつけ  
られたりしないだろうな？

まだまだ一件落着とはいかないってか。

嗚呼。マチルダさんにハグしてもらいたいぜ。

## 51・ジヨゼットちゃんガンバル!

ジヨゼットちゃんにジヨゼフ兄が虚無であるかもしれない云々という話を聞かれてしまったが、まあ取りようによっては悪い話というのでもないのかもしれないね。

シエフィールドさんの話も終わり、用意されていたワインを口にしながら、現状のマイナスとプラスを考え、俺は結論としてそう思った。なんせジヨゼットちゃんはシエフィールドさんの額のルーンを見てしまっている。

その上シエフィールドさんは自己紹介で『ジヨゼフの使い魔』であるとまで言っているのだ。

今後のジヨゼットちゃん次第だが、貴族の子女として生きるというのなら魔法についても学ぶことになるだろう。

当然使い魔の召喚をジヨゼットちゃん本人がすることになる可能性も高い。

その時に人間が使い魔として召喚されることが普通ではないということには気づかれる可能性も高くなり……。

要するにジヨゼットちゃんにシエフィールドさんの存在を隠すよと言い含めることは必要事項だったわけだ。

となれば、今話題に出た『ジヨゼフ兄が虚無だと知られれば大変なことになる』という情報は、ジヨゼットちゃんを口止めする際説得力を増してくれるだろう。なにせそれがバレれば内乱が起るとまで言っちゃったし。

まさかジヨゼットちゃんが戦争LOVEな大隊指揮官殿のような性癖は持ってないだろうしね。

「一応言っておくけど、今の話は他言無用ね。ジヨゼット」

「は、はいー！ わかりましたー！」



そういつてジョゼットちゃんはコクコクと高速で首を縦に振る。  
……別に威圧感を出してるわけでもないんだからそう緊張しなくてもいいのにな。

さて、と。

それじゃ話を戻しますかね。

シエフィールドさんの話は終わったし、次はジョゼットちゃんのことについてだね。

まあなんとなくはわかるよ。ジョゼフ兄が何故俺にジョゼットちゃんのことを説明したのかはね。

そりゃ自分の考えだけでジョゼットちゃんの処遇を決めたりせず、第三者の意見も聞きたかったというのがもあるだろう。

そのとき話し相手として候補に挙がるのは腹を割って話せる相手であり、かつ、王家を裏切る可能性など皆無な人間、すなわち俺くらいしかいないということもあるだろう。

でも、やっぱり……。

はあ。どういつ話になるかは予想できちゃっただよなあ。

「じゃ、本題に戻ろっか」

「そうだな。もともとジョゼットのことを話したくてセタンタには残ってもらったのだからな」

そうなんだよなあ。

マチルダさんとリユティスでも見て回りたかったのに。

「シャルル兄のもとに返すわけにはいかないよねえ」

「そうだな。王とは言ってみれば貴族のあり方を示す生きた象徴だ。たとえ双子を認めないのが法ではなく風習だといったとしても、それ

を破っていると知られるわけにはいかない」

「双子を認めない風習、か。そいつ自体をつぶすことは？」

「容易ではないな。かつてガリアは王家に双子が生まれたがゆえに二つに割れて争った。かの風習はその名残だ」

「王家の紋章が二つの杖の交差する様になっているのもその名残だものねえ。王家を示す紋章を変えるレベルのオオシゴトってわけだ」

となるとジョゼットちゃんをシャルル一家に戻すってのは難しいだろう。

ジョゼットちゃん本人の意思もあるだろうしねえ。

言ってみれば彼女はシャルル兄夫妻に捨てられた人間だ。

シャルル兄たちは選んだのだ。ジョゼットではなくシャルロットを残すと。

その親の元にジョゼットちゃん自身が戻りたいかと尋ねれば……答えは聞きたくないねえ。どちらの答えが返ってくるにせよ、ねえ。

「まったく。アルピオンでも散々思ったことだけど、王家の人間ってのは正直過ぎるよなあ。小細工ってのをもうチョイ考えてくれてもいいのに」

やりようなんていくらでもあっただろうに。

確かに青い髪ってのは王家とのつながりを示す。しかし『王家の正式な子供』であることを示しているわけじゃあない。

俺のように妾との子供だって青い髪は現れる。

ならシャルル兄の妾の子供として公表しちゃえばよかったんだ。シャルル兄は妾なんてとりそつにもないけどさ。

あるいはジョゼットの存在を一年遅く公表するとかさ。シャルル家の第二子として。

成長の遅い第一子と、成長の早い第二子。あり得ない話じゃないだろう。世の中には姉妹に見える母娘だっているのだから、双子に見える姉妹がいたっていいだろう。

シャルル兄は人望があつたんだ。わざわざ『シャルルは子供が双子であつたことを隠しているのだ』なんて不敬な疑惑を声高に叫ぶバカも出ないだろうに。

そもそもジョゼットちゃんの存在は兄弟である俺たちにすら隠されてきていた。

双子が生まれたから王家の風習にのっつて片方を『いなかったこと』にした、なんて法を順守しているぞアピールをしたかつたわけでもないのだろう。ならばなおさらジョゼットちゃんを助ける道を模索するべきだつただろうに。

「そついつな。全ては過去のことだ」

「そつだね。考えるべきはこれからのこと、か」

まあ当時のシャルル兄は王位に執心だつたからね。

万一にもジョゼフ派に付け込まれる隙を作りたくなかつたんだろつなつてのはわかるけどな。

「ついつても選択肢なんて二つしかないんだろつけど」

「ふむ。そつだな。事情を知らないものに預けるわけにもいかないだろつ」

となればジョゼフ兄か俺か。どちらかがジョゼットちゃんを引き取ることになるだろうね。

シャルル兄との関係性を第三者に悟らさないために青い髪こそフェイスチェンジなりで隠す必要があるだろうが、それでもなるべくなら不自由なく生きてもらいたい。

「加えるならば、リュティスにジョゼットを居させるのは避けたいというところだな」

やっぱりそう来ますか。

まあ理屈の上ではそっちに分があるだろうけどね。

「そうなるか。シャルル兄と鉢合わせる可能性も高いしね」

「シャルルにはいずれ説明するつもりではあるが、な」

捨てられた側と捨てた側。顔を合わせづらいことだろう。

それによってシャルル兄の行動が乱れば、勘ぐってくるやつも出かねないしね。

「俺としてはオルレアンにてジョゼットには生活してもらいたいと思っている。リュティスに居させるよりも安全だろうし、ラグドリアン湖があるオルレアンならば休暇の名目でシャルルらも足を運びやすいだろうからな」

……はあ。

ま、いいさ。ここまで来たらジョゼットちゃんも面倒見ますわ。

もともとティファニアのために余所からの目には警戒する予定だったしね。ジョゼットちゃんのことも隠し通せるでしょう。

マチルダさんの愛の巢(予定)に人が増えるのは歓迎できないけど、ティファニアの遊び相手になってくれれば邪魔され率も減るかもしれないし。

まあそのことを受け入れた一番の理由は、俺とジョゼフ兄とでジョゼットを押し付けあうみたいなのが嫌な議論をジョゼット本人に見せたくなかったのがあるんだけど。

「わかつ」「あ、あの一!」「」

と、腹を決めたところで当のジヨゼットちゃんが口を挟んだ。

見れば胸の前で両拳を握り、耳まで真っ赤にしているではありませんか。あらかわいい。

「私は、あのっ、ジヨゼフ様と一緒にいたいです!」

……あらかわいいw

ジヨゼフ兄はといえばポカンと口を開けていた。あらかわ……いや、こっちはどうでもいいか。レア顔だけど。

「あつ、その、そのっ、恩返しがしたくて! 私を助けてくれたジヨゼフ様に! そのっ、なのでここに置いてはもらえませんがございませんでしょうかです!」

「……使い魔だけじゃなく姪まで落とすとか。スゲエな兄貴。イザベラになんて説明するんだよ」

「ちよつと待て、セタンタ! 何を言っている!? ええい、ニヤニヤするな!」

ウケケケケ。いや、ニヤニヤするっての。

そういや原作でのジヨゼットは乙女回路内蔵型美少女だったものね。

つまり『このジヨゼット』にとってジヨゼフ兄は原作での『竜のお兄様』的ポジションになったってことだろう。

牢獄のような修道院から救い出してくれた白馬の王子様(笑)。いや、王子様(髭)かw

あー、楽しい。あのジヨゼフ兄がオタオタしてやがる。

ま、でもこれでジヨゼットちゃんの処遇は決定だな。



## 52・ラグドリアン湖の中心で

キーコキーコと小舟をこぐ。

魔法を使えば一発だろうし、そうでなくとも水の精霊サマに頼めば舟など軽く運んでくれるだろう。ラグドリアン湖なわけだし。

しかしやっぱり自分の力で櫂を動かしてこそだろう。

湖で小舟でデート。素晴らしく甘美な響きだと思っわけだよ。

フフ、フフフフ

そう！ こいつはデート！ マチルダさんと二人っきりの、テラスイートなデートなのよさ！

出し抜いてやったぜ、ティファニアめ！

フハハハハ！

おっと、テンションが上がってしまった。どもつす、クーです。

あのジョゼット騒動から数か月。長くもつらい時間だった。

いや、ジョゼットちゃんがオルレアンではなくジョゼフ兄を選んだってことで負担は減ったと思いたいんだけどね。

事実今後のジョゼットちゃんの処遇に関してはジョゼフ兄に一任出来たし。なにか仕事でも押し付けられちゃあかなわんってなもんで早々にオルレアンに帰っても来られたしで。厄介事なんてなかったんだけどさ。

でも……つらかったんすよ。俺。

だってさ、だって。

オルレアンでは四六時中マチルダさんとティファニアがイチャイチャしてんねんもん！

あんの小娘ときたら、マチルダさんに甘えてばっかりで。

せめて寝所くらいは別にしてくれよ。

そうすりゃ夜這……ゲフンゲフン。夜のデートに誘えたかもしれないってのに。

だが、俺は勝った！

ついにティファニアを出し抜くことに成功し、マチルダさんと二人でのデートにこぎつけることが出来たのだあ！

そりゃ顔もにやけるってなもんですわい。

「クー？」

おっと、折角のデートなんだ。チンチクリンのことなんて考えていたらもつたいない。

「どうしたかな、マチルダ？」

「えっと、行きすぎじゃないかしら？」

おお？ 言われてみれば確かに。

まあ腕力はランサー並みだからな。

「それもそうだね。ここらへんで少しのんびりしようか」

そういつて櫂を小舟へと引き上げる。

のんびりまったり。静かな湖面を眺めながらぼうつとしているのも悪くはない。

きらきらと太陽を反射するラグドリアン湖はどこか壮大ですらあり。

こういう日には、詩才のない自分に腹立たしくなったり。

なあんで片目の大将みたいなことを思ってみたりも。

……あふう

「いい天気だ。眠気を誘つ」

「少し横になる？」



「そいつは勿体ないかな。折角の二人きりの時間だ」

うん。もったいない。

眠ってる時間のごとは記憶できないからね。

むしろ時間が冗長に感じるくらい退屈なほうが嬉しいのかもしれない。

「あら、膝を貸してもよかったんだけど」

「是非に」

……いや、拒否はできないでしょ。

んなもん即前言撤回だつての。

「ふふっ。ぶっぞ」

うにゃーん。マチルダさんのひざまくらだあ。

太ももモフモフしたいお！　くんかくんかしたいお！

「あっ、うつ伏せじゃなくて仰向けにして下さ、あんっ、ちょっ、クー」

「アハハ。ごめんごめん」

怒られちったから今度はちゃんと仰向けに。

いやあ、堪能させていただきました。正直、たまりません。

「もっっ」

なんて口にしなからマチルダさんは俺の髪をなでてくれたり。

ああ。癒し効果パネエっす。

「じじやっつ」

「ん？」

「じじやっつてのんびりするのも良いものね」

片目を開けて見上げれば、湖を眺めるマチルダさんの横顔が。

「アルビオンに居たら、なにも心配せずに、ゆっくりと景色を眺めることなんてできなかつたでしょうから」

「ティファニアのことかい？」

「……テファとシャジャル様のごことは、常に意識していたから」

まあ楽観は出来なかつたろうけど。

「今は平気さ。シャジャルさんのことはモード大公に任せても平気だし、万が一の場合も俺が大公のバックにいる。ティファニアだって同じさ。オルレアン<sup>じ</sup>は俺を慕って付いて来てくれた連中で固めているしね」

ちなみに古株の臣下にはティファニアのごことはそれとなく注意するようになっている。

さすがにエルフであるとは教えていないが、常にフェイスチェンジが必要だ、と。

見た目での差別なんて地球だけの話じゃないからね。

今のティファニアは少し普通と見た目が違うだけで不当な扱いをされてきた貴族の子供だという認識をされている。それを俺の婚約者であるマチルダさんが使用人として引き取った、と。

「こう言っておけばオルレアンにいるのは気のいい連中だ。今の素直に笑うティファニアを見て、その笑顔を壊したいなんて思ったりはしない。安心できるというものだ。」

「今日も連中に預けていることだしね。バツソやレティシアも可愛がってくれている。」

「クーには感謝してもしきれないわ」

何度も聞いた言葉。

ただ、少し不満だったり。

「感謝してくれるのもうれしいけど、それだけで俺を受け入れるってのはやめてくれよ?」

弱みに付け込んでだったり、感謝されていることを利用してだったり、そういう形で結ばれるってのはどうかと思う。

俺は貴族だ。王家に連なる公爵だ。その必要があるというのなら、特に好きでもない相手とだって結婚するさ。

でも、やっぱり『前世』が一般人だった身としては自由恋愛してみたくかったり。

それにマチルダさんは心から好きになった人だ。一緒にいたいと思うが、マチルダさんの意思を無視してまで手に入れたとは思わない。

だから、感謝の言葉は不満でもあり、そして不安でもある。

「私が恩を返すためだけにクーとの婚約を受け入れたかもしれない?」

「信じたくはないけどね。少し怖いんだよ。感謝の言葉は聞かせてくれるけど、君自身の思いは口にしてきてないんじゃないかって」

サリりと髪が撫でられる。姉のような仕草が似合うのはティファニアで慣れているからなのかな。

俺はそれを受け入れながら目をつぶる。

こういう時『コミュニケーション』は逆に足枷になる。

相手が何を思っているのか。何を話そうとしているのか。それとなく感じ取れてしまうから。

「クー」

反応は返さない。ヘタレだなあなんて自分自身情けなくも思っけどわ。

「それを言うなら私もクーの思いは聞いてないわ。クーは私が欲しいとは言ってくれたけど。私を手に入れて離さないとは言ってくれたけど」

そうだったっけか？

まあ、それは、………なんというか申し訳ないな。

しかし言えと言われていうというのも恥ずかしさが倍増するといつか。

「クー？」

しかし無言というわけにもいかないか。

俺が不安を感じていたようにマチルダさんも不安を感じていたのだとしたら、それは俺にとってもとても悲しいことだろうから。

「俺は、……俺は君が好きだ。マチルダ。君のことが好きだよ。多分、君が思ってるよりもずっと、俺は君のことが好きだ。こうやって、傍にいただけで幸せを感じられるくらい。君が俺の人生に必要なだと確信できるくらい。君が俺のことを思ってくれる何倍も、君のことが好

きなんだと思う」

「私のクーへの思いの何倍も？」

「ああ。君よりもいや、きつと他の誰にも負けないと思う。他の誰にも負けないくらい、もっとずっと深く、君のことを」

「フフッ」

不意に聞こえた小さな声を意外に思って目を開ければ、そこには笑みを作って俺を見つめるマチルダさんの顔。

覗き込まれるようにして俺と目を合わせたマチルダさんは小さく笑って、

「私よりもなんて、そんなの信じられないわ」

「俺は、本当に」

しかし言葉は続けられなかった。

視界いっぱい広がったマチルダさんの顔に少し驚き、

不意に訪れた、俺の唇に何かに触れた感触に、

俺は、

## 53・V S・ティファニア

おひさー。クーです。気づいたら十四歳になってました。

思えばマチルダさん（＋）が我がオルレアンに来てから二年半。色々なことがありました。

マチルダさんとの色々は……まあ俺だけの秘密にしておきたい色々だったりしますが。にゅふふ

俺の周囲だけでなく世界情勢なんかも色々と動きました。

やっぱ一番でかいのはアルビオンのモード大公家が養子に迎え入れたスクウエア、ケヴィン・オブ・モードとトリステイン公爵家の長女、エレオノール・アルベルティーン・ブル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール嬢の婚約発表ですかね。（規模的には俺とマチルダさんの婚約発表でのガリアの盛り上がりの方が大きかったけど）

始祖の血を引く三王家のうち二王家、アルビオンとトリステインの王家の血縁者同士がくっつくとなれば、そもそも大騒ぎでしたよ。まあケヴィン君がモード大公の実子でない以上アルビオン王家の血はヴァリエール公爵家に混じることはないんですが。まあ政治的には問題ないし、むしろジエームズ一世の許可も取りやすくなったしね。

俺も会ったことがあります。ケヴィン君。まあアルビオンとトリステインがくっつくというのにガリアが傍観するというのもあれでしたし、ウエールズにも呼ばれましたしね。

ケヴィン君はなかなかの好青年でしたよ。どことなく気の弱そうな感じもしましたが、学者タイプのメイジだそうですし、エレオノールさんとも話は合うんじゃないですかね。まあ祖国の王家からも応援されている以上、エレオノールさんのツンドラに耐えられなくなつて逃亡ということも無いでしょう。

ウエールズが次は私の番だ、なんて呟いてたことは、まあ割愛というところで。

ガリア国内のことだったら印象に強く残っているのはジョゼットちゃんのことですかね。

ジョゼットちゃんがジョゼフ兄のところまで世話になり始めてしばらくして、このままシャルル兄にジョゼットちゃんのことを秘密にしておくのもアレだろうという話になりました。

で、俺とジョゼフ兄の立会いの下、会わせることになりました。

……うん。

出会いがしらに腹パンはどうかと思うんだ。

これで許してやるよ、お父様あ!! なんて言ってたけど、なんだかシエフィールドさんの影響が心配です。マジで。

今ではイザベラやシャルロットとも普通に会えているらしい。さすがにシャルル兄の娘と公表することは出来てないけど、『双子を認めたりなんかしないぜ』慣習が無くなればそれも改善されるでしょう。ジョゼフ兄とシャルル兄が色々動いている以上、時間の問題だとは思っ。

さて、こんな所かね。

そろそろ現実逃避に過去を振り返るのも限界ですか。

チツ。仕方ない。と俺はティファニアへと向き直り、

「で、なんだって?」

「ですから、魔法を教えてください」

……こんなこと言い出すだもんなあ。

「魔法ならちゃんと家庭教師をつけているだろう。それで不満ならレティシアにでも教えてもらえ」

「私はクーさんに教えてもらいたいんです」

ふん。上目遣いはマチルダさんのいる俺には通用しないぜ。

それに、意図が見え見えなんだよ！

どうせ俺が魔法を苦手としていることを誰かに聞いてるっだろう。それでマチルダさんの前で赤っ恥をかかせようという魂胆なんだ、このロリ巨乳は。

「……義兄さんと呼べば考えてやらんことも無い」

「……マチルダ姉さんに言いつけますよ」

ゴロゴロゴロゴロゴ、って感じの擬音が聞こえてくるぜ。

ムニッと俺がティファニアの頬をつねれば、

グニッとティファニアが俺の頬を引っ張ってくる。

……ゴ、このガキ

「俺の魔法なら何度も見せてるだろうが！ お前のフェイスチェンジだって俺がやってんだぞ！」

「それは水の精霊様をお願いしてるだけじゃないですか！ いいから教えてくださいよ！ 中庭でマチルダ姉さんも待っていてくれるんですから！」

「やっぱそれが狙いか！ こんのガキ！」

「ガ、ガキってなによ！ クーだってガキじゃない！」

くそう。周りの家臣たちも止めやしねえ。それどころか生暖かい眼で見えてきやがるし。

この二年で『みんなの妹、ティファニアちゃん』のポジションを作り上げやがったからなあ。



まあさすがに外からの客が来ているような状況では自重しているが。

「……先月リュティスに行ったときにシェフィールドに預けちまえばよかった」

「そしてマチルダ姉さんもリュティスで生活するんですね。わかります」

ぐぬぬ。ないとは言いい切れないのがつらいぜ。

「いいから、行きますよー！ ほら、マチルダ姉さんが待ってるんですからー」

「イデ！ イテテ！ おい引っ張るな！ とりあえず離せ」

「離れたら逃げるんでしょ！ バッソさんから聞いてますよ。クーさんは魔法の勉強になるといつも逃げ出してたって」

「あ、あの野郎。この前酒場の姉ちゃんに見とれてたってレティシアにチクってやる」

なんだか城内で黒い気が膨れ上がったような気もするが気にすまい。

つかマジで痛いんで一旦離そう？ ね？ いい子だから。

「って、もう中庭出てるじゃねえか！ お願い、ティファニアちゃん！ 今日の夕飯にニンジンが出たらあげるから！ だから離してー！」

「いいりませんー！ ふふ。マチルダ姉さんにガッカリされればいいんだわ」

「黒い！」の子黒いよー！」

「黒くありません！ 私は美白だってマチルダ姉さんもお風呂で褒めてくれました！」

……いいなあ、一緒にお風呂。ってそうじゃなくて！

「お待ちせー！ マチルダ姉さん！」

「ぎゃああああああ!!」

結局、見せつけてやりましたよ。

俺の渾身の『ライト』を。

ハハッ。無様にぶっ倒れたけどね。

だが、この程度じゃ俺とマチルダさんの愛は壊れたりしないんだよ

！

ティファニアには、マチルダさんの膝枕で介抱されている俺を悔しげに見ているのがお似合いさ。ウケケケケ！

## 54・内政チート

オッス。おらクー。おめーら元気にしてたか？

最近十五になりました。なんだか無性に盗んだホースで走り出した気分です。

最近はおルレ안의統治も軌道に乗り初めまして、そろそろ一人前と認めてもらってもいいような気がします。といっても大したことではないんですけどね。

そもそもシャルル兄の継承式典用に街道やら街並みやら綺麗にしたらからそう経ってないわけで、定期的に配下のメイジに固定化さえかかせておけばそれだけで『ガリアの誇る水の都』は維持できるわけです。

あー、水の都ですか。まあ、なんですね。そんな感じに呼ばれてます。我がおルレアン。

ま、察しはつくとは思いますが水の精霊サマのお蔭ってやつですわ。

元々は無限に分裂できる上に何故か俺を気に入ってくれている水の精霊サマが頑張ってくれば、治安維持や他国からのエージェント（笑）に対して有効なんじゃないかと思ってたんですけどね。そのために街中に水道引いたりしてたんですが、やっってるうちにちよつとノってきちゃいまして、噴水だのなんだの作りまくっちゃったわけですわ。

元々景勝地として名高いラグドリアン湖があるおルレアンでしたが、一気にハルケギニア最大の観光名所に成りあがりました。つか観光事業で年間何万エキュー（あれ？ 桁が一つか二つ違つかも。ま、いつか）も稼いでるとか、ハルケギニアでもウチくらいです。

で、そんなこんなしているうちに人も増えまして。景気が良い 平民が増える 経済が活性化する 税収が増える 使い道ないしリュティスを習って公共事業でもやるか 平民増える 以下ループ、とそ

んな感じに王家直轄領だったところに比べて人の数が数倍になったりしました。ま、税率が低かったり亜人討伐にM.V軍団が精力的だったりすることも、平民が流入してくることの二因かもしれません。連鎖的に隣領で交流もあるモンモランシ領が潤ったりもしてますが、まあその辺は割愛ということ。

で、ハルケギニアってのはある意味ワンパターンなんですかね。何らかの形で目立つと厄介事がやって来るってのはテンプレなのかもしれない。

ま、今回の死亡フラグとは無縁っぽいのでどっちかというところ『面倒事』というべきかもしれませんが。

いきなり呼びつけられましたよ。兄ズに。マチルダさんとティファニアと、それと数名の護衛を伴ってリュティスに来とります。ま、彼女たちはイザベラやシャルロットやジョゼットと遊びに来たようなものですが。

……唯一気がかりなのは最近マチルダさんとシエフィールドが仲が良いっぽいところなんですが……どうか毒されませんように。

閑話休題ってことで。さて、髭共の『面倒事』に脳みそ使うことにしますかね。

「はあ。ま、なんとなく理解したよ。つまり、『平民が潤いすぎていく』ってのが問題なわけだ」

相對してるのはシャルル兄とジョゼフ兄。

ちなみに王位についているシャルル兄だけど、他の臣民がいない時なんかは普通に接しろと言われてる。本人も『兄弟』として会うときにはあえて王冠を脱いだりするしね。なので敬語はナシです。

「問題、というには語弊があるけどね。平民もガリアの財産だ。彼らなくして国は語れない」

「是非ともアホ貴族に聞かせてやりたい言葉だねえ。ま、そんなアホ貴族の旅行先として潤ってるオルレアン<sup>ウ</sup>としては大きく出れないところもあるんだけど」

ちなみに俺がリュティスに呼ばれたのは『相談があるから』ということだった。

相談事は先述した通り平民が裕福になりすぎているということ。ま、パッと見なんでそれが不味いのか分かりにくいことではあるんだけどね。裕福な人間が増えるということは『前世』の価値基準で判断すれば『良い事』に他ならないし。

では何故『平民が富むこと』が不味いのか。まず思い浮かぶことといえば、

「貧乏貴族が僻んでるとか？」

ガリアは広大だ。中には傘張り浪人の如く食い詰めている貴族だっている。大抵は無茶な増税を課したりして民を苦しめ、結果経済を停滞させるといった悪循環をスタートさせたバカなんで、同情の余地もないんだけど。

「そちらは兄さんが抑えたよ」

「ああ。リュティスで過去何を行ったか公開してやった。自国の人間に隠しておいて得になる話でもないしな。もっとも『助言者』として俺の子飼いをその都度派遣しているが」

ああ。何気にえげつないことを。

つまり『どうすれば景気が良くなるか』を教える代わりに部下を潜り込ませてる訳か。景気が良くなったからと言ってアホなこと考えれば即座に宰相に情報が行くとか。ま、平穩が維持されるというなら反対することはないんだけど。

「と、い、い、いとは職にあぶれた他所の平民がリュティスの『豊かな平民』を襲ってるとか、い、い、い話でもないわけだ」

「そうだね。不景気に苦しむ領の貴族には、まず平民から無用の搾取をしないということ徹底させるから。自分たちの扱いの良くなった故郷を捨ててまで追われる立場になろうとするものは少ないよ」

「なのにリュティスの治安は悪化している、と？」

それも豊かになった平民のせいだ。

「そこまで目くじらを立てるほどのものではないがな。ま、放っておくわけにもいかないが」

「何故だかわかるかい？ セタンタ」

おいおい。何いきなり先生モードになってるわけ？

ま、解答に悩むほどの問題でもないけど。

平民ってのは搾取されてきた立場の人間だ。税を納めるために働き、御上に取られなかった余剰分で生活してきた者たち。

そんな連中が税収が下げられ好景気の恩恵を受ければどうなるか。オルレアンでも頭痛の種だった。

ぶっちゃけて言えば、平民の中から成金が出てきてること。しかも彼らは教育なんて受けてない。

その日その日をどうやって生きていくかしか考えてなかった人間が、何年も先のことなんて考えられるはずもない。

故に調子に乗る。調子に乗って、

「ギャンブルにでも手を出してるんでしょ。突然金を手に入れて、でも贅沢の仕方が分からない。財布に金を詰めて酒場にでも繰り出す

平民。いいカモだ。多少おだてて賭場に連れ込めば、初めてのギャンブルに勝手に脳を痺れさせてくれる」

「正解（だ）」

オルレアンでも困ってるんだよ。ギャンブルってのは。

全体が富むのは文句などない。多少の贅沢は金の流れをよくして景気を活性化させてくれる。

でもギャンブルは違う。金は回るのではなく、胴元という一か所に流れ込む。

それは搾取する側が領主から別の人間に変わっただけ。害でしかない。

はあ。娯楽が無さすぎるんだよなあ。ハルケギニアは。貴族でさえ『遊び』を知らない。せいぜいが遠乗りくらいだ。

ま、原作のモット伯みたいないな『遊び』に平民たちにハマられるというのもそれはそれで困るんだけど。

さて、どうしたもんかねえ。

## 55・今後の方針

さてさて、それじゃどうしようか考え始めていこうかね。

今日の議題を端的に言うならば、『ギャンブル狂いのカイジ君たちをなんとか更生させよう』ってところか。最近平穩になってきたハルケギニアをざわ……ざわ……なんて擬音で埋め尽くされたくないしね。俺の鼻や顎が尖りだしたらどうしてくれるってんだ。

もっとも優秀な兄ズのことだ。今後の方針なんてもんはある程度決まってると思うけど。まずはそっちを語ってもらおうかね。

「現状については理解したよ。賭場という裏側に金を回したくないってのには俺も賛成だし。で、兄さんたちはどうするべきだと考えているわけ？」

革新的な政策を次々に打っている二人の兄が何も考えていないわけがない。つか俺程度の知恵を借りたがってるとも思えないんだよね。確かに俺は『前世』からある程度の知識を持ち込んでいるが、天然チートの二人はそのさらに上を飛んで行ってるわけだし。

「ああ。とりあえず兄さんと話し合ったんだが、長期的、短期的、二つの政策を始めてみようと思ってる」

「ふむ。長期的なものとしては教育だな」

まあ妥当なところだろう。俺はジョゼフ兄の言葉にうなずいて続きを待った。

「そもそもからして博打に興じる平民の増加を招いたのはそれが理由なのだしな。極端な言い方をしてしまえば、これまでの彼らにとって



金というものは一日を食いつなぐ分の物でしかなかった。その余剰分で酒場に繰り出したり多少着飾ることはあってもだ」

「ゆえに平民たちは先のことを考えられなかった。というよりも考える必要が無かったというべきかもね。税を徴収官に収める分を他にすれば、蓄えるという習慣があまり無かったんだから。明日のこと、一月後のこと、一年後のことなど考える余裕などなかったんだ」

「だから考える力を与えるってことが。そのための教育、ね」

どんぶり勘定は平民の常だ。というか貴族の中にだって先々のことを考えられていない奴は少なくなかったりする。

「でも、容易なことじゃないよね？ 教育ってのはすぐに効果が出るものじゃない。さらに今回教育を施そうってのは平民相手だ。働いて金を稼ぐための時間を先々のために教育に回せと言って従うかどうか」

そう考えると『前世』ってのは良く出来てた。義務教育を子供たちに課し、さらに子供を働かせれば雇用側を罰するなんて法律まであったほどだ。そこまでされりゃ親は子供を働かせるより、教育を受けさせる方を選ぶだろう。

とはいえここはハルケギニア。子供には働かせるな。勉強をさせると言うわけにもいかないだろう。子供という労働力を失ったせいで税を納められなくなる者だって出てくるだろうし。平民が潤い始めたからと言っても、まだ一部の話なのだ。裕福な平民を対象に私塾のような形で学校を作れば見向きもされず、平民全体を法で縛れば未だ貧しい平民が苦しむだけ。

「長期的に、と言っただろう？ 一朝一夕に平民全体を変えられるとは俺もシャルルも考えてはおらんさ。そこまで出来るのは偉大な始

祖サマくらいのものだろつさ」

うへえ。一見プリミルサマの偉大さを讃えているようで、その実皮肉に塗れたセリフだ事。

「まあなんだね。教育というものに対して簡単に思っているわけではないけれど、長い目で見て変えていこうと思っっているのさ。もしかしたら僕が王位にいる間に成せることではないのかもしれないけどね」

そいつは、……なんとも気の長い話だね。

もっとも次代を担うシャルロットやイザベラのことを考えれば喜ぶべき話なのだろつけど。ウチの王様が広ーい視野をお持ちだったってことは。

まあなんだ。反対するようなことでもない、か。これだけを解決策と考えているならともかく、短期的な政策とやらもあるそうだし。

「なるほどね。ま、俺としては兄さんたちを信頼しているし、任せるさ。これまでみたいにリュティスから始めてガリア全体に浸透させることを目指すんでしょ？」

「ああ。教育に関してはシャルルが中心に組んでいく予定だ。平民たちが知恵をつけるといっなのはハルケギニアの在り方を変えかねないほどの大仕事だからな。国を挙げて取り組んでいかねばなるまい。なにせセタンタが言っていた、『領民を導く高等な教育を受けた平民』が生まれるのだからな」

は？ そんなこと言ったっけ？

……あー。なんかずいぶん昔にそんなことを言ったような気も。よくもまああんな戯言を覚えているもんだ。

ま、いつか。なんか突っ込んで掘り返すのもアレな予感がするし、

スルーするということ。俺の言葉がそこまで影響与えてるとか考えだすと、これから先不用意に口を開けなくなりそうだな。

「長期的な指針ってのは理解したよ。で、短期的にはどうするつもりなわけ？」

「簡単……というよりも単純と言うべきだろうけど、ストレートに出るつもりだよ」

「それはつまり？」

「賭場によって裕福な平民が搾り取られるというのだ。ならば賭場の方を潰してしまえばいいだろう？」

いや……まあ理にはかなっているけど。

「それは無理でしょ。賭博が流行っているってことは、つまりは人気があるってこと。賭場を開く側が儲かるってことだ。今ある賭場を潰したところで、別の奴が新たな賭場を開くだけ。解決策にはなりえないと思っただけど」

そのまんま『エスポワールを倒したくらいでいい気になるなよ。やがて第二第三の帝愛が……』な展開になると思っただけど。

「分かっている。すべてを潰そうなどとは思っていないさ。ギャンブルというのも一種の必要悪だ。蔓延しすぎなければ、そして平民たちが節度を守れるというのなら、ハメを外せる場と言うのも必要だろう。だから賭場を潰すのは警告のようなものだな。やりすぎれば叩くぞ、と国側から言うのだ」

「そちらに関してはジョゼフ兄がやることになってる。叩き過ぎず、

見逃し過ぎず。絶妙なバランス感覚が必要になるだろうからね」

ふーん。まあジョゼフ兄なら出来るの……か？ まあなんとかなるんだろうけど。

……あれ？ 長期短期ともに指針は決定してるじゃん。ならなんで俺が呼ばれたわけ？

「それでな、セタンタ」

あ、どうしよ。なんか嫌な予感がビンビンしだしたんだけど。

今日は『面倒事』の相談じゃなかったわけ？ ホントは『厄介事』だったってわけ？

「政策の方は纏まりを見せたんだが、別方向からも一手打ちたいのだ」

「平民は贅沢の仕方が分からないと言ったね。ならば贅沢の仕方を教えようってわけさ。さてセタンタ。平民たちに贅沢をさせるには何をすればいいと思うっ？」

「あ、あー。やっぱり物を増やしたりするのが良いんじゃない？ 絵画や宝石……とまではいかなくても、平民向けにも上等な衣類を増やさせたり、食を向上させたり」

「ああ。そしてもう一つ。今まで貴族にしか許されなかったものがある」

……どうしよ。ジョゼフ兄がすごい顔してるんだけど。いかに悪巧みしてますって表情をしてるんだけど。

「それはガリアにない物を手に入れることだ。アルビオンの茶葉。トリスティンのワイン。ロマリアの絵画。ゲルマニアの織物。輸送費

がかかるため、これまで市井の者では手にすることが出来なかった  
様々なものを商人に扱わせれば、ガリアを循環する金の流れは加速す  
るだろう」

「だからね。外交においては僕たち以上に才のあるセタンタにお願い  
したいんだ。各国との交易の開拓をね。幸いオルレアン領はトリス  
ティンとの国境にあるのだし」

「来年からトリスティンに行つて来い」

……

……

……や

「やだ!!」

56・帰りた

……

……

……………（　　）ハッ！

うおう。あまりのことに二カ月近く意識が飛んでた気がするぜ。

つか何の話だったっけか。

あーそうそう。確か俺にトリスティンに行けとか言いやがったんだった。この髭共は。

ありえねえだろ。なんでそういう話になるわけ？ 貿易なんてのは文官の仕事だろうに。俺、一応国家の重鎮（笑）なんですけど？

タイミングもありえねえよ。なんで今？ 俺ってマチルダさんと婚約して、そろそろゴールインかなあとかそういう時期なわけだぜ？

ジョゼフ兄の暴走でのガリアぶっ壊れフラグもアルビオン滅亡フラグもへし折って、やっとこさヤバ気ないイベント潰し終えた所なんだぜ？ 原作を途中までしか読んでなかったせいでロマリアが何しようとしてるのは分からないけど、それでもとりあえずの平和はつかめた所なんだぜ？

そこまで頑張った俺に今からトリスティンに行けと？ ただでさえ腹黒ハーフェルフのせいでマチルダさんとイチヤイチヤできる時間が減ってるというのに、遠距離恋愛しろと？

ちよっとおふざけが過ぎるでしょうが！ イザベラとシャルロットにあることないこと吹き込むぞコラ！

「落ち着けセタンタ」

「うん。それ無理」

あー、ナイフ持ちてえ。情報操作で部屋から出られなくしたうえで自律進化の可能性を模索してえ。

「そもそも何で俺なのさ。別に条約結んで来いってわけじゃないんでしょ？ 専門の奴にやらせればいいじゃん」

「だから落ち着け。話には続きがあるのだ。交易の開発というのは表向きの理由にすぎん」

……うへえ。それってつまり陰謀話ってこと？

のんびりさせてよう。まじでえ。

「表向き、セタンタには交易のための使者としてトリステインに行ってもらう。表向きの裏としては今までガリアの中枢で尽力してきたセタンタにしばらくの休暇を与える、ということになっている」

「そしてガリアでも一握りの者にしか明かせない裏としての理由。それをこれから話すけど……」

シャルル兄が「心の準備はいいかい？」なんて聞いてくるけど正直首を縦に振りたくはありません。

というか帰りたい。おうちかえらせて。

まあそんな切なる願いはこの二人には通じないんですけどね。あははー

「まず最も重要なことから。セタンタは虚無については憶えているよね？」

そら憶えてるさ。というか忘れられないっての。

……って、まさか？

「トリステインの虚無が目覚めたとか？」

だとしたらヤバい。シャルロットの年齢的に原作の時期はまだ先だろうとは思うが、この世界は俺が色々かき回している。バタフライエフェクトなんて素敵なサムシングがあったのかも。

もつともアルビオン滅亡フラグを潰している以上、ルイズがルビーを手に入れることも始祖の祈祷書をゲットする未来もなくなってるんだけど。神様ばうあー的修正力が働いてたらどうしょよ。

しかしそこはなんとかセーフだったのか、ジョゼフ兄が首を振って示したのは否定。

「それはない。トリスタニアへ放っている間者の報告では、水のルビーは王女アンリエッタが、始祖由来の祈祷書は宝物庫で、それぞれ管理されている。アンリエッタは水のトライアングルとして有名だからな。虚無ではない」

ルビーと祈祷書。それが虚無覚醒に必要なことは既に実験済みだったりする。ガリアでは香炉だけどね。ジョゼフ兄がシャルル兄から指輪を借りて試し、実際今では俺以上に魔法が使えたりもしてるくらいだ。だって俺、コモンスペルも二つしか使えないし。

「虚無に目覚める者の可能性。一つは始祖の、すなわち三王家の血を受け継いでいること。一つは系統魔法を全く使えないということ。そして虚無に目覚めるまではコモンマジックですら失敗させるといふことだ」

それがガリアの認識。シェフィールドさんが召喚されて以来、リュティスのアカデミーで虚無に関する研究も進められてたりする。今



までは伝説扱いだっただけに、わざわざ文献を漁ったりはしなかったそう。ロマリアならば虚無の判別方法なんかも確立されてるかもしれないけど、連中には簡単に聞かれはしない。下手につつけばジョゼフ兄が虚無だったことまで嗅ぎ付けられないしね。既に嗅ぎ付けてる可能性もあるけど。

というかこの話、俺にとっては結構怖い話でもあるんだよね。

なんたってオルレアンにはティファニアがいる。マチルダさんが引き取った貴族の庶子ということ。しかし魔法に関してはまるで成功させていないティファニアが。

ジョゼフ兄たちはティファニアにエルフの血が混じっていることを知っているから、系統ではなく先住ならば使えるのではと思っているらしいが、そのうちバレるのではないかと怖かったり。

ティファニアには虚無には関わらせたくないんだよねえ。あんなんでも一応義妹(予定)だし。ロマリアに利用されたりしたらマチルダさんが泣くだろうし。べ、べつにテファが心配ってわけじゃないんだからね！ 勘違いしないでよね！

……さて、話を戻そうか。

「つまりトリスティン王家の血を引いている人間で、かつ魔法が使えないのが見つかったってわけ？」

「ああ。セタンタもよく知るヴァリエール。その三女だ」

やっぱりルイズまで行き着いていたか。まあこの兄ズなら調べることなんて容易そうだけど。というか『実は既に攫ってきてあるんだZE』なんて言われても驚かないと思う。まあないとは思っけどさ。……ないよね？

「あー。つまりはその三女を？」

「別にどつどつしるなんて言わないよ。でも放置しておくには危険すぎるってことはセタンタもわかるよね？　僕も兄さんもそう結論付けたんだ」

「確かにトリスティンはガリアの友好国ではある。先日のヴァリエールとモードの婚姻にもセタンタが囃んでいるし、そうそう関係が悪化することはないだろう。だが、トリスティンは衰退しているとも言っているほどの小国だ」

「ゲルマニアに削られ、クルデンホルフのような大公領が独立し、歴史と伝統に縋り付かなくてはプライドも維持できないほどの小国。そんな国が『虚無の再来』を手にしたらどうなるか」

まあ碌なことにはならんよね。

かつての栄光を取り戻せー^^　わあい^^　な展開は勘弁願いたい。ゲルマニアに向けて熱狂的再征服とか。空の孤島アルビオンが割れるよりも降りかかってくる被害がでかそうだ。

「その三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだけだね、来年からトリスティンの魔法学院に入るらしいんだ」

「相手に虚無の可能性があるともなればたかが監視として人員を選ぶ。しかし他国の魔法学院に職員としてガリアの人間を送り込むのは難しく、留学生とすると年齢的に練度の高い者は少ない。何より虚無は国家機密だ。虚無かもしれないから監視しろ、などとは言えんだろう？」

「兄さんが虚無であることも機密事項だしね。そんな状況でミス・ヴァリエールが虚無かもしれないなんて言って、向こうの信奉者にでもなられたらたまらないだろ？」

「というわけだ。来年からトリスティンに行き、ヴァリエールと接触しろ。なんなら抱き込んでしまってもいいぞ?」

いや、それはホント勘弁してください。なんか親バカとか烈風とか動物マスターとかの影が怖いんで。

っていうかホントに行かなきゃダメっすかね? なんとかなんないもんなんすかね?

「ふむ。まだ納得できてないようだな。では次の理由だ」

まだあるんすか? もうやだー。

もうおうち帰らせてくれよ。マジでー!

57・幕間      ティファニアの憂鬱

クーがジョゼフ&シャルルコンビの説得攻勢にやられ、口からエクトプラズムらしきもやもやを吐き出している頃、クーやマチルダとともにリュティスに来ていたティファニアは、一人ジョゼットの部屋を訪ねていた。

クーの義妹（予定）ということまでティファニアはイザベラやシャルロットとも交流があったが、中でも一番話が合うのはジョゼットだった。

かたや王弟の娘兼ハーフエルフという隠匿されるべき存在だったティファニア。

かたやガリア王家では禁忌とされる双子の片割れとして生まれてすぐに修道院に送られたジョゼット。

お互いがお互いにシンパシーのようなものを感じるのは必然だったのかもしれない。

そしてそんな過去に陰を持つ二人はといえば、

茶をしばきながら盛大に愚痴り合っていた。

「それでね、結局最後はシェフィールドさんに全部持って行かれちゃって。私だってジョゼフおじ様のお手伝いしたかったのに」

「そう言えばいいじゃない。お手伝いさせてくださいって」

「言ったのよ。でも笑って流されるの。イザベラ姉様たちと遊んできなさいって」

ずーんと言った感じにジヨゼットは落ち込んでしまったが、しかしティファニアが慌てることはない。

何故なら彼女の頭の中は別のことでいっぱいなのだ。具体的にはリュティスからオルレアンに帰る馬車の中でクーとマチルダがいちやつきだすのを如何にして食い止めるか、その策を何種類も用意するためかティファニアの頭脳はフル回転中である。

それにぶっちゃけジヨゼットがジヨゼフに子ども扱いされて落ち込むのはいつものことだし。

「……私だって分かってるのよ？ 私は修道院にいたからイザベラ姉様やシャルロット姉さんと比べて勉強しなくちゃいけないこともたくさんあるし、おじ様はきつと、それ以外の時間に仕事を手伝わせちゃ悪いと思ってるんだろっつなっつてことばね」

「だったらいいじゃない。大切にされてるってことでしょ？」

「そうなんだけどもさあ。でもね。ふっとおじ様の執務室に行くとな」

そこで一端ジヨゼットは言葉を止めた。

しばらく俯いていたが、その時の情景を思い出していたのだろうか、ふるふる震えるとテーブルに両手を叩きつけ、叫ぶように言った。

「近いのよー！ シェフィールドさんが！ おじ様に近いの！ その上私に気づいて、」

「じゅん、わかんない」

友人、というか既に親友と言っても過言ではないほどの付き合いではあるが、そんな相手の言葉をティファニアはすげなく切り捨てた。というかホントにわからなかった。なんとなく面白くはないんだ

るうなあといいことは伝わってきたが。

「……そうよね。テファにはまだ早かったよね。ごめんね、お姉さん、大人げなかったかも」

だがその物言いにはちょっとカチンと来ちゃったぞ。

「ぶぶー、お姉ちゃん知ってます。ジョゼットちゃんはテファ姉さんの一っ年下ってこと知ってます」

「ふんだ。年齢なんか関係ないのよ。いい言葉を教えてあげるわテファ。女の子は恋を知らないうちは蕾でしかなく、恋を知ってようやく花として咲く。ゆえに恋をしている女は皆一様に美しい花である、ってね。その名言に照らせば私は大人でテファは子供ってわけ」

「な、なにそれ？ 誰の言葉？ なんかカッコいいね」

「え？ 私の言葉だけどカッコよかった？」

お前の言葉がいい。きっとティファニアが関西人だったらそうツッコミを入れていたことだろう。まあ当然ティファニアには関西人の血など一滴たりとも流れていなかったが。

俗にいうドヤ顔を浮かべ「ねえねえカッコよかった？ カッコいいと思っちゃった？」なんて絡んでくるジョゼットに取り合わずお茶請けのケーキを口いっぱい詰めた。ついでにジョゼットの分まで。うん、おいしい。

だけど、とティファニアは「……私のケーキが」と空になった皿を見ながら呆然としているジョゼットを見ながら思う。ホント、シャルロットと似てないなあ。

もちろん容姿のことではない。ジョゼットの現在の姿はティファ

ニア同様フェイスエンジがかげられ灰色の髪になっているが、しかしそれを解けばシャルロットと瓜二つの少女が出てくることを知っている。

ティファニアが思ったのは性格的な面だ。シャルロットはどこか引つ込み思案な、ジョゼットの花のたとえを借りるなら百合の花といった感じた。清楚で大人しく、どこか儂げにすら感じる少女。

一方でジョゼットは薔薇の花？ いやそこまで高貴さは感じさせないから大輪の向日葵とか？ 感情をよく表に出すことが印象的だ。修道院に捨てられるも同然に入れられた過去があるなどとても信じられない。

毎回リュティスに来るたび帰りの馬車の中でクーが「またジョゼットが毒されてた。絶対シエフィールドのせいだろアレ」とぼやいてはいるから、もともとシャルロットと似たような性格だったのかもしれない。想像しにくいけど。

それともやっぱりアレなんだろうか。ジョゼットの言うように恋つてのを知ると人間変わるのだろうか？ 思えばティファニアの周囲の強い女性はみんな恋をしているような気がする。ジョゼットしかリシエフィールドしかり、オルレ안의レティシアや、クーのお母様もそうかもしれない。そして、認めたくはないが、ほんっとーに認めるのは癪だがマチルダ姉さんも。

シャルロットも恋とやらを知ればジョゼットみたいになるのだろうか。イメージできないけど。

「ねえジョゼット？」

「んー。なによう。ケーキ泥棒めえ」

「いや、そこまで落ち込まなくても……。ごめんね？」

なんならもう一つメイドさんに頼もうか？ あまりのジョゼットの落胆っぷりにそう提案しては見るが、

「……いい。おじ様の耳に入って食い意地の張ってる子って思われたりしたらヤダし」

そ、そんなことまで気にするんだ。

「で？ なにか聞きかけたけど何？」

「え？ あ、あーっと、ちょっとした興味なんだけどね」

「うんうん」

「その、さ。恋ってそんなにスゴイものなの？ 人が変わっちゃうくらゝ」

ティファニアは気恥ずかしさを感じながらも尋ねる。それは年下の少女に尋ねることの恥かしさというよりも、思春期特有のそういう話に対する恥ずかしさではあったが。

しかし興味があるのも事実だった。コイバナに盛り上がるというのは異世界であつても共通なのかもしれない。

だが次の瞬間、ティファニアは微妙に後悔する羽目になる。シャルロットならば絶対に浮かべないであろうニヤニヤした笑みを浮かべたジョゼットを見てしまったために。

「ふーん。テファもそんな年頃なのね。お姉さんびっくりしちゃった」

「だから私の方がいっこ上だつて。それとホントにちょっとした興味だから答えてくれなくてもいいよ」



「まあまあ。別にからかつつもりはないんだって」

そう言ってジョゼットは引き留めるようにティファニアのカップに紅茶を注ぎなおす。

「恋がスゴイものかどうか、か。別に隠すつもりなんてないんだけど、でも自分でもよく分からないのよね。っていつかさっきのテファの言葉って私が変わったって意味？」

「うーん。どうなのかな。私は前のジョゼットのことあまり知らないし。でもさ、ジョゼットってシャルロットと双子なわけでしょ？ もともとシャルロットみたいな性格だったのかなって」

「シャルロット姉さんと同じとまでとは言わないけど、……でもそう言われればもう少し大人しかったかも」

「ちなみにクーはシェフィールドさんの影響を受けてるって言ってたわ」

「あー。それはあるの、かな？ いろいろ聞いてないことまで教えてくれるし」

まあそれはシェフィールドさんなりのおじ様への点数稼ぎというか、背伸びする妹みたいな扱いというか、ぶっちゃけ競争相手とは見られていないみたいでカチンと来るんだけど。そうジョゼットは続けたが、しかしその口調はジョゼットがシェフィールドを憎からず思っていることがありありと見て取れた。

これでは先ほどのシェフィールドに対する愚痴も、つまりは姉のような存在とのじゃれ合いを惚気られたようなものに思えてくる。

「まあ恋がスゴイものかどうかはハッキリ言えないけど、でもきつと

「イイものだとは思っよ？ 修道院にいたころは何をしても退屈で、  
いつつも海の向こうを眺めていたわ。この先には何があるんだろう、  
いったいどんな世界が広がっているんだろうってね」

でもね。つらい過去の話なのだろうにそれを話すジヨゼットの表情に陰りは見えず、

「今は何をしても楽しいの。こっやってテファとお茶をするのはもちろんだけど、お勉強やお祈りだって楽しいのよ？ 信じられる？」

「うーん。よくわかんないかなあ。私もオルレアン領でいろいろ教わってるけど、結構大変」

「大変なのは大変よ。覚えることもいっぱいあるし。でもね、コレを覚えたたらおじ様は褒めてくれるかもしれない、アレが出来るようになったらおじ様の手伝いができるかもしれない。そういう風に思うとね、大変だけど苦しくないの。お祈りだってこんな素敵な場所で素敵な人たちと一緒にいられることへの感謝でいっぱい、ちっとも嫌になんてならないわ」

きっとテファにも分かる時が来るわ。どことなく上から目線での物言いだったが、しかし今度は不思議と腹は立たなかった。

でも、とティファニアは思う。自分が普通の女の子みたいに恋なん  
てできるのか、と。

なにせ自分はハーフエルフ。エルフがハルケギニアでどれほど恐れられているかは、何故両親のもとを離れてガリアまで行かなくてはならないかを説明された時に知ってしまったし、あの日、クーと出会ったあの時にトリスティンの貴族の夫婦から向けられた視線から理解してしまった。そんなエルフの血が流れる自分が普通の恋なん

てできるのだろうか。

本当の自分を知っても怖がらないでいてくれるのなんて、両親やマチルダ姉さんを除けば、……あれ？ クーくらいしかないんじゃない？ そういえばクーは私のことを怖がりしなかったな。そうティファニアは思い出していた。

初めて会ったときの印象はとても怖い人。自分とほとんど歳は変わらないというのに父やトリスティン貴族の大人とも対等に渡り合っていた。

次に抱いたのは恩人だという意識。両親からマチルダ姉さんと一緒にガリアに行くべき理由を話された時、クーに助けられたのだとなんとなく理解した。

そして今抱いているのはマチルダ姉さんにデレデレしている情けない姿の印象。私や母様を助けてくれた時のカッコよさはどこへ行ってしまったの……か、と？

あ、あれ？ 違つ、違つでしょティファニア？ これじゃキリツとしてるクーがカッコいいと思ってるみたいじゃない。マチルダ姉さんにデレデレしてないでちゃんとしてくれればいいのと思ってるみたいじゃない。スツと赤い目を鋭くさせたクーをまた見れたらなあ、……じゃなくて！

ち、違つよ。私はただマチルダ姉さんが盗られるみたいなのが嫌なだけ。うん。ずっと母様と人目を忍んで生きてきた中で、一緒にいてくれたマチルダ姉さんの一番が私じゃなくなるのが嫌なだけなんだから！

そうよ！ だから帰りの馬車でクーとマチルダ姉さんがいちゃつき出すのを止めるのも、全部マチルダ姉さんを守るためのの！

頬を上気させ、雑念を振り払うように頭を振るティファニアはついでにぞろぞろ気が付かなかった。

お互いの境遇の類似性からなんとなくティファニアが抱いている

思いを察してしまったジヨゼットの、正しく妹を見るような優しい視線には。

## 58・幕間　　モンモランシーの溜息

トリスティン貴族たちが現在最も注目している少女、それがモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシである。

弱冠八歳で水の精霊との盟約を結び直すという偉業を達成し、マリアンヌ太后から直々に名誉を称えられた。

そしてその結果としてだろうか、モンモランシ家は宮廷に多大な影響力を持つマザリーニ枢機卿やトリスティンの貴族と言って差し支えないヴァリエール家ともコネクションを得るに至っている。

また、モンモランシーが水の精霊と盟約を結び直す時期と前後するようにヴァリエール家の次女、カトレアの病が治癒したことも大きかった。

何せヴァリエール家当主はカトレアのため、これまで古今東西の水のメイジを集めさまざまな治療法を収集していたのだ。そのことは多くの貴族が知ることであり、なれば当然カトレアの病が完治したことも知られること。それがモンモランシーが水の精霊との盟約を結び直した時期と重なれば、関連性を疑われるのも当然だった。なにせ水の精霊の一部である精霊の涙はあらゆる薬の最高の素材でもあるのだから。

しかもモンモランシー本人がカトレアと親交を深めているのだ。カトレアはよくモンモランシ領へと足を運んでいるし、社交界などで二人が同席すれば、毎回親密そうにあいさつを交わし姉妹のように仲睦まじく話している。もうこれはモンモランシーがカトレアの病の治癒に一役買ったと思われても仕方がないだろう。

さらにダメ押しのような形でモンモランシーの交友関係に加えられるのがかつてのガリアの第二皇子、現在のオルレアン公であるクー・セタンタの存在である。

モンモランシーには一体どれだけの価値があるのか。利に聡い貴族たちのこと、モンモランシ家の持つ政治力、モンモランシー個人を持つコネクションを考えればこそって親交を持つとするのも当然

だった。

結果モンモランシーはたびたび社交界に招かれ、数多くの貴族子弟と引き合されることになる。いささか食傷気味となるほどに。いかに女としてチャホヤされるのが嬉しいと言っても限度があるのだ。

(それに私はまだ十五歳だし。というか三十、四十のオジサン連れてきて婚約を仄めかされても……)

自分が優良物件だということくらいモンモランシーも理解していた。モンモランシー自身、れっきとした伯爵令嬢なのである。貴族の婚姻の持つ意味など嫌というほど理解している。

さらに言えば六年前に弟が生まれていることも大きかった。かつて干拓事業に失敗し、精霊にそっぽ向かれた時にはモンモランシ家はおはや凋落するしかないと思えたが、盟約は結び直され、隣領であるオルレアン領の開発に引く張られる形でモンモランシ領も非常に豊かになった。その心理的余裕もあったのだらう、両親の夫婦仲は現在も非常に良好で弟まで生まれたほどだ。

貴族の常通り、モンモランシ家は男子である弟が継ぐだらう。なれば当然モンモランシーはどこかへ嫁ぐこととなり、結果六年前からモンモランシーを狙う男は倍増した。それまで婿入りは無理だとあきらめていた貴族の長男たちまで名乗りを上げたのだから。

多くの貴族子弟に言い寄られているという点ではカトレアも同じなのだが、あちらはなんといいってもヴァリエール公爵令嬢である。高嶺の花どころか雲上人といっていいほど。雲の上を目指すよりは高嶺の花を目指した方がまだ可能性はあると思ったのだらう。本来なら伯爵令嬢高嶺の花であるにも関わらず、一向にモンモランシー狙いの男はカトレア狙いに鞍替えしてくれない。

(来年には魔法学院に入学だけど、自由でいられる最後の時間になりそうね)

学院を卒業すればおそらく自分は結婚することになる。それはモンモランシーも理解していた。

そのことに不満があるわけではない。引く手あまたな今の状況なら名門貴族に嫁ぐことも可能だろうし、貴族の妻として家を守り、子をなすことこそ女の幸せだとも教育されている。

(でも、家柄だけじゃイヤよね)

ぎらついた目で見てくるような男はイヤ。なんか怖いし。

紳士的でない男もイヤ。ちゃんと気遣ってくれる人がいい。

リード出来ない様な情けない男もイヤ。顔色を伺ってくるような男なんて論外。

気の多い男もイヤ。浮気なんて絶対許さない。

子供に優しくない男もイヤ。世の中にはそういう人もいるらしいけど自分の夫になる人にはちゃんと子供をかわいがってあげてほしい。

太っている男もイヤ。顔の造形とかならともかく努力でなんとか出来るのにそれをしない人はちょっと。

年を食いすぎてる男もイヤ。後妻なんて冗談じゃない。

魔法の腕を自慢するだけの男もイヤ。大事なのは何が成せるか。何が出来るか。実際魔法の腕が無くても様々な政策を実施し国を豊かにしている宰相や、領地を風光明媚な美しい街に発展させた公爵を知っている。

貧乏な男は……どうだろ？ 昔のお父様のことを考えるとイヤって断言できないけど。今は貧乏でも向上心を持って頑張ってる人なら支えてあげてもいいかもしれない。

(あれ？ 私って結構贅沢なのかしら?)

いや、そんなことはないはず。社交界なんかで知り合った女の子たちはもっというる言っていたし。出来れば爵位は伯爵以上とか、贅

沢できない貧乏貴族は嫌だとか、理想はトライアングル以上とか、グリフォン隊やマンティコア隊といったエリートが最高とか、マザコン野郎は死ねとか。

それに比べれば自分の理想はそんなに高くはないはず。

ギラついた目は多分私のコネが欲しいのよね？ だったら私を政治的な道具とかじゃなく一人の女として見てくれる人がいいってことか。

それでいて紳士的で、でもちゃんとリードしてくれて。

浮気なんかしないで私だけを愛してくれて、子供はちゃんと可愛がってくれて。

だらしなく太ってなくて、歳も同じくらいで。

魔法の腕なんかより大事なことが分かっていて、実績とかはまだ無理でも、ちゃんと自分に何が出来るかを考えていて。

貧乏でもいいけどちゃんと向上心を持っていて。まあお金持ちならそれにこしたことはないけど。

(で、お父様やお母様が納得する程度の家柄、か)

自分は贅沢じゃないはず。そう思つのに該当する相手がなかなか思い浮かばない。

先月の社交界であったグラモン家の四男は？ 見るからに気のない感じがした。あと薔薇を啜えるのもちょっと。口説き文句は洒落ていたけど、それはつまり色んな女性に言っていて慣れていているということだろう。

そのとき一緒にいたグラランドブレ家の彼は？ …… 太ってたわよねえ。一途そうな感じだったけど社交界で食事に一途なのはどうなんだろう。

眼鏡をかけていた彼、えっとレイナルだったかしら？ 彼はどうだろう。なんか年上の女性に言い寄ってあしらわれていたような気もするけど。それってマザコンってことなのかしら？



ロレーヌ家の彼は……、駄目ね。自分が既にラインメイジなんだつてことばかり自慢してたし。オーク鬼十数頭を槍一本で倒せる人がいるって知ったらどうなるんだろっ？

お父様と一緒に宮廷に上がった時に会ったグリフォン隊の隊長は？ 特に引つかかるところはないはずだけど……。あ、そういえばあの方はカトレア様の妹の婚約者だったわね。なら駄目ね。

（うーん。やばい。ロクなのがいない気がする）

いや、と頭を振ってモンモランシーは顔を上げる。自然と視線はラグドリアン湖の方向を向いていた。

（きつと魔法学院でならマトモな男が見つかるはず！）

それでダメでもまだ手はある。親交のあるカトレアからエレオノールを紹介してもらい、そこからさらにアルビオン貴族とのコネクションを得られれば。

さすがに二つの国から探せば条件に合う男も見つかるだろう。もし魔法学院にゲルマニアからの留学生でもいれば展望はさらに広がるかもしれない。ゲルマニア人は野蛮だって聞いたこともあるから期待薄だけど。

（……だからもう、ラグドリアン湖の向こう側を思っつのはやめるのよ、モンモランシー）

青い髪の少年の思い出を振り払うように今一度頭を振って、しかし振り払えなかったのか、諦めたように一瞬溜息をついた。

（ヴァリエールが雲上人だというのならあの方は天上人だっていうのに。それに婚約したとも聞いている。またお目にかかれる日が来るのかどうかすらわからないっていつの日に。我ながら女々しいわね）

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。彼女は同世代の女子が魔法衛士隊に守られる姫君としての自分を夢見るように、隣国の王子に攫われる自分を夢見る少女だった。

様々な思惑から留学してきた彼に彼女が再会するのは、まだしばらくは先のこと。

## 59・幕間 カトレアの退屈

さて、一躍時の人となったモンモランシーが一人ラグドリアン湖の向こう側を思い溜息をついていたころ、カトレアもまた東の空を眺めていた。

カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。今でこそラ・ヴァリエールを名乗っているが、かつてはあらゆる治療を受け付けぬ奇病にその身を苛まれ、それを哀れに思った父よりラ・フォンテーヌ領当主の座を与えられた女性である。

とはいえそれは既に過去のこと。現在のカトレアを、ヴァリエール家を取り巻く日々は、一部を除いてという注釈はつくかも知れないが、しかし非常に良好といえるだろう。

切っ掛けは当然カトレアの健康状態である。数年前に隣国の王子と、彼が契約した水の精霊によってなされた治療は完璧と言って差し支えないものだったようで、わずかながら懸念としてあった病の再発も起こらず、現在もカトレアは健康そのものである。

それは家族の一人の病気が快癒しただけだとは口が裂けても言えないほどの影響をヴァリエール家に齎した。

第一にヴァリエール家の当主。周知の事実だったようにそれまでヴァリエール家当主はカトレアの治療法を探し続けていた。トリステインーの大貴族としての財を惜しむこともなく、時間と労力を割き続けてきた。

そしてその必要が無くなった。カトレアの治療法を探すために時間を割く必要が無くなればどうなるか。大貴族の常として政治へと時間をかけるようになっていったのだ。

もっとも、彼がそれまで中央での政治活動に時間を割かなかったのはカトレアのことがあったからというだけでもないのだろう。賄賂や汚職のはびこる宮廷貴族たちの醜悪さ、王の不在という民の不安を

理解せずに喪に服し続ける太后、成長し続けるゲルマニアに対し金儲けしか能のない野蛮人たちの国と負け惜しみのような悪態をつくしかできない貴族たち、それらに失望し、結果ヴァリエール領に引きこもり自領の発展のみに注力していたのかもしれない。

しかしカトレアは快癒し憂いはなくなった。また、宮廷に大きな影響力を持つマザリー二枢機卿や、近年目に見えて発展しているモンモランシ伯爵家との繋がりも出来ている。

結果、彼は立ち上がった。ヴァリエール領のみならず、国家に働きかけ始めた。

それまで沈黙していたトリステインの雄、中央から距離をとり続けてきたヴァリエールの巨人が動き始めたのである。

多くの貴族は襟を正すことを強いられた。ヴァリエールには逆らうな、それはクルデンホルフ大公国ですら順守する貴族たちの掟なのだから。

しかもヴァリエール家の長女・エレオノールがアルビオンのモード大公家から婿を迎えてすらいる。アンリエッタ姫とプリンス・オブ・ウエールズの間係を察している宮廷貴族にとってみれば、エレオノールの婚姻がどのような布石になっているかも想像がつくだろう。なれば余計にヴァリエールには逆らえないというものだ。

故にトリステインは変わっていくことになる。それまで堂々と行われてすらいいた汚職は目に見えて減り、徐々に、本当に徐々にではあるが、トリステインは生まれ変わりつつあった。

きっかけとなったヴァリエールの影響力を、より一層強めるとともに。

第二に先述したヴァリエール家の長女・エレオノールである。本名をエレオノール・アルベルティーマ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。

彼女にとってもカトレアの存在は大きかった。それこそ王立魔法研究所に自ら籍を置くほどに。

エレオノール自身は土のメイジだった。カトレアの治療に直接関

われるわけではない。

しかし、いやだからこそと言つべきか、彼女は王立魔法研究所へと進路を進めた。トリステイン最高のメイジたちによる研究機関、そこならばカトレアを治療できるだけの水メイジも見つかるやもと考えて。

エレオノールにとってそれは苦痛ですらあった。彼女は極めて公爵令嬢らしい公爵令嬢だ。身分の差というものに厳格で、平民はもちろんだ下級貴族に対しても蔑視を持っていた。ともすれば侯爵や伯爵であつても同列に見られるのを嫌うほどに己の身分を理解していた。そんな彼女だ。スクウェアやトライアングルのメイジであつても爵位が低いのなら相手には出来ないと考える彼女なのだ。

爵位の格よりもメイジの格を重視する魔法研究所に籍を置くことはいかような苦痛であつたか。身分の低い、しかしカトレアの治療の力になるかもしれない水メイジとの付き合いを続けることがどれほどの苦勞であつたか。

常に苛立ち目付きも鋭くなるというものが。

しかし彼女は解放されることになる。カトレアの快癒によって。

加えて気が付けば婚約が結ばれトントン拍子に結婚まで。相手もそこらの貴族なんか目じゃないほどの大物。アルビオンの重鎮、モード大公家の者だ。

なにかもがエレオノールの追い風になっている気がした。始祖の祝福をうけたかと思うほどにエレオノールを取り巻く環境はプラスへと動いていった。

結果、彼女もまた変わる事となる。それまでは常に身の内に会つた焦燥感や鳴りを潜め、顔立ちまで柔らかくなつたと思えるほど。

どこか刺々しかったヴァリエール家の空気は、確実に優しい色を持ち始めていた。

第三にカトレアを最愛の姉と慕うヴァリエール家三女・ルイズ・フランソワーズ。

とはいえ彼女のことについてはまたいずれ言及することもあるだ

る。ここで詳細まで語るのは野暮と言つものか。

もつとも彼女もまたカトレアの快癒によつて大きく影響された一人であること、そのこと自体は変えようのない事実であるが。……それが母・カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールの胃を痛めるような変化ではあつたとしても。

さて、以上の様に大きな変化の齎されたヴァリエール家ではあるが、その中心たるカトレアにも変化はあつた。

それもまた当然だろう。屋敷から出ることもままならず、治る見込みのない病に日々怯えて過ごしていたのだ。病の快癒は彼女にとつて解放されたも同じことなのだ。

病床で苦しんでいたころには夢でしかなかった『学生』にもなつた。社交界に出席しダンスを踊る『令嬢』にもなれた。モンモランシーといった友人たちとお茶とおしゃべりを楽しむ『女の子』を経験すら出来たのだ。

カトレアはやがて新たな夢を抱くようになる。自分が助けられたように誰かを助けたいと。苦痛から解放され、世界がこんなにも美しいものだと思ふことが出来たように、今も病床で苦しむ誰かを今度は自分が救いたいと。

幸いなことにカトレアは水のメイジ。加えて水の精霊の御業をその身に経験したからだろうが、本人はトライアングルであるにもかかわらず治療と言ふ点においてはスクウェアに匹敵する腕となつていた。

全てが順風満帆に思えた。カトレアの、誰かを助け癒したいという『新たな夢』にはなんの障害もないように見えた。

しかしそれは順風満帆に思えただけ、障害などない様に見えただけだつた。

トリステインにおいて、いやハルケギニアにおいて貴族の医者とは主に往診医のことを指す。当然だろう。街などで売られる水の秘薬

では回復できない様な重病の貴族が必要とするのがメイジの医者なのだ（平民の場合はそもそもメイジに治療を頼むほどの金がない）。ガリアやゲルマニアと比べれば小国と言われても仕方のないトリステインではあるが、しかしそれでも領土は広大だ。そして秘薬を用いても効果の出ないほどの重病の患者が、はたして馬車で何時間も、場合によっては何日もかけて移動できるのか。

結果、医者を生業とする水のメイジたちは往診を繰り返すこととなる。患者は自領の屋敷で待ち、そこにメイジが訪れるようになるのである。どれほど腕のいいメイジが医者をしていたとしても、診察してもらったために患者側が動くなどということはまずない。

ではカトレアの場合はどうか。今さら言うまでもなく彼女はトリステインの大貴族、ヴァリエールの令嬢。果たしてそんな彼女に患者の治療を頼める貴族がいるだろうか。病床に伏せる患者のため自領まで呼びつけるような貴族が果たしているだろうか。

結論を言わせてもらえれば、そんな貴族はいなかった。たとえカトレア自身がスクウエアクラスの治療の腕を持っていたとしても、たとえ他のあらゆる水メイジが匙を投げた患者がいたとしても、ヴァリエールを呼び出せるような貴族は存在しなかった。

カトレアの夢は破れたのだろう。今も水の秘薬作りは続けてはいるが、それでも退屈を感じてしまう。自分が救いたいと思った病床に今もいる者達のことを思えば、病から解放された自分が日々を退屈に思ってしまうなど許されないとはい思っただが。

しかしそんなカトレアに転機が訪れた。

日課であるペットたちのブラッシングを済ませ、さて今日は何をしようか、水の秘薬も余り気味ではあるしと考えていたところだ。母・カリーヌに呼び出されたのは。（余談だがカトレア作の秘薬はあまり売れない。質は非常にいいのだが、なにせヴァリエールの次女作ということでブランド価値が出てしまうのだ。故に売れない。高すぎて）

メイドがハーブティーを用意し、母娘が揃って一口それを飲んだところでカリーヌがおもむろに切り出した。

「カトレア。魔法学院に行くつもりはありませんか？」

「え？ お母様、わたくしは学院なら卒業しましたが。まさかお忘れになったので？」

「もちろん忘れてなどいません。学生としてではなく、教師として学院に行くつもりはないかという意味で聞いたのです」

「教師として、ですか？」

「ええ。オールドオスマンが水の授業を受け持てるメイジを探しているらしいのです。前任者が結婚を機に領地へと戻ることになったとか。それで学院から宮廷に打診があったようです」

「それをお父様が聞いた、と」

「ええ。貴女ならば十分にこなせるでしょう。ヴァリエール家の者として恥ずかしくない働きも出来るはずですよ」

それに、とカリーヌは続け、

「最近部屋にこもって秘薬作りばかりでしょうか？ 気が滅入りませんか？」

「わたくしは、そんな……」

思わずカトレアは口ごもる。自覚はあった。あの頃から外へ出る



機会が減っていることは。社交界への出席回数も、友人との付き合いも目に見えて減っていることには。

「それにルイズのこともあります。あの子は未だに魔法が使えないまま。なのにあの人はあの子を学院に入れることを決め、変えようとしません。私もあの子が貴族の子女に相応しい振る舞いを身に付けるためにはそれも必要とは思いますが」

自然とカーリーヌの視線は窓の外を向いていた。今日もルイズが訓練に励んでいるだろう中庭の方を。

ルイズのことを心配しているのかもしれない。だから自分に付いて行かせようとしているのかも。カトレアはそう思った。

なにせ魔法の使えない者というのはトリスティンにおいては差別の対象だ。というのもも貴族と平民を分ける壁が魔法の有無なのだ。魔法を苦手とする下級貴族が平民扱いされるイジメを実際にカトレアは学生時代に見たこともあるほど。さすがにヴァリエールを馬鹿にするような命知らずな貴族はいないだろうと思いはするが……。

だが、もしも魔法が使えないということからルイズがいじめられたとしても、

「ルイズなら心配いらないのでは？　今のあの子を魔法が使えないということまで馬鹿にしようものなら、むしろ……」

「……はあ。相手の方が心配、ですか？　ええ、そうかもしれませんね。一体誰に似たのやら」

少なくともお父様ではないと思いますが。そんなカトレアの思考が読めたのか、溜息をついたカーリーヌは鋭い視線をカトレアに向けた。

「私だってあの子ほど破天荒じゃなかったわよ」

微妙に口調が崩れているのは疲労ゆえか。(ちなみにこれも余談だが、カトレア作の秘薬を一番使うのがルイズで、二番目がカリーヌ、三番目がマザリーニ枢機卿だったりする。カリーヌとマザリーニ枢機卿はカトレア印の胃薬のお得意様だ)

「まああの子のことはそれほど心配してはいないのです。いえ、ある意味心配ではあるんですが」

ですが、とカリーヌはいったん言葉を区切り、数秒の逡巡を見せた。しかし結局は話すことに決めたのだろう、カトレアに正面から向き直り、

「ですがやはり、貴女のことにも心配なのですよ、カトレア」

「わたくしは別に心配していただくようなことは……。今もいたって健康です」

「そうですね。貴女は健康そのもの。ですが、そんな健康な貴女はこれからどうするのですか？」

「わたくしは……」

「今の様に秘薬作りを続けますか？ 折角病が回復し、ベッドに縛り付けられる生活から解放されたというのに部屋にこもり続けるのですか？」

それとも

「エレオノールのように身を固めますか？ 貴女がそれを望むという

のなら」

「わたくしはっ……。」

ひどくつらそうに、しかし言葉に出来ないカトレアを見てカリーヌはため息をついた。

視線は再び窓の外へ。しかし思うのはルイズの居る中庭ではなくもつと向うだ。

娘が未だに彼を思っていることをカリーヌは知っていた。かつてはその思いを応援したくも思っていた。エレオノールの婚姻が決まって、カトレアをヴァリエールに縛り付ける必要が無くなってからは尚更に。

今も鮮明に思い出せる。かつて、夫と共にアルビオンに渡りモード大公の秘密を知ってしまったあの日、あの少年が遙かに年上の大貴族を前にしても尚泰然自若としていた姿を。魔法騎士団の精鋭であったとしても身を竦ませる『烈風』の殺気を受けて、『その程度か』とも言うかのように笑う彼の姿を。エルフという禁忌を飲み込んででも国家を、平和を守ろうとしたあの姿を。

彼ならば任せられる。そう確信できるだけの何かを彼は持っている。彼に嫁ぐのならば、たとえそれが祖国を離れ一人異国に行くことなのだとしてもカトレアは幸せになれる、と。

しかし……

「まだ、諦められませんか」

もうあの頃とは違うのだ。違ってしまったのだ。

「……。」

「私はエレオノールの婚約の儀の折りにあの方の婚約者とも会いまし

だが、実に仲睦まじい様子でした。これ以上あの方を思い続けていても貴女が傷つくだけですよ、カトレア」

「わかっては……いるのです……。もう……忘れるべきなんだと……」

「……ならば部屋にこもるのはおやめなさい。外に目を向けなさい。いつまでも自分の殻にこもっては、思い出に浸ることを止めることなど出来ないのです」

「……はい、お母様」

「魔法学院の教職の話、受けるかどうかは貴女に任せます。ですが私は、貴女が思い出よりも未来を見てくれることを願っていますよ。きっとそれは、あの方も同じでしょう」

「……はい。ありがとうございます、お母様」

数日の後、カトレアは学院の教師に就くことを決心する。

可愛い妹のルイズのために。自分を心配してくれる母のために。

そして、かつて胸に抱いた思いを忘れるために。

新たな環境が、新たに出会う人々との生活が、きっと自分を変えてくれると信じて。思い出よりも未来を見れるようになると願って。